

はじめに

子どものころ星を見るのが好きだった私は、北海道の寒空の下でよく星の観察をしたものです。ただ星を見ているだけで幸せだったのです。どうして星を見ているところも幸せな気分になれるのか。当時の私にはその理由が分かりませんでした。その謎が解けたのは、数十年後の自分を知った時でした。実は、私たちは宇宙のミニチュアだったのです。宇宙っ子そのものだったのです。だから星を見ているだけで幸せな気分になれたのです。しかし人類は、一番身近である人間を知ろうとしません。人間が人間を知らないで生きているのですから、不思議といえば不思議な話です。

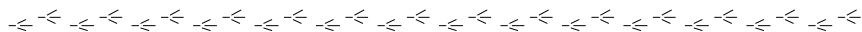
人類はこれまで宇宙の謎を解き明かそうと、膨大な費用をかけて宇宙に探査機を送り込んできましたが、人間が宇宙のミニチュアなら、わざわざ探査機を送り込む必要はなかったのではないのでしょうか。人間を知れば宇宙を知ることができるのですから……。でも人間は、本当の自分を知ろうとしません。自分を知らな

ければ、どこへ向かって進めば良いか分からないのも当然です。だから人間は躓き、迷い、様々な苦しみに喘いでいるのです。

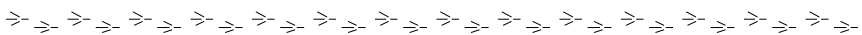
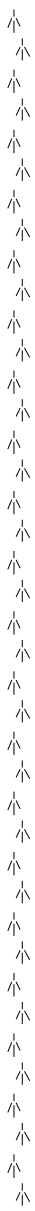
今人類は、未曾有の危機にひんしています。政治、経済、教育、環境など、すべての面で行き詰まっています。これを打開するには、真の人間を知り、人間を変える以外に方法はありません。真の人間を知れば、行くべき道筋が見えてきて、人類が抱えているあらゆる難問が解決されます。政治が、経済が、科学が、宗教が、人類を救うではありません。私たち一人一人が自分を知り、自分を変えることで救われるのです。本書では、まず人間が何者なのかを明らかにします。次に、どうしたら人間を変えることができるか、その方法を科学的に示します。人間が変われば社会が変わるのは当然ですから、その変容の姿も見えていきたいと思います。ただし、このメッセージは頭で知るようにはできておりません。心を通して知り、心を通して変わるので。ですから、いまだかつてこのような内容のメッセージはなかったと思います。このメッセージを読むにしたいが、「心を通して知る・心を通して変わる」という意味が分かってくると思います。どこの機会に本当の自分を知ってください。そして自分を変えてください。

このメッセージが、あなたの人生に転機をもたらすことができれば、これ以上の喜びはありません。

このメッセージは、宗教とは一切かわりのないものです。むしろ、宗教を否定しているメッセージといった方が良くもしくれません。そのことを冒頭にお断りしておきます。



(4) 偏らない生き方とは？	137
(5) 体験を通して学ぶ	150
(6) 生命に生きる	159
(7) 正しい心の使い方を覚えよう	167
(8) 完全な思いの中に生きよう！	180
(9) 愛を育もう！	187
(10) 平和と宗教を考える	198
(11) 真の幸せを求めて	215
(12) 新しい出発を誓う人に捧げる言葉	225
第三章 変わる	237
(1) 自分を変える瞑想	239
(2) 人はどう変わる？	262
(3) 社会はどう変わる？	268
(4) 自然と変わる社会	311
(5) 自然が、地球が、変わる	332
結びの章	353
おわりに	375



◎目次

はじめに	1
第一章 知る	9
(1) 自分を知らない私たち	11
(2) 私たちは生命である	20
(3) 意識の謎を解く!?	36
(4) なぜ人間は宇宙生命なのか?	47
(5) 実在の意味を知る	65
(6) 本当の自分を知るにはどうすれば良いか?	70
(7) 人はなぜ悟らねばならないのか?	77
(8) 循環こそ完全の証し	90
(9) 死は存在しない?	96
第二章 生きる	111
(1) 人生の意味を知ろう!	113
(2) 目的意識をしっかり持とう!	118
(3) 真の自由と真の役割	127

第一章 知る

自分探しの旅をしていない人など、この世に一人もおりません。どんな人も、常に自分探しの旅をしているのです。その代表的な話が西遊記です。ご存知のように西遊記は、三蔵法師が天竺（インド）に法典を取りに行く話ですが、交通機関も何も無い時代、様々な困難を乗り越え無事インドから法典を持ち帰ることができたのは、ひとえに自分探しの強い願望があつたからに外ならないと思います。冒険家といわれる人達が海や山や空に挑むのも、本当の自分を発見したためです。一見関係ないように見えますが、骨董品集めに夢中になつている人達も、有名ブランドを買いあさっている人達も、ネオン街をうろついている人達も、みな自分探しの旅をしているのです。何を探せば良いか分からないけれど、何かをしていなければ不安でいられないので、そのような事をしてはお茶を濁しているのです。この健全な心理状態に忘えるためにも、私たちは一日も早く本当の自分を発見しなければなりません。幸いにしてあなたは今日、自分探しの旅行案内書を手に入れました。この案内書を読み終えたとき、あなたの目からウロコが落ちるでありましょう。「そうだったのか！ そのために生まれてきたのか！」と……。これは千載一遇のチャンスです。ぜひ、このチャンスをものにして下さい。

(1) 自分を知らない私たち

今日殆どの宗教は、倫理的教えや道徳的教えに偏り、宗教の真髄である「人間を知らしめる」という根本的教えを忘れていきます。宗教の真の目的は、いかに人間を四苦（生・老・病・死）から解放してやるかであり、それは真の人間を知らずして果たせるものではないのです。今日の宗教の指導者の殆どは、自分を知っておりません。自分を知らないということは、人間を知らないということです。人間を知らないで人を導くのですから、これほど恐ろしいことはありません。さらに問題なのは、宗教が職業化している点です。宗教が食べるための道具になつては、衆生に純粹な教えが伝わるわけがないのです。今日神道も伝統仏教も新興宗教も、祭事や儀式などに奔走し真の宗教の目的を果たしていません。

なぜ私たちは、学校へ通い勉強しなければならないのでしょうか。なぜ私たちは、朝早くから外に働きに出なければならないのでしょうか。一体人生は何のためにあるのでしょうか。今の私たちは本当の自分も知らず、人生の意味も分らず、ただ生きるために、家族を養うために、学校に通ったり働きに出たりしているのです。

では人間は何者なのでしょう。一体何のために生きているのでしょうか。といってもその前に、正しいもの見方ができなくては核心に迫ることはできません。お釈迦様が八正道の第一番目に「正しく見る」を持ってきたのも、人間が一番惑わされやすいのは、「見る」という部分だったからです。正しくものを見る事が出来なくては、正しい選択も正しい判断も正しい生き方もできません。ですからこのメッセージも、正しくものを見るところから入りたいと思います。

○正しくものを見ていない私たち

私たちの感覚器官は、実にごまかされやすいように出来ています。特に見ることに関しては手放しなので、

次のような体験はありませんか。

隣の列車が前進しているのを見て、自分の乗っている列車がバックしていると錯覚したり、また、同じスピードで動いている列車を見て、自分の乗っている列車が止まっていると錯覚したり・・・この世の動きもこれとよく似ていて、周りのものと自分とが同じ時間（スピード）で動いているために、私たちは本当にそのものがあるような錯覚に陥っているのです。

本当は、この世の物は実際にはないので。でも私たちは実際にあると思っています。それは見て触られるからそう思うわけですが、でも見て触れられるもので永遠になくならないものがあるでしょうか。海も、山も、地球も、自分のボディさえも、いつか必ず消えてなくなってしまうのです。どんなものも、刻々と消える方向へ進んでいるのです。しかし、自分のボディも同じスピードで進んでいるため、実際にあるような錯覚に陥っているのです。もしこの世の動きを早送りで見ることができたら、私の言っていることがわかって頂けると思います。要するに私たちは、同じ時空の土俵の上で同じもの同士が相撲をとっているため、本当にあるような錯覚に陥っているのです。

こんな誤解もあります。空気を冷やせば水になり水を凍らせれば氷になることは、誰でも頭では分かっています。でも私たちは、本当に氷を空気だと思っているでしょうか。本当にあるのは空気で、氷は一時の存在です。ということは、氷は実在しないことになります。しかし私たちは、本当にあると誤解しているのです。私たちは見える物があると思っていますが、見える物は見えないモノ無しには存在できないのです。形ある物はすべて見えない本質から生まれ、見えない本質に帰るのです。もし見える物が永遠に存在するのなら、この宇宙は見える物で埋まってしまうでしょう。幸い形ある物は消えてなくなるから、宇宙は永遠の存続が可能なのです。

消えてなくなる物（結果）が、消えてなくなる物（結果）を生むことはありません。また消えてなくなる物（結果）が、永遠になくならないモノ（原因）を生むこともありません。永遠になくならないモノ（原因）が、消えてなくなる物（結果）を生み、永遠になくならないモノ（原因）が、永遠になくならないモノ（原因）を生むのです。これは冷静に考えれば誰でも分かることですが、私たちはこの当たり前のことを当たり前と思えない大きな錯覚に陥っているのです。

またこのような錯覚もあります。コップを手に取りこれは何ですかと質問すると、百人が百人とも「コップです！」と答えます。でもコップって、本当に実在するのでしょうか。コップとは、ガラスがコップの形をした時に付けられた名前ではありませんか。その証拠に、コップを粉々にしてしまえば誰もコップとは呼びません。ガラスのカケラというはずです。コップは名前だけの存在ですから、実在するものではないのです。実在しているのはガラスです。しかし私たちは、コップが実在していると錯覚しているのです。

さらに、次のような大きな誤解もあります。

私たちは宇宙の一部です。その証に私たちは、地球から生まれ今地球の中におります。その地球は、宇宙から生まれた宇宙の一部です。でも私たちは、地球は宇宙の一部だと思えても、自分が宇宙の一部だとは思っていません。それは宇宙に比べ、人間があまりにも小さな存在だからです。人間から生まれたイボは、人

間ではありませんか。人間の一部分である爪や毛は、人間ではありませんか。ならば宇宙から生まれた人間も、宇宙ではありませんか。私たちは正しい物の見方ができないために、自分が宇宙でありながら、宇宙と思えない錯覚に陥っているのです。

○正しく見（観）る

「正しく見（観）る」について、もう少し踏み込んで考えてみることにしましょう。私たちは普段になげなく物を見ておりますが、物を見ている状態には二つの状態があるのです。一つは外側（形・現象・結果）を見ている状態、もう一つは内側（本質・真実・原因）を見ている状態です。前者は実際にはない幻で、後者は実際にある真実です。私たちは外側を見る肉眼と内側を観る心眼を持っていますが、殆どの人は外側を見る肉眼しか使っておりません。これでは正しく生きられるわけがないのです。なぜなら、実際にはない物があると見れば、その物に溺れてしまうからです。多くの人が躍起になって物やお金を追い求めているのは、正しくモノを観ていないからです。

正しくモノを観るためには、モノの本質を、心眼で観なくてはなりません。心眼とは理解眼のことですが、見えない本質を観るには、理解力によって観るしかありません。お釈迦様がいつていた正見とは、物を色や

形で見るとは、モノの本質を理解力で観なさいという意味だったのです。モノの本質が心底で理解できるとなれば、この世のいかなる物にも執着しなくなり、また自分を本質として観られるようになりますので、本質として生きられるようになります。これは人間の自分から、本質の自分に変身したことを意味しますので、人世観が全く変わってしまうのです。

ここまで「正しく見（観）る」について述べてきましたが、一番大切なのは、本当にあるモノと本当なものの識別をすることです。本当でない物は目で見えますが、本当にあるモノは目で見えないのです。つまり結果は目で見えますが、原因は目で見えないのです。今日の教育の一番の問題点は、本質の世界のことを教えないで、形の世界のことばかり教えている点です。そんな結果をいくら教えても、原因を教えずには何の意味もないのです。教えるべきことは、「原因・本質・真実」すなわち「真理」です。自分探しの旅を続けるにあたって、まずこのことを念頭に留めておいて下さい。

○真実を知るには疑問を持つことである

私たちは生まれた時から、「あなたは人間ですよ！」と両親から教えられてきました。また学校の先生からも、「あなたは人間ですよ！」と教えられてきました。そして自分も今日まで何の疑いもなく、人間と思

って生きてきたはずです。誰もが自分のことを人間と思い、人間として生きております。でも私たちは、本当に人間なのでしょうか。おかしな質問かもしれませんが、この問いは実に重要なのです。なぜなら、もし私たちが人間でないとしたら、全面的に生き方を変えねばならないからです。人間だと思っているから学校に通わねばならないし、朝早くから働きにも出なければなりません。例えば、本当は空を飛べるカモなのにはアヒルだと勘違いしていたら、どんな生き方をするでしょうか。多分、一生地を這いずり回って生きることでしょう。もし空を飛べるカモだと知ったら、全く違った生き方をするはずですよ。

ヒマラヤの聖者たちは、水の上を歩いたり、空中から物を取りだしたり、色々と不思議なことができるといわれます。彼らは、私たちと何ら変わらぬ手順を踏んで生まれた人間なのに、どうしてそんなことができるのでしょうか。彼らと私たちとの違う点はたった一つ、本質として生きていくかいないか、すなわち、自分の本性に目覚めているかいないかだけの違いです。自分の本性に目覚めれば、誰でもそのようなことができるようになるのです。突然このようなことをいわれても信じられないかもしれませんが、コロンブスが卵を立てて見せたことも、やる前は誰も信じなかったのです。でもやってみせたことは、誰にでもできる当たり前のことだったのです。先駆者の言動は、はじめは誰の目にも狂気じみて見えるものです。でもその先駆者がいなくなったら、新しい道は開かれなかったのです。

○思い込み違いをしていないか確かめよう！

どんなに素晴らしい能力の持ち主も、周りの環境が悪いため能力を開花させることなく一生を終えてしまうということは、決して珍しいことではありません。その典型的例が、オオカミ少年の話です。ジャングルでオオカミに育てられた少年は、オオカミと同じように地を這って歩き、唸り声をあげ、口で肉を裂き、食べていたといいます。もしこの少年が人間社会で育っていたら、人の上に立つ素晴らしい人間になっていたかも知れません。

このように人間は、非情に環境に左右されやすい生き物なのです。しかし一方で、順応性の高い生き物でもあるのです。順応性が高いがゆえに、幼い頃から真実を教え真実に生きる教育をしたら、四苦からの解放は勿論、宇宙に羽ばたいてゆける存在になれるはずなのです。

学び始めのころ、「悟りとは己を知ることである」と教えられた時、己の何を知るのでろうと疑問に思いました。人間は人間以外の何者でもないはずなのに、いったい人間の何を知らなさいというのでろう。この疑問は、ずーっと私の頭から離れませんでした。でもあるきっかけがもとで、その疑問が解けたのです。

「確かに、この交差点を左折したところにコンビニがあったはずなのに・・・」。でもいくら探しても見付かりません。思い込みの激しい私でしたから、その交差点が間違っているとどうしても思えなかったの

です。そうこうして探しているうちに、「もしかしたら次の交差点だったかも知れない」と気付いたのです。やはりそうでした。私の思い込み違いだったのです。その時私は、真理の探究も同じではないだろうかと思付いたのです。

「今日まで何の疑いもなくボディーを自分だと思って生きてきたけど、本当にボディーが自分なのだろうか。もしかしたら、思い込み違いしているのではないだろうか。己を知らないとは、ボディーが本当の自分なのかどうか知りなさいということではないだろうか。もしこのボディーが自分でないとしたら、自分でないもののために毎日生きていることになる。それでは生きている意味も、生きている甲斐もないのではないだろうか」。

「もう一度考え直して見よう」私はその時そう思ったのでした。

思い込みとは恐ろしいもので、いったん信じ切ると他のことが考えられなくなるのです。特に長年思い込み違いしていると、それが凝り固まって間違っている間違っていても間違っていると思えなくなるのです。もし私たちが人間でないとしたら、これは大変な過ちを犯していることになります。ぜひこの機会に、思い込み違いしていないかどうか確かめて下さい。自分探しの旅の第一歩は、そこから始まるのです。

(2) 私たちは生命である

○本当の自分はボディーではない！

あなたは今、自分の体を感じていますね。つねれば痛いし、蚊に刺されれば痒いし、夏になれば暑いし、冬になれば寒いと感じるこの体を自分だと思っ**て**いるはず**です**。もしこの体が本当の自分**でなく**乗り物である車**だ**としたら、あなたは車と運転手のどちらを大切に**しますか**。どんなに車**が立派**でも、運転手**が乗**っていない**ければ**車は動かない**のです**。車**が勝手**に動く**ことは**ない**から**です。人間も体**が勝手**に動く**ことは**ない**のです**。体の中に**運転手**が入**って**、**こう動**か**そう**、**ああ動**か**そう**、**と考**えて**運**転**する**から**体は**動く**のです**。

では、**車と運**転**手と**、**どちら**が**本**当の**自分**で**しょうか**。そう**です**。運**転手**が**本**当の**自分**な**のです**。運**転手**と**車**が**あ**まりにも**一**体化**して**いる**ため**、**車**を**自分**だ**と勘**違**い**して**いる**の**です**。もし、**つね**つても**叩**いても**痛**く**感**じ**な**か**つ**たら、**体**を**自分**だ**と思**わ**ない**かも**知**れ**ませ**ん。そう**な**ると、**火**の**中**に**手**を**入**れ**大**や**け**ど**を**した**り**、**手**に**く**ぎ**を**打**ち**込**ん**で**大**げ**が**を**し**た**り**、**食**べ**な**い**で**飢**え**死**に**す**る**かも**知**れ**ませ**ん。それ**では**ボ**デー**ー**が**維持**でき**ない**ので**、私**たち**には、**目**と、**耳**と、**鼻**と、**舌**と、**肌**の、**五**つ**の**感**覚**器**官**が**与**え**ら**れ**て**いる**の**です。

私たちのボディと車とは実に良く似ています。車を動かすためにガソリンやオイルや水を入れますが、私たちも食べ物を食べ、水を飲みます。車にはサニーだとかコロナといった名前が付いていますが、私たちにも太郎とか花子といった名前が付いています。また、人間は口を通してものをいいますが、車もクラクションを通してものをいいます。人間は排泄物を出しますが、車も排気ガスを出します。

こうして見ると、私たちのボディと車は実に良く似ていることが分かります。ただ、固いか柔らかいかの違いがあるだけです。

それでは、一番大切な部分に触れることにしましょう。車は運転手がものを考えますが、人間は誰がもの考えるのでしょうか。もう少し分かりやすく言いたしましょう。車は人間が乗って運転しますが、人間を運転しているのは一体誰なのでしょうか。どんな名前の運転手なのでしょうか。本当の自分は誰で、どんな名前の持ち主なのでしょうか。

○私たちの本性は生命である

誰もが、見て触れるこのボディを自分だと思っております。でも本当の自分はボディではなく、ボディを運転している「生命」という名の運転手です。生命という名の運転手は、エネルギーですから目には

見えません。その見えない生命エネルギーが、ものを考え、言葉を話し、行動指令を出して肉体を動かしているのです。このボディーは、生命エネルギーのすみかであり、表現媒体なのです。ボディーは、老い、病み、死にますが、生命エネルギーは年も取らないし、病気にもならないし、死ぬこともない、永遠不滅の存在です。

あなたに亡くなった祖父母がいたとしましょう。その祖父母は亡くなったのではなく、乗り物がなくなっただけで、運転していた生命はなくなっていないのです。今も生き、あなたを見守っています。使い物にならなくなった車が廃棄処分されるように、祖父母の体も使い物にならなくなったから廃棄処分されただけなのです。人間が四苦から逃れられないのは、この消えてなくなるボディーを自分だと思い違いしているからです。もしボディーが自分でなく、老いることも、病むことも、傷つくことも、死ぬこともない生命が自分だと思えたら、一切の苦しみから解放されるのです。

本当に有るものなら、決してなくなることはありません。本当でないから、人間は消えてなくなるのです。私たちは、人間が思ったり語ったりすると思っただけですが、本当でない人間がどうして思ったり語ったりできますか。本当にある生命のみが、ものを思い、ものを語り、もの行えるのです。あなたが家族と団欒できるのは、あなたの中に生命が宿っているからなのです。あなたが恋人と甘い恋を語れるのは、あなたの中に

生命が宿っているからなのです。あなたがアスリートとして活躍できるのは、あなたの中に生命が宿っているからなのです。生命こそ、ボディーを生かし、動かし、働かせている主人なのです。

このように私たちには消えてなくなるボディーの自分と、永遠になくならない生命の自分があるのです。でも正しいものの見方ができないため、見て触れられるボディーを自分だと誤解しているのです。

○生命は魂とも呼ばれている

遠い昔より「人形に魂が宿る」といわれてきましたが、これは伝説でもおとぎ話でもなく、事実です。この宇宙では、形が作られると必ず生命が宿る仕組みになっているのです。この生命の宿りを、「生命核が宿る」とか、「原子核が宿る」とか、「魂が宿る」とか、「本質が宿る」などと、呼ばれているのです。本当の自分とは、永遠不滅の「生命核・原子核・魂・本質」(図1「後出」参照)のことなのです。この生命核は大宇宙の中心にあり、さらに一つ一つの原子の中心にもありますので、一つ一つの生命核は宇宙の中心点になり得る存在なのです。この辺が非常に解りづらいところですが、今解らなくても結構です。ただ、同じ一つの生命核が、あなたの中にも、私の中にも、すべての物の中にも生きて働いているということだけ覚えておきましょう。

さて、私たちが人間と錯覚する理由の一つは、ボディーが生き、生命が生きていると思えないからです。生命は見えないし、触れもしないものですから、そう思うのも無理はありませんが、見える物は見えないモノによって生かされ、働かされているのです。私たちは冷蔵庫が働いていると思っっていますが、見えない電気（エネルギー）が働いているのです。冷蔵庫は、見えない電気によって動かされているのです。動かされているのと、働いているのでは大違いです。人間も同じように、生命というエネルギーが働いているのであって、ボディーが働いているわけではないのです。形ある物の働きは、すべて見えない生命エネルギーの作業なのです。

もう一つ人間と錯覚する理由は、ボディーが死んだら意識もなくなると思うからです。はっきり言って、ボディーには一点の意識もありません。もしあるなら、死人に言葉があるはずですが、でも、そんな話しは聞いたことがありません。それはボディーに意識がないからです。

このように、意識は生命に属するものであって、ボディーに属するものではないのです。ですから、形のボディーが糧を得ることはありません。糧を得るのは、あくまでも形を操っている生命の方です。生命こそ、永遠に記憶を留め、保持し、糧を積み上げてゆく真実なるものなのです。

○どうしたら生命になれるのか

ここまで、人間の肉体は生命であると訴えてきましたが、あなたはまだ疑心暗鬼のようですね。無理もありません。気の遠くなる年月、人間だと思つて生きてきたのですから・・・でも何となく、そんな気になつてきたではありませんか。

ではどうすれば、私たちは生命になれるのでしょうか。何か修行でもしなければならぬのでしょうか。いいえ何もしなくても、今このままにして生命なのです。なぜなら、私たちの本質そのものが生命だからです。これから本質になるのなら、何かしなければならぬかもしれませんが、私たちは生まれながらにして生命という名の本質なのです。もし何かすることがあるとすれば、生命と考えるようになる努力が必要なのです。といつても、この思えるようになることが、大変といえは大変なところなのですが・・・。

あなたは今日まで、自分のことを人間だと思つて生きてきましたね。いいえ、あなただけではありません。あなたの両親も、学校の先生も、政治家も、誰も彼もが人間と思つて生きています。その思い癖は心の髄の髄まで染み込み、今や自己催眠にかかたらくらい凝り固まつております。他人がかけた催眠術なら、他人に解いてもらわなくてはなりません。自分でかけた催眠術ですから自分で解くしかありません。私が他力信仰を否定する理由は、自力で催眠術を解くしかないからです。

では催眠術を解くには、どうしたら良いのでしょうか。それは、生命の自分に一心を集中し、生命の自覚を高めるしかありません。ボディーを自分と思い続け人間癖を付けてしまったのですから、その反対に生命を思い続け人間癖を取るしかないのです。つまり、今無意識で人間と思っているように、無意識で生命と思えるようになるまで、生命を思い続けるしかないのです。

何の技術も何の修行もいりません。ただ思い続けるだけです。この思い続ける作業が、瞑想と言われるものなのです。瞑想は、自己催眠を解く最も手短な方法なのです。もし自己催眠から目覚めることができたら、偉大な智恵と力を持つ自分に変身できるでしょう。というより、本来の自分が蘇ると言った方が良いかもしれません。その変身の様子は、第三章で述べたいと思います。

○すべては人間を知るところから始まる

少々横道にそれますが、人間はどうして死ぬボディーを持ちながら、死を真剣に考えようとしないのでしょうか。もし死を真剣に考えるようになったら、人間社会に一切の不幸はなくなるでしょうに……。なぜなら、死を真剣に考えるようになれば、

「人間とは何か？」

「人生とは何か？」

「人は何のために生きているか？」

など、人間そのものを考えざるを得なくなるからです。

あなたは、自分のことをどれほど知っていますか。せいぜい、このボディーのことぐらいしか知らないのではありませんか。それで本当の自分を知ったといえるでしょうか。本当の自分を知らないで、どうして正しい見識が持てますか。どうして正しい物事の判断ができますか。どうして正しい生き方ができますか。

政治も、経済も、科学も、教育も、すべて「人間とは何か？」から始まるのです。この一番大切な土台が定まらないで、どうして揺るぎない社会が築かれましょうか。今の社会が混迷を極めているのは、皆がみな、人間として生きているからです。人間として生きれば、お金や物がたくさん要ります。地位や名誉も要ります。そうなれば、人と人との競い合いは避けられません。そんな社会で、どうして心穏やかに生きられるでしょうか。今私たちが一番にやらねばならないのは、真の人間を知らしめる作業です。殺人兵器に莫大なお金をかけるのに、一番大切な人間を知ることにお金をかけないとは、何ともおかしい話ではありませんか。

○嘘をつかないようにする

ここで注意したい点が二点あります。一点は、本当の自分を「思い語る」のに遠慮はいらないということです。私たちは、人間という嘘を付き過ぎているのです。それも、自覚なしに、です。世の中には、嘘と知りつつ嘘をつく人たちがたくさんおりますが、そんな嘘はまだかわいい嘘です。一番厄介な嘘は、嘘を嘘とも知らないでつく嘘です。なぜなら、知ってつく嘘は改めやすいですが、知らないでつく嘘は改めにくいからです。嘘が真実を生むなら、どうぞ嘘をつけて下さい。でも嘘からは嘘しか生まれません。この嘘は、知らず知らずのうちに私たちを重罪人に仕立てているのです。

では、なぜそれほど嘘の罪が重いかといいますと、自分を人間だと思っから偽りをいうのです。人間と思っから盗みをするのです。人間と思っから人を傷つけたり殺したりするのです。自分を人間と卑下すれば、どうしても罪を犯してしまうものなのです。自分の本性が生命だと知ったら、決して罪は犯さなんでしょう。これは、大金持ちが盗みに入らないのと同じ理屈です。腹いっぱいの人が無銭飲食しないのと同じ理屈です。どうか、嘘の重大さを知って下さい。

○知識を食べ過ぎてはならない！

もう一点注意したいのは、必要以上の知識を詰め込んではならないということです。私たちは今日まで、たくさん知識を身につけてきました。この世で生きてゆくためには仕方のないことなので全面的に否定はしませんが、知識を多く身につければつけるほど考え方に弾力性がなくなってしまいます。これは真理を追究する上で、非常に障害になります。もし真剣に真理を追究したいなら、できるだけこの世の知識を食べないことです。できるなら、これまで持っていた余分な知識を捨てることです。

イエス様は「新しいぶどう酒は新しい革袋に入れなさい！」と言っておられましたが、確かに古い知識がたくさん詰まっています、新しい知識の入る隙間はないでしょう。こんなことを言うと、何を言うのかと怒られそうですが、いいのです。いつか必ず分かってもらえる時がきます。

○生命のみが生きています

本道に戻りましょう。私たちが自分のことをポディーだと思ってもう一つの理由は、卵子と精子が結びついて細胞化し、さらに諸器官がつくられ、人間の形を取って生きるものになると考えているからです。でも、ポディーは、すでに形を取る前から生きています。なぜなら、ポディーを形づくっている原子そのもの

が生きているからです。先ほど本質そのものが生命だといいましたが、生命＝本質＝原子なのです。その生命はエネルギーですから、原子そのものが生きていて当然なのです。

このことは、次のように考えたら、分かりやすいかも知れません。

ここに人形のパーツ（原子・本質）があり、そのパーツを組み合わせて人形を作ったとします。人形は形が作られて生きるものになると思われがちですが、人形はパーツの段階で生きています。パーツ一つ一つに命があるのです。ただパーツの命は役割が違うため、形全体を保全することができないのです。形を操り保全するのは、あくまでも生命核（魂）の役目です。これはちょうど、家がつくられると中に電灯が必要になるのと良く似ています。この電灯に当たるものが、一般的にいわれている魂と呼ばれるものなのです。パーツの命と生命核とは、働きが別々なのです。本質的には同じですが、進化の歩みが違うため役割が違っているのです。生命核が抜けると形は維持できなくなり、形の要素である原子は宇宙空間にバラまかれますが、なくなったわけではなく、宇宙空間に浮遊し再び形をとるチャンスをうかがっています。生命核も同様に、宇宙空間に浮遊し次なる宿りを待っているのです。形は消えてなくなりますが、原子も生命核も永遠不滅の存在なのです。

ここで強調したい点は、本質は宇宙に一つしかないということです。生命は宇宙に一つしかないということです。その一つしかない生命が、万象万物の中に平等に行き渡り、生きて働いているのです。この宇宙は、一つの生き物なのです。宇宙空間そのものが生き物だという意味です。私たちは、今その生き物の中にいるのです。そしてその生き物は、今そっくりそのまま私たちの中にもいるのです。だから、人間を知れば宇宙を知ることができるわけです。

○生命である証し

釈迦は衆生の苦しむ様子を見て、「なぜ人間はこうも苦しまねばならないのだろうか？」とお嘆きになり、苦しみから抜け出す方法を探るため山にこもられました。何年もの思索の末得られた結論はこうでした。

「本当の人間は、ボディーではなく生命であった。しかし誰もが、自分のことをボディーだと思って生きている。ボディーを自分として生きる限り四苦から逃れられないのは当然で、これは実に嘆かわしいことである。もし生命に目覚めたら、一切の苦しみから解放されるのだが・・・。でもどんなに“人間の本性は生命である！”と力説しても分かってもらおうことができない。・・・一体どうしたものか？」

この悩みは釈迦だけでなく、古今東西覚者達が一様に持つ悩みであり、その悩みは今もって解決されていません。

では、その悩みを少しでも解決すべく、私なりに生命の証を立ててみることにしましょう。

この宇宙には、唯一生命という意識主（創造主・神）がいるだけです。なぜ生命しかないかといいますと、意識はこの宇宙に一つしかないからです。ならば意識を持つ生命が絶対実在なのは当然でしょう。このことを前提に考えれば、次のような論理が成り立つはずです。

「人間は意識を持っている、ゆえに人間は生命である」と・・・。

先ほども言ったように、ボディーは生きていないわけですから、ボディーに意識があるはずがありません。意識を持っているのは唯一生命ですから、意識を持っている人間が生命なのは、当たり前ではありませんか。この意識は、誰も手放すことはできないのです。どんなになくしたいと思っても、決してなくすことはできないのです。それが生命である証しなのです。

今、あなたは自分を「私」と思っていますね。でも、誰が私と思っているのでしょうか。ボディーのあなたでしょうか？ 生命のあなたでしょうか？ ボディーは意識を持っていないのですから、「私」と思えるはずがありません。

そこにあなたの影が映っています。その影をあなたは見ています。その見ているあなたは、影のあなたですか？ 光（生命）のあなたですか？

影が影を見ることはできないのです。本当に生きている光（生命）だけが、影を見ることができません。あなたが様々なことが理解できるのも、実際に存在する生命だからです。実際に存在する生命が理解するのであって、実際に存在しないボディが理解できるわけではないのです。

もう一つ崩せない絶対真理があります。それは、言葉は生命のみにあるという真理です。その生命のみにある言葉を今、あなたは語っています。ということは、あなたは生命であるということなのです。ボディは生きていないのですから、生きていないボディが思考を持つはずがないし、言葉を持つはずもないからです。生命だけに思考があり言葉があるのですから、今、語っているあなたは間違いなく生命です。ただ、自分のことを生命だと思っていないだけです。しかし、どんなに生命だと思っていなくても、あなたが生命である事実は変わらないのです。このように生命の証しは、「意識を持つ・思考を持つ・理解できる・言葉を持つ」という四つの理由で立証できるのです。それでもあなたが生命でないとおっしゃるなら、あなたは神を冒瀆していることになります。生命でありながら人間だと主張するのは、父親の王の前で息子の王子が、「私はこじぎだ！」と言っているようなものです。

はじめは単なる誤解だったかも知れませんが、いつの間にかそのような立場になってしまったのが人間なのです。さあ、誤解を解きましょう。生命に目覚めましょう。目覚めれば即、生命のような働きができるのですから……。繰り返して言いましょう。

「私たちは生命です」

「宇宙生命そのものです」

どうしてもそう思えないなら、こう考えて下さい。

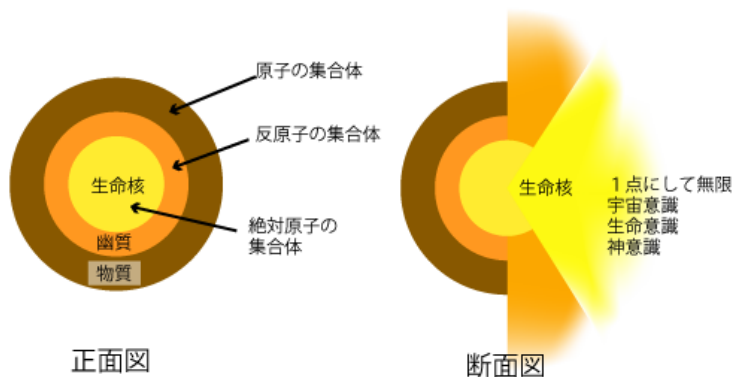
・私は、人間の形をしたロボットのの中に入って運転している生命だ。

・私は、人間の皮をかぶった生命だ。

・私は、後ろで人形（人間）を操っている黒子（生命）だ、と……。

運転手である生命が、ものを考え、語り、行っているのです。私たちは外形に惑わされて、人間と錯覚しているだけです。人間と錯覚すれば、人間以上の智慧も力も出せないのは当然です。しかし生命の自覚が持てれば、今即、生命としての智慧と力が出せるようになるのです。お釈迦さまが言っていた正しく見るとは、「人間を外形で見るのではなく、本質である生命を自分として観なさい！」という意味だったのです。

(図1)本質・生命・魂



・絶対原子そのものに意識と意志があるので、原子にも反原子にも意識と意志がある。

・狭い意味での本質は、物質を形づくっている原子である。

広い意味での本質は、生命核であり、魂であり、エネルギーである。

原子は反原子と共に絶対原子から吐き出されたものであるから、本質と呼んでもさしつかえない。

◎本質 = 原子 = 生命 = 魂 = エネルギー

◎本質 = 原子 + 反原子 + 絶対原子

◎本質 = 絶対原子

◎生命核 = 原子核 = 魂

絶対原子は本源にして本質であり宇宙意識そのものである。

宇宙意識、生命意識を神と呼ぶ。

(ここに示した図はあくまでもイメージ図です)

今、「私」と思っているあなたは生命(図1)です。今語っているあなたは生命です。今料理をしているあなたは生命です。今歩いているあなたは生命です。生命とすることに、思い過ぎるということはありません。ぜひ「本当の自分・生命の自分」を、意識するよう努めて下さい。

(3) 意識の謎を解く!?

私たちは意識を持ち意識を使っているにもかかわらず、意識が何で、どこから生まれ、どのような性質を持ち、どのような働きをしているか、全く知らないまま生きています。専門家である医学者や生物学者さえ、意識の正体を掴み切れないのですから、一般人が解らないのも当然です。

現代科学の常識では、意識は脳が生み出していることになっています。ものを考え、思い、記憶し、ボディを動かしているのは、みな脳がやっているというのです。そのような考えを持っているから、脳が死ねば意識がなくなると思い、人間は肉体ある限りのものであると結論付けてしまうのです。本当の自分を知る

キーポイントは、意識が何なのかに着目しその謎を解くことです。意識を知った者は自分を知り、宇宙を知った者であるといわれるくらい、意識の解明は欠かせないのです。では意識とは何でしょうか。

○意識とは？

意識とは存在の思いです。存在の心です。「何か」を感じられる思いです。「私」と思える思いです。思うにはエネルギーが必要ですから、意識はエネルギー（力）でもあるわけです。そのエネルギーは生命ですから、意識は生命そのものなのです。その意識的エネルギーが宇宙に遍満しておりますので、宇宙は意識の海とって良いわけです。つまり、宇宙は意識の海であり、生命の海なのです。その意識の海の中に、銀河も、星々も、地球も、私たちも存在しているのです。だから、「すべての物は意識の中に存在し、意識はすべての物の中に存在している！」といういい方ができるのです。なぜすべての物の中に意識が存在しているかといいますと、意識はすべての物を形造っている本質（素材）そのものだからです。

意識Ⅱ本質（素材）Ⅱ生命（エネルギー）

あなたの意識、私の意識など、たくさん意識があるように見えますが、意識は宇宙に一つしかないのです。自分は人間だ！ 個人だ！ 誰の誰べえだ！ と誤解することで、一つの意識をたくさん意識に分けてしまったのです。しかし、個々の意識はもともと一つの意識から生まれたものですから、個々の意識を遡れば一つの意識に収まってしまいうけです。

意識は、すべての創造物の本源にして本質(図1)であり生命の源泉です。その意識は、智恵と、力と、光を、己の表現道具として持ち、大宇宙を包容し差配しております。だから意識そのものが宇宙そのものであり、生命そのものといって良いのです。宇宙は意識と意志をも持った一匹の生き物なのです。その生き物の細胞一つ一つが私たちですから、私たちは生命そのものであり、大宇宙そのものといって良いのです。その意識が人間の中に宿れば、人間には五感という感覚器官があるため、どうしてもボディを自分と誤認し、自分を人間にしてしまうのです。人間と誤認すれば個人として生きるのは当然で、今私たちは宇宙生命でありながら個人として生きているのです。

○形は意識の表現の窓口である

意識(図2)を次のように例えたら分かりやすいかもしれません。役所はそのままでは抽象的な存在です。

役所が具体的な活動をするためには、手足となつて働いてくれる窓口が必要です。戸籍係や、清掃係や、公園係や、福祉係などの窓口は、その手足の役割を果たしているのです。宇宙生命も同じように、手足となる鉱物や植物や動物や人間などの窓口を作ったのです。窓口の役割はみな違いますが、宇宙生命の一部であり役所の一部所であることは違いありません。もしその窓口が単なる一窓口だと思っていたら、一窓口としての対応はできても、役所全体の対応はできないでしょう。市民から苦情がきても、「私は戸籍係だから外の係のことなど知りません!」と突っぱねるかもしれません。人間も私は太郎だ花子だと思っていたら、個人としての役割は果たせても、全体(生命)の役割は果たせないでしょう。今人間は、これと似た状態で生きているのです。全体を意識していないから、窓口と窓口が敵対するような戦争が起きているのです。一つの中で、心臓と肺が喧嘩しているようなものです。もし一つ一つの窓口が、役所としての自覚を持ったら、きっと仲良くできるはずですよ。

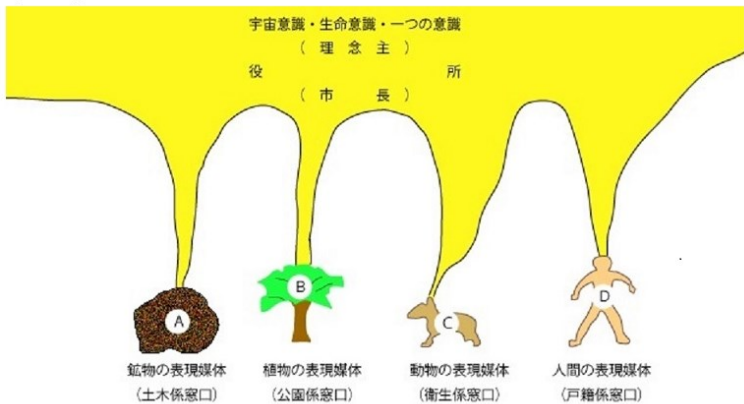
では、なぜたくさんの意識があるように見えるのでしょうか。それは個人個人に、五官という個別化された感覚器官があるためです。その感覚器官が自我を作り、その自我が窓口を自分と思うことによって、意識

を個別化してしまったのです。本当は宇宙生命（役所）なのに、人間（窓口）を自分だと思いい違ひすることで、全体の意識を個別の意識にしまったわけです。人間は宇宙生命の表現媒体であって、実在しているものではありません。あくまでも人間は、宇宙生命の一窓口です。実在しない窓口独自の意識があるわけがないのです。

○意識は意識している通りのもの

意識が一つしかない裏付けは、宇宙が永遠に存続してきた事実が示しております。もしたくさんさんの意識があるなら、宇宙はどうに消滅していたはずです。なぜなら、あなた私の

(図2)意識



- ◎ 鉱物・植物・動物・人間は生命の手足としての表現媒体
- ◎ 土木係・公園係・衛生係・戸籍係は役所の手足としての表現媒体
- ◎ 意識は意識している通りのもので、それ以上のものでも、それ以下のものでもない。

あるところには、必ず敵対するものが生まれるからです。幸い一つの意識しかないから、ぶつかりあうことなく存続してこられたのです。その一つしかない意識が、鉱物にも、植物にも、動物にも、人間にも、宿っているのです。一つしかない意識だから、分けることも区切ることもできないのです。あなたが使っている意識も、私が使っている意識も、鉱物・植物・動物が使っている意識も、同一の意識です。このすべての意識が同一の意識であると知ることが、とても大切なことなのです。もしすべての人類が、同一の意識で生かされている兄弟姉妹だと知ったら、決して争い事など起こさないう。しかし残念なことに人間は、同じ意識を持ち同じ意識を使っているにもかかわらず、一人一人の意識が別モノだと考えているのです。

生命意識もあって、人間意識もあるわけではないのです。大宇宙を意識している意識も、個人を意識している意識も、同じ一つの意識です。意識は意識している通りのもので、それ以上のものでもそれ以下のものでもないのです。人間と思えばそく人間意識になるし、生命と思えばそく生命意識になるだけです。ただ何と想っているか、それだけのことです。繰り返します。宇宙には、誰々の意識という区切られた意識はありません。たった一つの、生命意識・無限意識・宇宙意識があるだけです。その意識を勝手に小さく区切っているのが人間なのです。宇宙を自分と思えばそく宇宙意識になるし、人間を自分と思えばそく人間意識になるだけです。そこには自覚の問題があるだけで、仕分けされた意識があるわけではないのです。ただ

意識を天（生命）に置くか、地（人間）に置くか、それだけの話です。今生命と知っている私も、人間と
思い違っている私も、同じ意識の私です。私が二ついるわけではないのです。どんな意識も、一つの意識か
ら生まれたのですから、一つの私がいるだけなのです。

○意識は誰が生み出したのか

では意識は、誰が生み出したのでしょうか。いつ、どこから、生み出されたのでしょうか。いいえ、意識
は誰が生み出したのでも、いつどこから生み出されたのでもありません。初めなき始めより、宇宙意識とし
て唯一この宇宙にあったのです。ならば私たちの意識は、その唯一の宇宙意識ではありませんか。でも私た
ちは、自分の意識を宇宙意識だと思っておりません。形を自分だと思い違いし、どうしても人間意識にして
しまうのです。無理ありません。私たちは気の遠くなる年月、人間として生きてきたのですからね・・・。
でも私たちは、初めからそうだったわけではないのです。もともと宇宙生命の自覚を持つ意識だったのです。
その意識が表現の世界に出るに当たり、記憶を失ってしまったのです。なぜ記憶を失ったかについては後に
詳しく述べますが、失わねばならない理由はこうでした。

この表現世界は、ドラマを通して生命核（魂）が成長するよう用意された舞台です。その生命核が生命の記憶を持ったまま舞台に立ち、真剣な芝居ができるでしょうか。同じ私が同じ私相手に、真剣な芝居ができるわけがありません。真剣に芝居できなければ、その舞台にどんな意味があるでしょう。恨み、憎しみ、怒り、悲しい、楽しい、うれしい、この真剣なドラマを通してこそ、私たちは成長できるのです。だから宇宙生命は私たちの記憶を消し、相対的に芝居のできる環境を与えたのです。だからといって、私たちの意識が宇宙意識である事に変わりはありません。ただ失った記憶を手繰り寄せる体験に、大きな意味があるのです。

○意識に沿ってくれる生命核（魂）

宇宙には無限大の意識が一つあるだけです。その無限大の意識を個人と誤解することで、小さな意識に区切ってしまったのが人間なのです。意識を区切れば当然、エネルギーも、智慧も、光も、小さく区切ってしまうでしょう。なぜなら、エネルギーも、智慧も、光も、意識の大きさに沿うようできているからです。

良く個々の魂（図1）があるといわれますが、本来宇宙には寛大な魂が一つあるだけです。ただ意識を小さく使うことで、寛大な魂を個別の魂にしてしまっただけです。本当は宇宙大の魂なのに、人間と錯覚するこ

とで小さな魂にしているのです。意識を限定しなければ無限大の自分になれるのに、意識を限定することによって、個人の小さな自分になっているのです。

この地球上に争いが絶えないのは、意識を小さく区切って、あなた私の限定意識を作っているからです。あなた私があれば、人より多くの物を持ちたがるのは当然ですから、どうしても争い事が起きるのです。争わないためには、みな同じ意識であることを知ってもらうしかないのです。だから意識の正体を知ることが、とても大切なことなのです。といっても、言葉や文字で理解してもらえないのが意識（生命）です。したがって、この難問をいかに解決してゆくかが、今後理想の世を築く鍵となるでしょう。

○意識の応用

人間は偉大な意識を持ちながら、その意識を有効に使っていません。意識そのものが、生命であり、神であり、創造力ですから、その力を有効に使えば、潤いある人生を送ることができはずなのです。では意識の応用例を、いくつかご紹介しましょう。

一、自分の意識を花の中に飛ばし、そこに自分の意識を止めます。そして「花さん美しく咲いてね！ あるいは元気で長持ちしてね！」と意識でやさしく話しかけます。毎日意識で話しかけていけば、花持ちが良

くなります。飼っている猫や犬にも、同じように意識で話しかけやって下さい。彼らはますますなつくようになるでしょう。言葉で話しかけてやれば、なお良いでしょう。

二、ポツカリと浮いた白い雲の中に意識を飛ばし、そこに自分の意識を止めます。そして雲さんに、「雲さんどうか消えて下さい！」と意識で囁きかけてみて下さい。大きな雲は時間がかかりますが、小さな雲なら直ぐに消えてくれます。

三、スプーンを手に持ち、そのスプーンが光り輝いているとイメージして下さい。もし光り輝くイメージが持てない場合は、白いスプーンをイメージしても結構です。そのスプーンで、コーヒーを入れたカップを一分ほどかき回して下さい。コーヒーがまろやかにになります。

四、どこか痛い箇所があったら、痛い箇所に意識を持って行って、意識で痛い箇所を優しくさすって下さい。白い手か光の手をイメージし、その手で痛い部分をさすっても結構です。あるいは痛い部分が光り輝くイメージを持つか、パッと光がはじけ飛ぶイメージを持つても結構です。イメージのコツが掴めれば、胃潰瘍など数分で治ってしまいます。

五、親指と人差し指と中指で、空中に「光」の字を描いて下さい。描いたら両手の平を前に差出し、「光り！・光り！・光り！」と三度念じて下さい。すぐに手の平がピリピリしてくるはずですよ。ピリピリしたそ

の手の平で自分の体をさすって下さい。あるいは頭からかぶせて下さい。自分の身体を清めることができます。車を清めたかったら車の四隅に、家を清めたかったら家の四隅に光を投げかけてやって下さい。一般的には「大光明」が多く使われているようですが、「神」でも「大生命」でも効果は同じです。ぜひ試してみてください。

六、昔から雨乞いが行われてきましたが、これは迷信でも儀式もなく実際に効果があるのです。その理由は、私たちの意識は雨を呼ぶことができるからです。人間だけではありません。どんな生き物も意識を持っているわけですから、生き物が生息しているところでは雨が良く降るのです。日本が水に恵まれているのは、自然が豊かでたくさん生き物が生息しているからです。砂漠地帯に雨が少ないのは、生き物が余り生息していないからです。砂漠地帯に植物を植えると雨が降るようになるのは、生き物達が生息するようになったからです。

七、私は家の中にある物に、常に優しく声をかけてやっています。今私の家の中に、テレビ・洗濯機・電子レンジ・冷蔵庫などありますが、もう二十年以上使っているのに、一度も壊れたことがないのです。また私は今まで中古車しか買ったことがないのですが、乗りはじめ調子が悪くても、優しく声をかけてやっ

るうちに、いつのまにか調子が良くなってしまふのです。皆さんもどうか声をかけてやって下さい。物たちが喜んでいるのを体験できるように。

このように意識をうまく利用すれば、様々な効果が期待できるのです。コツを覚えたら瞑想に應用できますので、ぜひコツを掴んで下さい。

ボディーの私が私と思っているのか。別な私（生命エネルギーの私）が私と思っているのか。本当の自分を発見する手掛かりは、そこにある。

（4）なぜ人間は宇宙生命なのか？

○宇宙とは？

宇宙は二つあります。本当は一つしかないのですが、形を取っている私たちの目から見ると二つあるのです。一つは見える相対宇宙（表現宇宙）、もう一つは見えない絶対宇宙（意識宇宙）です。相対宇宙には時間があり空間がありますが、絶対宇宙には時間も空間も何も存在しません。では見えなくて何も存在しない絶対宇宙を、どうやって知ることができるでしょうか。それは、相対宇宙を通して知るしかありません。なぜ

なら、絶対宇宙と相対宇宙は表裏の関係にあるからです。表裏の関係にあるのは、時空そのものが表裏の関係にあるからです。

宇宙の「宇」とは、時間のことを指します。宇宙の「宙」とは、空間のことを指します。この二つは切り離すことができないので、「宇」と「宙」は一つと考えて良いでしょう。もし切り離せば、どちらも存在意義を失ってしまうからです。要するに絶対宇宙と相対宇宙は、相身互いの関係にあるのです。表現宇宙に時空があるのは、表現宇宙を創っている素粒子そのものに時空があるからです。素粒子には質量があります。質量があれば、当然空間があるでしょう。空間があれば、空間と空間を移動する時間が必要になりますから、その宇宙には必ず時間が生まれるのです。ということは、空間そのものが時間そのものであるということですから、だから時空は表裏の関係にあるというわけです。時空は二つで一つであり、一つで二つなのです。

表現宇宙を構成している素材は原子で、表現宇宙の細胞の一つ一つになっております。だから表現宇宙は、原子の海といって良いのです。その原子一つ一つは宇宙に似せて創られていますので、原子一つ一つの中に宇宙の全機能が存在し、原子一つ一つが一つの宇宙を形成していることになるのです。人間が宇宙の縮図といわれる理由は、その原子によって内面も外面も創られているからです。その宇宙を知る最大の難点は、形を通して知ることができない点です。人類は人工探査機を飛ばし宇宙の実態を探ろうとしますが、形を

とつた物をどんなに調べても、何一つ実を得ることはないのです。なぜなら、宇宙の実相は見えるところにあるのではなく、見えないところに隠されているからです。だからどんなに表面をほじくり回したところで、幻は発見できても真実は発見できないのです。宇宙の謎を解きほぐしたければ、相似形の宇宙である人間意識の奥深くに潜り込むしかないので。なぜなら、人間意識と宇宙意識は同一の意識だからです。

○唯物論から宇宙生命の謎に迫る

宇宙の輪郭がつかめたところで、なぜ人間が宇宙生命なのか説明したいと思います。

もしあなたが死んだら、あなたはどくなるでしょうか。ボディーを自分と思っている人は、「何もかもおしまいさ！ ボディーあってこそその自分なのだから」と思うでしょう。

では、唯物論者が信ずる、ボディーがすべてで意識はそのボディーが生み出す、との観点から話を進めることにしましょう。

今あなたが生きているのは、紛れもない事実ですね。ならば確率的に言えば、この後の誕生も「なし」にはならないでしょう。なぜなら、00000000000000000000……」の偶然とも思える確率で誕生したあなたも、宇宙の無限時間においては偶然でなくなるからです。

分かりやすく、仮に 10 兆年分の 1 の確率であなたが誕生したとしましょう。たとえこの分母が無限数であったとしても、0 を並べるわけにはゆきません。なぜなら、今現にあなたが存在している事実があるからです。ならば 10 兆年後、再びあなたは生まれてくることになります。永遠が宇宙ですから、時間も永遠に続くでしょう。

ならば、下記の式の通り、生まれる回数は無限数となります。

もちろん、ボディーは今のあなたのボディーではないが、あなたというあなたではありません。唯物論者はボディーが自我を作ると信じていますから、ボディーの死は無意識の始まりとなり、死に至った人はその瞬間から無意識に陥り、次生 10 兆年かかろうが、無意識においては一瞬と感ずるでしょう。もし唯心論者の信ずるように、死はボディーだけの現象で、意識は永遠に存続するとの観点に立てば、生と死の区分けができ、ボディーから離脱した人は一時の安寧が与えられるでしょう。要するに、自分のボディーの死を観察できるわけです。

さてここで結論付けられるのは、あなたは再び生まれてくるといふ事実であり、

$$\text{無限時間} \times \frac{1}{10 \text{兆年}} = \text{無限数}$$

その回数は無限度であるという事実です。よって唯物論者の死生観は、生の連続となって休みなきボデーの旅路が続くこととなります。それではA・B・C・Dのあなたは、全く関係ないあなたなのでしようか。すなわち今あなたと、未来であなたと思っっているあなたとの関連性は全くないのか、という事です。

【A】という名のあなたの誕生 【A】という名のあなたの死

【B】という名のあなたの誕生 【B】という名のあなたの死

【C】という名のあなたの誕生 【C】という名のあなたの死

【D】という名のあなたの誕生 【D】という名のあなたの死

私が言いたいのは、唯物論や唯心論に関係なく、あなたは再び生まれてくるという事実であり、それはあなたという意識の再生であるという事実です。再生というより、意識の続行といった方が正しいかも知れません。そのあなたという意識の持ち主は、一体何者なのでしょう。

○私が宇宙を存在させている

面白いゲームをしましょう。

まず目を閉じ、大の字になって床に寝ましょう。次に、私は今大宇宙の真つただ中に浮いている、とイメージしましょう。私は今、上下左右、真つ黒な大宇宙の中に浮いている。ものすごく気分が良い……。体の感覚がなくなりリラックスしている。ではリラックスしたところで、

まず、目を取ってしましましょう……。もう私は何も見えません。

次に、耳を取ってしましましょう……。もう私は何も聞こえません。

次に、鼻を取ってしましましょう……。もう私は何も臭いません。

次に、舌を取ってしましましょう……。もう私は何も味わえません。

最後に全身を捨ててしましましょう……。もう私は何も感じません。

さて、すべてを捨て去った私に残っているのは、「私」の意識のみ……。そう、大宇宙に「私」の意識が浮いているだけです。私は身軽です。何の束縛もありません。

自由そのものです。どこへでも行けます。大きくも小さくもできます。では、その意識も捨ててしましましょう。えっ……。？？？しかし意識は捨てられない。決して捨てることはできない。なぜなら、私の意識を捨てたその瞬間、宇宙は消え去ってしまうからです。なぜ消える？私の意識が宇宙を存在させていたからです。私の意識が大宇宙を感じ、地球を感じ、妻や子を感じ、親兄弟を感じればこそ、それらのものは

存在できたのです。その私の意識がなくなれば、その瞬間すべてのものは消え去ってしまうはず・・・!? そのうです。私の意識がすべてを存在させていたのです。私の意識がそれらのものと関係を結んでいたから、それらのものは存在できたのです。その私の意識がなくなれば、関係を結んでいたそれらのものは当然なくなってしまはず・・・? つまり、宇宙は消え去ってしまうことになる・・・。

あなたは、自分の意識がなくなった後のビジョンが描けますか。このまま眠りに入り、永久に目覚めない自分を想像することができませんか。できないはずで、なぜなら、あなたの意識は絶対なくならないからです。本能的になくならないと知っているから、ビジョンが描けないのです。ボディが意識を生み出すとしたことが、死んだら意識がなくなると思わせただけです。

「私は絶対なくならない!」

「私は永遠不滅の存在です!」

では永遠になくならない「私」とは、何者なのでしょう。宇宙を存在させていた不滅の「私」とは、一体何者なのでしょう。宇宙そのものだったのです。宇宙生命そのものだから、「私」は宇宙と共にあったのです。私がなくなれば宇宙が消えてしまうのは、「私」そのものが「宇宙」そのものだからです。

本当の私はポディーではないのです。本当の私は意識そのもの、生命そのもの、宇宙そのものだったのです。名前はいつでも良いのです。ただ永久になくならない意識こそが、本当の私なのです。私の意識が永遠だから、死後のビジョンが描けなかったのです。宇宙に意識が一つしかないとすれば、私たち一人一人の意識は全体意識になるでしょう。ということは、一人の意識でもなくなれば全体意識もなくなってしまいうことになる・・・でも、そんなことは絶対あり得ないわけですから、私たち一人一人の意識も決してなくなることはないのです。

意識はあくまでも主観的なものです。宇宙はたった一つの主観的意識で成り立っているのです。主観あるのみだから私はなくならないのです。この宇宙に客観性というものはないのです。私しかない世界で、どうして客観視できるというのでしょうか。誰も客観視などできないのです。その人の立場になって物を見たり、聴いたり、考えたり、する事などできないのです。客観視できた人など、いまだかつて一人もいないのです。想像はできるでしょう。でもその想像しているあなたは、一人しかない主観者であるあなたではありませんか。

この宇宙には、あなたしかいないのです。あなたがこの宇宙の主なのです。すべての全てなのです。宇宙意識そのものがあなたなのです。その意識はポディーにおいては多となり、生命においては一つとなります。

つまり、相対宇宙においては多となり、絶対宇宙においては一つになるのです。本来一なる意識しかないのですが、ボディーを私と思っている人達にはたくさん意識があるように見えるのです。だから私があり、あなたがあり、とぶつかり合う世の中になっているのです。私の正体は一なる意識そのもの、大宇宙に一つしかない意識そのもの、宇宙生命そのものだったのです。もう一度いいます。この宇宙は一つの意識で成り立っているのです。一つの意識しかないなら、どうして客観視できるのでしょうか。客観視できるのは、意識が二つ以上ある宇宙です。しかしそんな宇宙があるわけないので、客観視できるわけではないのです。

○すべては宇宙生命の分身である

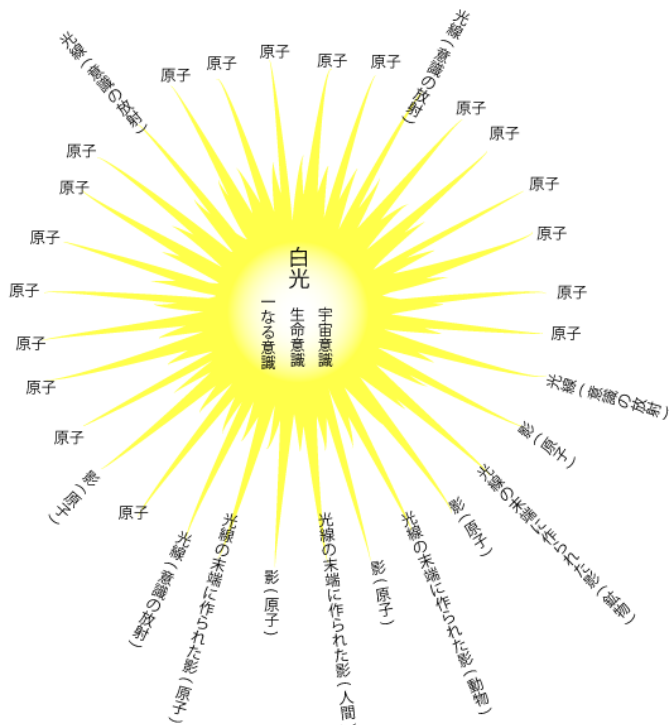
子供のように単純に物事を考えてみましょう。そして、あるものはあると素直に認めましょう。物が存在している背後には、それを存在させている何かが必要あるはずですよ。何も無いところから、ポカリと物が生まれるわけがないからです。

では人間は、一体何から生まれたのでしょうか。

人間のボディを科学的に分析してゆくと諸器官・細胞・分子・原子に行き着きます。さらにさかのぼって行くとクオークに達し、さらにさかのぼって行くと一つの意識に到達します。大元は一つの意識から成り立っているのです。この段階になると時空を超越しており、もう表現方法がありません。ただ「1」を示すしかありません。「1」——それは意識と意志を持った絶対意識、この宇宙に唯一君臨する宇宙生命そのものです。人間も他の生き物も、すべて宇宙生命から生まれた宇宙生命の分身なのです。

その宇宙生命の意識核の放射(図3)によって、宇宙の創造は開始されました。意識核が放射された途端に時空が生まれ、表現宇宙が誕生したのです。意識核の一定量集まったものを生命核(原子核・魂)といいますが、電子を伴っていないためそのままでは時空に存在できません。ですから時空が生まれた瞬間には、すでに原子化しているのです。つまり原子は、反原子と絶対原子の三身一体となったバランスの塊として存在しているのです。その意味では、原子は愛の結晶といって良いでしょう。その原子が元素となつているところから、当然元素にも意識があり、元素を素材とする物質にも意識があることとなります。でも元素には自我がありません。意識が希薄な状態なため、自分が何者か自覚できていないのです。自我を持つためには、形を創りその形の中に一定量の生命核を宿す必要があるのです。

(図3)意識



- 意識は宇宙に宇宙意識という一つの意識があるだけだが、白光から放射された光線が末端に影をつくることにより、無数の意識をつくってしまう。
- 原子は末端の影にあたり、その原子の背に乗って意識が出てくることで、原子の数だけ意識があるように見える。つまり、末端につくられた影(原子)が、自分を影(原子)だと錯覚することで、個別の意識をつくってしまうのである。
- どんなに末端の影(原子)を自分と錯覚しようと、本当の自分は白光の宇宙意識の中に存在しているのである。

鉱物も植物も動物も人間も、意識核を宿した元素の集まりであるボディ（外面）と、ボディの中に生命核（内面）を宿した二重生命体です。この宇宙では、形が創られるとその中心に必ず生命核が宿る仕組みになっているのです。ただ生命核の量が多いか少ないかによって、自我を持つ能力と創造能力に差が出るだけです。一定量の生命核を有する人間は、自我を持つところまで進化しておりますから、それ相応の創造力が発揮できますが、鉱物や植物や動物はまだ生命核が少ないため、自我を持って活動する段階に至っていないのです。でもその人間も、まだ自分の本性を見破るところまで進化していませんから多くの生命核を集め、「自分は宇宙生命である！」と自覚できるところまで上り詰めねばならないのです。

なぜ人間が宇宙生命なのか、理解できませんでしたでしょうか。あなたがどんなに宇宙生命でないと否定しても、あなたが宇宙生命である事実は変わらないのです。なぜなら、あなたの意識は絶対にならないからです。ために目をつぶり、自分の意識がなくなった後の自分をイメージしてみてください。絶対できないはずですが、特にこの本を読んでいるあなたは、イメージできないはずですが、意識が高いからです。

自殺する人は、死んだら何も分からなくなるから楽だろうと考えますがとんでもない！ ボディは破壊できても意識は絶対なくすることはできないのです。自殺した者の殆どが、向こうへ帰って、なぜこんな愚かなことをしたのだろうと、地団駄を踏んで悔しがっています。車から降りたら、運転手の意識はなくなるで

しょうか。なくなりませんね。同じようにボディーから降りても、あなたの意識はなくなるわけではありません。繰り返します。あなたは意識であって、ボディーではないのです。意識そのもの、生命そのものです。ボディーはあくまでも意識(生命)の乗り物です。ならば、何を大切にせねばならないのでしょうか、実在しないボディーですか、実在する生命ですか、生命ですね。

この世の物が永遠なら、物の価値を認めましょう。しかしどんな物も、時間と共に消えてなくなってしまうのです。お金も、宝石も、民族も、国も、地球も、表現宇宙さえも、いつか必ず消えてなくなってしまうのです。だから釈迦は、無常なるものを追いかけてはならない、永遠なるものを追いかけてほしい！ といわれたのです。永遠なるものとは、生命のことです。本当の自分のことです。

悟った人は、人間が汗水流してやっている事を、空しい「事」と冷めた目で見ています。このメッセージを読み終えたころ、あなたもきつとその意味を知るでしょう。

【コラム】生命は理念であり素材である

絶対宇宙に君臨する生命は、意識と意志を持った理念の主であり絶対者です。絶対者なるがゆえに、唯一の存在です。でもその生命は、姿形を持たない日陰の身ですから、そのままでは存在意味がありません。存在を示すためには、姿形を取るしかないわけですが、幸いなことに生命は理念の主ですから、自らの意志

で原子を生み出し、それを組み立て、どうにでも姿形を取ることができるのです。表現宇宙は、その原子で埋め尽くされた生命の海です。生命の海であるがゆえに、様々な生き物が誕生してくるのです。科学者は、真空からは何も生まれえないといいますが、もしそれが本当なら、真空宇宙に浮いている地球にどうして生命が誕生したのでしょうか。真空は何もないではありません。むしろ何もかも有る生命の海です。生命の故郷です。それは、宇宙空間そのものが生命であるという意味です。

現在この地球上には、百数十個の原子が発見されておりますが、宇宙には無限に近い数の原子が存在するのです。その無限に近い数の原子で組み立てられた宇宙には、無限数の生き物が存在しているのです。その無限数の生き物達は、みな一つの生命によって生かされ、一つの生命によって働かされているのです。つまり形はたくさんありますが、形を操っている生命は一つしかないのです。その一つしかない生命によって人間は創られ、その一つしかない生命が人間の中で生きて働いているのです。だから人間は、生命そのものといつて良いのです。

このように生命が人間の中で生きて働いているわけですから、どんなに私は生命ではないと言い張っても、言い張れるものではないのです。

【コラム】オリジナルな世界

この宇宙には、私のオリジナルな世界が一つあるだけで、共有された世界があるわけではありません。世界が共有されているなら、すべての場面にすべての人が出てこなければなりません、いつも出てくるのは私が意識したものだけ……。つまり、私と私の関係した人や物しか出てこないのです。

今私の世界では、私を主人公としたドラマが進行中です。私の世界に登場してくる人物は、私と関係を持った時のみ出てくる脇役で、自分勝手に出てくる者は一人もおりません。つまり、私の引き立て役としては時々顔を出しますが、必要のない時には出てこないのです。カメラアングルは常に私の前方を捕え、私の関係する人や物を写し出しています。私が主役の私が演じるドラマだから、私抜きの場合は一つもないのです。だから、私の思った通りのシーンが続行します。そのドラマは、宇宙に存在する人類の数だけあります。理由は、一人ひとりが自分の世界を持っているからです。その人の世界は、その人のものなのです。一人ひとりが当事者だという意味です。だから、誰もその人の世界を乗っ取ることなどできないのです。

これは、次のような譬え話でいい表せるでしょう。同じマンションに住む三人の奥さんが、茶飲み話をしております。五階に住む奥さんが微笑みながらいいました。

「このマンションから見る景色は、本当に素晴らしいですわね……。」

一階に住む奥さんも誘われるように、

「ええ、素晴らしいですわね!」と、相槌を打ちます。

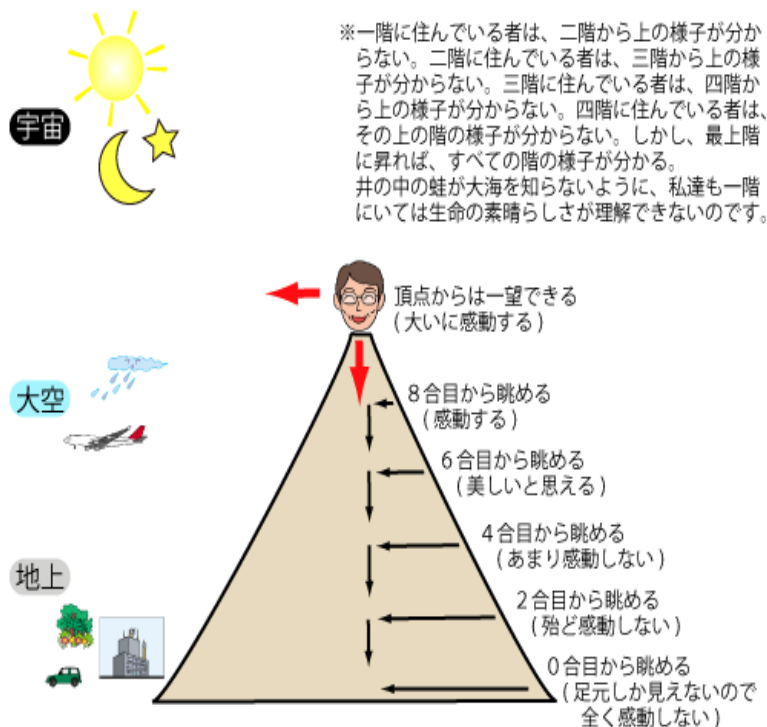
特に十階に住む奥さんは、

「毎日こんな素晴らしい景色が見られて、私たちは幸せ者ですわね!」と、笑顔一杯で応えます。

さてこの三人の奥さんは、本当に同じ景色を見てそういつているのでしょうか。いいえ、別々な景色を見てそういつているのです。なぜなら、一階から見る景色と、五階から見る景色と、十階から見る景色が同じであるはずがないからです。この景色の違いが、理解力（意識の高さ）の違いなのです。（図4）私たちは同じ世界で生きていますつもりですが、理解力の違いによって生きている世界がみな違うのです。だから私は、人類の数だけ世界があるというのです。見ている世界が違うなら、人それぞれ意見が違って当然でしょう。だから、意見が違うからといって人を批判してはならないのです。その人は、その人の見た通りの正しい意見を見ているのですから……。ただしこの話は、迷った人達の話であって悟った人達の話ではありません。悟れば同じ階から同じ景色を見ることになるのですから、意見の食い違いが出るわけがないからです。今世界中で様々な衝突が起きているのは、一つの私を分けて個人個人を作り、その個人個人が別々な階から景色を見て、ああだ！こつだ！と自己主張しているからです。もし全体は私！私は全体！という

真理に目覚めたら、もつとそこに立場の違いや利害は生じなくなり、世界は一つに収まるでしょう。悟りが必要なのはそのためです。悟ればオリジナルな世界は消え、唯一の世界、唯一の宇宙を写し出すことになるからです。

(図4)理解力は視野を拡大させる



- ・理解力の高さによって見えるものが違ってくる。
- ・生命の素晴らしさを知るには、生命に対する理解力をその次元まで高めなければならない。

(5) 実在の意味を知る

人間の不幸は、実際に有るものとなない物の識別ができないためである、と覚者はいつております。もし実際に有るものとなない物の識別ができたなら、この世から一切の争い事はなくなるでしょう。なぜなら、誰も実際にないカゲロウを奪い合う愚かなことはしないはずだからです。では実際に有るものとは何か。実際にない物とは何か。識別してみたいと思います。

○実在の意味

実際に有るものを実在といい、実際にないものを非実在といいます。実際に有るものとは、永遠になくならないもの、不変不動のもの、つまり真理のことです。

では真理とは何でしょうか。真理の(真)とは動かせないもの、不動のもの、つまり永遠に変わらないものを意味します。(理)とは宇宙のことわり、つまり法則のことを意味します。二文字を通して解釈すれば、真理とは、永遠に変わらない不動の法則という意味になります。法則は実在を意味しますから、実在が真理ということになります。その解釈を前提に考えると、「意識」は実在です。「生命」は実在です。「光」は

実在です。「元数」は実在です。「神」は実在です。なぜなら、それらのものは永遠になくならないからです。ということは、法則そのものが、生命であり、光であり、元数であり、神であるということになります。

では実際にはないものとは何でしょうか。それは無常なるもの、可変変動するもの、つまり非真理のことです。ですから「物質」は非実在です。「時空」は非実在です。「影」は非実在です。「分数」は非実在です。人間も、動物も、植物も、鉱物も、非実在です。形ある物は必ず崩壊し、朽ち果て、なくなってしまうからです。だからあなたのボディは非実在です。あなたの子供は非実在です。あなたの妻や夫は非実在です。お金も財産も非実在です。地球も月も太陽も非実在です。この世の出来事は、みな時と共に時代と共に移り変わってゆく非実在です。日々演じている人生劇もまた同じです。しかし形は非実在でも、それを生かしている意識・生命・エネルギーは実在です。

私たちは見えないモノはないと思いますが、この宇宙の実態は見えないモノがホンモノで、見える物にはみなニセモノなのです。形ある物は、みな見えない世界から出て、見えない世界へ帰るのです。すなわち見えない意識（理念）が先にあり、その表現の場として後に形の世界が創られたのです。形ある物の背後には、それを生み出している意識の主が必ず存在するということです。その意識主を私たちは、生命とか神とか呼んでいるのです。

※元数とは、宇宙生命のことです。生命意識のことです。その元数が表現世界に出るに当たり、分数に身をやつたのです。ですから、分数は表現世界に一時存在する幻です。でも元数は、すべての大元ですから永遠に実在する真実です。この元数については、いずれ機会を見付け詳しく説明したいと思います。

○見えないモノ（空）こそ実在である

画家がいなくては絵が生まれないように、生命の存在無しに物は生まれません。どんな物の中にも必ず生みの親である生命が存在し、生きて働いているのです。形はただの死に絵です。形として現れた物はみな死に絵なのです。表現し終わったものは、何の進展性も発展性もないからです。形が実在でない理由は、次のような例えでも説明できるでしょう。

粘土（素材）をこねて人形を作ったとします。そこには、人の形をした粘土があるだけです。粘土はなくなりませんが、形は崩してしまえばなくなりません。人間も生命という素材によって創られた形ですから、形を粉々にしてしまえばなくなるのです。ということは、人間という形は幻で、実際に有るのは素材である生命だったことになります。その素材である生命が、生きて働いているのです。

私たちは形が生きていると思っていますが、形は生きていなければ働いてもいけないのです。生きて働いているのは、あくまでも素材である生命の方です。その形と生命が余りにも一体化しているため、私たちは形が生きていると錯覚しているのです。形と生命は絶対不可分といって、決して切り離すことができないのです。そのことを釈迦は、「色不異空・空不異色・色即是空・空即是色」といわれました。つまり、見える「色」は見えない「空」であり、見えない「空」は見える「色」であるといわれたのです。その見えない空が、生きて働いているのです。だから人間が生きても、働いているとも、いつてはならないのです。今考えていたのは、今語っていたのは、今行っていたのは、実際にある空、つまり生命だったのです。

このように実在とは、永遠不滅・不変不動なる生命のことをいうのです。しかし残念ながら、生命には形がありませんので、そのままでは存在意味がありません。そこで生命は、自分の身代わりとして人間を創造したのです。だから人間には、生命の代弁代行を果たす使命があるのです。

これは光と影の關係に置換えれば、なお分かりやすいかもしれません。影は光によって写し出された幻ですから、自分で動くことも働くこともできません。影には、一点の智恵も、一寸の力も、ないのです。影は光の表現媒体なのです。だからといって、光は影を軽んじるわけにはゆきません。なぜなら、光は影無

しに自分の存在を明かすことができないからです。光と影は、相身互いの関係にあるのです。同じように、生命も人間なしに自分の存在を明かすことはできないのです。光と影が相身互いの関係にあるように、生命と人間も相身互いの関係にあるのです。その意味では、実在と非実在は同等の重みがあるといつて良いでしょう。

先ほど形を取ったものは死に絵だといいましたが、では人間も死に絵なのでしょう。ええ、そのままではそうなってしまう。人間が死に絵にならないためには、絵でありながら画家としての自覚を持つ必要があるのです。つまり、人間でありながら生命としての自覚を持つ必要があるのです。もし人間が生命の自覚を持つことができたなら、時空にいながら時空に縛られない自由な生き方ができるでしょう。その者は、絵でありながら画家なのです。人間でありながら生命なのです。形でありながら理念の主なのです。その者は、もう四苦から解放されています。私たちは最終的に、非実在の世界と実在の世界を同時に生きる存在にならねばならないのです。人間が人間として生きる限り非実在ですが、生命として生きれば実在そのものになれるのです。

もう一つ念を押しておかねばならないのは、夢も、幻覚も、幽界も、物質界も、みな非実在だということです。形ある物は、みな消えてなくなる幻だからです。ただ物質界は、五感によって本当にあるような錯覚を与えている点、夢や、幻覚や、幽界とは違うでしょう。

(6) 本当の自分を知るにはどうすれば良いか？

人の見出したものは人のものです。自分が見出したものは自分のものです。だから真理の受け売りはできない！ と昔からいわれてきたのです。真理を自分のものにしたければ、自分の心に問い、自分の心から回答を得ることです。

○知ること！

一度 医者には、人間とは何ですかと質問してみてください。多分、このボディーを人間だというはずですが。そして、ものを考えるのは脳だというはずですが。もし脳がものを考えるなら、コンピューターが発明発見するといわねばなりません。でも、コンピューターは、入力されたものしか回答できないのです。それは、コ

コンピューターは物質だからです。脳も同じ物質ですから、記憶したものしか回答できないのです。ものを思い、考え、語り、行っているのは生命です。素晴らしい発見や発明は、みな生命がやっていることなのです。

あなたは学校で、動くものだけが生き物だと教えられたはずで、また、人間だけに意識があると教えられたはずで、でも、それも誤りです。形あるもの形なきものにみな意識があり、生きています。だから偉大なスポーツマンは、道具を大切にしています。どんな物も生きていますから、粗末に扱ってほしくないということです。

このように私たちは、幼い頃から間違った知識を植え付けられてきたわけですが、今あなたが自分のことをボディーだと思い込んでいるのも、その間違った知識の一つです。そんな誤った知識を持っていては、自分探しの旅に出かけても迷い道に入り込むだけです。ですからまず、その誤った概念を取り除く作業から始めて下さい。そのためには、生命についてトコトン知ることです。つまり、自分と生命との関係を納得するまで知ることです。それから、なぜ自分は生命なのか疑問点を掘り下げていったら良いのです。

○探すこと！

人生の目的は自分を知るためにあるのだから、あまり勉強する必要もない、あまり働く必要もないといったら、世間の人達はどう思うでしょうか。多分、気違い扱いするでしょうね。言う必要はないのです。心の中でやれば良いのですから、自分だけの秘密にしておけば良いのです。

この世の宝探しは、外に出て人と競わねばなりませんから大変ですが、心の中の宝探しは外に出て人と競う必要がないから楽です。といっても私は、怠け者になりなさいといっているではありません。もしあなたが、今の仕事や勉強が面白くやりがいがあるなら、大いにやって下さい。でも苦しいなら、苦しくない程度打ち込んで下さい。苦しくて苦しくて仕方がないなら、やらなくても良いのです。ただ、社会常識程度の知識は身に付けて下さい。食べられるだけの仕事はして下さい。それが苦しいなら、それは甘えです。怠け者といわれても仕方がありません。要するに、苦しくない程度にやって下さい。そして余った時間を、本当の自分を探すことに使ってください。

これまで多くの人達が、お金をかけ時間をかけ真実を探し求めてきましたが、手に入れたのはほんの一握りの人達だけでした。なぜでしょう？ それは、外側に真実を探し求めてきたからです。この世には真実を作っている所もなければ、売っている所もないのです。唯一真実は、手よりも足よりも近い自分の心の中に

あるのです。ただし、どんなに身近にあっても、真剣に探さねば手に入りません。真実という宝物は、心の奥深いところにあるからです。

では具体的に、どのように探せば良いのでしょうか。何事でもそうですが、何かを得るためにはコツを覚えてくれるアドバイザーが必要です。真理を得るのも例外ではないのです。そのアドバイザーは、真剣に真理を求めている人と縁を結んでいますので、探せば必ず巡り会えるようになっていきます。そのアドバイザーの指導を受け、人間の思索、宇宙の思索、生命の思索をするのです。真剣に思索を続ければ、今のあなたの意識の高さに相応した回答が得られます。これは体験者である私が保証します。探すとはこのように、まずアドバイザーを探すこと、次に自分の心の中を探すことなのです。

○求めること！

恋人を愛している人は、片時も恋人のことを忘れません。同じように生命を愛するためには、片時も生命を忘れてはなりません。求めるとは、片時も生命を忘れないことです。忘れないとは、生命を意識することです。生命を想うことです。恋人のことを想っていれば気持ちが通じ合うように、生命を想っていれば必ず気が通じ合うようになります。これは「想念は実現の母」が保証してくれるので間違いありません。

どんな気難しい人でも、親しく接していれば気が合うようになるものです。生命は気難しくありませんから、こちらから親しく歩み寄れば必ず仲良くなれます。どうか生命と親しくなつて下さい。親しくなればなるほど、生命は身近なものとなります。普段の生活の中で、どれだけ生命を想うかが勝負です。求めるとは、想うこと！ 意識すること！ なのです。

○叩くこと！

私たちは生まれた時から五感を頼りに生きてきたため、五感で物事を理解する癖が付いております。見える物を理解するのはそれで良いのですが、見えないモノ（真実）を理解するには、沈黙思考して心の奥深くに潜り込まねばできないのです。覚者が瞑想を重視するのはそのためです。瞑想は、真実と触れ合う最良の方法なのです。

「子が父を知った時、父は子を知りたもう！」という覚者の言葉がありますがその意味は、表面意識（子・人間）が潜在意識（父・生命）に触れた時、潜在意識は表面意識を通して現われるという意味です。潜在意識に触れ合った状態が、真実（父・生命・神）に触れ合った状態なのです。でもこれは、何も神秘的なことではないのです。

表面意識も潜在意識も同じ生命意識ですから、表面意識が潜在意識に触れれば、潜在意識の思いが表面意識に浮かび上がり、潜在意識が去っても浮かび上がった思いは、表面意識に余韻として残るのです。余韻は時間と共に消え去ってしましますが、表面意識と潜在意識の触れ合いを繰り返すことにより、表面意識はやがて潜在意識にとって代わられてしまうのです。つまり自我意識が、真我意識にとって代わられてしまうのです。この触れ合いを繰り返す作業が、叩くこと、つまり瞑想なのです。

おさらいしましょう。本当の自分を知るには、

・まず、自分の中に生命が存在する事実を「知る」ことです。

・知ったら、自分の中に生命を「探す」ことです。すなわち、覚者（アドバイザー）の言葉を手掛かりに思索をすることです。

・そして生命を片時も忘れず意識すること、想うこと、親しくすること、すなわち「求める」ことです。

・最後に「叩く」ことです。すなわち瞑想することです。「吾生命なり！」が叩くことなのです。

本当の自分を知るためには、この四点は必須科目です。どうか「知る！」「探す！」「求める！」「叩く！」ことを忘れないで下さい。

○道に沿って進むこと

自分の中に生命が存在するから、自分の中を探しなさいといわれても、その道は細くて長いイバラ道ですから、新たな道を開拓するとなると大変な時間と労力が必要になります。でも幸いなことに、私たちにはすでに知花先生が敷いてくれた道があります。その道に沿って進めば、そう苦労しなくても頂上に辿り着くことができます。

先生は今はおられません、講演会のDVDや本などがたくさん残されており、それを見て、聴いて、読んで、瞑想することが、先生の敷いてくれた「道に沿う」という意味です。どうか、探して！ 探して！ 求めて！ 求めて！ 叩いて！ 叩いて！ 真理を我がものにして下さい。

何もしないで待っていて、どうして欲しいものが手に入るだろうか。欲しいなら、自分の方から探し求めることである。

(7) 人はなぜ悟らねばならないのか？

私たちは、「悟り」をよそ事のように考えています。身近でそんな話が出て、そんなことがあるのか？ そんなことができるのか？ とまるでおとぎ話でも聴くような感覚で聞いています。ましてや自分が悟るなどとてもない！ と考えています。しかし、悟りはよそ事ではありません。あなたの人生の最重要課題です。何を放っておいてもやらねばならない、人生の一大事業なのです。

では人間は、なぜ悟らねばならないのでしょうか。悟りと人生と、どんな関係があるのでしょうか。この問いに答えるには、宇宙の誕生に触れねばなりません。しばらくは、宇宙の誕生について筆を進めたいと思います。

○なぜ表現宇宙は創られたか

宇宙は見える宇宙と見えない宇宙があいまって、一つの宇宙を成しています。見えない宇宙だけでも、見える宇宙だけでも、存在不可能という意味です。見えない宇宙は姿形を取りませんから、時空の対象になりません。ですから、表現方法がないのです。ただ「1」を示すしかありません。そこには宇宙生命の「私」

がいるだけです。「私」しかない？ では、「私」の存在を誰が認めてくれるのでしょうか。私が私を認めても、それは認められたことにはなりません。客観的に認められて、はじめて認められたことになるのです。ですからそのままでは、「私」は永久に闇に葬られたままです。

どうでしょう。一だけなら、一は分からないのではありませんか。自分だけなら、自分分からないのではありませんか。自分が分からないということは、存在しないということです。右があるから左があるのです。上があるから下があるのです。一つだけなら、一つは存在しないのと同じなのです。すなわち絶対だけでは、絶対は存在しないのと同じなのです。だから宇宙生命は、自分を認めてもらうために相対宇宙（表現宇宙）を創造することにしたのです。

その創造劇は、宇宙生命の意識の放射によって始まりました。絶対宇宙の一点から無限の光が放射され、宇宙の創造劇が開始されたのです。それを意識の放射とも、光の放射とも、ビッグバンともいいます。その光は、すべての色を包含した白光です。白光から放たれた光は、無数の色に分散されて色光となりました。その色光が波動を下げ意識核となりました。さらに波動を下げ、元素（原子）となりました。これを意識の観点から考えると、白光は宇宙生命自身ですから、宇宙生命であるという意識は持っています。しかし、意識核となった時点で意識がモウロウとなり、「私」という意識は持っていない、「私」が誰なのか記憶を失

っているのです。その状態は元素も同じで、「私」という意識は持っていないも、「私」が誰か自覚できていないのです。こうして元素が塵として形を取りはじめた時から、「私」探しの旅が始まるのです。

生命の誕生とは元素の誕生のことですが、その元素はエネルギーと物質の両面を持ちながら表現宇宙に遍在しております。鉱物・植物・動物・人間は、その元素が形をとり、そこに生命核（魂）を宿した二重生命体です。宇宙生命の目的は、あくまでも自分の存在を認めてもらうことですから、元素の意識がモウロウとしていたのでは、自分の存在に気付いてもらうことはできません。そこで宇宙生命は、記憶を取戻す方法を本能という形で生命核に組込んだのです。だから元素は、本能的に意識核を集める方法を知っているのです。宇宙塵が集まり星々（星雲や恒星群など）の形を取るのには、その本能的親和力によるものです。その恒星の周りに、惑星群や衛星群がバランスを取って回り出します。

さて形が作られると、その形をコントロールする意識核が集まってきます。それを「生命核・魂」が宿ると言い、宇宙の一つの約束事です。地球もその約束事によって誕生しましたので、地球の中心にも生命核の塊があるのです。生命核は意識そのものですから、生命核を宿している地球は、意識を持った生命体そのものといえるのです。

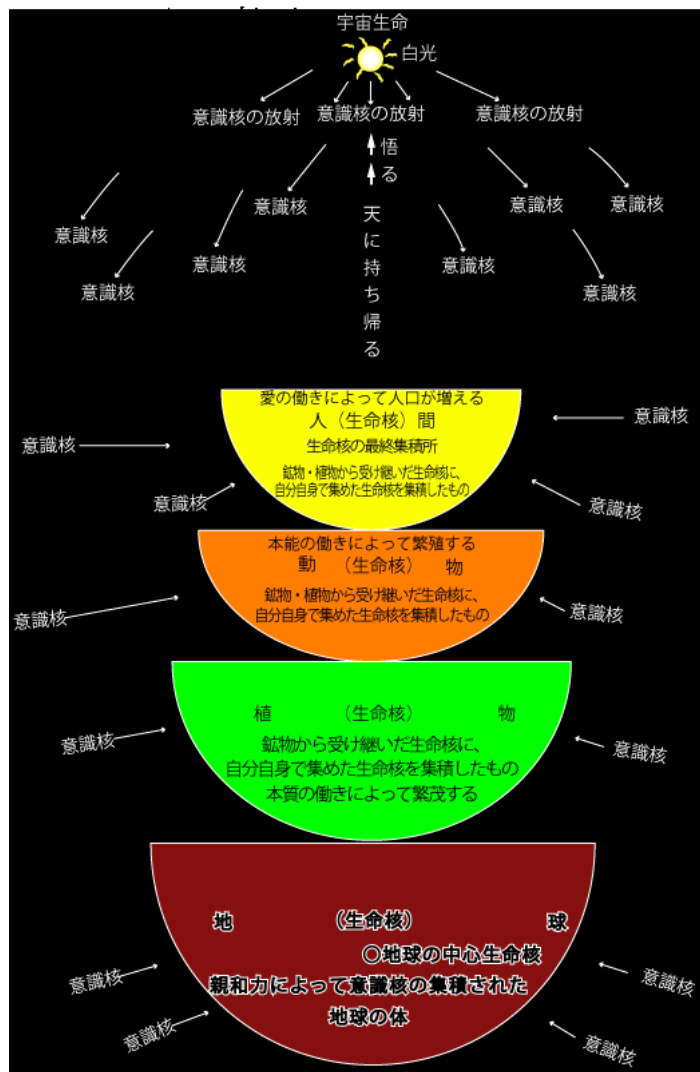
生命体の誕生に都合の良い環境が整ったところ、地球上に植物が誕生します。植物は鉱物より自由度が高いため、より多くの生命核を増やすことができますが、これは本質の働きによるものです。次に動物が誕生します。動物は植物より自由度が高いため、莫大な生命核を増やすことができます。それを促しているのが本能の力です。こうして鉱物・植物・動物が誕生した地球上に、やがて人間が降り立ちます。人口が増えるのは、進化の追いかけによるものですが、それを支えているのが愛の力です。愛の力は、生命核を増やす最大の武器になっています。

このように、親和力・本質力・本能の力・愛の力によって表現宇宙に多くの生命体が誕生したわけですが、それはあくまでも生命核を増やし自分を知るためです。この宇宙においては、自分を知ることが最重要課題となっており、すべての生き物はこの目的に向かって進化しているのです。

さてここで特筆すべき点は、鉱物の体験記憶も、植物の体験記憶も、動物の体験記憶も、みな人間に受け継がれている点です。これは神が考えた、実に巧妙な生命ピラミット(図5)の仕組みと違って良いでしょう。ですから人間の生命核には、彼らが集積した体験記憶のすべてが刻み込まれているのです。

こうして人類は、累積された生命核を引き継ぎ、さらに生命核を増やすべく進化の道を歩んで行くのです。その姿は正に、悠久の時をかけた生命核(魂)の厳しい進化の旅といえるでしょう。

(図5)生命ピラミット・・・進化の軌跡



○人の悟りが宇宙の脈動運動を終らせる

意識を高めるべく歩んできた表現宇宙は、やがて人の悟りによって終わりを告げます。悟ると、一對となっていた物質とエネルギーの分離が行われ、元の純粋な宇宙生命の「1」に帰るのです。つまり生命意識と合体し、元の宇宙生命に戻るのです。それは時空の収縮を意味すると同時に、脈動運動の最終段階にきたことを意味します。若い宇宙は膨張を続けますが、老いてくると収縮が始まるのです。これは悟り人が多くなつた証です。膨張は意識の分散・拡大・希薄であり、収縮は合体・縮小・濃縮です。生命核が濃縮されればされるほど智慧が増す（記憶が戻る）のは、全能の宇宙生命に近付いて行くからです。そして完全に悟ると、宇宙生命と一体になるのです。これが生命核の宇宙生命へ回帰するメカニズムの実態です。

瞑想は生命核を増やす一番の近道です。生命核がある一定量集まると悟りに至るわけですが、瞑想は生命核を集める集塵機のような働きをしているのです。要するに、アントロピーを縮小させているのです。宇宙生命が完全なのは、アントロピーを縮小させる能力を持っているからですが、それは人の悟りが担っているのです。

こうして悟り人がある数に達すると、星の役目は終わりを告げます。つまり惑星は生命を受け入れなくなり、その星における生命の誕生劇は終わるのです。これを熟した星、あるいは枯れた星といいます。木星も

土星も海王星も今は枯れた星になっていますが、これは生命を受け入れる必要のなくなった進化した星だからです。

熟した星がある数に達すると、今まで膨張を続けていた宇宙はその動きを止め、やがて収縮に転じます。急速に悟り人が増えるのです。やがて一点に収斂し、宇宙の脈動運動の一周期を終えます。しばらくは休息期に入りますがそれもつかの間で、脈動のリズムに押し出されるように、宇宙は再び膨張を開始するのです。

このように宇宙は、永久に脈動運動を繰り返しているのです。宇宙がアルファ「 α 」にしてオメガ「 ω 」といわれる理由は、（始め無き終り無き宇宙）永久に脈動運動を続けているからです。その脈動運度を持続させる役割を担っているのが人の悟りなのです。もし人間がこの役割を放棄したら（悟らなかつたら）、宇宙の脈動運動は停止し、宇宙は凍結してしまうでしょう。だから人間は、どうしても悟らねばならないのです。

なぜ人は悟らねばならないか、理解できたでしょうか。あなたがどんなに悟りたくないと駄々をこねても、そうはいかないのが宇宙の事情なのです。それほどあなたは、宇宙にとって掛け替えのない存在なのです。それに、あなたがここまで成長してくるのに、どれほど多くの生き物達の涙ぐましい格闘劇があったと思いますか。それを考えたら、とても「悟りたくない！」などと我がままはいえないと思います。

※意識核と生命核の違い

宇宙生命より放射された意識核は原子を創造し、物質の元となっています。一方、意識核を中心核に据えた電子の伴わない原子核の集合体を生命核と呼んでおり、俗にいう魂となっています。生命核と意識核との違いは、集積された核になっているかいないかの違いです。進化の旅とは、この生命核（魂）を増やす旅のことなのです。

○自分を知ることが当たり前のこと

ここでもう一度、表現宇宙が創られた宇宙生命の意図を考えてみたいと思います。

宇宙生命は 自分の存在を明確にするため、客観的視野を持つもう一人の自分を表現世界に送られました。しかし 表現世界に出た途端意識が希薄になり、自分が何者なのか忘れてしまったのです。したがって 記憶を取り戻す作業が最優先課題となってしまうのです。それはそれは、気の遠くなる年月をかけた自分探しの旅でした。しかし やっと人類は自分が何者か記憶を取り戻すところまで成長してきたのです。つまり、自分を、宇宙を、認識できるところまで進化してきたのです。でも 地球人類の多くは、いまだに自分

のことを人間だと思って生きています。だから四苦の苦しみから逃れられないのです。本当の自分を
知れば幸せになれるのに、人間はそれを知ろうとしないのです。

どうでしょう。本当の自分を知るとは、特別なことですか。当たり前のことではありませんか。その当
たり前なことを、なぜしようとしないのでしょうか。それは肉体（物質）の虜になっています。戦争
も、事件も、事故も、病気も、災害も、みな物質の虜になった結果です。そろそろ人類は、その過ちに気付
いても良いころです。

このメッセージを読まれているあなたは、これまで様々な苦しみや悲しみを体験し、人生に大きな疑問を
持っている幸い人と思われれます。だから今、人生の思索（真理を求めている）をしているのだと思います。
さあ、悟って故郷へ帰りましょう。冒頭に述べたように、悟りは他人事ではありません。「いつか、誰でも、
必ず」通らねばならない例外なしの道です。それが人生の目的だからです。

【コラム】神と人間の物語

初め無きはじめ、宇宙にはたった一つの神（生命）が存在していました。その神は、何一つ憂いのない満
ち足りた生活を送っておりました。でも、ある時フト思いました。

「私はすべてに満ち足りている。幸せ一杯であるが、そのことは私しか知らないのだ。これで良いのか？」
またこうも思いました。

「私は現に存在している。だが、そのことを知っているのは私だけである。私だけが私の存在を知っている、一体何になるのだろうか？」

そのことに気付いた神は、表現の世界を創り、そこから自分の存在を認知してもらおうと考えたのです。神の意識（光子）が四方八方に放射され、宇宙の創造劇が開始されました。神は真・善・美を最高の目標とし、思いの丈を地のキャンパス一杯に表したのです。海も、山も、川も、湖も、鉱物も、植物も、動物も、それはそれは神々しく輝いていました。気候は穏やかで、草花は一年中咲き乱れ、そこには蜂や蝶が乱舞していました。たしかに地上は美しかったが、彼らは創造主の私を認識しようとしません。これでは以前と何も変わらないではないか・・・神は考えあぐねた末、思い立ちます。

「そうだ！ 私の分身を地に降ろし、その分身に私を認知してもらおう！」
こうして人間は、表現の世界に出現することになったのです。地上に降り立った人間は、感嘆の声を上げます。

「何と素晴らしい世界だ！ 神は何と偉大であろう！」と・・・。

人間は神の偉大さを、しみじみと噛み締めるのでした。

「やっと私の存在を認めてもらうことができました。」

神は満足しました。

人間は当初、己が神の分身であることを知っておりましたので、神と変わらぬ自由自在な生き方をしておりました。肉を持ったまま天と地を行き来し、天の利を地に降ろすことができましたのです。乗り物に乗ることなくどこへでも行けましたし、意識の交流も自由に行うことができました。人々からは光が放たれていましたので、鉱物も、植物も、動物も、みな輝いていました。ライオンと子羊が戯れる光景は、当たり前だったのです。それは正に、地上天国そのものでした。

ところが人間は、地上に慣れ親しむうちに物質の虜となり、肉体を自分だと誤認するようになりました。そしていつしか、己が神の分身であることを忘れてしまったのです。自他の意識が芽生え、自我が膨らみはじめます。自分だけが、家族だけが、部族だけが、といった排他的精神が蔓延しはじめます。縄張り争い、物の奪い合い、戦争がはじまります。今まで穏やかだった地上界は、こうして争い多い世界へと変わっていったのです。自然界にも変化が現れはじめます。

● 厳寒と酷暑が巡るようになります。

● 暗雲が空を覆うようになります。

● 海は騒ぎ、地は唸り、山は火を噴き、嵐が襲いかかるようになります。

● 不安と絶望、苦しみと悲しみが、人々を襲いはじめます。

でも神はこうなることを予測し、因果の法の中に自らを留め、人間が目覚めるよう配慮していたのです。人間はやがて気付きはじめます。

「なぜ苦しいのだろうか？」

「なぜ悲しいのだろうか？」

思索に思索を重ねた末、ついに自分を思い出します。

「そうだ！ 私は人間ではなかったのだ！ この肉体が私ではなかったのだ！ 私は創造主の分身であ

る神の子だったのだ！」と・・・。

目覚めた人間は苦笑します。

「自分が神であったことを忘れていた。何と愚かな私であったことか・・・あはははは！」

自分を思い出した途端、神は人間を通して現れはじめます。

- ・誠が返ってきました。
- ・正義が取り戻されました。
- ・美が輝きはじめました。

再び人間の手に神の御業が取り戻されたのです。すなわち人間は、以前のような神の生き方をするようになったのです。こうして地上界は、再び喜び多い天国へと変容するのです。

この宇宙で、これまで、どれほどのドラマが生まれたことであろうか。

そして今、どれほどのドラマが進行中であろうか。

考えただけでも気の遠くなる思いがする

悲しいドラマ、楽しいドラマ、退屈なドラマ、感動的なドラマ、どれ一つとっても同じ筋書きのないドラマを、神は懸命に演じている。己が神だとも知らないで・・・。

(8) 循環こそ完全の証し

止まりは死、行きつ切りは野放図です。循環してこそ完全です。この宇宙が完全なのは、すべてのものが循環しているからです。私たちは循環の中で生かされ、動かされ、働かされ、永遠の命を得ているのです。

○循環の大切さ

宇宙は循環の働きによって永遠と完全を得ているわけですが、この循環の働きは地球上においても到るところで見られる現象です。水の循環、大気の循環、エネルギーの循環をはじめ、菌類の循環、昆虫類の循環、渡り鳥の循環、魚介類の循環、野生動物の循環など、生きとし生ける物のすべてが、循環運動によって共に命を支え合っているのです。

例えば野生動物は、餌を求めて転々と移動していますが、盲滅法に移動しているわけではありません。本能に導かれ、促進に導かれ、移動するべきにして移動しているのです。彼らはすべての生き物が循環していることを本能的に知っているため、自分が循環していれば必ず餌に出会えるという確信のもとに移動してい

るのです。その出会いも、必要な時期に必要な数だけ、それも生命力の弱いものと強いものが出会うよう仕組まれているのです。だから地球の生態系は、常にバランスが保たれているのです。

このように 一つの例をとってみても、循環の働きの素晴らしさが分かります。もし循環の一つでも錆ついたら、たちまち地球は大混乱に陥ることでしょう。こういうことを考えてみて下さい。もし、食べて出さなかつたらどうなるでしょうか。息を吸って吐かなかつたらどうなるでしょう？ 死を招きますね。死は宇宙にふさわしくありません。だから常に循環しているのです。地球が生きながらえるのも、海中において、地中において、地上において、空中において、循環しているからです。

人間も大昔は、豊かな土地を転々と移動しながら生活していました。遊牧民や焼畑農民の中にその名残がみられます。しかし人間は賢かったので、自分たちが移動するのではなく、ものを循環させることで糧を得る方法を見付けたのです。それが農業です。牧畜です。漁業です。漁民と農民は、海産物と農産物と交換することで互いに糧を得ていましたし、町民は農民に糞尿を買い取ってもらうことによって糧を得ていました。これも循環を応用した人間の智恵です。人間は無意識のうちに、海の幸（海のエネルギー）と、田の幸（陸のエネルギー）と、山の幸（山のエネルギー）を循環させる媒介役を果たしていたわけです。このように循環は、生き物たちにとって大切な命の抛りどころになっているのです。

○人間の経済活動が地球を進化させている

人間社会も、経済の循環が生活の拠りどころとなっております。その主役を担っているのがお金です。お金の回転が良ければ良いほど経済が活性化するのは、お金はエネルギーの塊だからです。エネルギーは流れが良ければ良いほど活性化するのです。私たちは労働力を投入しお金を稼ぎますが、その稼いだお金は生活を支える一方投資され、物やサービスに姿を変えます。この時点でエネルギーは物やサービスに移動するわけですが、その物は消費され再び私たちの生活を支えることとなります。消費された物は最終的に大気に還元されますが、どんなに姿を変えてもエネルギーはなくなっていないのです。エネルギー不滅の法則に基づいて、次の出番をジッと待っているのです。

このように、労働力↓お金↓投資↓生産↓消費↓労働力の経済循環が人間社会を支えているわけですが、それは同時に資源（エネルギー）を循環させ、地球を進化させる役割も果たしているのです。つまり地球と人類は、相互依存を通して共に進化の道を進んでおり、人間はそれを生活手段として経済を営む中で無意識の内に行っているのです。その意味では、地球資源を全く使わないことも良くないし、無駄な食いつぶしも良くないのです。今地球環境がおかしくなっているのは、経済活動が旺盛過ぎてバランスを崩しているからです。

○命の使い人としての役割

「使命」とは、「命」に「使える」と書くように、私たちは生命から遣わされた命の使い人です。役割は三つあります。一つは地のエネルギーを循環させる役割で、これは経済活動によって果たすことができます。二つは天のエネルギーを地に降ろす役割で、これは宇宙の謎を解明することで果たすことができます。地のエネルギーを動かすことを横の循環といい、天のエネルギーを動かすことを縦の循環といい、この縦横の循環をバランス良く行うことで、地上に理想の世を築くことができます。三つ目の役割は、因縁をつなぐ役割です。これは、一つ目の役割と二つ目の役割を補完する目的があります。

私たちがこの世に誕生するに当たっては、想像を絶する人と人との因縁のからみつきがあります。いや人間だけではありません。すべての生き物とのからみつきがあるのです。それも無限に広がるからみつきです。例えば、あなたが誰かと結婚したとしましょう。この縁のからみは単に夫婦間だけに止まらず、夫婦の縁者達やそのペットなどにも及び、様々な学びのチャンスを提供してくれるのです。例えば、こういうことです。

あなたの夫（妻）と結んだ縁は、あなたの夫の親族とのつながりを生み、その親族の親しい人とのつながりを生み、さらに飼っている犬や猫や小鳥などのつながりを生むでしょう。その縁は、今度は結ばれる縁

として、夫（妻）と自分の親族とのつながりを生み、自分の親族と親しい人達とのつながりを生み、さらにその人達の可愛がっている生き物とのつながりを生むでしょう。そして、そこで演じられたドラマの影響は、良くも悪くも巡り巡って自分のところに帰ってくるのです。このように、縁も循環しているのです。

ドミノ倒しというゲームがありますが、私たちはドミノの一つなのです。ドミノ一つなくてもドミノ倒しが完成されないように、どの生き物がいなくても因縁の役割は果たされないのです。因縁の役割の完遂こそ、計画してきたこの世の学びの完成なのです。多くの因縁の友が、この世の学びを完成させてくれるのです。だから、醜いからといって虫を嫌ってはならないし、無闇に殺してもならないのです。嫌いな微生物も虫も、私たちを成長させてくれる因縁の友です。嫌っているあの人もこの人も、私たちを成長させてくれる因縁の友です。それを知ったら、何も嫌えないし、何も憎めないはずです。その意味では、この世に不必要なものは何一つないことになるでしょう。私の使命が分からないという人がおりますが、そこにいて縁を結ぶことが使命なのです。

このようにすべての生き物には、天と地のエネルギーを循環させる役割と、因縁の循環を完遂させる役割があるのです。循環の大切さが分かってもらえたでしょうか。

【三三三】すべて善しすべて善し

良くなる苦しみを悪というでしょうか。それは悪とはいえません。私たちは病気を毛嫌いしますが、病苦があるから成長できるのです。良く大病して人が変わったといわれますが、それは病気から何かを学んだからです。転んで痛い目をみた人は、必ず何かをつかんで起き上がるものなのです。だから病気は悪ではなく善です。

反対に、悪なる善も善とはいわないのです。例えば、甘やかしや過保護は人を駄目にします。これは悪なる善であります。だから悪なる善も善とはいわないのです。しかし、それも善なのです。なぜなら、悪を体験させる善は、悪の体験によって善を知るから、それは善なのです。そして、その善も善ではなく悪なのです。

善は悪に転換するし、悪は善に転換します。善と悪は循環して完全になるのです。ということは、この宇宙には完全しかないことになります。だから、すべて善し！ すべて善し！ すべて善し！ すべて善し！ なのです。

(9) 死は存在しない？

人間の最大の敵は死の恐怖です。でも その恐怖は、肉体を自分と思う誤解から生み出されたものなので、もし生命が自分と思えたら、もう死の恐怖に脅えることはないでしょう。死の恐怖は、本当の自分を知らない無知が生み出した誤解なのです。

○ボディーの死は変化にしか過ぎない

宇宙に死はふさわしくないとはいいましたが、なぜふさわしくないのでしょうか。それは、宇宙からドラマを消し去ってしまうからです。死とは、何の進展も発展もない状態なのです。正に、無・無・無・・・です。それでは、何一つドラマは生まれません。ドラマを生まない宇宙に、どんな意味があるというのでしょうか。それは、何も書かれていない小説を見せられているようなものです。死は肉体を自分と信ずる者にはないのであって、生命を自分と信ずる者にはないのであるのです。もしあるとすれば、ただ変化があるだけです。物質は、個体・液体・気体の三態に変化します。どんな物質も、液体を通して必ず気体に戻るので。昇華という言葉がありますが、物質から直接昇華することはありません。昇華しているように見えるナフタリ

ンも、瞬間的に液体となり気体となっているのです。人間のボディーも、生命核(魂)が抜けると液体となり気体となり宇宙空間にバラ撒かれます。でもそれは形がなくなっただけで、本質(原子)はなくなっていないのです。いつか必ず縁に触れ、再び形を取るのです。変化したのは形のみで、本質も生命核も不変不動なのです。

ではボディーから生命核が抜けたら、どのような変化が起きるのでしょうか。

○理解度によって定まる幻の世界

人間のボディーがどのような構造になっているか 大まかに説明しますと、まず中心に絶対原子(生命核)があります。中間に反原子体があり、その外側に原子体があります。ボディーから生命核が抜けると、ボディーは水を通して土に帰りますが、最終的には気体に帰ります。良く土に帰るといいますが、元素に帰ることを土に帰るといっているのです。人間はボディーの下に、反原子体というボディーとそっくりな体を持っており、死ぬとしばらくはその体をまもったまま地上近くをさまっています。

殆どの人は死んだら意識がなくなりますが、ボディーを脱ぎ捨てても何ら変わらぬ意識状態を保って生きているのです。反原子体とボディーとは、何も変わらないのです。姿形も同じ、柔らかさも同じ、

温かさと同じ、脈も打っていますし、呼吸だっと思っています。だから、死んでもまだ生きてると錯覚している人達がいるわけです。この反原子体はボディーの着のよなもので、通常ボディーの余韻を残したエーテル体は、数日から数年で消えてなくなります。（あくまでも思いの強さによる）その間に意識の調整が行われ、その人のメンタルが描いた世界へ旅立って行くのです。落ち着く先は、自分と同じ理解度を持った人達の集まった世界です。そこで似通った精神状態の人達が、集落を成し生活しています。

このメンタルな世界は 生命の理解度によって、上は光の体を持った階層から、下は動物さながらの階層まで無数の世界に分かれており、ここでも自然の法則である、因果の法則・同類共鳴の法則・慣性の法則・循環の法則が働いております。ただ 思いの世界は、思った瞬間結果が現れるので、物質世界のような誤魔化しがきかないのです。例えば 人を憎んだ瞬間、般若の面相になり、愛を与えたいと思えば即座に仏の顔になるといった具合に、思いと行いは同じですから少しも悪いことは思えないのです。だから、その世界では、上辺を飾って生きるしかないのです。またこの世界は似通った者同士が生活していますので、人の振り見て我が振り直せといった相対的体験があまりできません。さらに生きる苦しみがないので、努力することも我慢することも覚ええないのです。要するに厳しさがないので向上心がわかないのです。だからこの世界では、あまり成長が期待できないのです。

苦しみのないところに進歩はありませんから、そんな生活が長期間続くと嫌気がさしてきます。そこで厳しい世界へ降りて行って欠点を修正したいと思うようになり、再びボディーを持って生まれにくるというわけです。人の本性は生命ですから、本能的に本当の自分を知りたがっているのです。ですから、いつまでも生温い世界にはいられないのです。

○**本当の自分を知った者だけが、本源の世界へ帰ることができる**

自分が宇宙生命であると完全に自覚できた人は、反原子体を脱ぎ捨て純粋な生命意識となつて本源の世界（生命の世界）へ帰って行きます。私たちの帰るべき世界は、生命の世界であつて幻の世界（物質界・幽界）ではありません。ですからできるだけボディーを持つている間に、本当の自分を知っておく必要があるのです。本当の自分を知った者は、ボディーを脱ぎ捨てたらすぐに生命の世界へ帰れますが、人間に固執している者は地上付近にウロついております。これが迷った魂といわれるものです。

人は死んだら成仏するのではないのです。死んでも生きている時と同じ考えを持ち、同じ行動を取るのです。ですからお経の意味も解らない人に、お経をあげても何の意味もないのです。お経を上げたり果物や花

を供養することが供養になるのではなく、生きている私たちが彼らに正しい生き方を見せることが供養になるのです。

あまり書きたくないことを書いたのは、少しでも皆さんの不安を解消したいと思ったからです。死後の世界など考えなくても良いのです。私たちの本性は生命ですから、生命の世界へ帰ることだけ考えたら良いのです。幻の世界を意識すれば、幻の世界へ帰るのです。生命の世界を意識すれば、生命の世界へ帰るのです。意識すれば実現するのが宇宙の仕組みですから、あまり幻の世界のことは意識しないことです。

○死を真剣に考えることの大切さ

豊臣秀吉も、徳川家康も、ヒットラーも、今はいません。どんなに権力を欲しいままにした者も、いつか必ずこの世を去るのです。若い人はあまり死について考えないと思いますが、人生なんてアツという間です。人は必ずこの世を去るのです。百パーセント間違いないこの事実を、どうして誰も真剣に受け止めようとしていないのでしょうか。150年後には、今生きている人は地球上に一人もいないのですよ。この間違いない事実を、どうして真剣に考えようと思わないのでしょうか。生まれてくる子供のことは色々考え用意するのに、間違いない死に対して何も用意しないのは、不公平ではないのでしょうか。生まれてくる子供は間違っ

まれてこないことはあっても、人の死は百パーセント間違いないことなのです。なぜこうもクドクドいのかといいますと、百パーセント間違いない死に対して、あまりにも人間は無頓着すぎるからです。死ぬと分かち切っているのに、どうして何も用意しないのか不思議でならないのです。

死後の用意とは、あの世のことを考えたり調べたりすることではありません。生きている間にしておかねばならない準備のことです。つまり本当の自分を知り、正しい生き方をするということです。本当の自分を知り、正しい生き方をするので、死後の準備はできるのです。準備のできた者は素晴らしい世界（生命の世界・これを天国と呼んでいる）へ帰ることが出来るし、できない者は厳しい世界へ帰ることになる、これは一重に生きている時の生き様が決定するのです。

○死は怖いものではない！

宇宙に生命しかない前提で物事を考えれば、これまでの物の見方がまるで違ってきます。更にその考えを自分の身に置換えることができれば、自分を大きく変身させることができるでしょう。例えば鉄を溶かしてナイフを作り、ハサミを作り、鍋を作っても、その材質が鉄であることは間違いありません。同様に生命を溶かして鋤物を作り、植物を作り、動物を作り、人間を作っても、その材質が生命であることは間違いあり

ません。ナイフを溶かせれば鉄に戻るように、人間を溶かせば（死ねば）生命に戻ります。でも形だけを見ている人間は、どうしても生命に帰るとは思えないのです。だから人間は、死を怖いものにしてしまふのです。

人間は、一つの本質（生命）の現れなのです。死とは、無常なる形が永遠不滅の本質に帰ることです。生命の自分に帰ることです。何にも束縛されない自由な自分になれるというのに、なぜ悲しいのですか。なぜ怖ろしいのですか。死は悲しむべきものでも、怖ろしいものでもなく、むしろ喜ぶべきことなのです。

多くの人は、死ねば何も分からなくなると思っています。とんでもありません。肉体は死んでも、意識は今の状態のまま持ち続けるのです。人格もそのままです。記憶も失っていません。勿論、感情もそのままです。死は生命が、肉体という乗物から降りただけのことです。人生とは、生命の自分が肉体という乗物に乗って様々な体験をしている状態なのです。これまで私たちは、その体験を何万回もしてきました。今さら何を恐れるというのでしょうか。このように、自分の本質が心の底で理解できれば、人生の見方が大きく違ってくるのです。

【「ラム」】自然の法則

私たちはボディーを持っている限り、自然の法則に縛られ生きなければなりません。この自然の法則は中間世界（幽界）にまで及んでいますので、今の内にその働きを知っておいた方が良いでしょう。では自然の法則とは、どのようなものなのでしょうか。

「原因と結果の法則」

原因と結果の法則を物理学では、作用と反作用の法則といっております。壁にボールをぶつけるとボールが跳ね返ってきます。それも弱くぶつければ弱く、強くぶつければ強く跳ね返ってきます。因果の法則も同じで、人を憎めば憎しみが返ってくるし、人を愛せば愛が返ってきます。ただ因果の法則は、作用した結果が一方からだけでなく、四方八方から、それも何倍にも膨れ上がって帰ってくるので要注意です。

「人を呪わば穴二つ」という諺がありますが、これは人を呪えばその呪いの波動は自分に返ってくる、だから呪うなら墓穴を二つ用意して待ちなさい！ という戒めの諺なのです。

「同類共鳴の法則」

同じ振動数を持った発音体を向かい合わせ、一つの発音体を叩くと、向かい合わせたもう一つの発音体が唸りを発します。これを共鳴現象といい、似た振動数を持った物の間で起きる現象です。私たちは自覚しな

いで生活していますが、知らないうちに似た者同士が集まって生活しているのです。釣り好きな者は釣り好きな者同士が、酒好きな者は酒好きな者同士が、キャンブル好きな者はキャンブル好きな者同士が集まって、同じ行動を取っているのです。類は友を呼ぶ・類を以て集まるの譬えのように、同類は同類を呼び、良い人のところには良い人が、悪い人のところには悪い人が集まってくるのです。この同類共鳴の法則は、波動の同調によるものですから、もし悪とぶつかったら、自分はまだそのような波動を出しているのだなあ！ということに気づき、自分を誠めることです。

「循環の法則」

循環の法則は大きく別けて、大循環の法則と、中循環の法則と、小循環の法則があります。どの働きも同じです。ここでは小循環の法則について述べたいと思います。自然界は循環の法則の下に進化し続けているわけですが、私たちも中間世界と表現世界を循環することで成長を続けているのです。仏教でいわれる輪廻転生とは、この小循環の法則のことをいっており、この循環があればこそ、私たちは悔しさを晴らし、過ちを正し、成長してゆけるのです。循環の法則は、進化を続ける者にとって欠かせない仕組みなのです。

「慣性の法則」

気分よく運転していた時、急に横合いから犬が飛び出してきて急ブレーキをかけた、そんな体験はありませんか。その時車は直ぐに止まらず、しばらくは惰性で進んだはずですが、心の法則も同じで、一旦つけた心の癖は急に直すことができないのです。これを業といっておりますが、なくて七癖といわれるように、人には様々な癖があるのです。

良い癖は人生を明るくし、悪い癖は人生を暗いものにしてしまいます。世間の人は、なぜあんな良い人がこんな目に合うのだといいますが、宇宙には偶然や間違いはないのです。どんな良いことをしても、悪い思いを持てば悪い運命を引き寄せるのです。思った事と行った事は、同等の重さがあるのです。それが分からないから迷信を恐れ、宗教にしがみつこうようになるのです。運命は自分の思いと行いが引き寄せると知れば、もう迷信を恐れることも、神を恐れることもなくなるので、宗教にしがみつこうこともなくなるでしょう。

【コラム】この世はバーチャル・シアター

最近、バーチャル・シアターといわれる疑似体験旅行が話題になっていますが、これは自分が体験旅行の中にそっくり取り込まれ、あたかも実体験しているかのような感覚が味わえるというものです。例えばジェット機の操縦席に乗っている疑似体験旅行の場合、眼前には百八十度の立体画面が用意され、耳からは立体

音響が聞こえ、匂いまでもし、操縦席も本物のように動くといいます。正に、五感を最大限に生かした疑似体験旅行です。

私たちのこの世の体験も、バーチャル・シアターそのものといえるでしょう。ただ違うのは、自分の意思で体験内容をどうにでも変えられる点です。つまりバーチャル・シアターは筋書きが決まっていますが、この世の体験は自分が筋書きを描くのです。今私たちは、肉体という乗物に乗って色々な体験をしています、それは正にバーチャル・シアターそのものといって良いでしょう。何のことはない、私たちは今バーチャル・シアターで演技している真最中というわけです。

【コラム】無駄な人生などない！

生まれてすぐ死ぬ嬰兒がいます。小児マヒで苦しむ幼子がいます。病気で死ぬ少年がいます。戦争で傷つく青年がいます。世の中にはこのように、「神も仏もないものか!」と思いたくなる悲しい出来事がたくさんあります。しかし殆どの人は、その不幸を不運と偶然の中で処理してしまいます。運が悪かったのだ! 仕方がなかったのだ! と……。でも、決して不運でも偶然でもありません。なるべくしてなった因果の法則の現れなのです。

生命核（魂）の進化というものは、命の歴史の流れを通して、それも永遠の渡し場で見なければ見えないのです。つまり、命の位相を輪切りにして見るのではなく、永遠の目で、それも一本のロープとして見なければ、その全容が見えてこないのです。苦しみも、悲しみも、喜びも、感動も、みな進化の素材であり成長の糧です。その素材がなければ、生命という作品は完成されません。無駄な人生などない！ とはそういうことなのです。

【コラム】三身（位） 一体の構造

この宇宙の仕組みは、すべて三身一体（図6）の構造を成しています。まず大宇宙の構造ですが、本源・本質は絶対宇宙です。この世界は時間も空間も形もない、一なる純粹意識の世界です。対して表現宇宙（相対宇宙）は、時間も空間も形も有る物質の世界です。その中間に反物質の世界があり、この三つの世界が一体となって大宇宙は構成されているのです。この構造は原子の世界においても同じで、一個の原子は、原子と反原子と絶対原子の三身一体の構造を成しております。絶対原子は純粹意識ですから、その存在を知ることができませんが、陰に隠れながら反原子と原子を操っているのです。

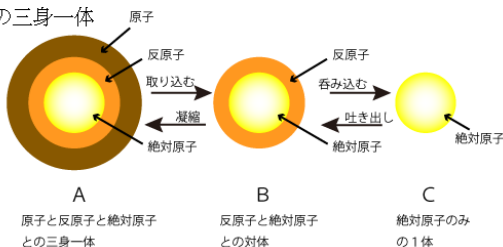
私たちのポテターも同様に、三身一体の構造を成しています。いわゆる肉体は、原子と反原子と絶対原子が結びつき、そこに肉体の支配者である生命核（魂）が宿ったものです。なぜ三身一体の構造を成しているかといいますと、これは物の創造の原理であり仕組だからです。例えば家を建てる場合、まず建築主の要望（理念）があります。次に、その要望をもとに青写真が描かれます。家はその青写真をもとに建てられるわけですが、その理念に当たるものが絶対原子であり、青写真に当たるものが反原子であり、建てられた家が原子に当たるわけです。このように物の創造の背後には、必ず理念の主と青写真と創造物の三者が存在するのです。ただしこの三者は一者です。なぜなら、この宇宙には絶対原子（理念の主である建築主）しか実在しないからです。

さてその絶対原子は、単独で表現宇宙に存在することができません。存在するためには、反原子と結びつき二態になるか、反原子と原子と結びつき三態になるしかありません。つまり、三身一体の構造を取るしかないのです。でも誤解してもらいたくないのは、絶対原子は、原子や反原子の数ほどあるわけではないのです。絶対原子は、宇宙に一つしかありません。たった一つの絶対原子が、すべての原子や反原子の中に同居し、自分を表現しているのです。この辺が非常に理解のしづらいところですが、今はただ信じてもらうしかないでしゅい。

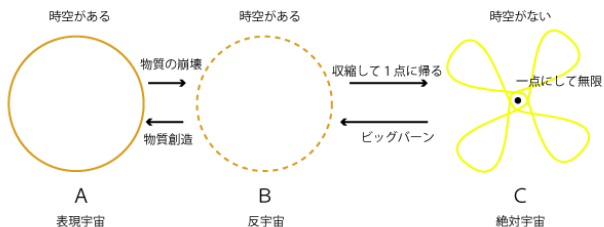
さて、原子も反原子も時空においてのみ存在できる幻の素材であって、実在しているものではありません。それゆえに、自分が絶対原子から生まれた素材だと悟ると、絶対原子に呑み込まれ消えて行くしかなくなり、一方呑み込んだ絶対原子も、その時点で時空の世界にいらなくなり、絶対世界へ帰って行くこととなります。ただし殆どの絶対原子は、表現宇宙の進化を後押しするため、最後まで表現宇宙に留まり活躍しております。このように原子も反原子もその本性は、絶対原子から吐き出された絶対原子そのものなのです。言い換えれば、理念も、青写真も、建築物も、みな建築主（創造主）であるということです。宇宙が一つのものです。創られているといわれるのも、創造主である絶対原子がすべての創造物の素材となっているからです。

(図6) 三身 (位) 一体の構造

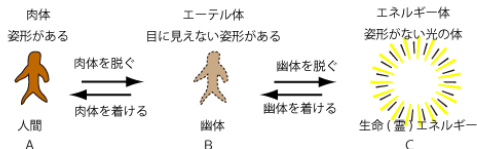
原子の三身一体



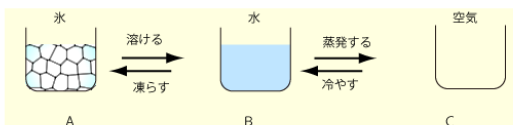
宇宙の三身一体



人間の三身一体



物質の三身一体



◎原子の三身一体も、宇宙の三身一体も、人間の三身一体も、物質の三身一体も、本質的にはみな同じ仕組みである。

第一章 生きる

世の中には、不幸を他人のせいにしてている人達がありますが、人のせいにしても不幸はなくなるものではありません。なぜなら、不幸は誰が作ったものでもなく、自分が作ったものだからです。自分が作った不幸なら、自分でなくすしかないのではありませんか。

・天に唾すれば、自分にかかるのは当たり前！

・泥道を歩いたら、足が汚れるのは当たり前！

・自堕落な生き方をしたら、不幸になるのは当たり前！

本当の自分を知った者は、もうこのように愚かな生き方はしなくなります。生命に生きる者は、正しい判断ができるようになるからです。この章では、生命に生きるとはどういうことなのか、様々な角度から光を当ててみたいと思います。

(1) 人生の意味を知ろう！

○人生の意味

私たちは、人間に上り詰めた後も数々の人生体験を積みながら、今日ここまで成長してきました。しかしその間にあっては、言うにいわれぬ数奇な人生を送ったことも少なからずあったでしょう。例えばある時は戦争で傷つき、ある時は病に倒れ、ある時は事故で負傷し、己の人生を呪ったこともあったでしょう。ある時は失恋に涙し、ある時は三角関係に悩み、ある時は夫に（妻に）裏切られ、もん絶の日々を送ったこともあったでしょう。また人に騙されたり、裏切られたり、陥れられるなど、散々な目にあったかも知れません。あるいは、富と名誉を掴み喜びに気炎したこともあれば、すべてを失い自ら命を絶ったこともあったかも知れません。その一つ一つの人生ドラマは、宇宙生命にとって一体どのような意味があったのでしょうか。単なる映画の一コマにしか過ぎなかったのでしょうか。

宇宙生命から見れば、それらの人生ドラマは、分身が故郷に帰る便法的な体験にしか過ぎませんでした。どんなに苦しい人生を送ろうが、どんなに楽しい人生を送ろうが、ドラマそのものには何の意味もなかったのです。なぜなら、そのドラマは続編のない一回限りのドラマだからです。登場人物もドラマの内容も一回

一回違うのです。受け継がれるのは、ドラマで体験した心の傷痕です。意識の高揚と理解力の高まりです。どれほど自分を知ったか、どれほど宇宙の仕組みを知ったか、それだけが実績として残るのです。といってもそのドラマは、人格形成上欠かせない体験であり、宇宙生命が望む幸せの拠り所でもありますから、おろそかにして良いというものではありません。与えられた命が尽きるまで、一生懸命生きることが大切です。

人生航路というものは厄介なもので、前進しているか、後退しているか、停滞しているか、見えづらいうところがあるのです。だからうっかりすると、道に迷ったり、堂々巡りしたり、脇道にそれるなど、無駄な時間を費やすこともままあるのです。道に迷わないためには、人生を点として捕らえるのではなく、線として捕らえねばならないでしょう。そうすれば全容が見え、欠点を修正することも容易になるからです。要するに私たちの人生は、生命核（魂）が綴る歴史の一ページ一ページであり、それは取りも直さず数万回の人生の総決算であると同時に、生命核自身の総決算でもあるのです。その意味では、数万回の人生は一つとして途切れていないということです。

○大切にすべきものは命格である

一回一回の人生において、名前も性別も環境も演じるドラマの内容も違っていきますが、常に幸せでありたい願いは変わっていないと思います。でも生命核から見れば、登場人物の幸せなどどうでも良いのです。なぜなら、登場人物はその人生における演技者にしか過ぎないからです。登場人物と人格は別モノなのです。登場人物は今生限りの存在ですが、人格は宇宙生命に帰るまで持ち続けられるものです。ですから正しくは、人格を「命格」と記すべきでしょう。

この度の人生は、

- ・ 幸せだったか、不幸せだったかではないのです。
- ・ 長命だったか、短命だったかではないのです。
- ・ 何を成し遂げたか、成し遂げられなかったかではないのです。
- ・ 世に名声をとどろかせたか、とどろかせなかったかではないのです。

どれほど魂を揺さぶる人生を送ったかなのです。その意味では、どんなにつまらない人生でも、それが魂に実りをもたらすものなら大成功です。勿論、どんな人生にも必ず実りはあるものです。ただ無自覚のまま人生を送ると、自覚を持って送るのでは月とスッポンの差がありますので、できるだけ人生の意味を知

る必要があるのです。人生の意味を知った者は、決して無為な人生を送ることはしません。必ず充実した人生を送ります。この際ぜひ人生の意味を知って下さい。

○私たちは本当の自分を知るために生まれてきた

殆どの人は、何のためにある人生か知らないまま一生を終えています。これでは、生まれてきた意味がありません。私たちは、本当の自分を知るために生まれてきたのです。それは、あなた自身も知っています。お父さんも、お母さんも、兄弟姉妹達も知っています。しかし肉体を持った途端、百人が百人ともそのことを忘れてしまうのです。これは仕方ないことかもしれませんが、仕方ないで済まされないのが人生なのです。なぜ人生に、苦しみや悲しみが付いて回るのでしょうか。それは、苦しみや悲しみが本当の自分を発見させるからです。宇宙の仕組みは良くできているもので、本当の自分を早く発見した者は早く苦しみから解放され、発見しない者は発見するまで解放されないようにできているのです。だから私は、仕方ないでは済まされないというのです。苦しみから早く解放されたかったら、一日も早く本当の自分を発見することです。人生に意味のない苦しみや悲しみはないのです。どんな苦しみも悲しみも、みな本当の自分を発見するための糧になっているのです。今苦しんでいる人は、なぜ苦しまねばならないのか疑問を持って下さい。疑問

を持ったなら、その疑問の予先を人生の思索に向けて下さい。それが、一日も早く苦しみから抜け出すコツです。

○この世は夢の如し

良く人生を懐かしがる人がおります。特に老境に入ると、その傾向が強くなるようです。でも良く考えてみて下さい。この世の出来事は、束の間の絵空事にしか過ぎないのですよ！ 私たちの人生は、単なる映画の一コマ一コマにしか過ぎないのです。どんなに懐かしがっても、どんな悔やんでも、元に戻すことはできません。もし戻せたとしても、それは過ぎ去ったものとは別モノです。そんな儂い絵空事を追いかけて、一体何になるのでしょうか。

この世は浮世といつて、現れては消えてゆく幻の世界です。この世に何一つ真実なるものはないのです。今楽しかったことも、今辛かったことも、次の瞬間には思い出しにしか過ぎなくなるのです。思い出は捕らえておくことはできません、過ぎ去る絵空事は捕らえておくことはできません。どんなに泣き叫ぼうが、どんなにわめこうが、たちまち手の中からすり抜けてゆくのです。でも、私たちの心・意識・生命は、絶対的な

りません。だから私たちは絵空事を大切にするのではなく、心を大切にすべきです。心こそ永遠不滅の私です。その心の中に永遠の幸せがあるのです。

どんなに栄耀栄華の人生を送ろうと、それは時の上に組み立てられた積み木のようなもので、必ず崩れ去ってしまいます。でも、心の中に組み立てられた積み木は絶対崩れません。私たちは、崩れない積み木を組み立てるべきです。そのためには、本当の自分を発見することです。すなわち、生命の自分を心の底で知ることです。

(2) 目的意識をしっかりと持とう！

目的なしに山の中を歩くのは苦痛なものです。ポールを追いかけ歩くから、一日中歩いても疲れないのです。引退したアスリートが亡霊のようになってしまふ、定年退職した人が急に老け込んでしまふ、といったことが起きるのも、生きる目的を失ったからです。人間は目的を持たず生きることなどできないのです。だから多彩な趣味を持ったり、旅行をしたり、買い物をしたりして自分をごまかしているのです。でも、どんなにごまかしても心は満足しません。なぜなら、それらの目的はいずれ失う目的だからです。永遠の生命が

失うものを追いかけて、満足するはずがありません。私たちは永遠の生命ですから、永遠のものを追いかけては満足できないのです。

○目的を誤ってはならない！

人間の本性を探ることは、実に意味深いものがあります。なぜなら、それによって生き方が全く違ってくるからです。私は人間を二つの視点から思索してみました。

一、人間は肉の塊であり、意識や思考はその肉から生まれるものである。したがって、生きている間は個々それぞれの肉が、それぞれの責任において快適に過ごせるよう努力すれば良く、それが人に迷惑をかけず対立しないものであれば、何をしても許されるものである。よって倫理も道徳も宗教も必要とせず、ただ肉体の維持がスムーズにゆくよう心掛ければ良い、といった唯物観に立った考え方です。

二、人間は意識（心）そのものであり、肉体はその意識の乗り物であり表現媒体であるから、肉体を大切にする以前に、まずは心の安寧を図らねばならない。また法則によって支配されている宇宙においては、法に逆らえば苦しみや悲しみを生み出すことになるから、法を理解し尊び遵守して幸せの道を歩くべきである、といった唯心観に立った考え方です。

一の唯物観に立てば、物やお金を多く得ることが幸せの基準になりますから、競い合いや奪い合いなどの闘争社会が生まれるのは当然でしょう。さらに唯物主義者は、人生は肉体ある限りのものと思っ
ていますので、どうしても刹那的・短絡的な生き方をしがちです。他人の迷惑も顧みず、おもしろおかしく生きる人達
が後を絶たないのはそのためです。

二の唯心観に立てば、心は永遠不滅のものですから、失うことも奪われることも死におびえることもあり
ません。ただ一心に秩序と平安を保とうとしましょう。要するに人々は、物より心を重視した穏やかな世
の中を志向するようになるのです。

どちらが平和な社会を生み出すかは、もうお分かりのことと思います。しかし多くの人達は、唯物観に立
った生き方をしています。人生の目的が不明確だから、そのような生き方をするのです。入口を間違えれば、
おかしな出口に出るのは当たり前です。いかに正しい目的を持つことが大切か、私たちは良く良く注意した
いものです。

○道を究めるための準備と計画

何度もいいますように、人生の真の目的は本当の自分を知ることです。子孫繁栄のためでも、良い家庭を築くためでも、地位や名誉を勝ち取るためでも、大金持ちになるためでもありません。それらの目的は、あくまでも肉体を維持する伏線の目的であって、真の目的ではないのです。だからといって私は、この世の生活を否定しているわけではありません。この世の生活に目がくらまされ、人生の目的を見失ってはならないといっているのです。

これはどんな道を極める場合にもあてはまることですが、挑戦するためには事前に様々な準備と計画が必要です。たとえばスポーツや芸術を極めるには、基礎体力や精神力を養う必要があるでしょう。また、強い意志力や感性やイマジネーションも養わねばならないでしょう。さらに、肉体を維持する経済的環境も整えねばならないでしょう。そして、一番肝心な指導者も見付けねばならないでしょう。これらの準備が整って、はじめて挑戦できるのです。本当の自分を知るにも、同じような準備と計画が必要なのです。

幸い荒野といわれるこの厳しい社会は、悟りに必要な道具を磨く格好の舞台になっています。私がこの世のどんな体験も否定しないのは、この社会で体験した伏線の目的が、後に本線の目的を達成する足場作りになっっているからです。つまり目的を達成するためには、この伏線の目的で、もまれ叩かれ強くなる必要があ

るのです。例えば、最後までやり通す強い意志力・向上心・忍耐力・集中力など、どれも悟りに必要なものばかりです。それを養う場が、荒野といわれるこの社会です。

では伏線の目的と本線の目的は、どのように違うのでしょうか。例えていえば、急峻な氷壁に挑むための装備や心構えなどが伏線の目的だとすると、実際に氷壁にピッケルを打ち込んでよじ登る行為が本線の目的といえるでしょう。具体的には、生命の実体を知ること、理解力を深めること、生命の自覚を高めて行くこと・・・、そして、一瞬一瞬一刻一日一日欠かさず生命を意識し、生命を自分として生きることです。（ピッケルとは瞑想のことで、本当の自分を知るために欠かせない道具です。）

このようにいうと、とても出来そうにないと思うかも知れませんが、心配いりません。そこまで行くところやんとした指導者にも巡り会え、また悟りやすい環境も用意されるものです。遠くから見ると大変そうに見えますが、近づいて見ると案外そうでもないのです。人生の目的をあまり深刻に考えないで下さい。どんな体験も、それなりに目的に適っているのですから、案することなく今与えられた環境で精いっぱい生きることです。

○目的に適った生き方をしよう！

人生の目的が本当の自分を知るためにあるなら、今日のような弱肉強食まがいの経済は必要ありません。寒さをしのげる衣服と、大の字になって寝られる部屋と、そこそこの食べ物があれば良いのですからね…。大邸宅や高級車やぜいたく品を欲しがるから、たくさんのお金が必要になるのです。

お金や財産をたくさん持っても、死ねばみな置いて行かねばならないのですよ。その置いて行かねばならない物の取り合いをしているのが、人間ではないでしょうか。命をかけるだけの価値があると思えますか。私たちが奪い合っているものは永遠のものでしょうか。みな失うものばかりではありませんか。生きる目的が不明確だから、そのような生き方をするのです。真の目的を知ったら目線が揃ってきます。足並みが揃ってきまず。目的地を知った者が、バラバラな行動を取るわけがないからです。だからどんな目的にせよ、目的を見出した人の目は輝いているのです。

どうでしょう、現代人の目は輝いていますか。食するという切実な目的のあった終戦直後の方が、輝いている人が多かったのではないのでしょうか。今輝きが見られないのは、物が豊かになり何に目的を見出したら良いか分からなくなったからです。今目を輝かしているのは、スポーツマンか、芸術家か、ガムシヤラに金儲けに走っている人達くらいなものです。それ以外の人達は、可もなく不可もなくといった、のらりくらり

とした生き方をしています。今日を輝かせている人達も、真の目的ではないわけですから、いずれ亡霊のようになってしまうでしょう。

人間は今、完全に行き先を見失っています。満たされぬ心を、買い物や、趣味や、旅行や、ゲームなどでごまかして生きています。それもこれも、人生の目的が不明確だからです。さあ、人生の目的をはっきりと掴みましょう。そうすれば、悔いのない人生を送ることができるのですから・・・。

○人生とは宇宙のベルトコンベヤーに乗っているようなもの？

それにしても人生とは不思議なもので、良くも悪くも最終的には一つの道につながっているのです。どんな後ろ向きに走っているつもりでも、気がついてみると前向きに走らされているのが人生なのです。人生は一直線には出来ていないのです。一体こんな回りくねった道に何の意味があるのだろう、と思うような道を歩まされることもしばしばあるのです。でもどんな曲がりくねった道も、みな目的地につながっているのです。

人生とは、宇宙のベルトコンベヤーの上に乗っているようなものです。その宇宙のベルトコンベヤーは、真の目的地に向かって一直線に動いています。どんなことが起ころうが、この動きは変わらないし止まらない

いのです。その上に乗せられているのが私たちですから、どんなに逆らっても逆らい切れるものではないのです。たとえば（A）という人は、ベルトコンベヤーの動きに従い前向きに歩いているとします。（B）という人は、ベルトコンベヤーの動きに逆らって後ろ向きに歩いているとします。当然、二人の距離は開いて行くでしょう。でもどんなに（B）が逆らっても、いつか必ず（A）の位置まで戻されます。逆らった分の苦しみが待っているだけです。でも真の目的を発見するためには、どうしても苦しみが必要なのです。人間は苦しい体験をしなければ、明かりが発見できないのです。その意味では、学ぶ苦しみも、働く苦しみも、お金を儲ける苦しみも、地位や名誉を得る苦しみも、また家庭的な悩みも、肉体的な悩みも、本線に入るための伏線的目的として、みな必要な体験といって良いでしょう。

○目的意識を持つことの大切さ

人間は目的意識を強く持った時、とんでもない力を発揮するものです。例えばスポーツ選手が一心に目的に向かって挑む時、大記録を打ち立てたり、絶対絶命のピンチを切り抜けたりします。ところが一旦目的が失われると、ガタガタと崩れてしまいます。

真の求道者はこういいます。

「もし本当に真理を自分のものにできるなら、火の中であろうと、水の中であろうと、地の果てであろうと、また身が裂けようと、手足をもぎ取られようと、ひるむものではない」と・・・。

ニセモノの目的を目指す人でさえ途轍もない力を発揮するのですから、ホンモノの目的を目指す求道者にとっては、この世の苦痛など何でもないでしょう。

今小中学で学級崩壊や登校拒否が起きているのは、子供たちに正しい目的が示されていないからです。ただ勉強しろとお尻を叩かれたのでは、子供たちが横を向くのも当たり前です。子供たちは真実を知りたがっているのです。特に最近の子供たちは意識が高いので、その欲求が強いです。

近年日本では、年に三万人を超す自殺者を出しておりますが、この中には人生の目的を見失い、命を絶つた者も少なくないのです。特に若者の中に多いのです。もし彼らの前に真の目的が示されれば、目をランランと輝かせ希望を持って生きることでしょう。おそらく自殺する者など、一人もいなくなるでしょう。

(3) 真の自由と真の役割

人間が「自由！ 自由！」と叫んでいる自由は、ただ肉を保全するための自由であって、真の自由ではありません。では真の自由とは、どのような自由をいうのでしょうか。そして真の自由を得た者の真の役割とは、どのような役割をいうのでしょうか。以下考えて見ることにしましょう。

○真の自由とは？

多くの政治家は、民主主義は自由を勝ち得る最良のシステムであると豪語しますが、本当に今の社会は自由でしょうか。あなたは朝早くから夜遅くまで、資本主義の象徴である時間やお金に縛られていませんか。家を出るのも時間を気にし、電車に乗るのも時間を気にし、タイムカードを押すのも時間を気にし、仕事をするのも時間を気にし、まるで時間の奴隷ではありませんか。また何をするにもどこに行くにも、お金なしでは動きが取れないではありませんか。このように私たちは自由に生きていくつもりで、実際は不自由な生き方を強いられているのです。

例えば、学生も、スポーツ選手も、営業マンも、成績やノルマに縛られています。会社は業績や株価に縛られています。銀行は金利や為替レートに縛られています。政治家は政党や派閥に縛られています。総理大臣は国民の支持率に縛られています。国は経済の成り行きや、国際情勢に縛られています。国際社会は資源や領有権に縛られています。一般人は居住権に縛られ、私有財産に縛られ、規則や条例や法律に縛られています。また生活の髓まで、コマースャルに縛られています。おまけに、こうあらねばならない！ あああらねばならない！ といった社会慣習や既成概念に縛られています。

最近では飛行機に乗るにも博覧会々場に入るにも、持ち物検査なしには語れなくなりました。あなたは車に鍵をかけ、家に鍵をかけ、金庫に鍵をかけ、心落ち着かない日々を過ごしておりませんか。アメリカにおいては、銃を所持していなくては安心して暮らせないのですよ。紛争地域では、武器を所持してさえ安全の確保はできないのです。日本においても最近では、子供一人で学校へ行けなくなりました。何せ凶悪犯が、学校の中まで侵入するようになったのですからね……。こんな社会を自由社会というのでしょうか。万物の霊長である人間が、動物以下の不自由を強いられている現状を、あなたはどう思いますか。あなたは間違った社会慣習に身を委ね、自分を殺していませんか。社会の仕組みがそうだから仕方がないと、自分の良心を腐らせていませんか。そんな生き方をしている、どうして真の役割が果たせるのでしょうか。

真の自由とは、次のような自由をいうのです。

一、天から与えられた役割を果たす自由。

二、良心が喜ぶ自由。

三、宇宙の意思に沿う自由です。

ではこの三つの自由を、真の役割に照らして一つずつ見てゆくことにしましょう。

○役割に優劣はない！

この世の形ある物には、みな個性があります。それは、個性に基づいた役割を果たすために存在させられているからです。その役割に優劣はありません。だからダイヤモンドと石は同等の価値があります。ミミズと人間は同等の価値があります。河原に転がっている石の代役はダイヤモンドにはできないし、ミミズの代役も人間にはできないからです。個性に基づいた役割があるという意味は、ネジ一本なくても時計は動かかない、部品一個なくても自動車は動かない、はめ絵一つなくても地球絵は完成されないという意味です。だから物の価値も、職業の価値も、能力の価値も、みな対等の価値にみなさなくてはならないのです。差別を付けるから、貧困層と富裕層ができるのです。

すべての生き物は、地球絵におけるジグソーパズルの一つ一つです。どんな小さな虫にも、どんなみずぼらしい花にも、どんな醜い動物にも、その生き物にしかできない尊い役割があるのです。人間においても、子供には子供の役割が、大人には大人の役割が、女には女の役割が、男には男の役割が、ちゃんとあるのです。ですから性転換手術など、もつての外なのです。自然に逆らう行為は、持って生まれた役割を放棄することになるからです。ですから男女同権などありえないし、男尊女卑という考えも許されるものではないのです。

たしかに宇宙の仕組みにおいて、男は「光」で女は「影」となっています。男は「能動的」な働きをし、女は「受動的」な働きをしています。でも光は影なしに意味をなさないし、影は光なしに存在できないのです。能動は受動なしに意味をなさないし、受動は能動なしに存在できないのです。このように男と女は相身互いの関係にあるわけですから、どちらが優れどちらが劣るというものではないのです。そこには優劣の問題があるのではなく、役割の問題があるだけです。

あなたの代わりは誰もできないし、私の代わりも誰もできないのです。いやどんな物も、代役は利かないのです。どんな小さな物にも、どんな弱い物にも、その物にしかできない尊い役割があるわけですから、虫一匹・花一輪むやみに殺したり摘み取ったりしてはならないのです。能力の有る無しなんか、役割の重さか

から見れば小さな問題にしか過ぎません。だから、決して能力にこだわってはならないのです。といっても私は、怠け者になりなさいといっているわけではありません。与えられた能力を精いっぱい發揮して生きることが、役割だといっているのです。

○天から与えられた役割を果たす自由

天から与えられた役割が、特別にあるわけではありません。そこにいて一生懸命生きることが役割なのです。生きていること自体が役割なのです。この世に存在させられているどんな物にも役割があるという意味は、その場所で個性を發揮しながら、自分のできることを精いっぱい行い生きることが役割だという意味です。もし細胞の一つが全体と切り離されたら、細胞の一つは勿論、全体の細胞も無事ではいられないでしょう。一つ一つの細胞の役割は小さいかも知れませんが、その小さな働きがなければ全体の働きはないのです。だから、小さいからといって軽んじてはならないのです。

地球はバランスの樹です。鉱物も植物も動物も人間も、すべてバランスの樹の一員です。もしむやみに摘み取れば、この地球というバランスの樹はたちまち崩れ去ってしまうでしょう。その意味では、どんな物も

対等です。どんな人も対等です。だから私は、どんな物にもどんな人にも、差別を付けてはならないというのです。

一の「天から与えられた役割を果たす自由」とは、どんなしがらみや制約にも左右されず、天から与えられた役割を忠実に果たす自由行使のことです。それは自然体です。身構える必要はありません。一人ひとり与えられた環境の中で、与えられた能力を精いっぱい使って生きることです。

○良心が喜ぶ自由

資本主義経済は悪そのものです。勿論、今の地球においては過渡的に必要な仕組みですから、全面的に否定するつもりはありませんが、本来は悪なのです。なぜなら、その仕組みそのものが悪を生み出しているからです。どうでしょう？ あなたは会社のため、生活のため、仕方なく良心に恥じる行為をしていますか。

- ・ あなたは本当に、良いと思って商品を勧めているでしょうか。
- ・ 成績欲しさに、偽りをいっていませんか。
- ・ 売上欲しさに、接待や供応や買収などの不正手段を使っていませんか。
- ・ 良心を傷つけるような駆け引きをしていませんか。

・ライバルを陥れていないでしょうか。

・過剰な宣伝や過剰な売り込みなど、客の購買欲を煽り売上増強を目論んでいないでしょうか。

・お金のために、芸や技の切り売りをしていないでしょうか。

・視聴率を上げるために、好奇心を誘う内容や興味本位な内容で勝負していないでしょうか。

そんなことはしていないといえる人が、果たして何人いるでしょうか。

次のようなことも不自然です。今の世の中には汗も流さず、ただお金を動かすだけで巨万の富を得ている人達がたくさんおられます。お金はエネルギーですから、出した分（働いた分）入るのが自然なのです。なのに汗も流さず巨万の富を得るなど、エネルギー均衡の法則に照らしても不自然です。彼らはこの行為を、不自然と思わず堂々とやっています。

いったん資本主義というベルトコンベヤーに乗せられてしまうと、何が正しく何が正しくないか分からなくなってしまうのです。不正融資、不正雇用、不正販売、不正投資、積載違反、建築違反、手抜き工事など、世の違反といわれる違反は、すべてこの仕組みが生み出しているのです。殆どの人が悪いと思いつつも、会社のために家族のために生きるためにと、嫌々ながらやっているのです。仕組みが良識を狂わせ、良心ま

で腐らせているのです。このように、資本主義がいかにも悪を生み出しているかが分かります。人の欲望を逆手に取って繁栄する社会など、本来あってはならないのです。

真の自由は、良心に生きることです。そこに何一つ規則や法律の関与はありません。世の人々は、良心に生きることが苦しいと思いますが、欲を持つから苦しいのです。無欲で生きれば、苦しいどころかこれほどさわやかな自由はないのです。

二の「良心が喜ぶ自由」とは、社会の仕組や慣習に縛られない、真に良心が喜ぶ自由行使のことなのです。

○宇宙の大きな意思に沿う自由

たしかに自由は何よりも大切です。自由は正しい未来を切り開く土壌となっているからです。だからといって、何をしても良いというものではありません。人間が作った規則や法律は、一日たてば変わってしまう恣意的な法です。それを盾に、自分のやっていることは正しい、と思うこと自体良識が疑われるのです。私たちが守らねばならない法は、永遠に変わらぬ宇宙の法です。そして私たちが行使すべき自由は、宇宙の大きな意思に沿う自由です。すなわち、地球絵と宇宙絵を完成させる自由です。好き勝手に自由を行使し、違う場所に違うパズルを嵌めたのでは、地球絵も宇宙絵も滅茶苦茶になってしまいます。

宇宙意思が目指す流れの方向は、すでに決められています。今私たちは、宇宙号という名の列車に乗っているのです。その列車の中においては、何をしても自由です。でも、列車の外に飛び出す自由は与えられていないのです。もし放漫な自由を欲しがり外に飛び出すなら、大怪我をすること間違いないでしょう。事実流れに逆らって生きているために、今人間は苦しんでいるではありませんか。所詮人間は、宇宙の意思に逆らって生きることなどできないのです。

流れの方向は決められているといいましたが、大きな流れが決められているという意味で、一人ひとりの人生は本人の自由意志で選べるのです。列車の外には飛び出せないけれど、列車の中では何をしても自由なのです。先頭車両に乗っても、真ん中の車両に乗っても、最後尾の車両に乗っても、また右側の席に座っても、左側の席に座っても良いのです。そこで何を飲み、何を食べ、誰と結婚し、どんな家庭を持っても良いのです。ただ、宇宙の大きな意思の外に出られないだけです。その列車の行く先は、生命という名の駅です。私たちの乗っている列車は、悟りに向かって走っているのです。どんなに嫌だと駄々をこねても、列車の外に飛び出すわけにゆかないのが私たちなのです。

- ・法に生きる者は法に守られ、法に逆らう者は法に退けられる。
- ・愛に生きる者は愛に守られ、愛に逆らう者は愛に退けられる。

これが宇宙のしきたりです。

三の「宇宙の意思に沿う自由」とは、宇宙法則の中において生きる自由行使のことなのです。

○真の自由を学ぶために生まれてきた

本来、生命としての私たちは自由です。その自由な生命が、なぜ不自由な世界へ出てこなければならなかったのでしょうか。不自由を知らない者は、真に自由な生き方はできません。不自由を知らない者は、自由の有り難みが分からないからです。だから生命は自由の有り難さを学ぶために、わざわざ不自由な世界へ出てきたのです。私たちの肉体は、生命の乗り物です。実にもろく、弱く、汚く、重く、不自由です。でもその肉体に乗って不自由を体験することで、自由の有り難みを知るのです。

野放図な自由は悪です。自由の尊さを学ぶ不自由は善です。自由奔放な生命は、不自由な肉体の中に入ることのできる事を学びます。今人類は、この世の様々な矛盾やしがらみを通して、真の自由を発見しようとしているのです。やがて人類は、次のことを学び知るでしょう。

・人間を不自由にするもの・・・それは無知という鎖錠である。

無知が暴走を生み、暴走が鎖錠（法律）を生み出し、その鎖錠が人間を不自由にする。

・人間を自由にするもの・・・それは智慧という鍵である。

不自由が疑問を生み、疑問が智慧をもたらし、その智慧が人間を自由にする。

(4) 偏らない生き方とは？

中道、あるいは中庸という言葉を目にしたことがあると思いますが、これは真ん中の道を歩みなさいという意味です。どちらにも偏らない生き方が、中道に生きる姿です。なぜ中道を歩むことが大切かといいますと、真ん中にいけば心穏やかに生きられるからです。

こんな体験はありませんか。電車に乗った時、一番降りやすいのは出入り口付近です。しかし出入り口付近は出入りが激しいので、押したり押されたりして大変です。また、一番奥については出るのに苦労します。真ん中にいけば、そう苦労しなくても出られます。高速道路には何車線もの道がありますが、どこを通れば一番安全でしょうか。真ん中の道进行することですね。特に知らない道进行場合は、真ん中の道进行するのが無難です。なぜなら、右にも左にも車線変更しやすからです。シーソーに乗ったことのある人は分かると思います。一番揺れるのは両端です。中心に寄れば寄るほど揺れは少なくなり。人生の荒波を乗り越

えるコツも同じです。楽な道ばかり歩いてみると、必ず厳しい道を歩かされることになります。楽あれば苦ありは真理なのです。

○バランスに生きることの大切さ

宇宙は寸分も偏らないバランスの下に運行されていますが、その象徴的姿が物質（陰）と生命（陽）とのバランスです。これは地球も例外ではなく、昼と夜、運動と休止、晴れと雨、益虫と害虫、善玉菌と悪玉菌など、相反するもの同士がバランスを取り合って生きています。でもこれを知らない人間は、無謀な手段を使ってバランスを崩そうとします。薬を使って虫を殺す。雑草を殺す。悪玉菌を殺す。陰陽のバランスを崩し、害虫や悪玉菌を繁殖させたのは人間なのに、それが悪いと殺しにかかるのですから、彼らが暴れるのも無理はありません。彼らは、「あなた達のやっていることは間違っていますよ！ 正しなさい！」と忠告してくれているのです。どんなものもバランスの樹の一員ですから、本来害虫や悪玉菌などいるわけがないのです。人間がバランスを崩すから、バランスを取り戻そうと彼らは反対の行動に出るのです。

病気も同じです。通常私たちの体内では、様々な菌がバランスを取り合って生きております。しかし偏った生活をしてバランスを崩すと、悪と思える菌の方が活発化するのです。でも人間はそれが悪いと、殺菌す

る、焼き殺す、切除する、まったく恩を仇で返しています。これでは根本治療は不可能です。何事においてもバランスを保つことは、とても大切なことなのです。特にこれから話すことは重要ですので、ぜひ頭に叩き込んでおいて下さい。

私たちは食べ物からだけエネルギーを補給していると思っていますが、水からも空気からも補給しているのです。ただし補給しても生命の自覚がなければ、エネルギーを完全燃焼させることができないのです。なぜなら、エネルギーは陰（地）と陽（天）のバランスが取れ、始めて完全燃焼するようにできているからです。殆どの人は陰（物質・地・影）ばかりを意識し、陽（生命・天・光）を意識していません。だからエネルギーを弱め、病気や事故などの災厄に苦しまねばならないのです。もし、生命を自覚しエネルギーを完全燃焼させることができれば、もう災厄に苦しむことはないでしょう。

私たちの身体には、宇宙エネルギーを取り込む臓器がちゃんと用意されています。ただ今の人間は、それを使わなくなったから、使えなくなっただけです。なんでもそうですが、使わなければ能力が低下してしまうのです。使うとは、生命を意識することです。もし生命を意識して生きれば、間違いなく能力は回復するでしょう。

○心の針を中心からずらしてはならない

生命の自覚を持った者は、けして偏った生き方をしません。偏れば苦しみが待っていることを知っているからです。だから彼らは、常に中道を歩んでいます。でもそのことを知らない人達は、楽な方へ楽な方へと偏った生活をしたがりです。無理ありません。今の文明社会は、人間を墮落させる方へ墮落させる方へ引っ張っているのですからね……。お酒に呑まれる人、グルメ狂の人、ネオン街を徘徊する人、ギャンブルに手を染める人、娯楽や快楽にのめり込む人、暖衣飽食に酔いしれ肥満になったからと言ってサウナやエステに通う人など、快楽や快適を求めているのが現代人の姿ではないでしょうか。だから健康を害したり、事件や事故などの災厄に見舞われたりするのは、不幸は偏った生活をした代償なのです。

今人類は完全にお金や物に溺れています。お金や物を得ることが最大の幸せだと勘違いしているのです。領有権争い、資源の奪い合い、企業間の確執、隣人同士の不仲、家族の断絶、みなお金や物に目隠しされ生まれた不幸です。これを打開するには、大自然から生き方を学ばねばなりません。大自然のバランスの見事を御覧下さい。

- ・ 生き物の左右上下のバランス性。
- ・ 生態ピラミットのバランス性。

・季節の移り変わりの安定性。

・重力の均衡性とエネルギーの均一性。

・中心磁場の絶対性。

このように大自然の心は、常に中道を保とうとしています。その心を、人間は自然から学ばねばなりません。このような体験はありませんか。ひいきのチームが負けた時、怒りがこみ上げて眠れなくなったことが・・・。これは想いの針が中心からずれた時に起きる現象です。想いの針が中心にある時は、心穏やかでいられるのですが、何かに囚われ想いの針が中心からずれると、イライラや怒りが込み上げてくるのです。現代人の殆どは、想いの針が中心からずれています。まっ暗闇とまではいいませんが、とても薄暗いのです。薄暗い所に蚊やハエが飛び交うように、薄暗い心の中にも邪悪な波動が飛び交うのです。事実、多くの人が邪悪な波動に犯され、様々な災厄に苦しんでいるではありませんか。自殺や凶悪犯罪や事故など、すべて邪悪な波動が絡んで起きた災厄です。正常な人が、人を殺めることなどあり得ないのです。何十万分の一の確率で起こる事故が、頻繁に起きるわけではないのです。みな闇が闇を引き寄せた、波動の同調による災厄です。人の心が光で満たされていれば、このような事件や事故が頻繁に起こるわけではないのです。

この宇宙には、天のエネルギーと地のエネルギーが存在するのです。もともとは一つなのですが、人間が天と地を分けることで、二つある状態にしてしまったのです。今人類は、地のエネルギーだけを働かせているのです。片輪だけ働かせているから、つまずくのです。私たちは二つのエネルギーを、バランス良く働かせなければなりません。天と地のエネルギーをバランス良く働かせれば、あらゆる争い、あらゆる災厄は、嘘のようになくなってしまおうでしょう。天と地のエネルギーをブレンドさせ、地上に理想の世を築くことが人類の最終目標なのです。

○中庸（中道）に生きるには？

人間には、物質（陰）と生命（陽）の二つの側面があるわけですが、殆どの人は物質の側面を重視して生きております。これは明らかに偏った生き方です。偏ればエネルギーの低下を招きますから、病気や事故などの災厄に見舞われるのは当然なのです。今人類が様々な苦しみに喘いでいるのは、欲の面においても、情の面においても、富の面においても、偏った生き方をしているからです。例えば日本の資本家はまだまだですが、欧米の資本家は庶民の何百倍・何千倍・いや何十万倍もの富を独占しています。これは明らかに、エネルギー均衡の法則に反しています。エネルギーの多い中東地域に争いが絶えないのも、金持ちの周りに争

いが絶えないのも、エネルギー均衡の法則に反しているからです。富（エネルギー）が偏れば、必ず波風が立ち、争い事が起きますのです。

中庸・中道の法則は絶対的法則ですから、この法則に逆らって幸せになった人など一人もいないのです。だから法則に逆らいながら、「神様幸せにして下さい！」と祈るのは矛盾だということです。幸せになりたかったら、どうか生命と物質をバランス良く生きて下さい。生命と物質をバランス良く生きるという意味は、一日せめて四時間だけでも生命を意識して生きるという意味です。四時間物質から離れていれば、寝ている時間と併せ一二時間物質から離れることになるわけですから、陰陽のバランスが整うのです。陰陽のバランスが整えば、物やお金や地位や名誉を求める欲望が薄らぐのです。

以上偏らない生き方について述べさせてもらいましたが、要点は一つ、想いを中心からずらさないことです。陰（物質）と陽（生命）をバランス良く生る事です。つまり何事もホドホドでありなさい！ 中道でありなさい！ ということです。

【コラム】偏りがいけない理由

今人類は偏った生き方をしていますが、偏った生き方をしたら間違はなく災を招きます。でも人類は、そのことにまだ気づいていないのです。では偏るとなぜ災いとなるのか、その理由を列挙してみることにしましょう。

一、五官を刺激して得る快樂は、度が過ぎると必ず苦しみに変わるようになっていきます。麻薬による快樂は、その典型的例といって良いでしょう。楽しみもホドホドなら良いのですが、度が過ぎると苦しみに変わりますから要注意です。

二、空气中に散在する酸素は安定していますが、濃縮すれば危険物になります。火薬を詰めた爆弾も、ガスボンベも、危険物の塊です。特に、ウランを濃縮して作った原子爆弾の破壊力は絶大です。濃縮すればするほど、偏らせれば偏らせるほど、危険が増大するのが物質界の特徴なのです。

三、毎年台風による被害は甚大ですが、その台風は空気の偏りによって生まれたものです。竜巻もそうです。豪雨も干ばつも偏りによって生まれるものです。人類が物質に偏れば、自然も追隨するように偏りを見せるようになるのです。これは、人類の偏りに対する警告なのです。

四、根や莖や葉など、薬草全体を使った漢方薬は穏やかな効き目が期待できますが、濃縮して作った化学薬品は効き目が強いため必ず副作用が起こります。毒はその典型的例です。どんな良い物でも、偏った使い方すれば毒になることを自然は教えてくれているのです。

五、エネルギーの多い地域に紛争が絶えないのも、金持ちの周辺に波風が立つのも、エネルギーの偏りが原因です。石油もお金もエネルギーの塊ですから、偏ればどうしても争い事が起きやすくなるのです。

六、怒り・憎しみ・心配・恐怖などの想いを多く抱くと、いつか必ず重い病になります。これは想いを陰の方に偏らせた結果です。ひいきのチームが負け悔しくて眠れないのも、想いを偏らせたためです。悔しさや腹立たしさほど、人の心を腐らせることはありません。想いの偏りは心を腐らせるばかりでなく、身体を壊すことにもなりかねないのです。これは思想の偏りにもいえることで、よくよく注意せねばなりません。

七、欧米では同性愛同士の結婚が増えておりますが、この結びつきは天と地を逆様にしたぐらいのアンバランスを生み出すのです。水素と酸素を偏らせてみて下さい。酸とアルカリを偏らせてみて下さい。同じように、同性同士も偏らせれば、異様な危険を生み出すのです。なぜガンという病気が生まれたと思いますか。なぜエイズという病気が生まれたと思いますか。なぜ狂牛病や鳥インフルエンザが生まれたと思いますか。人類の偏った生き方が、そのような病を生み出したのです。

八、知識の取り過ぎは、知識の偏りです。知識過多になると、考え方に弾力性がなくなるばかりでなく、直観力まで弱めてしまうのです。これは真理を追究する者にとって、大変な障害になります。特に信仰の偏りは大敵です。一つの宗教に凝り固まってしまうと、その思想から抜け出すのが大変なのです。

九、肥満症はエネルギー過多、拒食症はエネルギー過少、どちらも偏りから生まれた病気です。甘すぎるのも、辛すぎるのも、脂っこすぎるのも、病気の原因になります。これは食べ物だけでなく、普段の生活の中においても気を付けるべきことです。例えば、睡眠の過少過多、運動の過少過多、娯楽の過少過多など、偏れば間違いなく心身を乱すのです。

十、機械の便利さに頼ると、想像力や直観力や記憶力を鈍らせるばかりでなく、身体能力も低下させてしまいます。脳をあまり使わない、手をあまり使わない、足をあまり使わない、これでは能力が低下するのも当然です。機械文明が精神と肉体の荒廃を生むといわれるのは、何でも機械頼りになり、能力を低下させてしまうからです。

十一、物の生産を特化してしまうと、何かあった場合切り替えるのが大変です。また技術や技能が偏ってしまうため、特定の人しか扱えなくなってしまうのです。さらに生産物の移動に、大変な労力と時間が必要に

なります。生産物はその地で作り、その地の人たちが使うべきです。すなわち、地産地消を原則とすべきです。

十二、過密都市や過疎地域の弊害は、偏りの典型的事例といつて良いでしょう。大都市では人がひしめき合い、様々な悪しきことが起こっています。例えば、交通渋滞や交通事故などは慢性的です。詐欺・強盗・殺人などの犯罪も日常茶飯事です。一方過疎地域では働くところがないため、若者は都会に出て行きますます過疎化が進んでおります。高齢化が進んだ過疎地域では、働き手がいらないため、田畑や山林など見るに忍びないほど荒れ放題になっています。村おこしや町おこしなどして人を集めようとしていますが、それもままならないのが現状です。これもみな経済の偏りが生み出した弊害なのです。

十三、小学生のころから、なぜ有名校を目指して勉強しなければならぬのでしょうか。毎日朝早くから夜遅くまで、なぜ働き蜂のように働かなければならぬのでしょうか。深海深くパイプを打ち込み、なぜエネルギーを汲み出さなければならぬのでしょうか。燃料をたいてまで、なぜハウス栽培しなければならぬのでしょうか。資本主義経済は、富を多く偏らせることによって成り立っていますが、これは人心を狂わせるばかりでなく、自然界までも狂わせているのです。

このように何でも偏らせること、様々な悪しきことが生まれてくるのです。このまま偏った営みを続ければ、いずれ大きな代償を払われるでしょう。苦しみとして・・・悲しみとして・・・さあ気づいて下さい。そして一日も早く偏りを解消して下さい。

【コラム】誰もが克服しなければならない肉欲の誘惑

快楽は、私たちの心を乱します。特に極端な快楽は、心の大敵です。しかし殆どの人は、この快楽にのめり込んでゆきます。でも極端な快楽は苦の対極にありますから、必ず反応の波が押し寄せてきます。薬の副作用や麻薬の禁断症状などは、その典型的例とって良いでしょう。たしかに早期の回復と、大きな喜びを味わうことはできます。でも中庸を旨とする宇宙は、必ずバランスを取り戻そうとしますので、どうしても苦しみの反動がやってくるのです。

私たちが求める喜びは極端な快楽ではなく、静かな喜びでなくてはなりません。なぜなら、五官を刺激して得る興奮の快楽は一時ですが、心の弦を震わせて得る静かな喜びは永続するものだからです。ですから一旦心の喜びを体験した者は、肉の快楽にのめり込むことはなくなるのです。たしかに極端な快楽は魅力的です。私たちを虜にします。でも極端な快楽を貪り続ければ、必ず苦しみに代わってしまうのが中庸の性です。

それは先ほどもいったように、快樂は苦の對極にあるからです。對極にあるものは必ず中心（中庸）に戻ろうとするので、どうしても苦しみの反動がやってくるのです。

とはいっても、成長の過程で肉の快樂を体験しなければならぬ時期もあるのです。それは、一セモノとホンモノの見分けがつかない幼い時期です。昔からいわれてきた「飲む・打つ・買う」の三欲は、肉欲を克服するため誰もが通らねばならない道だったのです。でもその空しさを知った暁は、もうそのようなものには思いを寄せないことです。

罪を憎んで人を憎まず、すなわち、肉を憎んで人を憎まず。

(5) 体験を通して学ぶ

体験なしに偉大なことを成し得た人など、世の中に一人もおりません。偉人・才人といわれる人ほど、多くの体験を積んでいるものです。体験は人間ばかりではなく、どんな生き物も成長させます。それも多く体験すればするほど、大きく成長させてくれます。だから臆することなく、何にでも挑戦したら良いのです。鉱物も植物も動物も体験して成長し、その果実を人間にバトン・タッチしてくれたのです。

○動くことは体験することである

この世に存在するどんな物も振動し動いております。石も、鉄も、原子も、振動し、みな動いております。例外はありません。動けば出会いが生まれ、出会えば必ずドラマが生まれます。つまり体験できるのです。私たちは体験するために生まれ、体験を通して成長するよう計られているのです。ただし進化の度合いによつては、多く体験できる物とできない物があります。例えば鉱物は、自ら動きませんのであまり体験できません。だから彼らは、長い年月をかけ少しずつ成長してゆくしかかないのです。しかし鉱物も進化の後半には、

何かを介して体験範囲を広げようとはします。たとえばダイヤモンドや水晶のような進化した鉱物は、飾り物となって人の身に付けられ体験を深めます。

植物も自由が制限されているため、思うような体験はできません。でも風や虫や動物によって運ばれ、体験範囲を広げることができます。中でも進化した花や木は、観賞用として、食用として、薬用として、人間生活の中に入り込み、色々な体験をすることができます。動物になると体験範囲は一段と拡大します。特にペットは、じかに人間の波動を受けることができるので、飛躍的な成長が期待できます。人間になるともう限界がありません。

このように進化すればするほど自由が拡大し、体験量も質も豊富になって行くのです。その意味では、人間には無限の成長の可能性があるわけです。その体験内容は、幼いうちは単純で肉体的に厳しい体験を、中熟してくるとやや複雑で肉体的・精神的に苦しい体験を、熟してくると難度な精神的体験へと移って行きます。神は成熟度に応じ、体験内容を物質的なものから精神的なものへ、容易なものから難度なものへと引き上げられるのです。

環境が変わると、誰もが戸惑ったり不安になったりするものですが、これはステップ・アップの変化であって、決してステップ・ダウンの変化ではありません。環境が変わるのは、成長の証なのです。その時には

分からなくても、後で振り返れば必ず納得ゆくはずです。だから厳しい環境が与えられたからといって、決して逃げ腰になつてはなりません。むしろ誇りに思つて果敢に挑戦すべきです。

○この世は体験道場である

家に閉じこもっている人より、外に出で悪事を働いている人の方が成長が早いといわれるのは、悪事の中にも教材がたくさんあるからです。火傷して火の扱いを学ぶのです。手を切つて刃物の扱いを覚えるのです。怖がつて何もしなかつたら、何も学ぶことができません。たしかに外に出れば、嫌なことも煩わしいこともたくさんあるでしょう。でもその体験がなければ、気づくことも、発見することも、できないのです。

例えば、ここに幸せしか知らない人がいたとしましょう。その人は幸せなのに、幸せしか知らないために幸せだと思えないのです。本当は幸せなのに幸せとは思えない、これほど悲しいことはないではありませんか。おいしいものをたらふく食べながら、不平不満をいつているようなものです。それはひもじい体験をしていないからです。不幸を知らないから、幸せの中にも幸せとは思えないのです。勿論、わざわざ苦しみをもらいに行く必要はありません。でも体験の必要な魂は、どうしても自ら苦しみをもらいに行くのです。

今逃げ腰で家に閉じこもっている人は、作用と反作用の法則によって必ずしっぺ返しを受けるでしょう。この宇宙は、逃げて得するようにはできていないのです。必要な課題を克服するまで、何度も何度も同じ体験をさせられるのです。でなければ、次のステップを踏めないからです。ならば、早く課題を克服した方が利口ではないでしょうか。

ここで重要なのは、気づくということです。気はエネルギーですから、気づくとエネルギーが強まり、理解力や判断力が増すのです。理解力が増せば次の気付きにつながり、さらに理解力が増すといった良い循環を生み、ますます判断力や見識力が高められるのです。だから、気付きは悟りの第一歩だといわれるのです。でもその気付きは、体験を通してやってきますから、やはり体験はとても大切なことなのです。動いて、出会って、ドラマを演じ、その体験を通して成長するよう設定されているのが宇宙の仕組みです。すべて学びの一環です。だから体験を嫌ってはならないのです。体験が自分を成長させてくれると思えば、どんな厳しい体験もひるまず挑戦できるでしょう。

○人生体験を繰り返す理由

この宇宙の素晴らしいところは、すべての人に平等に悟りのチャンスが与えられている点です。それは時代を問わず、人種を問わず、性別を問わず、頭の良し悪しを問わず、貧富の差を問わず、職業の別を問わずです。しかしチャンスは平等であっても、悟りの道における人生体験は人それぞれ違うのです。それだけに、煩惱のアカの付き方も濃さも違うのです。煩惱のアカ落しは、一皮一皮、一步一步、着実に課題を克服してゆくしかありません。克服する課題は大きく分けて三つあります。

一、欲望の克服です。

二、感情の克服です。

三、想念のコントロールができるようになることです。

この三つの課題は、本来瞑想によって克服可能なのですが、今の地球において瞑想で克服できる人は、殆どいないといって良いでしょう。なぜなら、これほど煩惱の火が燃え盛っているのは、心穏やかに瞑想できるわけがないからです。私たちは、欲望をむさぼることの空しさ、感情に流されることの愚かさ、悪想念から受けるダメージの恐ろしさなど、人生体験を通して一つひとつ煩惱の火を消してゆくしかないのです。それがまた、瞑想しやすい環境を整えることにもつながるからです。

では、乗り越えねばならない課題について、一つひとつ見てゆくことにしましょう。

まず食欲・色欲・などの克服ですが、この本能的欲望は動物時代の癖が残っているため、厳しい相対的体験が必要になります。ある時は腹一杯を体験し、ある時は餓死寸前を体験します。ある時は女性に振られる体験をし、ある時は女性にもてる体験をします。物欲・金銭欲・地位や名誉欲などの克服も、相対的体験を通して行われます。ある時は乞食を体験し、ある時は大金持ちを体験します。ある時は奴隷を体験し、ある時は王を体験します。ある時は黒人を体験し、ある時は白人を体験します。このように様々な相対的体験を通して、哀れさ、憤り、空しさなどを知ってゆくのです。

次いで 感情の克服が待っています。家族や隣人や友人同士 のトラブルは、怒りや憎しみや恨みなどの悪感情を生み出しますが、その悪感情は自分のところにダメージとして帰ってきます。そこで挫折感を味わい、空しさを味わい、冷静さを取り戻した時、人は悪感情の愚かさに気付かされます。また 肉親との別れや恋人との別れ、夫婦間の情愛や親子間の情愛などから生まれる苦悩は、人に正しい感情の持ち方や愛情の持ち方を教えます。

最後の想念のコントロールは、人生の総仕上げといったところでしょうか。私たちが演じてきたドラマの内容は、総じて苦しみや悲しみの連続であったといっても過言ではないでしょう。そのために、何かといえ

ば苦い体験が思い出され、ネガティブな想いに傾いてしまいます。そのネガティブな想いが二重の苦しみを生み出しているわけですが、どんな体験も無駄にはなっておらず、なぜ？ なぜ？ の疑問が、苦しみから抜け出すコツを覚えさせるのです。すなわち、想念のコントロールの重要性を認識させるのです。想念のコントロールができれば、一夜にして理想世界がやってくるといわれるくらい、想念のコントロールはとても大切なことなのです。

このように人生体験は、この世のアカを付ける一方、消してもくれるのです。アカを多くつけて帰るか、少なくて帰るかは、ひとえに本人の自覚と努力次第というわけです。

それにしても宇宙はうまくできているもので、絶対世界の素晴しさは、相対世界の苦しい体験無しには分らないのです。例えば、貧しい体験あればこそ、豊かさの有り難味が分かるのです。不幸せな体験あればこそ、幸せの有り難味が分かるのです。でも、一極に立ってはいは分かりません。分かるのは、両極を体験しどちらにも偏らない中心点に立った時です。だから、体験ほど大切なことはないのです。

○体験なしに智恵は育たない！

知識をどんなに貪っても、体験を嫌っていたのでは、知恵を育てることはできません。頭でっかちでは、智恵は育たないのです。どうですか、知識だけで泳げるようになりますか、滑れるようになりますか、乗れるようになりますか、なれないはずです。体験してこそ、智恵の花が咲くのです。求道者の中に知識に溺れている人が結構見られます。彼らは知識を振りかざし論争し合っていますが、それは絵に描いたボタモチを食べ合っているようなものです。そんなボタモチを食べ合ってたって、栄養になるわけがありません。

もともとこの宇宙には、全体としての智恵があるだけで、小分けされた智恵があるわけではないのです。個々の体験を通して納得した時、知識が小分けされた智恵に変わります。だから私は若い求道者というのは、今あなた達がやらねばならないのは、出来るだけ多く体験をすることですよ。若い時多く体験した者は、晩年真理に出会っても即座に知識を智恵に変えることができますが、体験を嫌っていた者は、どんなに若い時から真理に出会っても、知識を智恵に変えることはできないのです。

一番良いのは、人生体験をしながら真理を追求することです。生活を維持しながら真理を追求するのは大変かも知れませんが、それができたら、後々間違いなく果実を手にすることが出来ます。だから私は若い求道者ということです。真理を追求することは大変重要ですが、人生体験はもっと重要ですよ。

【コラム】時を生かさう！

体験知とは、体験によって人生の意味を知ることです。その体験に、善し悪しのレベルは貼ってありません。だから、体験に優劣を付けてはならないのです。昨日のつまらない体験も、今日の素晴らしい体験も、同じ価値ある体験です。その一つ一つの体験は、一歩一歩頂上を目指す歩に等しく、必ず目的地に近づけてくれます。カラ（空）歩きがないように、カラ（空）体験もないのです。歩いた分だけ、体験した分だけ、必ず成長します。だから、時間を無駄にしないでくありません。

時は歩です。・・・時間は空間です。

歩は時です。・・・空間は時間です。

今歩を踏めば、今の時が生きてくるのです。今歩を踏まなければ、今の時を殺してしまうのです。時は生き物です。その時を殺してはなりません。時を生かせば、時はあなたを大きくしてくれます。時を生かせば、時はあなたの人生を実りあるものにしてくれます。

時は叫んでいます。・・・私を上手に使って下さいと。。。。

時は訴えています。・・・私を上手に生かして下さいと。。。。

(6) 生命に生きる

生命に生きている者は賢者です。人間に生きている者は愚者です。なぜなら、生命に生きている者は真実に生きていますが、人間に生きている者は非真実に生きているからです。ないものに生きて、どうして幸せになれるでしょうか。

○生命に生きる者は賢者である。

人に生きる者は偽りをいいます。罪を犯します。だからこの世では、法律や罰則が欠かせないのです。生命に生きる者は（良心に生きる者）偽りをいいません。罪を犯しません。人の目の届かない所でも、決して曲った行動を取ることはありません。生命に生きる者は、悪心が持てないからです。私はその原因が波動にあることを知りました。

波動は実に正直です。精妙な波動は精妙な波動と共鳴し合い、鈍重な波動は鈍重な波動と共鳴し合うのです。生命に生きる者は精妙な波動を持っていますので、低い波動とは同調できないのです。もし同調しようとすれば、自分の波動を落とさなくてはなりませんから苦しくなるのです。人に生きる者は、波動のギャッ

プが少ないためあまり苦しまないのです。でも本性は生命ですから、やはり心のどこかで苦しんでいるのです。

生命に生きるようになると、あまり物を必要としません。お金もあまりいりません。ましてや地位や権力が欲しいなどとこれポッチも思いません。なぜでしょう？ 生命にはすべてのものが与えられているからです。また生命のもつとうは、中庸・均一・平等・バランスに生きることでですから、偽りや偏りを嫌うのです。欲は偏りですから、生命に生きるようになると欲が持てなくなるのです。これは意識してそうなるのではなく、自然とそうなるのです。だから生命に目覚めた人は無欲になり、ゆったりとした生き方をするようになるのです。

○生命に生きるとは真実に生きること

「生命」という字は、「命」が「生」きると書きます。この文字は、「生」きているのは「命」ですよ、といっているのです。ではなぜ、命は生きているのでしょうか。それは、命には意識があるからです。意識のあることが命の証しなのです。だから私たちは、意識に生きなければなりません。つまり、生命に生きなければなりません。

さて、「今私たちは生きていますと信じていますが、本当に生きていますのでしょうか。」一体生きるとは、どういふことなのでしょう。生きるには、二つの意味合いがあります。一つは意識（生命）を自分として生きる意味合い、もう一つは今の今に生きる意味合いです。

意識を自分として生きる意味合いとはこういうことです。

世の中には形が生きているとされている人が大半ですが、形は生きておりません。生きているのは形ではなく意識です。この宇宙の実体は、形を持たないのが正常で、形を持つのは異常なのです。なぜならこの表現宇宙は、意識によって生み出された映像（形）の世界だからです。映された映像は仮相で、映し出している意識が実相なのです。ですから形（ボディ）を自分として生きている人は、本当に生きているとはいえないのです。

形を持って生きるのと、形を持たないで生きるのと、何が違うのでしょうか。もし形が生きているというなら、植物人間も生きていますといわねばなりません。ものを見ず、ものを聞かず、ものをいわない植物人間が、果たして生きているといえるのでしょうか。どうも私たちは長いこと形の中で生きてきたために、形がなくては生きていると思えなくなつたようです。意識こそ絶対実在なのです。意識こそ主人なのです。といつても、形がなくては生きているとはいえません。なぜなら、どんな素晴らしい絵の構想を持っていても、描いて見

せなければ意味がないからです。表現されない意識は有っても無きに等しいのです。意識は表現してこそ、自分が誇示できるのです。

二つ目の今の今に生きる意味合いとは、今に生きることが真実に生きることになるという意味合いです。いまだかつて過去や未来があった試しがありません。永遠に続く、今・今・今があるだけです。その今を生命に生きることを、真実に生きるということです。過去を懐かしがったり悔しがったりしている人や、未来を憂いたり心配したりしている人は、真実に生きてはいえませんが、また、今この世の雑事に生きています。人も、真実に生きてはいえませんが、過去に生き、未来に生き、今雑事に生きています。今を逸している人は、今を逸しているのです。今を逸しているということは、今に死んでいるということです。だから今を逸している人は、死人といわれても仕方がないのです。

今私たちが見聞きしているもので、真実なるものが一つだけあってあるでしょうか。一瞬一瞬状況が変わり、一刻一刻姿を変えてゆく幻ばかりです。このボディーさえ消えてなくなる幻なのです。そんな幻を追いかけてどうして生きていけるといえるのでしょうか。人間が苦しむのは、今真実に生きていないからです。もし今真実に生きることができれば、過去にも、未来にも、多くの実りをもたらしてくれるでしょう。なぜなら、今真実に生きれば過去を正しく生きたことになり、未来も正しく生きられるようになるからです。

今正しく生きられるのは、過去真実に生きた結果です。未来を正しく生きられるのは、今真実に生きた結果です。過去真実に生きずして、どうして今正しく生きられましょうか。今真実に生きずして、どうして未来を正しく生きられましょうか。過去過ちを犯していた者が、今を正しく生きられるはずがないし、今過ちを犯している者が、未来を正しく生きられるはずもないのです。あくまでも原因あつての結果です。

例えば、ここに正常な麦の刈り取りをしている農夫と、毒麦の刈り取りをしている農夫がいたとしましょう。正常な麦の刈り取りをしている農夫は、良い種を撒いた結果として今豊穰を手に入れています。この農夫は今後も良い種を撒くでしょうから、未来の豊穰は約束されたも同然です。一方、毒麦を刈り取っている農夫も、悪い種を撒いた結果として今毒麦を手に入れています。もしこの農夫が、何の疑問も持たず同じ種を撒くなら、再び毒麦を刈り取らねばならないでしょう。しかし、原因に気づき良い種を撒くなら、未来の豊穰は約束されるはずですよ。

過去は変えられないと私たちは思っていますが、今どう生きるかで過去を変えることができます。つまり農夫が良い種を撒こうと気付いたのは、過去の学びによるものですから、それは過去を変えたことなのです。今が変われば未来も変わります。だから今真実に生きれば、過去を正当化させ、未来も正当化さ

せることができるわけです。私たちが使える時間は今の今です。今の中にしか真実はないのです。その今しか使えない時間を、私たちはどのように使っているでしょうか。

このように、ポディーを自分として生きている人、あるいは今に生きていない人は、本当に生きているとはいえないのです。そう考えると、本当に生きている人の何と少ないことか。殆どの人は幻に生きながら本当に生きていると信じているのです。冒頭に、「今私たちは生きていると信じていますが、本当に生きているのでしょうか」、と疑問符を投げかけたのは、このことをいっていたのです。今生命に生きている人は本当に生きていることになるし、今この世の雑事に生きている人は空しい人生を送っていることになるのです。

○生命と物質をバランス良く生きる

この表現宇宙は生命の表現の場としてありますので、物質と生命をバランス良く生きれば幸せになれるようになっております。しかし人類は、今多くの苦しみを抱えております。それは余りにも物質に偏った生き方をしているからです。これを打開する方法は一つ、生命（陽）を意識する時間を増やし、物質（陰）を意識する時間を減らすことです。つまり、できるだけ生命を想って生きることです。今お客さんと話しているのは生命である。今仕事をしているのは生命である。今ボールを蹴っているのは生命である。

何をやっていても、生命がやっていると思つて下さい。半分でもそう思えたら、何割も力が増し、何割も智恵が増し、何割も愛が増します。もし心の底から思えたら、もうあなたに不可能なことはないでしょう。さあ、二十四時間の内せめて四時間でも良いから、生命を意識して生きましよう。意識すること、それが瞑想です。四時間瞑想すれば、寝ている八時間と合わせると、十二時間この世の雑事から離れられますので、それだけ迷う時間が少なくなるのです。

瞑想が苦手という人は、実生活の中でやってください。つまり、何を見ても、何を聞いても、何をやっていても、生命が見ている、生命が聞いている、生命がやっていると思いつながら生きることです。その時その人は、瞑想したことになるのです。瞑想とは、生命を意識することなのです。目をつぶってやることだけが、瞑想でないことを知つて下さい。人間を含めどんな物も生命の現れです。この宇宙に生命でない物は、一つもないのです。だから、何を見ても生命と思つて生きることです。

○波動を落とさず現実社会をどう生きる？

人生の目的は、本当の自分を知るためであるといつても、肉体を持っている限り世間を無視して生きるわけにはいきません。家族との触れ合いも、近所付き合いも、友達付き合いも、職場での付き合いも、しなく

てはなりません。その中で波動を落さず生きるのは至難の業です。といって現実逃避するわけにもいきませんから、これは何としても解決しなければならぬ問題です。では現実逃避せず、どうしたら波動を落とさず生きられるか考えてみましょう。

一つの方法は、嫌なことや煩わしいことから逃げないことです。

この社会で生きていけば、嫌なことや煩わしいことに直面するものですが、その時逃げるのではなく果敢に挑戦することです。そうすれば、あなたの生命核（魂）は間違いなく増えます。なぜ増えるかといいますと、嫌なことや煩わしいことに挑むとき強い決意が必要になり、その決意が生命核を増やすからです。私たちの魂は、嫌なことに挑戦すればするほど増える仕組みになっています。生命核が増えれば波動が上がりますから、現実社会で波動を落とさず生きられるのです。

もう一つの方法は、何事も良く受け取り、自分の屋敷（心）を汚さないようにすることです。世の中には、人のいうことを悪く受け取り、自分で自分の心を汚している人がおりますが、その人は自分の屋敷の管理の下手な人です。他人が自分の心を汚すことはありません。自分が悪く受け取るから汚すのです。どうか心の管理をしっかりやって下さい。そうすれば、波動を落さず生きられます。

(7) 正しい心の使い方覚えよう

「吾は光なり！」と思つたら、ただでは済みません。それなりの変化が起きます。なぜなら、想念はものを具現する力を持っているからです。どのような変化がもたらされるかは、思つた人の理解力と念の強さによります。これは良きにつけ、悪しきにつけです。それほど私たちの想念は、偉大な力を秘めているのです。

○正しい心の使い方

心とは何でしょうか。心とは思いの根源です。思うには力がいきますから、心はエネルギーでもあるわけです。だから思力とも、念力ともいふのです。私たちは人の数だけ心があると思つていますが、心は宇宙に一つしかないのです。「宇宙心」、それがこの宇宙に唯一存在する心です。その心は一つでありながら、無限の表現ができるのです。でも一つしかない心が、どうして無限の表現できるのでしょうか。こういうことをイメージしてみてください。

ここに一つの酒樽があるとします。その酒樽に一つの蛇口しかない場合は、一つの蛇口からしか酒を注ぐことができません。でもたくさんの蛇口がある場合は、蛇口の数だけ酒を注ぐことができます。このたくさ

んの蛇口に当たるのが、人間の心なのです。一つの蛇口しかない場合には、一つの表現（味）しかできませんが、たくさんの蛇口があればたくさんの表現ができるのです。つまり、蛇口の数だけ個性を持った表現（個性を持った味）ができるのです。蛇口に個性が生まれるのは、それぞれの蛇口に五感が備わっているからです。このように一つしかない宇宙心は、人間（蛇口）の心を通すことによって、たくさんの心の表現ができるわけです。

このような例え方もあります。

大海には無数の波頭（人間）が浮き沈みしております。その波頭が自分だと思えば、一つの波頭としての心を作るため、波頭の数だけ心が有るように見えるのです。しかし大海だと思えば、大海としての心しか作らないため、一つの心しか生まれないのです。本当は大海なのに、波頭が「私だ！ あなただ！」と別けることによって、個別の心を作ってしまうのです。

波頭が大海に沈めば一つになります。私たちも宇宙心に沈めば一つになるのです。波頭と大海の境目がないように、宇宙心と個人の心にも境目はないのです。境目が無いということは、宇宙心と個人の心は同一の心であるということです。波頭と大海は同じですから、当然といえば当然の話です。ただ、どれほど宇宙心を自覚しているかによって、宇宙心に近い表現ができるかできないか決まってくるだけです。つまり、個人

と思えば個人の心の表現をするし、宇宙と思えば宇宙の心の表現をするというわけです。同様に蛇口（人間）が、同じ酒樽（宇宙心）の蛇口だと思えば同じ味の酒を出すけれど、別々な酒樽の蛇口（人間）だと思えば違った味の酒を出すというわけです。今人間が衝突し合っているのは、一人ひとりが違う酒樽の蛇口だと思っ
ているからです。

○心の特性

心の特性の一つは、心には自由性があるという点です。心は時空を超越しているのです。ですから、一瞬のうちに宇宙の果てまで飛ばすことができれば、小さなボディーの中に留めることもできるのです。また心は大きく広く使うこともできれば、小さく狭く使うこともできます。

ある川に荷車がやっと一台通れるほどの狭い橋が架かっていました。その橋の上をAさんが荷車を引いて渡っておりまして。途中まで来たところで、向こうから一台の荷車がやってくるのに気づきます。相手も気づき立ち止まります。どちらかが譲らねば渡れません。でも同じ距離だけ来ているので、どちら譲りたくありません。しばらく無言のにらみあいが続きます。やがてAさんが苛立つように口を開きました。「私はこの荷を時間までに、届けねばならないのだ、すまないが私を先に通してくれないか」しかし相手も、「い

や、私もこの荷を時間まで届けなければならぬのだ、私を先に通してほしい！」といい返します。金銭が絡んでいるだけにどちらも譲れません。

これを解決するには、大きな心が必要です。もし、心を小さく使ったらどうなるでしょうか。多分、喧嘩になってしまふでしょう。この世の争いの大半は、心を小さく使うことによって起きています。あなたがあれば、立場の違いや利害の違いが生まれますから、譲る心は生まれません。でも、あなたは私であり私はあなたであると思えば、あなたの得は私の得はあなたの得になるわけです。どちらが得しても良いと思えるはずですよ。

もう一つ、心は思い癖が付きやすいという、非常に厄介な特性を持っています。例えば心配性の人は、心配性の癖が心にシミついてなかなか消えないのです。これを業といっておりますが、一旦付けた心の癖を取るには大変な苦勞がいるのです。なぜ思い癖ができるかといいますと、思いにも慣性の法則が働くからです。私たちが今人間とと思っているのも、その慣性の法則のせいです。一種の催眠術にかかっているのです。この癖は死後の世界まで持ち越され、さらに次生にまで持ち越されるといふ悪循環を生み出すのです。良く仏教で成仏とか不成仏とかいいますが、人間と思つたままこの世を去ると、不成仏となつてこの世とあの世を輪

廻せねばならないのです。だから生きている時に、心の癖を取っておく必要があるわけです。このように思い癖は、私たちの人生に大変な影響を及ぼしているのです。

心の最大の特性は、何でも生み出す力を持っている点です。心はエネルギーの増幅器であり、物を具現する製造機でもあるのです。ある人が、こんなことをいっていました。どんな高級料理よりも母が握ってくれたオニギリの方がおいしいと……。私も同感です。なぜおいしいかといいますと、それは母の心がこもっているからです。コンビニのオニギリがあまりおいしくないのは、握っているのは心のない機械だからです。例えば人が握っていたとしても、商売心（儲け心）で握っていたのでは、おいしいわけがありません。

このように、どんな思いを持つかで、影響がまるで違ってくるのです。良く思えば良い影響が、悪く思えば悪い影響が……。それも強く思えば強く……。弱く思えば弱く……。心はもろ刃の剣のようなものなのです。私たちは、最良の武器と最悪の武器を持たされているというわけです。だから、よほど注意して使わねばならないのです。

利口な人は心の特性を上手に利用します。例えば朝家を出たとたん石に躓いて転んだとします。その時誰もが、朝から縁起が悪いと腹を立てるでしょう。でも待てよ？ 転んだおかげで車に跳ねられずに済んだ

のかも知れない、とポジティブに受け取れば腹を立てずに済むのです。事実石に躓かなかつたら、そうなっていたかも知れないのです。

最近いじめが社会問題になっていますが、いじめは子供社会にだけあるのではなく、社会のいたるところにあるのです。それを気にしていたのでは、この社会で生きてゆくことはできません。恐れたり逃げたりするのではなく、いじめを逆手に取って自分の成長につなげることが大切なのです。いじめられることよって自分が強くなれると思えば、相手を許せるし感謝もできるはずです。例え耐え切れないいじめを受けた場合でも、「いじめられるには、いじめられるだけの原因があるはずである。今生身に覚えがなくても、過去世で原因を作っていたのかも知れない。今自分をいじめている相手は、過去の自分の姿なのかもしれない、ならば相手を恨むのではなく、気付かせてくれたことに感謝しよう」とポジティブに受け取り、心からその人に詫げれば、自分を納得させることができるのです。詫びるといっても、わざわざその人の所に行く必要はありません。心の中で詫げれば良いのです。そうすれば、いじめはピタリと止まるでしょう。ただし、あまり期待してはなりません。期待は強要することになり、欲につながるからです。あくまでも心から詫びることを目的として下さい。

世の中にはいじめられ自殺する人がおりますが、自殺しても苦しみから逃れられるものではありません。逃げるのではなく、いじめられる原因を見つけ出し、その原因を断ち切ることが肝心なのです。私たちは今、心の使い方次第で凶にも吉にもなることを、試練を通して勉強させられています。

○自由な思いには責任がついてくる

世の中には、思いたい放題のことをしている人がおりますが、心の特性を考えるとこれほど恐ろしいことはありません。私たちは何でも思える特権を持たされていると同時に、責任も持たされているのです。その責任は苦しみとして、悲しみとして、痛みとして、自分が背負わねばならないのです。自由な思いには責任が伴うということです。

先日ある人から、こんな質問を受けました。

「私は今日まで、世のため人のために何もしてきませんでした。これからでも何かしたいと思うのですが、私に何ができるでしょうか？」と・・・。

私は彼に、

「世のため人のためになりたいなら、何も思わないことです」と答えました。

彼は不思議な顔をして、

「何も思わないことが、どうして世のため人のためになるのですか」と問い返してきました。

「あなたは普段、良い想いと悪い想いのどちらを多く使っていますか」と質問すると、彼はすぐに理解できたとようで、笑いながらこういいました。

「悪い想いの方が多いようです。分かりました。では、できるだけ何も思わないようにします。」

私は彼の誠実さを感じたので、

「何も思わないのは苦しいでしょうから、うれしいとか！ 楽しいとか！ ありがとうとか！ 良い想いを持つたらどうでしょう。さらに、私は愛である！ 宇宙である！ 生命である！ と思えたら最高です。決してネガティブな想いを持たないことです。」と彼に助言しました。

私たちは、同時に二つの想いを持つことはできないのです。つまり悪い想いも持ち、良い想いも持つことはできないのです。それなら、良い想いを持った方が利口です。なぜなら、良い想いを持ってば世に貢献できるからです。これはボランティアをやるより、よほど世のため人のためになっているのです。ボランティアをやりながら一方で悪想念を放っていたのでは、何のためのボランティアか分かりません。

良い想いを持っているときは、「白い息」(光の息)を吐いているのです。悪い想いを持っているときは、「黒い息」(毒の息)を吐いているのです。だから悪い想いを持っている人は災い人です。良い想いを持っている人は幸い人です。心は宇宙に一つしかないわけですから、自分の心を汚せば他人を汚し宇宙を汚し、自分の心を清めれば他人を清め宇宙を清めるのは当然なのです。だから、決して悪い想いは持たないことです。どうか幸い人になるよう努めて下さい。

○心を上手に使おう！

結果「現象」を生み出しているのは、原因である意識・思い・心です。ですから心を上手に使えばみな幸せになれるのに、心の使い方が下手なため多くの人が不幸せになっているのです。

私は以前、後頭部に傷を負ったことがありました。治りかけてカサブタができたのですが、どうもそのカサブタが気になるのです。それ以来、カサブタがなくならないのです。一種の皮膚病になってしまったようです。真理をかじり始めたころ、「意識がものをつくる」と書かれた本を見て、ハッと気づいたのです。もしかしたら、気にしているからなくならないのではないかと……。そこで私は、気にしないよう心がけたのです。気にしなくなって三週間ほどたった頃、フト頭に手をやると、なんとカサブタがなくなっているでは

ありませんか。当時 私の母も首筋に何かできており、毎日軟膏を塗っていました。そこで 私の体験を話し、意識しないよう進言したのです。何週間かたったある日、フト母の首筋を見るときれいに治っているのです。母は大感激でした。悪に抗するなかれとは、「悪にエネルギーを与えるな！ 相手にするな！」ということなのです。

こんな嘘のような本当の話もあります。

ある人が医者から胃ガンの宣告を受けたのです。当人が悩んだのはいうまでもありません。でも三週間後、それが誤りだったことが分かったのです。どうやら、他人のレントゲン写真と取り違えていたらしいのです。告げられた本人はホッとしましたが、どうも胃の具合が良くないのです。そこで改めてレントゲン検査したところ、何と！ 以前レントゲン写真に無かった病巣が写っているではありませんか。それも、見せられた写真と同じ場所にできているのです。たった三週間で、自分で病気を作ってしまったというわけです。きっかけとなったのは誤報ですが、病気を作ったのは自分の心です。肉体は生きていないのですから、肉体が勝手に悪くなるはずはないのです。三週間悩んだ自分の心が病を作ったのです。

ガン検診は、ガンを恐れている人達のことです。だからガン検診を受けている人ほど、ガンになる確率が高いのです。意識しなければなることはないのですから、意識しないことです。「寝ている子を起さないことです。」

私たちが苦しむのは、嫌なことを自分の意識に入れるからです。これはちょうど、おいしい食べ物に誘われて食べ、腹を壊すようなものです。食べなければ腹を壊すことはないのですから、食べないことです。

ここで述べたことは、決して現代社会では珍しいことではありません。病気の情報・薬の情報・食療法の情報・ガン検査の情報・紫外線情報・花粉情報など、マスコミは良かれと思ってやっているのですが、これは心の法則を知らない無知な者のする所業です。だからといって、マスコミを責めるわけにはゆきません。毒を食べ腹を壊したのは、私たちなのですからね……。意識すれば何でも与えられるのが宇宙の法則ですから、良いことだけを意識しようではありませんか。

○何よりも大切なのは、心

この世の中には、剣道・柔道・花道・茶道・書道など、極めるべき道が多々ありますが、どんな道も心の鍛錬が最終目標になるようで、宮本武蔵も晩年の鍛錬に励んだといわれます。ではなぜ、心の鍛錬が最終

目標になるのでしょうか。それは、技の鍛錬は物理法則内が限度ですが、心の鍛錬には限度がないからです。限度のない心の鍛錬こそ、究極の道につながっているのです。究極の道、すなわち悟りの道です。

心は智恵の源であり、創造力の源です。心を上手に使えば、成せぬことは何もないのです。だから私はいうのです。人道も社会道も同じ道ならば、心を整えることに重点を置くべきだと……。心が整えば、黙っていても社会は良くなります。母の握ったオニギリがどんな高級料理よりもおいしいように、心を前面に打ち出した社会も、きっと素晴らしい社会になるでしょう。

私たちは表現された物に価値を見出そうとしますが、それは表現物を通して語りかけた心の表現であって、表現物その物が語りかけているわけではないのです。心を通さなければ何の価値も何の感動も生まないのは、表現された物が生きているのではなく、表現された物の中に表現者である心が生きているからです。どうか表現者を見て下さい。真実を見て下さい。心を見て下さい。

○心の乱れは技の乱れ

人間はあまり心を重要視しませんが、それは心が見えないからです。しかし見えない心が、形の世界に大きな影響を与えているのです。それを端的に現わしているのがスポーツです。多くのアスリートは、技を磨

くこと（体力強化を含め）に時間を費やしています。でも私は、技を磨く時間と心を磨く時間を同じにすべきたと考えています。なぜなら、技の乱れは心の乱れから来るからです。よくプレッシャーに負け力を出せない人がいますが、それは自分の心がコントロールできないからです。余計なことを考え、自分で自分の心を乱しているのです。よく無心になれとか、リラクセスせよとかいわれますが、人間は余計なことを考えれば、どうしても心を乱してしまうものなのです。

有名になった途端成績が下るアスリートがおりますが、これは周りからチャホヤされ雑念を多く抱えるようになったからです。例えば、報道関係者と多く接するようになった、コマーシャルに出演するようになった、様々な行事に引っ張りだこになるなど、多く雑念を持つようになると、どうしても心を乱してしまうのです。良い成績を長く保ちたいなら、できるだけ周囲との関係を断つことです。勿論、周囲との関係を保ちながら良い成績を残せるなら、それに越したことはありませんが、そうはいかないのが人間の心です。それでも良い成績を残したいなら、技を磨く時間と心を磨く時間を同じくすることです。

心を磨くとは、集中力を養う鍛錬のことです。心を制御する鍛錬のことです。瞑想は、それを成し遂げる最も手短な方法です。もし瞑想によって心を制御できたら、驚くほどの成績を残すことができるでしょう。どうか「技の乱れは心の乱れ」という言葉を忘れないで下さい。

たとえ身は汚しても、心まで汚してはならない！ なぜなら身は一時の自分であるが、心は永遠の自分だからである。

(8) 完全な思いの中に生きよう！

宇宙は完全です。宇宙生命は完全です。その完全から生まれた人間が不完全であるはずがありません。不完全にしているのは、人間の不完全な（ネガティブな）思いです。戦争も、災害も、事件も、事故も、病も、みな人間の不完全な思いが生み出した結果なのです。

○人の思いが不幸（不完全）を作っている

外なるものは内なるものの反映です。外なるものが勝手に一人歩きし、世界を作ったり壊したりしているのではないのです。体が勝手に動くことがないように、すべて内なる思いの結果として、外なる働きがあるのです。だから人の思いが健全であれば、戦争や、事故や、災害や、病気など、あり得ないのです。私たちはこれまで、外から災いを受けてきたと思ってきました。あんなものを食べさせられたから、あの人がこん

なことをしたから、あの虫が、あの犬が、あのライバルが、あの企業が、あの国が、あの災害が、といった具合に、すべて外側に責任をかぶせてきたのです。でも責任の所在は、みな自分の思いにあったのです。すなわち自分の思いが原因を作り、その結果に苦しんできたのが私たちなのです。だから、決して自分の不幸を他人のせいにしてはならないのです。

先日こんな話を聞きました。

同じ水を入れた二つのコップを用意し、一つのコップには「バカ野郎！」と書いた紙を貼り、もう一つのコップには「ありがとう！」という紙を貼ったところ、「バカ野郎！」と書いた水の方は数日で腐りましたが、「ありがとう！」と書いた水の方は倍以上も腐らなかったといえます。こんな貼り紙一つでさえ物に影響を与えるのですから、私たちの日々の思いがどれほど人生に影響を与えていることか……。どうか人生を左右しているのは、「自分の思いである！」ということに気付いて下さい。

○内側の思いをクリーンにしよう！

この内側の思いとは、いうまでもなく自分の心です。ですから内側の思いをクリーンにするという意味は、自分の心をクリーンにするという意味になります。このクリーンな思いの中身の一つは、「良い思い・楽し

いたい・明るい思い・建設的な思い・夢と希望にあふれる思い」を持つこと。もう一つは「私は宇宙生命である！」という思いを持つことです。この二つの思いは、光（エネルギー）を呼び込みますので、思っている本人は勿論、周囲の人やモノや地球環境までもクリーンにしてくれるのです。

世の中には散々悪い思いを持つ人がおりますが、そのような人は周囲に毒を撒き散らしている大罪人です。なぜなら、悪い思いを持っている人は毒の息（黒い息）を吐いているからです。目には見えませんが、この毒の息が暗い社会にしているのです。このような罪を犯す人が多いのは、自分の悪想念が周りに悪影響を与えていることを知らないからです。

- ・ 肉体を動かしているのは何だと思えますか。
- ・ 家庭を動かしているのは何だと思えますか。
- ・ 社会を動かしているのは何だと思えますか。
- ・ 国を動かしているのは何だと思えますか。
- ・ 世界を動かしているのは何だと思えますか。

みな人の思いではありませんか。その思いが汚れていては、肉体も、家庭も、社会も、国も、世界も、汚れるのは当然です。人の悪想念が不幸の要因であることに気付かない限り、地球に真の平和は訪れません。

どうか、

- ・自分の不幸を人のせいにしないで下さい。
- ・家族の不幸を人のせいにしないで下さい。
- ・社会の不幸を人のせいにしないで下さい。
- ・国の不幸を人のせいにしないで下さい。
- ・世界の不幸を人のせいにしないで下さい。

地球を平和な星にしたいなら、まず自分の思いをクリーンにすることです。内側の思いをクリーンにすれば、間違いなく外側もクリーンになります。ぜひ、クリーンな思いを持って下さい。

○気付いていない思いの大切さ

人間は目に見える物しか信じませんが、本当に有るのは目に見えないモノなのです。本当に有る見えないモノとは「思い・意識」です。思いが物を生み、動かし、働かせているのです。もろもろの出来事は、みな思いが関係しているのです。でも人間は、そのことにまだ気付いていないのです。つまり、

・不幸がどこから来ているのか。災厄がどこから来ているのか。まだ気付いていないのです。

・人間の想念が苦しみや悲しみを作っていることに、まだ気付いていないのです。

・地球上の災厄のすべてが、人類の悪想念によって引き起こされていることに、まだ気付いていないのです。

思いは目に見えませんが、思いがやっていると信じられないかも知れませんが、あなたはこの本を見たいと思ひ、肉体が見ているではありませんか。旅行に行きたいと思ひ、肉体が旅行に行くのではありませんか。肉体が勝手に本を読んだり、旅行に行ったりするわけがないのです。

次のようなことも、人間の思いによるものです。

本来、動植物の世界に今のような寿命はありません。人間の限定意識が、今のような寿命を作ってしまったのです。猫や犬が糖尿病になるのも、歯槽膿漏になるのも、人間の意識の移入によるものです。人間の限定意識が、自然界に様々な制限や制約を作っているのです。もし人間が限定意識を捨てたら、自然の法則に則った正しい姿に戻りましょう。

私は想念が物質に与える影響を、国策を持って研究してもらいたいと思っています。つまり想念の働きを科学的に立証すること、因果の法則を科学的に立証することです。想念の働きを科学的に研究してゆけば、想念が物質に与える影響の重大さが解ってくるはずで、また時間をかけ統計を取ってゆけば、幸・不幸の

因果関係も立証されるはずですが、もし因果関係が立証されたら、法を犯す者はいなくなるでしょうから、理想世界も夢でなくなるでしょう。

人間がクリーンな思いを持てば、人間社会は勿論、自然界も地球もクリーンになります。ぜひ国を挙げて、いや世界を挙げて、想念の研究に取り組んで欲しいと思います。

○完全なる思いの中に生きるとは？

この宇宙のどこかに、完全な世界（理想の世界）があるわけではありません。またこの宇宙のどこかに、不完全な世界（地獄の世界）があるわけでもありません。人間の完全な思いが完全な世界を作り出し、不完全な思いが不完全な世界を作り出しているだけです。幸・不幸も同様に、人間の完全な思いが幸せを生み出し、不完全な思いが不幸を生み出しているだけです。

完全な宇宙意識は、完全な思いの中で究極の幸せを掴むことができますが、不完全な人間意識は、不完全な思いの中で一時の幸せしか掴めないのです。なぜなら、完全な宇宙意識は永遠の生命を意識するけれど、不完全な人間意識は無常の物しか意識しないからです。どうでしょう？ なくなる物を意識するのと、なくなるものを意識するのと、どちらが心穏やかになれますか。なくなるものですね。なぜなら、なく

なる物を意識しても、幻や誤解や無知しか得られないけれど、なくならないものを意識すれば、真実の理解や智恵が得られるからです。だから私は、物質を意識するのではなく、生命を意識して欲しいと願うわけです。

・生命を意識している時は、完全な思いの中にいるのです。

・物質を意識している時は、不完全な思いの中にいるのです。

・ポジティブな想いを持っている時は、完全な思いの中にいるのです。

・ネガティブな想いを持っている時は、不完全な思いの中にいるのです。

完全な世界を作るか不完全な世界を作るかは、私たちが何を意識するかで決まるのです。どうか永遠なる生命に意識を留めて下さい。そして常に、ポジティブに、前向きに、建設的に生きて下さい。それが、完全なる思いの中に生きるという意味なのです。

(9) 愛を育もう！

愛はバランスです。そこに入れば、どんな汚れも、どんな悪も、どんな苦しみも、どんな悲しみも、解消されます。愛は毒消しの役割を果たしているのです。宇宙は愛の海ですから、本来そこには美しいもの、清いもの、完全なるものしかないのです。なのに私たちはどうして、不自由で、不浄で、不完全なのでしょう。いいえ、そう見えているだけです。私たちはもともと美しいのです。清いのです。自由なのです。完全なのです。

○愛はバランス

一般的にいわれている愛は、夫婦仲良くとか、兄弟仲良くとか、隣人と仲良くとか、狭い愛を指しているようですが、勿論それも愛には違いありませんが、本当の愛は「陰・陽」のバランスを取る愛のことなのです。なぜなら、この宇宙に存在するすべての物は、陰と陽のバランスから生れた愛の結晶だからです。しかし人間は形に囚われ、どうしても自分と違う物を排斥しがります。だから自他の隔たりを大きくし、

小さな愛にしか生きられないのです。陰とは物質のことです。陽とは生命(エネルギー)のことです。だから愛を育むとは、物質と生命を限りなく一つに近づけるといふ意味になります。

原子が陰と陽のバランスの結晶である理由は、一個の原子の中に物質の要素とエネルギーの要素が、バランス良く配合されているからです。その原子によって造られたのが私たちですから、当然愛の結晶といつて良いでしょう。しかし愛の結晶であるためには、その証を立てなくてはなりません。つまり、正しい愛の表現をしなくてはならないのです。

世間には義理人情に厚い人や、家族に対して特別に情愛の深い人がおります。でもこのような人は、小さな愛に生きている人達です。彼らは形ある物を全てと考え、形のない生命を無視していますので、どうしても小さな愛の表現しかできないのです。もし生命を愛するならば、生命はすべてですから、すべての物を等しく愛せるはずなのです。

「物質と生命を限りなく一つに近づけなさい！」という意味は、「物質と生命の隔たりをなくし、どんな人もどんな物も自分の如く愛せるようになりなさい！」という意味です。でも、一挙にそのような愛を育てることは苦しみとなりますから、まずは家族を通して愛を学ぶわけです。

親子の關係も兄弟姉妹の關係も、生まれる前にすでに契約済みです。私の母や父になって互いに学び合ひましょう！ 私の子供になって互いに学び合ひましょう！ 兄弟姉妹となって互いに学び合ひましょう！と誓い合つて出てきた仲間同士です。親も子も兄弟姉妹も、学びの友以外の何者でもありません。親だから兄弟姉妹だから、といった上下關係は一切ないのです。

しかし多くの親は、子供を自分の持ち物のように扱おうとします。親は子を従屬物にしてはならないし、子も親の従屬物になってはいけません。あくまでも親子は對等の關係にあるべきです。本当に子供を愛するなら、あまり付きまとわないことです。子供が困っているからといって、すぐに助け船を出さないことです。子も親の顔色をうかがうのではなく、やりたいことを伸び伸びやることです。

また、親が苦しんでいるからといって、自分まで一緒になって苦しめないことです。情を絡ませ自分まで苦しんでは、家庭全体が暗くなってしまう。苦しみは人を成長させるのですから、今学びの真つ最中だと思つて側で温かく見守つてやつたら良いのです。どうにもならなくなった場合、手を差し伸べて上げたら良いのです。まだ本人が解決できるのに、情に流され助け船を出せば、大切な学びの材料を奪いかねないからです。だから私は、淡白になりなさいということです。薄情になりなさい、といっているわけではありません。甘やかしてはなりませんよ、といっているのです。本当の愛には厳しさが必要です。情を絡ませた生温い愛

では、人を成長させることはできません。情を絡ませず淡泊でありながら、温かい愛を注いであげる、これが本当の愛を育てる秘訣だと思います。

兄弟姉妹の関係も同じです。兄弟姉妹仲良くすることは良いことですが、情に流されお互い学びの材料を摘み取っていないでしょうか。兄や姉が弟や妹をかばう、それを世間は美しい兄弟愛や姉妹愛だといいますが、本当にそうなのか良く考えて見ることです。案外と甘やかしになっている場合が多いのです。兄弟姉妹が互いに切磋琢磨し、厳しい愛を体験し合う、これが真の愛を育む秘訣だと思います。真の愛を育むには、生温い愛であってはならないことです。私たちは家族を通して真の愛を学び、それを隣人愛へ、国家愛へ、人類愛へ、宇宙愛へと拡大してゆかねばなりません。私たちはそのために今奮闘しているのです。繰り返しいいます。本当の愛は、人を成長させる愛でなくてはなりません。すなわち、魂を育てる愛こそが真の愛なのです。この事を強調しておきたいと思います。

○愛の現象

この宇宙は愛に満ち溢れています。その愛に満たされている限り、創造性においては自由です。だからある日突然、今まで無かったバイ菌や病気が発生するのです。ガンや、エイズや、O一五七や、鳥インフルエ

ンザや、狂牛病などがそうです。醜い虫も、厭なバイ菌も、みなそうです。人間はこれを悪と毛嫌いしますが、すべて愛の動機に基づいて生まれた愛の創造物です。愛ゆえに、自分を犠牲にしてまで警告してくれているのです。それが人間には理解できない、だから憎み、恨み、バイ菌を殺そうとする、でも殺せば殺すほど抵抗力は増す。これも愛ゆえの抵抗です。人間が過ちに気付いたら、そんなものは黙っていても消えてゆくのです。

病気の殆どは、人間の過ちに対する警告です。特に、エイズという病気はそうです。もしエイズという病気が無かったら、性の暴走によって人類は滅びていたかも知れません。エイズは愛の使者なのです。蚊もハエもゴキブリも、愛の使者です。「不衛生ですよ！ 手入れを怠っていますよ！ 環境を良くしなさい！」と警告してくれている健気な働きものです。もしこれらの虫がいなかったら、今のような清潔な環境は保たれていなかったでしょう。人間は嫌なものを見せ付けられたり痛い目に遭わなければ気付かないのです。

次のようなことも同じです。

良く人に騙まされたといつて怒る人がおりますが、それは自分の心を見せられている姿なのです。自分の心の中に人を騙したい思いがあるから、そのような事件を呼んだのです。自分の意識の中にもないものは絶対現れません。あくまでも波動の同調によって生まれた愛の現象です。なぜ愛の現象かといえば、不幸はバラ

ンスを取り戻す愛のエネルギーだからです。だからそのような目に遭った人は、「まだ自分の中にそのような思いがあったのだなあ!」と気付いて反省することです。

この宇宙に存在するもので、愛の動機に裏打ちされていないものは何一つ存在しません。必要だから生まれ、必要だから生かされ、必要だから働かされ、必要だから消えてゆくのです。その意味では、今人類が様々な苦しみに喘いでいるのも、愛ゆえの現象だと思つたら良いでしょう。要するに、一生懸命バランスを取り戻そうとしている健気な愛の姿なのです。

人間は馬鹿ではありません。やがて気付きます。小さな愛を育むことに躍起になり、大きな愛を育もうとしなかったことに……。その時、地球に愛の鐘が鳴り響くのです。

○愛を育むとは、生命を意識すること

宇宙愛を育みなさいというと、そのような大きな愛など育めないという人がおりますが、私は何も愛を育みに宇宙に出かけてゆきなさい、といっているわけではありません。一番身近な、自分を、家族を、隣人を、自然を、地球を、愛しなさいといっているのです。なぜなら、私も、あなたも、家族も、隣人も、どんな物も、宇宙の一部であり全体だからです。

・自分を愛している人は、宇宙を愛している人なのです。

・家族を愛している人は、宇宙を愛している人なのです。

・隣人を愛している人は、宇宙を愛している人なのです。

・自然を愛している人は、宇宙を愛している人なのです。

・地球を愛している人は、宇宙を愛している人なのです。

どんなものも宇宙の一部であり、宇宙生命そのものですから、何を愛しても愛を育んでいることになるのです。宇宙愛を育むとはこのように、すべてのものを自分のごとく愛しなさいという意味です。ただし、心から愛せるようになるためには、すべての物の本質が生命であることを知らねばなりません。自分も、家族も、隣人も、どんな物も、みな生命の現れだと心の底で思えなくては、心から愛することができないからです。だから瞑想が必要になるのです。

瞑想し生命に一心集中している時は、真に愛を育んでいる時です。

さあ、

・自分の中に生命を観じて下さい！

・家族の中に生命を観じて下さい！

・隣人の中に生命を観じて下さい！

・どんな物の中にも生命を観じて下さい！

その時あなたは、宇宙を愛していることになるのです。

○自分を愛するとは？

子供を愛している親は、常に子供のことを意識しています。反対に子供を愛していない親は、子供のことを忘れています。自分を愛するのも同じです。自分を愛している人は、常に本当の自分を意識しています。自分を愛していない人は、本当の自分を忘れています。本当の自分は生命ですから、常に生命を意識している人は、自分を愛している人なのです。

世間には、孤独に耐えかねている人達が結構おりますが、その人達は自分と他の物を分けて考えているから寂しいのです。身の回りにペットや植物を置きたくなる心理状態は、物と自分との隔たりを少しでもなくしたい思いから生まれているのです。つまり、好みの物を身近に置くことで、物との隔たりを少しでも埋めたいと思っているのです。

私たちはみな一つなのです。どんな物も、どんな人も、みな自分です。一つのを、二つにも、三つにも分けるから、一つに合わさっていなければ孤独を感じてしまうのです。一つしかないと思えば、常に一緒にいるわけですから、孤独を感じるわけはないのです。どうでしょう？ 自分と他の物を分けている人が、どうして自分を愛しているといえますか。自分と他の物を分けている人は、自分を手放しているわけですから、自分を愛しているわけがないのです。

自分を愛するなら、常に生命の自分を意識して下さい。自分を愛するなら、すべてのものを生命と思い、自分のごとく愛して下さい。本当に自分を愛しているなら、できるはずです。

○与えよ、さらば与えられん！

貰おうとしてばかりいて愛を与えない人に、愛が与えられるわけがありません。愛は出した分与えられるようになっていくのですから、まずは自分の方から愛を与えることです。商店でも、品物を出すからお金が入ってくるのです。息も出すから入ってくるのです。太陽も光を放射し続けているから、いつまでも輝いていられるのです。受動と能動は同時に働いているのです。吸引と放射は同時に働いているのです。この宇宙に一方通行はないのです。自分の働きによって相手が動き、相手の働きによって自分が動くのです。

愛の法則に支配されている宇宙では、どこかに愛の欠如が生じれば必ず豊かな処から愛が流れて行くようになっていきます。だから愛が欲しかったら、まず自分の方から愛を与えて凹を作ることです。そうすれば愛は、凸から凹へ必ず流れて行くでしょう。これが平安を願う宇宙法則の愛の仕組みです。「与えよ！ さらば与えられん！」は、愛の法則そのものなのです。

○人の幸せは、どれほど愛の法則を信じられるかにかかっている

この表現宇宙は、神の愛によって創造された愛の館です。その愛の館は完全ですから、本来そこに不幸や不完全なものがあるはずがないのです。でもどうしたことか、私たちの周りにはたくさんの不幸や不完全があります。なぜでしょうか。それは、神の愛を心から信じられないからです。

自然界を見てください。小鳥は嬉々としてさえずり、子猫はじゃれあい、子犬は所はばからず走り回っています。なぜ彼らは、そのように無邪気でいられるのでしょうか。それは、神の愛を心から信じているからではないでしょうか。そうです。彼らは、生かされるままに生きております。彼らは何が起きようが、良きに計らってくれる神の愛を疑らないのです。人間はどうでしょうか？ 万人が万人、躍起になって保身にかけているではありませんか。神の愛が信じられないから、そのような生き方をするのです。

幼い頃の私を振り返れば、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。その頃の私には、なんの悩みも無かったのです。それは私の心の中に、悪なるものが一つも無かったからです。だから何を見ても、良いものしか見えなかったのです。しかし成長するにつれ、今まで見えなかった悪が見えるようになりました。そこに不信が生まれ疑惑が生まれ、それが恐怖へ心配へと発展し、私の心の中に苦悩が生まれたのです。いつまでも幼子のような心を持っていたら、このような苦悩は生まれなかったでしょうが、周りの環境がそれを許さなかったのです。でも、もし神の愛が信じられたら、このような苦悩は生まれなかったかも知れません。

私たちが苦悩に苛まれるのは、神の愛に対する不信です。雷に打たれるのではないか。交通事故に遭うのではないか。病気になるのではないか。地震で家が潰れるのではないか。そんな心配を抱えていては、平安な心が保たれるわけがありません。さあ、ア리가人の足元で平気で歩くように、トコトン神の愛を信じましょう。神は決して悪いようにはしないのですから・・・。そう信じられたら、もう苦悩は生まれません。どうか神の愛を信じ、今自分がやれることを精いっぱいやって、光の訪れる日を待つて下さい。

愛の人とは、神を心から信じられる人のことです。神にすべてを委ねられる人のことです。そうなれば、病んでも善し！ 傷付いても善し！ 老いても善し！ 死んでも善し！ です。人の幸せは、神の愛をどれだけ信じられるかで決まるのです。

(10) 平和と宗教を考える

平和は作るものではありません。もともと平和だったのです。この宇宙には、平和しか無かったです。その平和を崩したのは誰でしょうか。人間ではありませんか。その平和を崩した人間が、平和を作ろうなど矛盾というものです。

○一人一人の感情が戦争の後押しをしている

戦争は誰が起こしているのでしょうか。政治家だという人もいます。軍人だという人もいます。資本家だという人もいます。宗教家だという人もいます。でも本当は、私たち一人ひとりが起こしているのです。

あなたは、人を憎んだり、恨んだり、怒ったり、騙したり、したことはありませんか。あれが欲しい！これが欲しい！と欲望をあらわにしたことはありませんか。約束事をきちっと守っていましたか。愚痴や不平不満をいりませんでしたか。はつきりいって、その思いと行為が遠因となって戦争は引き起こされているのです。確かに戦争を引き起こす一番近くにいるのは、政治家や軍人かも知れません。しかし、私たち一人ひとりの悪想念や悪感情や強欲が、間接的に銃の引き金を引いているのです。

良く指導者はいいます。「国民の幸せのために、自国の繁栄のために、自国を守るために、やむなく戦争をするのだと・・・。」では、

・あなた自身の生活は質素だろうか。

・国民は贅沢していないだろうか。

・全国民が困窮しているのだろうか。

・本当に切羽詰まっているのだろうか。

・助け合いはし尽くしたのだろうか。

・国民はみな勤勉なのだろうか。

・努力はし尽くしたのだろうか。

・戦争をしたら必ず人は死ぬ、そうまでしてやらねばならない戦争なのだろうか。

ここまで心を広げて、なお戦争しなければならぬとは思えない。そこには、国を守るため！ 国の繁栄のため！ 子孫のため！ と理由を正当化し、国民感情を煽っている国賊や、政商や、あるいは死の商人といわれる族が必ずいるはず。どんなに正当な理由を並べても、所詮国民を悲劇へ引っ張っていることに変わりはないのです。私たちは利権にしがみつき私腹を肥やしている、そんな強欲な権力者の口車に

乗って戦争の後押しをしてはなりません。政治家になって世界平和を訴えるのも結構、反戦運動に情熱を傾けることも結構ですが、最も大切な自分の心が貧しいままで、どうして平和が語れましょうか。

○真の平和運動とは？

平和とは、戦争のない状態をいうのではないのです。一人ひとりの心に、憎しみや、怒りや、欲得がなく
なって、はじめて真の平和といえるのです。世界は一人ひとりの集まりですから、その一人ひとりの心が整
えば、いやでも世界は平和になるのです。その意味では、平和は一人ひとりの心の延長線にあるといえる
でしょう。世界を平和にしたいくば、まず自分の心を平和にすることからはじめるべきです。

では自分の心を平和にするには、どうすれば良いのでしょうか。お金が必要でしょうか。物が必要でしょ
うか。地位や名誉が必要でしょうか。いいえ、本当の自分を知ることが必要です。本当の自分を知れば、こ
の世のどんなものにも執着しなくなるからです。そのような者が一人でも多くなれば、世界は間違いない変
わります。

真の平和運動とは、外に出て旗を振ったり叫んだりすることではなく、一人ひとりが本当の自分を知り、
正しい思いと行為の下に生きることなのです。それは家において、自分の心を見詰めるだけでできるのです。

争いの原因は人の心にあるわけですから、その心を正せば平和になるのは当たり前なのです。上流を清めればわざわざ下流を清める必要がないように、人の心を清めれば黙っていても世界は平和になるのです。

○無知が愚かな戦いを生んでいる

宗教戦争ほど愚かな戦いはありません。なぜなら、本当の自分を知れば宗教などいらなことが分かるからです。本当の自分を知った者が宗教を作るでしょうか。宗教に入るでしょうか。宗教戦争をするでしょうか。知らないから、宗教を作り宗教に入り宗教戦争をするのです。

いまだかつて偉大な覚者が、宗教団体を作ったためしがありません。モーゼも、釈迦も、イエスも、宗教団体は作っていません。本当の自分を知らない偽教祖が、宗教団体を作って信者を惑わし、宗教戦争を起こしているのです。自分を知らないということは、何も知らないということです。そんな無知同士が、何を確信して戦っているのでしょうか。それは単なる迷いの戦いではありませんか。真実を得んがための戦いならやむを得ないでしょう。しかし、何が真実で何が非真実かも分からず戦っているのですよ。これほど愚かな戦いはないではありませんか。勿論、真実を知った者が戦うはずがありません。私が何をいいたいのかかりますか。

A国とB国の境界線上に、ただの石ころがありました。A国の無知な者が、「これはダイヤモンドの鉱石だ！」といい出しました。B国の無知な者も欲に誘われ、「そうだこれはダイヤモンドの鉱石だ！」と主張し出します。境界線上での騒ぎですから、さあ石の取りあい合戦になりました。彼らは無知ゆえにニセモノの宗教を（石をダイヤモンドと信じている）ホンモノと信じ、聖地の取り合いをしているのです。その宗教は、ただの石ころなのです。今彼らは、石の取り合いに命をかけているのです。本当の自分を知った者なら、決してニセモノの取り合いはしないでしよう。A国もB国もそれが石だと知ったら、石の取り合いはしないはず。無知ほど恐ろしいことはないとは、このことをいうのです。

あなたは何派だ！ 私は何派だ！ と敵視し合っている信者も同じです。どちらもニセモノなのですから、もともと争う価値などないのです。ただ私の宗派の方が正しい！ いや私の宗派の方が正しい！ と自己主張しているに過ぎないのです。何がホンモノを決めると思えますか。宗教ですか。教義ですか。經典ですか。儀式ですか。そうではないはず。思いと行いではありませんか。問われるのは、どのように正しい思いと行いをしているかだけです。

これは、領土や資源の奪い合いにもあてはまることです。この世に存在する物は、すべて消え去る無常な物です。そんな無常な物に、命をかけて戦う価値があると思えますか。今の私たちは、せいぜい生きても百

年そこそこです。ならば、生きられるだけの物があれば良いではありませんか。なぜ欲張るのですか。死後の世界まで持って行こうとでもいうのですか。良く指導者達は、子孫のために資源の確保は必要であると言います。でも、子孫にとっては良い迷惑です。なぜなら、余分なエネルギーを持てば持つほど周囲に波風が立つからです。考えても見て下さい。今地球上で起きている争いの殆どは、エネルギー資源の豊かな地域で起きているではありませんか。親の財産相続で兄弟姉妹が骨肉の争いをするのも、財産家ならではの話です。もし財産が無かったら、兄弟姉妹みな仲良くしていられただけです。エネルギーの偏りは、必ず争いの種になるのです。だから子孫にとって良い迷惑だということです。それよりも、人類全体のものにしてあげば安心ではありませんか。なぜなら、エネルギー均衡の法則が穏やかな方向へ導いてくれるからです。

人間は欲があるわりには、欲がないのです。よろしいですか。あなたは地球上のすべての物を自分のものにするのと、自国の物だけ自分のものにするのと、どちらが豊かになると思いますか。地球上のすべての物を自分のものにするのですね。では人類は今、そのようなことをやっておりますか。ここからここまで我が国の物、そこからここまであなたの国の物、と線引きし合っているではありませんか。線引きしなかったら、地球上のすべての物を自分のものにできるのに、線引きし合っているために自ら貧しくしているのです。自国だけの物としたいその欲が、貧しくしているのです。欲を持たず、国境を作らず、すべての物を人

類全体のものとするなら、地球上に貧しい人は一人もいなくなるのです。地球には、使い切れない資源が用意されているのです。資源が枯渇すると考えるのは、神の愛を知らない者だけです。なぜなら、地球は無限の供給源である宇宙とつながっているからです。

○自分を殺す者が平和を作れるはずがない！

自分を人間だと思っている者は、どうしても他人を殺してしまうのです。それは、自分を殺しているからです。自分を殺すぐらいですから、他人を殺さないはずがありません。こういうことです。今日の社会において死ぬ人は、みな自殺者なのです。病気で死ぬ人は勿論、事故や事件で死ぬ人も、自然災害で死ぬ人も、戦争やテロで死ぬ人も、みな人災なのです。人災ということは、みな自殺しているということです。自分を殺している者は、全員が全員欲を持ち、憎しみを持ち、怒りを持ち、多くの悪想念を放っているわけですから、他人を傷つけ殺し、社会を傷つけ殺し、地球を傷つけ殺さないはずがないのです。

自分が出した思いや言葉に、一方通行はないのです。自分が出した思いや言葉は、相手に影響を与えると同時に自分にも影響を与えているのです。どうでしょう。相手に泥をぶつけるのに、自分の手を汚さないでできますか。

- ・自分を恨まないで、他人を恨むことなどできないのです。
- ・自分を憎まないで、他人を憎むことなどできないのです。
- ・自分を怒らないで、他人を怒ることなどできないのです。
- ・自分を殺さないで、他人を殺すことなどできないのです。

自分の中から出てくる汚れた思いや言葉は、まず自分の心を汚しその後他人を汚しているのです。一方通行がないとは、そういう意味です。だから、決して汚れた思いや言葉を出さないことです。すなわち、誰も恨まない、憎まない、怒らない、殺さないことです。出すなら、清い思いと清い言葉を出して下さい。そうすれば、自分の心と口は清められます。

平和が欲しかったら、自分を汚さないことです。自分を汚さなければ、他人も社会も汚すことはありません。これが世界平和を実現するコツです。

○終戦記念日は心を語る日にしよう！

毎年八月十五日の終戦記念日には、国中で様々な式典が行われます。テレビなどでも、当時の悲惨な戦いの映像が放映されたり、多くの人の口から戦争のむごさが語られたりします。でも私たちは、どうしてい

までも戦争の傷跡を引きずって生きなければならぬのでしょうか。どんなに式典を行っても、どんなに戦争の悲惨さを語っても、そこから平和は生まれませんよ！ 平和が欲しかったら、人の心について語るべきです。なぜなら、戦争の原因は人の心にあるからです。心を無視して、どうして平和が得られるでしょうか。これでは一步も前進していません。

私たちがやるべきことは、結果に目を向けることではなく、戦争の原因である心に目を向けることです。私たちはすでに戦争から教訓を受け取ったのですから、それ以上戦争を引きずらないことです。大切なのは、教訓を生かすことです。それが戦争で亡くなった人達への最大の供養になるのです。

これは戦争に限った話ではありません。環境問題にしても、経済問題にしても、人種問題にしても、同じです。どんなに地球環境の酷さを語っても、どんなに経済の破綻状況を語っても、どんなに人種問題の根深さを語っても、何の解決にもならないのです。そんな時間があるなら、原因である心について語るべきです。だから私はいふのです。終戦記念日を、心を語る日にしてはと……。心を語るようになれば、人間は何か、人生の目的は何なのか、人類はどこに向かうべきかなど、人間存在の根本に論点が向けられるでしょうから、これなら前進です。ぜひ、意義のある終戦記念日になりたいものです。

○宗教の仕事

どこの仏典にもこの聖典にも、修行して神・仏になるとは書いてありません。何と書かれてあるかといえますと、「人間は生まれながらにして神・仏である！」と書かれています。それを後の宗教家達が、修行しなければ神・仏になれないと書き換えてしまったのです。お釈迦さまも、イエスさまも、人間の本性は神・仏である、すなわち生命である、とはっきりいっておられます。インドのサイバ師も、私たちは神の化身であるとはっきりといっております。「私」とはいつておりません。「私たちは」と複数形を用いつております。

人間が戦争をし罪を犯すのは、自分のことを人間とと思っているからです。もし生命だと知ったら、決して戦争も罪も犯さないでしょう。だから私はいうのです。もろもろの罪の所在は宗教家にあると・・・。宗教の仕事は、人に正しい生き方を説くことでも、葬儀でお経を読むことでも、お墓の番人になることでもありません。一人でも多くの人に人間の本性を知らしめ、生命の自分に目覚めさせることです。人間が生命に目覚めたら、教えなくても愛深い生き方をするようになり、正しい生き方をするようになります。そうなったら、何もしなくても世界は平和になるのです。

「無知と闇と悪に打ち勝たねばならない」、と覚者が語調を強めていうのは、もろもろの不幸は無知からきているからです。すなわち、真実を知らないから、人類は争い事を起こし苦しんでいるのです。真実を知れば、今地球上で起きている一切の争い事はなくなってしまおうでしょう。だから私は、一人でも多くの人に真実を知ってほしいと願うわけです。

○宗教は必要か

迷いの多い時代を末法の世といい、その時代には必ず多くの宗教が生まれます。しかし末法の世は、正法の世でもあるのです。なぜなら、偉大な指導者の多く出る時代でもあり、熟した魂が多く生まれる時代でもあるからです。玉石混交の時代、それが末法の世の特徴です。ですから多くの魂が、競って生まれてくるわけです。でも、その魂が出会う宗教の殆どはまがいものです。多くの者がまがいのものの宗教に埋没し、生涯を終えてしまうのです。ホンモノの指導者に出会う確率は、奇跡に等しい確率です。いや、出会うには出会うのですが、真偽の識別ができないためにまがいのものを掴んでしまうのです。真理を掴むか掴まないかは、いかにホンモノの指導者とニセモノの指導者を識別できるかにかかっているのです。

ニセモノは奇跡を見せびらかして説きますが、ホンモノは科学的に説きます。私の恩師である知花先生は、一度だって神秘的な手法を用いて説いたことはありません。実生活に密着した、しかも現実的手法を用いて私たちの心に訴えます。そして宗教はいらない！ 宗教に入ってはならない！ 宗教に騙されてはならない！ と戒めます。神は空想や妄想の産物ではありません。真実そのもの、現実そのものです。常に私たちの実生活に密着しているのが神なのです。

- ・ 思わせているのは誰でしょう。
- ・ 心臓を動かしているのは誰でしょう。
- ・ 息をさせているのは誰でしょう。
- ・ 傷を治しているのは誰でしょう。
- ・ 芽を吹かせ、花を咲かせ、実を付けさせているのは誰でしょう。
- ・ 蜂に巣を作らせているのは誰でしょう。
- ・ 雨を降らせ風を吹かせているのは誰でしょう。
- ・ 地球を回転させているのは誰でしょう。

神なくして私たちはないのでしょ！ 神なくして地球はないのですよ！ 神なくして宇宙はないのですよ！ 目に見えない神が、すべての存在物を生かし働かせているのです。すなわち、現実を生み出している力そのものが神なのです。神という言葉が嫌いなら、生命と呼んでも良いのです。エネルギーと呼んでも良いのです。法則と呼んでも良いのです。決して神を神秘化しないで下さい。

神や仏を敬っているのに、なぜ線香やロウソクの火で火事になるのですか。先祖が私たちを守ってくれているなら、なぜ墓参りの行き帰りに交通事故に遭うのですか。このことからいっても、神や仏や先祖や宗教が、私たちを守ったり救ったりしてくれているのではないことが分かります。救うのは私たち自身です。自分の思いと行いが自分を救うのです。偶像崇拜からは何も生まれません。仏壇や神棚や十字架に手を合わせて拜むのは偶像崇拜です。形あるものに手を合わせるの、みな偶像崇拜者なのです。形ある物は、すべて消えてなくなる幻だからです。そんな幻に手を合わせて、一体何になるのでしょうか。その意味では、肉体を自分と信じている人も偶像崇拜者です。もうそろそろ宗教から足を洗いたいものです。

【コラム】人生に続きがあるか

人生に続きがあるか否かは、本来宗教で論じられる問題ではなく、教育で、いや政治で論じられるべき大問題なのです。今人類が利根的な生き方をしているのは、人間が一時の存在だと考えているからです。もし人間が永遠の存在で、今の生き様が未来の人生に重大な影響を及ぼすと知れば、決して無責任な生き方はないでしょう。科学者にいわせれば、そんな非科学的な思想を吹き込むのは無責任極まりないということでしょうが、たとえ非科学的であっても、人に希望とやる気をもたらすなら許されて良いのではないのでしょうか。

今の子供たちの目に輝きが見えますか。何一つ夢も希望も与えず、ただガムシヤラに勉強せよと叱咤する教育が、本当に子供たちのためになっているでしょうか。子供たちは真実を知りたがっているのです。もし彼らに人生の本当の意味を教えたら、おそらく目をキラキラと輝かせ生きることでしょう。どうでしょう、やってみる価値があるではありませんか。

例えば私が唯物論者だとしても、人生に続きがあるかないか問われたら、五分五分だと返答します。今の科学にこれを否定する根拠は何もないからです。ないということは、確率五割だということですよ。ならば、やってみる価値があるのではないのでしょうか。私は体験者ですから100%あると断言できますが、百歩譲って

50%だとしても、大いに現実味のある話だと思います。あなたは五分五分の勝負はしないのですか。まずまず混乱する地球の現状を、五分五分の勝負だからといってしないつもりですか。いまだかつて人類は、このような勝負はしたことがないのです。やってみて駄目なら、元に戻れば良いではありませんか。ただ非科学的だからといって、笑って済ませるつもりですか。人生に続きが有るかないか論するのに、なぜそこまで躊躇するのですか。この話を教育や政治に持ち込むことが、そんなに非常識なことですか。

同じ環境に生まれ、同じ環境で育った一卵性双生児でさえ、気性や氣質が違つのですよ。それは過去において、違う人生を歩んでいたからではありませんか。同じ人間でありながら、なぜこつも気性や氣質が違つのでしょうか。今生だけの人生なら、そう変わらなはずです。生まれながら幸運な人もいれば不運な人も、脆弱な肉体を持って生まれてくる人もいれば強靱な肉体を持って生まれてくる人もいる、これもおかしいとは思いませんか。これは人生に続きがあると考えなければ解けない謎です。

ある人はいいます。人生に続きがあるといえば、命を粗末にする者が出てくるから、軽々しく口走ってはならないと・・・とんでもない！一回限りの人生だと思つているから粗末にするのですよ！もし、今の人生が未来の人生に重大な影響を与えると知れば、軽んずるところか今以上に大切にすることははずです。恐らく、

自殺する者など一人もいなくなるでしょう。いずれ私のいつていることが、科学的に立証される時代が来るでしょう。その時唯物論を唱えている科学者達は、大恥をかくことでしょう。

【コラム】色即是空・空即是色とは

仏教語に「色即是空・空即是色」という難しい言葉がありますが、その意味は小学生にでも分かるやさしい内容なのです。どんな物にも色が着いていますから見えます。でも空気は色が着いていないので見えません。だからお釈迦様は、見える物を「色」と呼び、見えないモノを「空」と呼んだのです。でも、見える物と見えないモノは同じものなのです。なぜなら、見える物は見えない空気から生まれているからです。でもそのことが、一般人にはなかなか理解できない。そこでお釈迦様は分かりやすく、色の着いた物を「色」と表現し、無色透明なものを「空」と表現したわけです。お釈迦様は、実にうまい表現をされたものだと思います。

このように、見える物はすべて見えない空から生まれているわけですが、この空のことを現代人は原子と呼んでいるのです。原子は見えません。その見えない原子が、すべての見える物を生み出しているのです。だから、鉱物も植物も動物も人間も原子です。原子が分子化し、様々な形に化身しているわけです。つまり、

「空」が様々な「色」に化身しているわけです。その空である原子は別名、生命とも呼ばれています。ですからこの表現の世界は、物質の世界であると同時に生命の世界(空の世界)でもあるのです。この世には様々な色の着いた形がありますが、その中身はみな同じ生命なのです。だから、鉱物も植物も動物も人間もみな生命なのです。

その生命は、この宇宙にたった一つしかありません。一つしかないということは、あなたは私ではあるということになります。私はあなたであるということになります。すなわち万象万物は私であり、私は万象万物であるということになります。だからお釈迦様は、「他人を自分の如く愛しなさい！ すべての物を自分の如く愛しなさい！」といわれたのです。一つしかないということは、私しかないということですから、私が他人を愛し万象万物を愛するのは当然ではありませんか。さあ今日から、何を見ても、何を聞いても、何を味わっても、何を嗅いでも、何を触っても、私と違って下さい。愛を育むコツは、色即是空・空即是色を正しく理解することです。すべての物は、「空から生まれた兄弟姉妹なのですよ！」「ということを理解するのです。

おらにお釈迦様は、この世は無常の世界であるともいっておられます。無常の世界とは、常ならぬ世界、変化する世界、すなわち幻の世界という意味です。形ある物は、みな消えてなくなっていくばかりです。「色

褪せる「という言葉がありませんが、「色」「つまり」「物質」は「褪せて」しまうものですよ！ 無常なるものですよ！ 消えてなくなるものですよ！」といっているわけです。だから「色」は、つまりこの世の物は、実在するものではないのです。

(11) 真の幸せを求めて

なぜ人間は、真の幸せを求めたがるのでしょうか。人が真の幸せを求めたがるのは当たり前のように思いますが、この欲求の背後にはとても重大な意味が隠されているのです。では人間はなぜ真の幸せを求めたがるのか、これは悟りの根源にもかかわる重要問題ですから、慎重に考えて見たいと思います。

○人間はなぜ幸せを求めたがるのか

あなたは耐え切れない悔悟の念に襲われた時、これまでの一切の記憶を失いたいと思ったことはありませんか。このまま眠りに就き、永久に目覚めなければどれほど幸せか、と思ったことはありませんか。しかし、目覚めの来ない日はありません。たとえ肉体がなくなっても、目覚めないことはないのです。私たちの意識

は、永久になくなることはないのです。もしなくせるなら、これほど幸せなことではないでしょう。なぜなら、何の苦悩も体験せずに済むからです。いや、こんな考えさえ持たなくて良いのですからね……。しかし残念なことに、（幸いなのかも知れませんが）私たちの意識は永久になくなることはありません。だから私たちは、意識の処遇に苦慮せねばならないのです。より苦しみ少ない状態に……。より幸せ多い状態に……。永久になくならない意識を苦しみの中に置くより、幸せの中に置きたいと思うのは、意識あるものにとって当然の願いだからです。これが人間が真の幸せを求めたがる理由です。

もう一つ、人間が真の幸せを求めたがる理由は、真の幸せがどのようなものか本能的に知っているからです。知っているから求めたがるのです。でもその幸せがどこにあるか分からない？ どうしたら得られるか分からない？ だから人間は、真の幸せを求めて旅を続けようとするのです。では真の幸せは、何処に、どんな形であるのでしょうか。

○この世の幸せとは？

私たちはおいしいものを食べている時、幸せだなあと感じています。またディズニールランドで乗り物に乗っている時も、幸せだなあと感じています。しかしその幸せも、喉もと過ぎれば熱さを忘れるのごとく、す

ぐに過去のものとなつてしまいます。あの時は楽しかったなあ！ という思い出しにしか過ぎなくなるのです。家族と共に過ごす幸せだって、いつまで続くか分かりません。子供は独立し離ればなれになってゆきますし、元氣だった親も年老い病に倒れ、死んでゆきます。自分だっていつまで健康でいられるか分かりません。こうして見ると、この世に一時の幸せはあつても、永遠の幸せのないことが分かります。

この世の形ある物は、必ず消えてなくなる運命にあるのです。すべての物は、なくなる方向へ流れているのです。無常の世界、消えてなくなる世界、幻の世界、これがこの世の実態です。そんな世界で、永遠の幸せが得られるわけがありません。真の幸せを考えるに当たり、まずこの事を知って下さい。

○この世の幸せは心の持ちよう次第

ある哲学者が、人の感覚とその認識について研究しているうちに、面白いことに気付きました。それは感覚の強さが等差級数的に増すには、刺激の強さを等比級数的に増してやらねば効果が薄いというものでした。感覚はあくまでも主観的なものですから、外から認識したり観察したりすることはできませんが、一定の法則に基づいて変化して行く実態は定量化できるというわけです。たとえば感覚を、一、二、三、四・・・と一定の強さで増すためには、刺激の強さを二、四、六、八・・・と、一定の比率で高めてやらなくては効果

が薄いのです。つまり年収百万円の人が二百万円に昇給した時の喜びと、年収一千万円の人が一千万円に昇給した時の喜びの大きさは、著しく違ってくるというわけです。私たちは自分の幸せと他人の幸せを比べますが、比べる幸せは幸せの中に入るのを妨げるのです。幸せの中に入れても、幸せとは思えないのです。

こんな小話があります。あるヤドカリが、隣のヤドカリを大層うらやんでおりました。「自分もあのよう大きな家が欲しいなあ！」うらやめばうらやめほど自分がみじめになります。ある日隣のヤドカリが家を留守したのを幸いに、その家に引越したのです。引越したのは良かったのですが、どうも居心地が良くありません。広すぎるし、手入れや掃除も大変です。「やはり自分の家の方がいいや！」そう思ったヤドカリは元の家に戻ろうとしたのですが、何とすでに誰かが住んでいるではありませんか。住んでいたのは、この家に住んでいたあのヤドカリでした。隣の花は赤い（隣の芝生は青い）といいますが、彼らもそう見えただけでしょう。

こんな思い出話もあります。子供のころ、いつも苦い顔をしている隣の家のおじさんから、アメ玉を一個もらったことがあります。その時の嬉しさ、今思い出しても胸が躍るほどです。果たして、今の子供たちはどう思うでしょうか。幸せの中に幸せはないといわれるように、幸せ厚い人は、幸せの中にいながらそれを実感できない不幸せな人です。幸せ薄い人は、常に幸せを意識している幸せな人です。幸せの基準など、

どこにもないのです。自分が幸せだと思ったら、それが幸せなのです。だからいまだかつて、外から幸せをもたらした人などいないのです。幸せの青い鳥を探しに旅に出たチルチルミチルの話は、私たちにそのことを教えているのではないのでしょうか。

これも私事になりますが、子供のころの私は、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。朝食を終えるとすぐに家を飛び出し、道端で、広場で、近くの山や川で、日が落ちるまで夢中で遊んだものです。気の利いた遊び道具など一切ありませんでしたが、何もなくても楽しかったです。一番幸せだったのは、家族全員でテーブルを囲む夕餉の一時でした。ごちそうといえば月に一度のカレーライスくらいなもので、肉など殆ど入っていませんでしたが、母の気持ちのこもった手料理は私にとって何よりのごちそうでした。このように物は豊かではありませんでしたが、その当時の私は幸せだったのです。

物が豊かになった今日、なぜこうも家庭崩壊が多いのでしょうか。多くの親は、経済的に豊かになれば幸せになると思い、子供を放りっぱなしにして共働きに出ます。その反動が子供の非行です。子供たちは寂しいのです。愛に飢えているのです。だから心の隙間を埋めようと、ゲームに夢中になったり、お金をせびったり、反抗的になったりするので。子供たちは犠牲者なのです。そんな子供たちを、大人達がどうして責められましょうか。

大金持ちがきらびやかな衣装や宝石で身を飾ったり、豪華客船で世界一周旅行に出かけたりするのも、心の隙間を埋めようとする行動です。お金をかければ、幸せの味が増すとも思っているのでしょうか。一食十万円かける夕食と、千円かける夕食のおいしさの差が、百倍あるとは私には思えません。また一億円のダイヤモンドの指輪をするのと、千円のガラス玉の指輪をするのと、その美しさに十万倍の差があるとは思えません。彼らの味わっているのは、食べ物の味や美しさではなく、見栄や虚栄心ではないでしょうか。どんな豪華な食べ物を食べようと、どんな貧素な食べ物を食べようと、お腹に入ってしまうえばみな同じなのです。どんな羽根布団で寝ようと、どんなセンベイ布団で寝ようと、眠ってしまったえばみな同じなのです。お腹がすいていたらどんな食べ物でもおいしいし、眠かったらどんな布団でも寝られるのです。すべて心の持ち方一つです。このようにこの世の幸せは、あくまでも本人の感じ方一つ、心の持ちよう次第なのです。私が「真の幸せ」という言葉を使ったのは、この世の幸せは一時の幸せだからです。永遠になくならない意識を持っている私たちに、永遠になくならない、それも色褪せない幸せを掴まなくては意味がないのです。

○究極の幸せを求めて旅している私たち

さて、この世に真の幸せのないことが分かりました。また心の持ち方一つで、幸せの味が変わることも知りました。永遠の心が、一時の幸せを掴んで満足するはずがないからです。ですから心は、真の幸せを求めて旅を続けようとするのです。多くの人が心の成長に比例するように、求める幸せの種類を変えて行くのはそのためです。

例えば、今までこの世的な幸せで満足していた者が、ある時から満足できなくなる。そこで様々な趣味に興じる、山登りをする、お遍路参りをする、でも何をやっても心は満足しない。そこで哲学書を読む、宗教に入る、一時満足しても再び疑問がわいてくる、そこでさらに偉大な指導者を探し真理を学ぶ、こうして物質的な幸せから精神的な幸せへ、この世的な幸せから究極の幸せへと、求める幸せを変えてゆくのです。このように考えると、幸せを求める旅は魂の進化の旅といえるのかも知れません。

○私たちが求めるべき究極の幸せとは？

では永遠に色褪せない究極の幸せは、一体何処にどんな形であるのでしょうか。私たちは先ほど、幸せは意識状態であることを知りました。幸せが意識状態であるということは、意識は私たちが持っているわけ

すから、もともと私たちの中に幸せの種があったことになりす。なのに私たちは、外に幸せを求めてきたために発見できなかったのです。どうやら私たちは、遠回りしていたようです。では究極の幸せとは？…。

究極の幸せを一言でいえば、「自分が生命であると悟った時に得られる喜びです。」なぜ自分が生命だと悟れば、そのような喜びが得られるかといえば、生命にはすべてのものが与えられているからです。つまり、

- ・ 永遠に病まない、老いない、傷つかない、死なない、命が与えられています。
- ・ 無限の智慧と力と光と愛が与えられています。
- ・ 無限の創造力が与えられております。
- ・ 無限の自由が与えられています。
- ・ 永遠に尽きない平安と喜びが与えられています。
- ・ 永遠に色あせない平安と喜びが与えられています。

これが天の幸せの境地です。ですから天の幸せを掴んだ者は、もうどんなものにも見向きもなくなるのです。それほど天の幸せは、喜び多い幸せだということです。私たちはこの究極の幸せを掴むために、これまでも奮闘してきたし、今も奮闘しているし、今後も奮闘しなければならぬのです。

念を押しします。究極の幸せを得るためには、「心の底から生命だと思えるようになること、つまり生命の自覚を持つこと」です。その生命は、意識としてははじめから私たちの中に入ったのです。ですから私たちは、すでに喜びの味を知っているのです。知っているから求めたがるのです。生命イコール私たちです。生命イコール意識です。意識イコール私たちです。この熟知と自覚です。私たちが何かを求めバタバタしているのも、すべて究極の幸せが欲しいためです。地球上のどんな物を手に入れても、宇宙の何を知っても無意味なのは、外側の物はみな消えてなくなる幻だからです。しかし私たちの意識は、永遠になくなりません。その永遠になくならない意識を、永遠の幸せの中に置くには、自分が永遠の生命であることを悟るしかないのです。その意味では、悟りも究極の幸せを掴む手段に過ぎないということです。

繰り返します。真の幸せは外側にあるのではなく、自分の心の中にあるのです。自分の意識の中にあるのです。だから幸せは、意識状態だということです。このことを強調しておきたいと思います。

【コラム】天国とは？

もしこの世に、永遠に飽きない幸せがあったら、一体この世の人達はどうするでしょうか。多分、殺し合っても奪い合おうとするでしょう。（現に、色あせるこの世の物でさえ奪い合っている）そして一日

掴んだら、二度と手放そうとしないでしよう。ならば彼らは、一体どうなってしまっただけでしょうか。満足は停滞です。向上心のない状態です。それでは成長が望めません。幸いこの世の幸せは飽きるから、私たちは飽きない幸せを求めて旅を続けようとするのです。

天国にはルビーやダイヤモンドで造られた宮殿があり、そこで白い羽衣を着た天使がハーブを奏で、唄を歌い踊り楽しんでいる、といった夢のような話をする宗教家がありますが、それは嘘です。例えあつたとしても、そんな所が天国であるはずがありません。なぜなら形ある世界は、飽きがきて、色あせ、陳腐化し、いつか必ず消えてしまうからです。では飽きのこない幸せは、何処にどんな形であるのでしょうか。

それは時空を超越した、生命の世界にあるのです。生命の世界にあるといっても、天国という場所があるわけではありません。天国のような喜びの意識状態があるという意味です。つまり心の底から生命であると思えた時、永遠の喜びの意識状態として体験することができるのです。その喜びの意識状態は、体験した者でなければ分らないでしょう。

何度もいうように、私たちの意識は永遠になくなりません。なくならないがゆえに、究極の幸せの中（天国）に入らなければならぬのです。どうかこの意味の深さを知って下さい。

(12) 新しい出発を誓う人に捧げる言葉

人生ってこんなもので良いのか。何かし忘れている事があるのではないか。60歳も過ぎ人生の終幕が近づいてくると、人はこれまで歩んできた人生に疑問を持ち始めるものです。でも、どうして良いか分からない。分からないから自分をごまかして生きるしかない。そこで旅行をしたり、買い物をしたり、多彩な趣味を持ったりして気分を紛らわせる、そんな人が多いのではないのでしょうか。疑問を持ったら、その疑問を取り除きましょう。60歳からが人生の勝負なのですから……。

人生の荒波にもてあそばされ、心ならずもやりたくないことをやり、良心の呵責に耐えかねている人も少なくないと思いますが、肉体を持つて生きている限り、悪いことをしない人など一人もいないのです。(心で犯す罪も同罪です)悪いことをするのが悪いのではなく、悪いことを悪いまま放っておくことが悪いのです。過去の思いや行為を元に戻すことはできませんが、気付いた後の人生を直すことで過去の償いができ、更なる飛躍も可能なのです。その方法を私の体験からお伝えしたいと思います。

○ 人生を正す方法

30 数年も前になりますが、私も人生の荒波にもてあそばれ墮落した時代がありました。しかしあるきっかけを境に、人生を変えようと決意したのです。それはそれは、断崖絶壁から飛び降りるような強い決意と勇気がいりました。

「今日ただ今から良心に恥じない生き方をする！」

「これまでの人生の総懺悔をする！」

「世のため、人のため、あらゆる生き物のために、残りの人生を捧げる！」

この三つの誓いを胸に秘め、私は人生の再出発を図ったのです。それは一切の妥協を許さない一大決心でした。それから数週間後のある晩、私は素晴らしい体験をさせてもらいました。それは生命(神様)からのご褒美だったと、今でも私はそう思っています。それから以後の私は、人が変わってしまいました。周りの環境に変化が起きはじめました。出会う人達にも変化が起きはじめました。仕事も順調に回転しはじめました。その時は意識していませんでしたが、今考えてみると再出発を誓ったことで生命核が増え、それが環境の変化という形で現れたのだと思います。

私たちの中には生命核(魂)が存在します。その生命核は、常に増殖を願って私たちの心を叩いています。しかし自我が活発化していると、生命の思いが顕在意識に届かないため、正しい考えや行動に結びつかないのです。私が人生の再出発を誓ったことで生命との同調ができ、生命核が増えたと考えられるのです。

○生命核を増やす方法

生命核(魂)とは原子核のことです。原子核は生命エネルギーですから、原子核が増えればエネルギーが強まるため、これまでの考え方や生き方に変化が生まれるのです。また直感力や判断力が鋭くなるため、これまで不明だった問題点の解決の道筋が見付かるのです。さらに高い波動との同調(守護霊によって導かれる)が起こるため、必要な情報が入ったり、予期せぬ人との出会いが起こったりして、人生が良い方向へ転換してゆくのです。

大懺悔も一大決心も、間違いなく生命核を増やします。特に、真に世のため人のために尽くしたいと思っ
て成す行為は、間違いなく生命核を増やします。これは仕事上でもいえることで、たとえば部下をかばう、
人の嫌がる仕事を引き受ける、相手のためになることを考え仕事をする、これは自我を減らすことにつなが
りますので、生命との絆が強まり、生命核を増やす要因になるのです。自我が生命との絆を断っていたので

すから、自我が減れば生命核が増えるのは当然なのです。ただしどんなに良いことでも、動機が不純であればなりません。正しい動機に基づいた、正しい行いをするのが大切です。

このように、世のため人のために尽くす思いで生きれば、日々の生活に張りが生まれ、充実した一日を送ることが出来ます。人生で置き忘れていた何かを発見したような、爽やかな気分になれます。これは私の体験からいえることなので間違いありません。是非やってみて下さい。なぜ決心すると原子核が増えるかについては、いつか別な機会を設け述べたいと思います。

最後に元気の出る人生の応援歌をいくつか紹介し、この章を結びたいと思います。

。神は小学生に大学生の問題は与えません。今あなたに難しい問題が与えられているとしたら、その問題をこなせる実力の持ち主だと神が判断したからに他なりません。これは大いに誇って良いことです。さあ、自信を持って難問に挑戦しましょう。それは誰のためでもない、自分のためなのですから……。

。「自分なんかいない方がいい！」そんな悲しいことをいってはなりません。この世に存在するもので、必要のないものなど何一つないのですから……。

・石に穴をあけ続ける雨滴を見て、心打たれるかも知れない！

・木の葉の舞い落ちるのを見て、素晴らしい詩を思いつくかも知れない！

・果敢に道路を横切る毛虫を見て、勇気づけられるかも知れない！

こんな小さな存在でさえ、周りのものに影響を与えずにはおかないのです。ましてやあなたの存在が、どれほど周りの人達に影響を与えていることか……。たとえ一歳で閉じる人生でさえ、両親に、兄弟姉妹に、周囲の関係者に、大きな波紋を残して行くのです。それほどあなたは、掛け替えのない存在なのです。

。愛する人と暮らすのは素晴らしい！・・・でも、その有り難みもつい忘れてしまうもの、空気や水のように……。思い出しましょう！　素晴らしかったあの頃のことを・・・ただ側にいるだけで幸せだったあの時代のことを……。

。長寿の譬えに、鶴は千年、亀は万年、という諺があります。短命の譬えに、蝉はひと夏の命、カゲロウは一日の命、という諺があります。しかしどんな命を生きても、同じ命を生きたことに変わりはないのです。

大切なのは、どれほど永く生きたかではなく、どれほど充実した人生を送ったか。どれほど納得のゆく人生を送ったか、ではないでしょうか。

。喜びは自然の本源的姿です。蝶は喜々として飛び回り、小鳥はさえずり、仔馬ははしゃぎ、子猫はじゃれあう・・・花も、木も、川も、湖も、山も、海も、喜びいっぱいを表しています。それは、今与えられた環境に満足し切っているからではないでしょうか。人間はどうでしょう？ 私たちも与えられた環境で精いっぱい生きれば、彼らのように楽しく生きられるのです。

。どんな絵も彫刻も、初めから完成されたものはありません。何が何だか分からない状態から、徐々に完成されて行くのです。今の私たちも、見かけは良くないが、いつか必ず芽を出し、花を咲かせ、実を結ぶのです。その実がどんなにみずばらしくても、そこに全能の生命が宿っていることは間違いないのです。

。楽しい時が良いわけでもない！ 辛い時が悪いわけでもない！ 良い時も悪い時も共にあって良いのです。昨日の良き日も、今日の悪き日も、あなたにはなくてはならない大切な一日だったのです。なぜなら、学びの体験に善し悪しなどないからです。今私たちは、絶好の学びのチャンスが与えられているのです。

。大自然の優麗なパノラマの数々をごらん下さい！ そのデザイン、その色合い、その配置、どれを取っても人間技の比ではありません。この素晴らしい創作したのは、一体誰でしょうか。絵が勝手に描かれなように、ビルが勝手に建たないように、哲学の論文がアイウエオの偶然の集まりでないように、大宇宙を創造したのも、大自然を創造したのも、その背後にはそれを創作した何者かがいたのです。それを私たちは、神(生命)と呼んでいるのです。

。人は平々凡々の日の下では、得るものが少ないものです。厳しい嵐の中でこそ、大きな飛躍が期待できるのです。その意味では、逆境にある時こそ栄光の道を歩いているといえるでしょう。考えてもごらん下さい、悩みも苦しみもない人生の何と退屈なことか・・・。

。過ぎ去った時は使えません。いまだ来ぬ時も使えません。使えるのは唯一今という時だけです。あなたの人生に足跡を残すのは過去でも未来でもない、今日という一日なのです。その一日をあなたは、どのように使っているでしょうか。

。「ああだ！　こうだ！」と考へ、行動に移さない人は、種を撒こうとしない農夫のようなものです。その種は手の中で腐り、やがて使い物にならなくなってしまうでしょう。人生も同じこと……。やろうと決心したら実行に移すことです。種も撒けばこそ、芽を出し、花を咲かせ、実を結ぶのです。例えその実がどんなに貧素であっても、その実の中に人生で体験した深い味がこもっているからです。

。どんな仕打ちを受けても、決して人を憎んではなりません。その人は自分のために悪役を引き受けてくれたのですから……。そう思えば、「ありがとう！」の感謝の言葉も出てこようというものです。かつて、自分も敵役を演じていたかもしれません。いや間違ひなく演じていたでしょう。そして今後も役を取換え演じ合うことでしょう。討つ役あれば、討たれる役あり、世の中は実にうまくできているものです。

。しかめ面して生きても一生、笑顔で生きても一生ならば、楽しく生きようではありませんか。明るい処には蝶や蜂が舞飛び、暗い処にはネズミやゴキブリが徘徊するのですから……。今どんな環境にあらうと、ジョークは飛ばせるはずですよ。おどけることもできるはずですよ。笑顔だってふりまけるはずですよ。そんなあなたを見れば、誰もがあなたを好きになるでしょう。

。この世には愛別離苦があります。特に愛しい人との死の別れは、別れがたい別れです。でも死は、別れではありません。一つに帰る別れです。一つに戻る別れです。本当は別れなどないのです。一から生まれ一に帰る別れがあるだけです。出てきた故郷に帰る別れがあるだけです。そんな別れを別れというのでしょうか？

。今自分がどん底にあるからといって、投げやりになつてはなりません。落ちれば落ちるほど上がりもまた大きいのですから、トランポリンを飛んだ時のように……。さあ、飛躍できる時のやってくることを信じ、今を精いっぱい生きましょう。

老人の茶飲み話のほとんどは昔話です。確かに人生を振り返れば、楽しかったこと、苦しかったこと、懐かしい思い出など、山ほどあるでしょう。でもその思い出に登場した人達は、今も健在でしょうか。祖父母はどうでしょう？ 父母はどうでしょう？ 叔父や叔母はどうでしょう？ 兄弟姉妹はどうでしょう？ 隣人達はどうでしょう？ あの政治家は？ あの女優は？ あのアスリートは？ あなたの家は？ あなたの町は？ …… こうして見ると、人生は夢の如しです。

そう、人生は夢物語なのです。この世の出来事で、一つだって真実なるものはないのです。そんな夢事を懐かしがり、感傷に浸っていてどうなるのでしょうか。私たちは一日も早く、浮世から卒業しなければなりません。生まれる、生きる苦しみがありません。老いる苦しみがありません。病む苦しみがありません。死ぬ苦しみがありません。もうこりこりですよ！ だからイエス様は、二度と生まれてはならないと戒められたのです。

この世の幸せなんて一時です。でも、生命の世界の幸せは永遠なのです。あなたは、一時の幸せが欲しいのですか。永遠の幸せが欲しいのですか。イエス様の戒めの言葉を、じっくりと噛み締めたいものです。

【コラム】原因点を追究する

意識の高い人は、自分の身に何か災いが起きても、決して他人のせいにすることはありません。すべて自己責任と考え、自分を戒めます。でも意識の低い人は、他人に責任を転嫁しようとしています。なぜでしょうか。それは、意識の高い人は外側のものはみな幻で、内側に真実があると思っていますからです。内側とは自分の心のことですから、自分の心の中に原因を探そうとする結果、自分を戒めるようになるのです。対して意識の低い人は、外側に本物があると思っていますから、外側に原因を探そうとする結果、他人を責めるようになるのです。

結果である外側からは、何も得られません。得たいなら、原因である内側を追究することです。原因を追求すれば、必ず得たいものが見つかります。結果の世界をどんなにいじくり回しても、何も出てこないことを知って下さい。

第二章

変わる

ある思想家が、こんなことをいっております。

変えられないものを受け入れる心の静けさと、

変えられるものを変える勇氣と、

その両者を見分ける叡智を我に与え給え、と・・・。

私たちは第一章で本当の自分を知り、第二章で正しい生き方を学ぶことにより、変えられないものと変えられないものを見分ける慧眼を養いました。慧眼の養われた者は、当たり前な生き方ができるようになりますので、そのような者が多くなった社会は、変わるべき方向へ自然と変わってゆきます。すなわち、変わるべきものは自然と変わってゆき、変えてならないものは自然と残されるのです。

この章では当たり前な生き方の基本理念を、私の願望を込め示したいと思えます。私たちはそこで、単純で素朴な社会の姿を見てしよう。それは子供の国そのものです。どうぞ子供心に立ち返り、メルヘンの世界で遊んで下さい。

(1) 自分を変える瞑想

すでに述べましたように、人には二通りの生き方があります。一つはボディーを主体にした生き方、もう一つは心を主体にした生き方です。ボディーを主体に生きれば、安全と快適と豊かさを追求する物質主義に傾きますので、争いの多い社会へ発展するのはやむを得ないでしょう。

一方心を主体に生きれば、平安と安らぎを目指す精神主義に傾きますので、穏やかな社会に落ち着くのは当然でしょう。また足ることを知るのは心の属性ですから、分かち合いによる生活の安定が図られ、幸せの道が開かれるのもまた当然でしょう。

このように二通りの生き方があるにもかかわらず、人間はいつの時代も物質第一主義を貫いてきました。分かち合うのと奪い合うのと、どちらが賢い生き方かは誰が考えても分かることですが、実際にはそうなっておりません。

覚者は口々にこういいます。

「人間をこういうものだ、ああいうものだと限定しないで欲しい。肉体を自分だと思って生きる限り、肉
体人間以上の働きはできないからだ。人間はそんな無力な存在ではないのである。本当の自分に目覚めれば、

どんなことも成し得る偉大な自分に返り咲けるのである。そんな力を持ちながら、小さな自分に甘んじている人間が口惜しい！ またそのことを知ってもらえない歯がゆさがたまらない！」と・・・。

このようにいう覚者の気持が、私には良く分かります。私たちの本性は生命ですから、生命に目覚めたら、もっともつと自由ではつらつとした生き方ができるはずなのです。私たちはただ姿形を見て、人間だ！ 個人だ！ と思いい違っているだけです。このメッセージを読み、「本当の自分は生命だったのか！」と嬉しさが込み上げてきた方は、すでに変わりつつあります。さらに深く理解し瞑想を実践すれば、自分を大きく変えることができるでしょう。

瞑想は自分を変える特効薬のようなものです。瞑想なしに自分を変えることはできないのです。これまで瞑想しながら変化の起きなかった人は、瞑想そのものが正しくなかったか、瞑想のやりかたが間違っていたかのどちらかです。瞑想は科学なのです。変化しない瞑想は、科学的瞑想とはいえませんが、これから紹介する科学的瞑想法は、やり方さえ間違わなければ必ず自分を変えられる瞑想です。ぜひ挑戦してみてください。

○科学的瞑想法とは？

私の恩師である知花敏彦先生が開発された科学的瞑想法は、実にシンプルです。いらぬ贅肉をそぎ落とし、すっきりさせた分かりやすい瞑想法です。なぜ科学的瞑想法かといいますと、宇宙力である想念力を抛りどころにしているからです。想念は実現の母といわれるように、私たちの想念は宇宙をも創造し得る偉大な力を持っております。その偉大な想念を利用すれば、成せぬことはないのです。ただ残念なことに私たちは、長年外側の世界に慣れ親しんできたために、内側に意識を集中することが不得手なのです。これが大変といえば大変なところですが、幸いなことに想念には「同時に二つの思いを持つことができない！」という特性があるため、その特性を上手に利用すれば効果的に集中することができます。知花先生が開発された瞑想法は、その特性を科学的に応用したものです。

さて私たちは、輪廻転生を繰り返す内に思いの罪を犯し、宇宙空間を歪めてしまいました。その歪みは、消さない限り何千年経っても宇宙空間に残っております。これでは落ち着いて瞑想することができないのです。なぜなら、歪めた原因に対する結果として様々な災難が襲ってくるからです。ですからまずは、その歪みをなくす作業が必要になってくるのです。その作業が、「反省・懺悔の行」といわれるものです。

知花先生の開發された科学的瞑想法を土台とし、そこに「反省・懺悔の行」を加えた二段構えの瞑想法がこれから紹介する瞑想法です。この二段構えの瞑想法こそ、完璧な瞑想法だと私は確信します。あとは、やる気と根気と努力です。では、その手順と技法を述べたいと思います。

○心の汚れを取る反省（懺悔）

キリスト教に洗礼という儀式がありますが、この洗礼には火の洗礼と水の洗礼の二通りがあります。水の洗礼は字のごとく、体を水で清める儀式のことをいいます。火の洗礼は、反省や懺悔によって心の汚れを取る行のことをいいます。私たちは今日まで、社会の汚れにドップリと浸かってきたために、殆どの人が心にもスモッグを付けております。そのまま放っておいては生命の光が届かないため、心穏やかに瞑想することができません。ですから瞑想に取り掛かる前に心の汚れを取りなさいということで、どの宗教にも反省や懺悔の行が組み込まれています。

ランプの火を明々と照らすためには、火屋の内外に汚れがあつてはなりません。生命の光を照らすにも、私たちの心の内外に汚れがあつてはならないのです。勿論、生命の自覚が持てれば反省も懺悔も必要ないのですが、そう簡単に持てないのが生命の自覚です。そこで反省や懺悔によって、先に外側の心の汚れだけで

も落とそうというわけです。火屋の外側の汚れとは今生つけた心の汚れのこと、内側の汚れとは過去世でつけた心の汚れのことです。今生つけた心の汚れは、真剣に反省すればきれいに落とすことができます。これは私の体験からいえることなので間違いありません

基本的には、「これまで歩んできた人生を振り返り、過ちがあったら心から詫び、二度と過ちを犯さないよう堅く心に誓うこと」です。反省には、大きく分けて三通りの手順があります。

【一つは、成長ごとにする反省です】

幼児のころ、小学生のころ、中学生のころ、高校生のころ、大学生のころ、大人になってからも、青年時代、中年時代、熟年時代、老年時代といったふうに、成長ごとにやります。「反省の対象は、人だけではありません。自分の肉体・鉱物・植物・動物など、すべての生き物を対象とします。一例として、

・自分の肉体を酷使しなかったか。乱暴に使っていなかったか。何十年も働き続けてくれた肉体に感謝しただろうか。

・生き物に自分の怒りをぶつけなかったか。不平不満をいったり、文句をつけたり、八つ当たりしなかったか。

・乱暴な使い方や、もてあそぶような使い方をしなかったか。

うつぶんを晴らすため、怒りを収めるため、欲望を満足させるためにやっていたら、大いに反省すべきです。

【二つは、環境や境遇や運命に対する反省です】

私たちは知らない内に、自分の環境（身体的・能力的・性的・経済的・家庭環境など）や境遇に対して、愚痴や恨みや怒りや嫉妬心などをもち、心を汚しているものです。特に悲運（運命）を呪ったり、恨んだり、愚痴ったり、怒ったりして心を汚しています。これは間接的に親を恨み、世を恨み、時代を恨み、神を恨むことにつながっていますので、この心の汚れを取る作業は大変重要です。

【三つは、縁ある人に対する反省です】

この反省の対象は勿論人間です。まず身近な肉親に対する反省、次に隣人に対する反省、友人に対する反省、学校の先生に対する反省、そして職場の上司や同僚や部下に対する反省といった具合に、「反省の対象を広げてゆきます。難しく考える必要はありません。焦らず小出しに少しずつ反省することです。若い人ほど短時間で終えられ、年を取った人ほど時間がかかるでしょう。私の場合は余りにも反省材料が多かったため、何ヶ月もかかったものです。反省している内に、これまで犯した過ちがイモずる式に思い出され、悔悟の涙

で溢れるでしょう。特にひどい仕打ちをした人に対する反省の場合は、大声を出して泣き叫ぶかも知れません。私も大声を出して何度も泣いたものです。

反省の一番肝心な点は、自己弁護を一切しないことです。恥ずかしいこと、罪深いことなど、一切隠すことなく良心の前で懺悔することです。私の場合はキリスト教会で行いましたが、そんなことをしなくても良心の前でやれば良いのです。自分の中に神がおられるのですから、その前で真剣に反省すれば心の汚れは取れるのです。心から反省すれば、色々と不思議な現象が起きるのも反省の特典です。例えば、身も心も軽くなり空中に浮きそうになったり、淡い光に包まれたり、素晴らしい現象を見せられたり、身がとろけるような安らぎを体験したりします。この体験は、こちらが一步近づけば神は百歩も近づいてくれるという、神様からのご褒美だと私は思っています。あまり特典を気にしてもなりません、生命（神）に対する確信を深めるには大いに役立つと思います。

このように真心を持って反省すれば、神の心を打つのです。反省は心の曇りを取り除く、最も手短かな方法なのです。科学的にいつても、波動の打ち消し合いによって悪業が消えるのは間違いありません。どんな極悪人も心から改心したら、同じように神の祝福を受けることができるのですから、罪を犯したからといって

死刑にしてはならないのです。神の許しを得るチャンスを、人の手で奪うことほど罪深いことはないからです。

反省で最も注意すべき点は、犯した罪を悔やみ過ぎ心を曇らせないことです。受け取った教訓を後の人生に生かすことが大切なのであって、心を曇らせたのでは何のための反省か分かりません。ですから反省したらスパッと忘れ、後に尾を引かないようにすることが大切です。もう一点、私たちは肉を持っている限り汚れた社会で身を浸して生きてゆかねばなりませんから、日々の反省が重要になってきます。一日を振り返り、今日自分はどんな思いで過ごしたか。心に汚れはつけなかったか。もしつけたら反省し、その日の心の汚れはその日のうちに取ることです。それが癖になると、一瞬一瞬が反省になります。それができたら、もうあなたの心に一点のシミもなくなるでしょう。

最後に・・・、反省をすると、どうしても気持ちが落ち込みがちになるものです。自分の悪いところを重箱の隅をつつくようにするわけですから、良い気分になれるわけがありません。ですから自虐的になりやすい人は、次のような反省の仕方をお勧めします。まず罪を犯した対象物や人を思い浮かべ、「私はあなたに酷いことをしました。本当に申しわけありませんでした。でもその体験から色々学ぶことができました。あなたは私の恩人です。本当に有難うございました！」と反省の対象物や人に感謝することです。感謝の

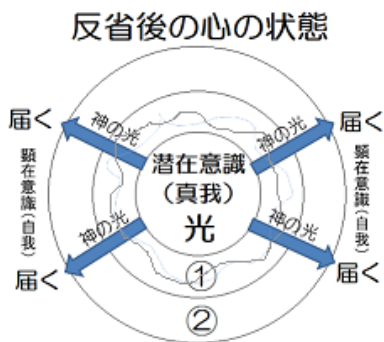
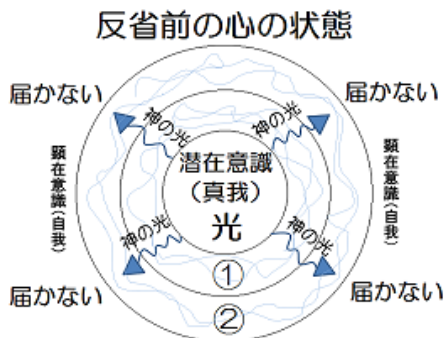
波動は反省の波動と同じですので、波動の打ち消し合いによって犯した罪は消えてしまうのです。この方法ですとあまり心を暗くしなくて済みますので、ぜひお勧めします。

本来この宇宙には、悪もなければ不完全もないのです。だから罪があるわけがありません。目覚めた瞬間業が消えるのはそのためです。しかし悪的波動を出した人は、実際に宇宙空間を歪めているわけですから、反省して打ち消さない限り、歪みを消すことはできないのです。心の汚れをたくさん持ちながら生命の自覚を得ようなど、戦車に立ち向かうアリののようなものです。だから私は、瞑想を始める前にできるだけ心の汚れを取っておく方が良いと思います、反省を勧めているわけです。生命の自覚が簡単に持てるなら、反省など必要ないのです。簡単に持てないから、「反省や懺悔が必要になってくるのです。事実心の汚れを取る前と後では、明らかに瞑想に違いが出てきます。雑念が少なくなり、集中しやすくなり、深く入りやすくなるのです。

それは心のアカが取れ、わだかまりがなくなったからです。反省が先か瞑想が先かと問われたら、私は反省が先だと答えたいと思います。この反省による変化は、第一次の変性変容が起きたことを意味し、悟りの道に踏み込んだ証しと考えて良いでしょう。(図7)

壁に描いた落書き(汚れ)は、消そうと思えば消すことができるが、心に描いた落書き(汚れ)は、心から悔い改めねば消すことができない!

(図7)心の汚れを取る反省



- ①過去生でつけた心の汚れ・・反省によって大方取れるが、完全には取るには生命の自覚が必要である。
- ②今生でつけた心の汚れ・・反省によって完全に取れる。過去生でつけた心の汚れと、今生でつけた心の汚れを持っている限り、神の光は顕在意識に届かないため、光を見ることはできない。反省をし、今生の心の汚れを落とせば過去生の心の汚れもほぼ取れるため、光を見ることが出来る。

○瞑想のメカニズム

瞑想を教えて下さいという人がおりますが、瞑想は教えられるものではありません。瞑想は当人が心の中で紡ぐ、内的作業だからです。もし内側のものを外側のルートを使って伝えるとすれば、余韻も香りも伝えたいものとは似ても似つかぬものとなり、返って人を惑わしてしまふでしょう。だから昔から、瞑想は言葉や文字で伝えられないといわれてきたのです。といって口を閉ざしては前に進みませんので、ここでは私の瞑想体験をできるだけシンプルに伝え、皆さんの瞑想に少しでもお役に立ててもらいたいと思います。

私たちは宇宙生命から生まれた宇宙っ子ですから、瞑想によって呼び水さえ与えれば、本当の自分を思い出すことができるのです。もし私たちが宇宙生命で無かったら、どんな修行をしようが、どんな瞑想をしようが、思い出すことはできないでしょう。思い出せるのは、もともと宇宙生命だからです。

私たちは何億年もの時をかけ、やっと自分は人間である！ 妻子がいる！ 宇宙がある！ と自覚できるところまで成長してきたのです。鉱物や植物は自我を持っていませんが、動物になると少し自我が芽生えてきます。意識核が一定量集まると、自我が芽生えるのです。自我が芽生えると自分が何者か自覚できるようになるわけですが、これを自己に目覚めた生命といい、進化の第一段階を卒業したことを意味します。さらに、宇宙生命だと自覚のできるようになった生命を、本性に目覚めた生命といい、進化の第二段階を卒業し

たことを意味します。そして宇宙生命そのものになった生命を悟った生命といい、進化の第三段階を卒業したことを意味します。

進化の第一段階に達した生命体は、宇宙を認識できるところまで成長しておりますから、宇宙生命から見れば半ば目的が達成されたこととなります。人間は自分を自覚し、さらに宇宙を認識できるところまで成長していますので、今進化の第一段階を卒業した所にいるわけです。しかし、まだ自分が宇宙生命だと自覚する段階に至っていませんので、できるだけ多く意識核を集め生命核を増やす必要があるのです。

瞑想は意識の濃縮作業そのものです。瞑想を続けることによって記憶が蘇ってくるのは、意識核が生命核として濃縮されるからです。これは私の体験からいえることで、まさに最初の自覚は、喉ぼとけに引っ掛かっていた人の名を思い出したような記憶の蘇りでした。でもその自覚の程度は弱いもので、すぐに失ってしまいました。再びその記憶が蘇ったのは、半月ほど後のことでした。今度は絶対忘れまいと、二時間ほど集中して瞑想したのですが、その自覚も電話一本で失ってしまいました。

自覚した時は実際に、私は宇宙生命だと思えるのです。思えている間は光に包まれ心地良く、これが自覚に入った印なのだ嬉しくなったものです。次に自覚がやってきたのは、一週間後のことでした。今度こそ

失うまいと、五時間ほど必死になって瞑想したのですが、夕食をとった後再挑戦してみると、何と自覚が持てないのです。それほど自覚の維持は難しいのです。

この自覚の境地をどう伝えたら良いかは、古今東西覚者達が一様に持つ悩みでした。自覚した時には、本当に宇宙生命だと思えるのです。宇宙を闊歩できる気分になれるのです。宇宙生命そのものに成り切れるのです。これ以上いいようがありません。そのいいようのない自覚は、失うのもまたいいようがないのです。先ほどまであれほど自覚が強かったのに、今はどこにも見当たらない、一体あれは何だったのか？ このように自覚は、寄せては返す波のように揺れ動いているのです。しかし、少しずつではありますが維持できる時間が延びてきて、やがて目をつぶるとすぐに自覚がやってくるようになります。ここまで来ると、もう自覚はどこにも逃げません。

自覚を高めてゆくと意識核が集まってくるので、光が強くなってくるのが分かります。自覚を持たず瞑想すると、自覚を持って瞑想するのと天と地の開きがあるのは、自覚の強弱によって意識核の集まり方に差が出てくるからです。はじめ内的光は見えませんが、自覚が生まれるとボンヤリと紫色の光が見えてきます。さらに自覚が深まると、曇り空の一角から太陽が覗いたような明るさを体験します。人によっては、光の輪

が眉間に向かって飛んで行く体験をします。でも大切なのはそんなことではなく、あくまでも自覚の深さや強さです。内的光が見えるようになった人は、次のような境地で瞑想したら良いでしょう。

- ・ 見えている光に意識を集中し、その意識を光の奥へ奥へと潜り込ませる。
- ・ 意識で光の扉をこじ開ける。

なぜこのような瞑想が必要かといいますと、宇宙生命は私たちの意識の奥深いところに存在しているからです。いわゆる顕在意識は前方に位置し、潜在意識である宇宙生命は奥深いところに位置しているのです。

(場所があるわけではない、イメージとして・・・)

※大和神話に出てくる「天の岩戸」とは、自我の扉(自覚の境界線)のことを指しており、その扉の奥に隠れているアマテラスが宇宙生命(真我・神)なのです。力持ちのスサノオとは、悟りを志す強い思いのことをいっており、その思いによって天の岩戸を開け、アマテラスと対面するわけです。天の岩戸を開けるとは、瞑想によって自我の扉を開くこと、つまり自覚の境界線を超えることを意味するのです。

○瞑想の基本的作業

瞑想の基本的作業は、本当の自分（生命）に一心集中することです。私たちの本性はもともと生命ですから、生命を強く意識すれば、本来の自分に戻れるのです。ではもともと生命である私たちが、なぜ人間と違うようになってしまったのでしょうか。それは気の遠くなる年月、人間と誤解して生きてきたためです。つまり、自分で自分に人間という催眠術をかけてしまったのです。その催眠術を解くには、「私は生命である！」と繰り返し思い続ける作業が必要なのです。なぜ思い続ければ催眠術が解けるかといいますと、想念は実現の母だからです。

私たちはもともと生命ですから、生命になる必要はないのです。人間と誤解している誤解を解くだけです。何度も何度も「私は生命である！」と自分にいい聴かせ、思い聴かせれば、必ず目覚めることができます。そこには根気と忍耐がいるだけで、技術的なものは何もありません。ただ素直に生命の自分を意識し、生命の自分に成り切ることです。

○理解力の伴った瞑想が必要

生命に一心集中する事といいましたが、厳密に言えば、生命が何なのか理解の伴った一心集中が必要なのです。ただ口先で生命と思っても、効果は少ないのです。心の底から生命と思えるには、生命がどのようなもので、どのような働きをするかなど、生命に対する理解が必要ですが、それは覚者の言葉が後押ししてくれます。私が知花先生のDVDの視聴を勧めるのは、DVDの中に理解力を高める強い波動が含まれているからです。ぜひ、視聴することをお勧めします。

ところで一心集中する言葉(マントラ)は、生命に限ったものではありません。理解の伴う言葉なら、「神」でも、「無限」でも、「智慧」でも、「愛」でも、「光」でも、「エネルギー」でも結構です。なぜなら、生命は神であり、無限であり、智慧であり、愛であり、光であり、エネルギーだからです。

私たちの意識は、限定されたもの(物質)に向ければ固着し、抽象的なものに向ければ拡大するようにできております。私たちの帰るべきところは無限生命ですから、できるだけ抽象的なものに意識を向ける必要があるのです。「神・生命・無限・普遍・空・愛・光・エネルギー・智慧」などの言葉は、抽象的で掴みどころがありませんから、意識が拡大しやすいのです。瞑想が単純でありながら奥深い側面を持っているといわれるのは、理解力の伴わない思いは力が弱く、また意識を固着させる物質的思いは波動を低下させるから

です。念を押しますが、生命の自覚を持った人（覚者）の言葉は間違いなく理解力を高めてくれます。ぜひ、生命の自覚を持った人の助言を頂いて下さい。

○瞑想の大切な要点

- 一、 瞑想で一番大切なのは根気です。何の変化が起きなくても続ける意志の強さが必要です。
- 二、 想念の力を利用し成し遂げようというのが科学的瞑想法ですから、思いを常に生命（真実）に向ける必要があります。その意味では、真理の話聞いてる時も、花に生命を感じている時も、海や山に生命を感じている時も、みな瞑想していることになるのです。ただ目をつぶってやることだけが、瞑想でないことを知って下さい。

三、 瞑想を限定しないで下さい。瞑想は形ではなく、あくまでも意識状態です。座り方がどうか、手足の恰好がどうか、息の吸い方や吐き方がどうか、目のつぶり方がどうか、そんなものに囚われないで下さい。いかに意識が真実に向いているかが大切なのです。それは座っていても、寝ていても、歩いていても、トイレに入っても、料理をしていても、電車に乗っていてもできるはずですよ。この少しずつの積み重ねが後々大きな成果を生むのですから、少しの間も見つけやってみて下さい。

四、慣性の法則を利用するのも、科学的瞑想法の一つです。何でもそうですが、始め動かす時は力がいりますが、惰性がつきだしたら案外と知らないものです。瞑想も同じところがあり、思いを集中させ惰性が付きだしたら、知らず知らずの内に奥深いところまで意識が潜り込んでゆくものです。

五、瞑想していると、どうしても雑念に邪魔され深く入れません。その場合、雑念と戦わず放っておくことです。放っておけば、雑念は消えてゆきます。どうしても消えない場合は、時を改めてすることです。一つ良い方法があります。それは連続的祈りです。連続的祈りとは、隙間を与えない瞑想のことです。例えば、「吾生命なり！」と思いつくと同時に、「吾生命なり！」と思いを重ねるやり方です。

六、義務的瞑想なら止めましょう。やりたいから瞑想をすることです。強い信念に基づいた瞑想が大切です。

七、瞑想は時間を決めてやるものではありません。やりたいと思つた時が瞑想の時間です。何時間しなければならぬとか、何時までしなければならぬといった限定瞑想は止めましょう。解きたくなるまでやるのが瞑想です。それは納得した時です。瞑想は納得のゆくまでするものです。「今日の瞑想は有意義だった！ 確かな手ごたえがあった！」と思えるまで続けられたら最高です。

八、瞑想はやりたい気分になった時やれば良いという人がおりますが、私はノルマを課してやるべきだと思っています。なぜなら、私たちは常に物質の誘惑を受けているため、ややもするとその誘惑に負け、瞑想をやる気分をそがれてしまうからです。その誘惑に打ち勝つには、自分にノルマを課することが必要なのです。

九、瞑想の真髄は生命の自覚を持つことですが、それは自分を生命と認められるか、認められないかで決まってきます。しかし、なかなか認められないのが人間癖を持った私たちです。その認められない自我の思いを打ち砕くには、繰り返し繰り返しが必要なのです。瞑想は理屈ではありません。繰り返し繰り返しの単純作業です。

十、できるだけ覚者に添って下さい。もしくは、それに近い波動を出す人に添って下さい。その見分ける目を養うのも、大切な学びの一つです。波動は嘘つきませんから、波動に従えば間違いありません。

○相対させながら問う瞑想

さて瞑想の一つに、相対させる自問自答の瞑想があります。私は「重く・汚く・無能で・不自由な人間か」、それとも「軽く・清く・全能で・自由な宇宙生命か」、と自分に問いかける瞑想です。何度か問いかけている内に、「軽く・清く・全能で・自由な宇宙生命である」という思いが、気持ちの良い波動と共に出てくる

はずです。その思いには実感が伴っていますから、その思いを忘れないよう、自分は生命である！ 自分は生命である！ と繰り返し繰り返し心に訴え続けることです。この瞑想は、生命の自覚を深めるのに大いに役立ちます。

不思議なもので、相対物の違いの差が大きければ大きいほど自覚が得やすいのです。だからいつも知花先生は、あなたは「人間ですか生命ですか」、「個人ですか無限ですか」、「闇ですか光ですか」、と相対させて話すのです。例えば、日本人と日本人を並べてみてもあまり違いが分からないけれど、欧米人と並べてみたら違いがはっきりと分かります。ぬるま湯からぬるま湯に入っても違いが分からないけれど、熱い湯から冷たい湯に入れば違いがはっきりと分かります。同じように、人間と生命を比べれば違いがはっきり分かるので、自覚が得られやすいのです。ぜひ、やってみてください。

○思索を巡らせる瞑想

さらに思索を巡らせる瞑想があります。一例として、「自分はなぜ宇宙生命なのか」、「私の意識は一体どこから来ているのか」、「私の意識がなくなったら宇宙はどうなるのか」、など自分に問いかける瞑想です。始めはすぐに答えは返ってきませんが、リラックスしている時などにヒラメキとして、あるいは気付き

として返ってくるようになります。気付きは理解力を高めますので、これを上手に利用すれば自覚を深める武器になります。またこの道筋が付けば、問いかけに対し即座に答えが返ってくるようになります。これは実に不思議な気分です。学んだことのない知識や智恵が、フツフツと自分の思いとなって湧き上がってくるのです。しかも、その解答には実感が伴っているのです。ただし、何でも回答が与えられるわけではありません。神は知識欲を満足させる回答は与えないのです。本当に今必要な回答、それも今の理解力に相応した回答しか与えないのです。

このように思索を巡らせる瞑想は、生命とのつながりを深めてくれるのです。思索の題材は、普段疑問に思っていること、心に引っかかっていることなど、自分で考えて下さい。必要なら、きっと回答が与えられるでしょう。ちなみに、このメッセージに書かれている内容の殆どは、そこから得たものです。

○光を放射する瞑想

生命に一心集中していると内的光が見えてきますが、その光をイメージ力を持って全世界に放射するのが、光を放射する瞑想です。一旦イメージした光は自動的に流れますので、流れるままに放っておきましょう。その光エネルギーは、癒しを必要とする人のところに届くと同時に、地球をも宇宙をも浄化し、さらにエネ

ルギーの道を太くするという、三重四重の効果をもたらしてくれます。与えれば与えられるの法則は、ここでも生きているというわけです。

さて、自覚の高まりはエネルギーの高まりと比例していますので、ドンドン意識を高めてゆくと、眩いばかりの光に包まれるようになります。それはそれは、まるで光のドームの中にいるような感覚です。またそれとは別に霊太陽が見えてきますが、その光は目を潰すほど強烈です。（慣れてくると霊太陽の輪郭まで見えるようになる。）でもそんな現象に囚われ、自覚の思いを置き忘れてはなりません。あくまでも生命の自覚を高めることに主眼を置いて下さい。

○誰もが通らねばならない瞑想の道

生命に一心集中する瞑想を続ける内に、必ず自覚の訪れる時がやってきます。その証が内的光と細胞の振動です。この現象は、自覚が得られた印と思っただら良いでしょう。すなわち、自覚の境界線を超えた証です。自覚が得られた時は、何をやっていても中止し、一心に自覚の味を噛み締めることです。味がなくなるまでしゃぶり続けることです。自覚する、自覚を失う、自覚する、自覚を失う、しばらくこの繰り返しは続くでしょうが、やがて目をつぶるとすぐに自覚がやってくるようになります。

自覚がどのような意識状態か伝えることはできませんが、一つだけいえることは、自覚の深さに際限はないということ。浅い自覚から深い自覚まで、その意識段階は無限に存在するということです。だから少々自覚が得られたからといって、そこが終着点だと思わないで下さい。ただ節目節目はあるようですので、一つの節目にたどり着くまでは根気よく続けて下さい。

私は悟らなくても結構ですといえないのは、人間が宇宙生命ゆえの宿命だからです。どんなに嫌だと駄々をこねても、この悟りの道だけは避けて通るわけにはゆかないのです。ならば、やるしかないのではありませんか。

さてここまで瞑想について述べてきましたが、瞑想は何かの御利益を得るためにやるものではありません。あくまでも生命の自覚を得るためにやるのです。不純な目的意識を持ってやれば、邪悪な波動に侵されかねませんので、ぜひ、正しい目的意識を持ってやって下さい。

瞑想で大切なのは形や作法などではない！あくまでも意識状態である。

(2) 人はどう変わる？

○制御されている人間の能力

この宇宙は、水も漏らさぬ完璧な仕組み（法則）によって営まれております。その一つが、生命の自覚に比例して能力が蘇るといふ仕組みです。人間は生命の子ですから、本来なら生命と同じ能力が使えて当然なのですが、今の人間は全くの無力です。それは、生命（神）に対する自覚が乏しいからです。というのも、自覚の乏しい魂に偉大な能力を与えては宇宙を破壊しかねないので、神は自覚に応じて能力が蘇るようプログラムされたからです。人間は人間の自覚を持って生きる限り人間としての能力しか使えませんが、生命の自覚を持つようになれば、制御されていたプログラムが解除され偉大な能力が使えるようになるのです。それも浅い自覚には浅い自覚に応じた能力が、深い自覚には深い自覚に応じた能力が・・・。

例えば、唯物的な自覚を持っている間は物の制約に阻まれ不自由な生き方しかできませんが、生命の自覚が持てれば物の制約を受けなくなるばかりか、物を自由に操れるようになるのです。そんな馬鹿など疑われるかも知れませんが、宇宙の仕組みは人間の常識を遥かに越えたSFの領域にあるのです。今の地球人類

は、井の中の蛙同然の見識しか持ち合わせていません。でも井戸の外には、人類の常識をはるかに超えた世界が広がっているのです。

○変化の様子を見る

先に、生命の自覚が高まれば変性・変容が起きるといいましたが、どのような変性・変容が起きるのか、ここで説明したいと思います。といっても自覚の程度は人様々ですから、変性・変容の内容も人それぞれ違います。ですからここでは、一般的な変性・変容について説明したいと思います。

一、生命を知識的に知り、かつ生命を意識して生きるようになった人の変性・変容（第一次の変性変容）

- ・ 謙虚に反省するようになる。
- ・ 淡い光で満たされるようになる。
- ・ 良心に従って生きるようになる。
- ・ 悪心があまり持てなくなる。
- ・ この世的な雑談をあまり好まなくなる。
- ・ 人生の目的をしっかりと見据えて生きるようになる。

・物欲や、金欲や、権勢欲や、自己顕示欲が少なくなる。

・物事にこだわらなくなる。

・心が平安になるので、物腰が穏やかになり、静かな人になる。

・争いを起こさない人になる。

この他にも変化が起きてきますが、その変化は意識状態により人様々です。人間はほぼ同じ形に造られていますので、外側から意識の高さを推し量ることはできませんが、肉体を脱いだ時その差は歴然とします。ですから、今何も変化が起きないからといって落胆しないで下さい。さあ、無駄な人生で終わらせないためにも、できるだけ生命を意識して生きましょう。もし地球人類の一割でも、生命を意識して生きることができれば、理想世界はずっと近づくでしょう。

二、生命を自覚した人（自覚の境界線を越えた人）の変性・変容（第二次の変性変容）

・細胞が振動する。黄金の光で満たされるようになる。

・物欲・色欲・食欲・などの本能的欲望のコントロールができるようになる。

・自己顕示欲・権勢欲など、一切の欲望がなくなる。

・想念のコントロールができるようになる。

・直感が働くようになる。

・愛深い者となり、世のため人のために尽くしたいと思うようになる。

・何でも許せる人になる。

・言葉少ない静かな人になる。

・思った事が実現しやすくなる。

・智恵深い者となる。

・瞑想によって光を放出し、地場を、国を、世界を、宇宙を、清められるようになる。

・体が軽く感じられるようになる。

・体が柔らかくなる。

・胸が熱くなる。(宇宙エネルギーとつながったため)息が熱くなる。人によっては口の中が火傷するこ

ともある。

・息を吹きかけ物の性質を変えたり、病を癒したりできるようになる。

・強烈な宇宙エネルギーを込めて話せるようになる。

・食事の量が減る。

・睡眠時間が短くなる。

・疲れを知らなくなる。

・病気をしなくなる。

・粗雑な細胞から精妙な細胞に変質する。

・もう一つの目が開かれる。(理解力が増すことによって、物の本質が光として見えるようになってくる。

これが第三の目とか心眼とかいわれるものです)

この他にも言葉で伝えられない恵みが与えられますが、その恵みの内容は意識状態により人様々です。でもその域に入った人は、その恵みを、世のため人のため地球のために使ってほしいと思います。

三、生命そのものになった人の変性・変容(第三次の変性変容)

ヒマラヤの聖者のような変化が起きますが、一般人にとってあまりにも現実離れし過ぎているので、現時点では触れないでおきます。

生命を意識して生きるようになった人の変性変容(第一次の変性変容)は、極端な形でやってくるのではなく、自然な形でやってくるのです。でも生命の自覚のできた人(第二次の変性変容)の変性変容は、はっきりとした形でやってきます。この変性変容の起きた人を自覚の境界

線を越えた人といい、進化の第二段階を卒業した人です。私たちは当面、この境界線を越えることを目標に精進すべきでしょう。

【三つ目の目を開くには】

私たちはこの表現の世界に出るに当たり、二つの目が与えられました。一つは見える物を見る目、もう一つは見えないモノを観る目です。見える物を見る目を肉眼といい、見えないモノを観る目を心眼あるいは理解眼といいます。この二つの目を上手に使い分けることで、私たちは表現の世界で迷いなく生きられるのです。でも残念なことに人間は、物質に目がくらまされ肉眼だけを使うようになりました。その結果二七モノとホンモノの識別ができなくなり、様々な悩みや苦しみを背負うようになったのです。

では、どうすれば心眼は開かれるのでしょうか。それは、すべての物が一つの見えない本質（生命）で造られていることを心底で理解することです。そのことが心底で理解できるようになると、物質を光（生命||光||物質）として観られるようになるのです。心眼のことを理解眼と呼ぶのは、理解力が物の本質を観えるようにするからです。物の本質は光ですから、物の本質が心底で理解できるようになると、物質の中に光を観ることができるようになるのです。

例えば色の基本色は白色ですが、白色の中にすべての色が包含されると心底で理解できると、白色の中にすべての色を観ることができるようになるのです。ということは反対に、すべての色が白色の一部だと心底で理解できれば、どんな色を見ても白色に観えてくるわけです。心眼を開くには、物の共通項を探すことです。形を見ればたくさんあるので共通項は見出せませんが、本質を見れば共通項は一つ（生命・光）ですから、生命として、光として、観られるようになるのです。

（3）社会はどう変わる？

○社会の役割

どの時代の社会にも、その社会にしかできない役割を持っているものです。ですから今日の矛盾に満ちた社会にも、ちゃんとした目的があり役割があるのです。

地球には最終段階に入った魂、生まれたばかりの魂、その中間に位置する魂など、様々な魂が混在しております。それら遍歴の違う魂は、同じ舞台の上で出会い、同じ舞台の上でドラマを演じ合うことにより、少しずつ成長してゆくよう計られています。たとえば熟した魂は、丸みを帯びた石です。幼い魂は、鋭い角の

ある石です。中間の魂は、少し角の取れた石です。鋭い角を持った石同士が直接ぶつかり合ったのでは大変ですから、丸みを帯びた石が入って潤滑油の役割を果たします。また少し角のある石は、その両者の間に入って滑り止めとなり、ほど良い摩擦を生みだす役割を果たします。こうして適度な摩擦の中で角が取れ、円みを帯び、少しずつ石が磨かれてゆくのです。今の社会は、その舞台を提供する格好の役割を果たしているのです。

確かに今の社会は、弱肉強食まがいの厳しい社会に見えます。しかし隠れたところで、互いに助け合い補い合う社会になっているのです。つまり自分が生きるために必死にやっていることが、結果的に人助けになっているわけです。支える者と支えられる者が、適切な時期に出会い設定された課題をこなすには、今の社会は恰好のシステムなのです。これは縁と欲と情が絡み合いながら学びの材料を提供し合う、相対社会ならではの妙技といって良いでしょう。だからこの社会は、そのままにして使命を果たしているわけです。とはいっても、いつまでもそのような社会であってはなりません。そうです。今の社会に終止符を打たねばならない時期が、刻々と近づいているのです。すなわち、今まで他人を競い相手としていた相対的試練の社会から、自分を競い相手とする絶対的試練の社会へ変わってゆく時期が近づいているのです。

○社会が変わるための前提条件

幼い社会は分けることを好みます。でも分ければ分けるほど、勘定が合わなくなってゆきます。分ければ分けるほど、複雑化してゆきます。分ければ分けるほど、意見の対立が激しくなり、争い事が多くなってゆきます。でも大人の社会は、一つになることを好みます。そうなれば社会は簡素化されるため、意見がまとまりやすくなり、秩序が保たれやすくなり、争い事がなくなってゆきます。理想社会を築くに当たり一番注意しなければならない点は、できるだけ簡素簡潔を心がけることです。そのためには、まず人間の本性を知ることです。つまり正しい真理を身に付けることです。

私たちは第一章で、人間の本性が生命であることを知りました。つまり、万象万物は一つの生命の現われであり、人間一人ひとは全体であり、全体は一人ひとりであることを知ったのです。この全体は一人、一人は全体という真理を納得して受け入れることが、理想社会を実現する上の前提条件なのです。もし人類が、この前提条件を納得して受け入れることができたなら、今日のような弱肉強食の社会から、共存共栄の社会へ転換してゆくことでしょう。人生の目的がお金や物を得ることから、本当の自分を知ることへ変わるわけですから、社会もそれに沿った姿が変わって行くのは当然だからです。では人類が本当の自分に目覚めたとき、人間社会はどう変わって行くか見てゆくことにしましょう。

○お金のない社会に変わる

【貨幣は人的なものである】

経済は配分の哲学であるといわれるように、経済を語る時にこの配分問題を避けて通るわけにはゆきませぬ。今日この配分は、市場経済（資本主義経済）によって行われておりますが、その中枢を担っているのが貨幣制度なのです。

金が敵の世の中といわれるように、人生劇場で演じられるドラマの殆どが金にまつわる悲劇でした。しかし人間は、一向に貨幣を手放そうとしません。どうも人間は、貨幣というものがこの自然界にもともとあり、どうしても使わなければならないような錯覚に陥っているようですが、これは人が社会生活を営む中で必要に迫られ作られた、純粹に人的なものなのです。ですからなくせるものなら、一日も早くなくすべきなのです。もし貨幣がなくなり一切の損得勘定ができなくなったら、人が本来持っているところの真心が蘇り、争いのない穏やかな社会になることでしょうか。ではどうしたらこの社会から貨幣をなくすることができるか、その方法を次の論拠を持って示したいと思えます。

【貨幣の要らない論拠】

経済の源をたどってゆくと、まず自然の恵みである資源や土地①を取り上げなくてはなりません。次に、それを製品化する労働力②が必要です。また、生産技術③も忘れてはなりません。さらに、資本④もなくてはなりません。最後に、流通や販売にかかわる商行為⑤が必要です。この五つの要素が支えあって、今の経済は成り立っているはずですが、でも良く考えてみると、この五つの要素はいずれも労働力の問題であることに気がきます。

例えば、①の資源や土地を実際に使えるようにするには労働力が必要です。③の生産技術も労働力（智恵や工夫も含む）の問題です。⑤の流通や販売にかかわる商行為も労働力の問題です。④の資本についても、労働力を集める力のことですから、これも労働力の問題です。ということは、①から⑤のいずれの要素も、みな労働力の問題であるということになります。

「経済を支えている大黒柱は労働力である！」、という論拠をまず示しました。

もしこの労働力を自然界の贈り物のようにタダで確保できたら、すべての物もサービスもタダにできるのではないのでしょうか。現代の経済学は次のようにいっています。

「労働力という商品の価値は、労働力の再生産に必要な生活材（サービスも含む）を生み出す価値に等しい・・・すなわち、労働力という価値が生活材の価値を規定し、また生活材の価値が労働力の価値を規定し返す」と・・・。

ならば生活材をタダにしたら、労働力もタダになるのではないのでしょうか。いや先に労働力をタダにすれば、連れて生活材もタダになるのではないのでしょうか。賃金は下げられないと思っっていますが、発想を変え賃金を下げてみることにしましょう。労働力の価値100であったものを、50に、さらに30に・・・、このように下げられたら、生活材の価値も50に30に下げられるのではないのでしょうか。1000円であった物価が500円や300円になれば、賃金が半分になっても、3分の1になっても、生活できるはずだからです。といつても労働力の価値を0にしない限り、貨幣はどこまでもついてきますから、この考えをもう一歩前進させ、労働力の価値を0にまで下げてみることにしましょう。さあ、どうなるのでしょうか。

労働力の価値を0にするということは、無報酬で働くということになります。もしそれが可能なら、当然物の価値も0になるはずですが、物の価値も0、労働力の価値も0なら、そこに貨幣は必要でしょうか。貨幣が必要なのは価値差を埋めるためですから、労働力がタダになり価値が一切存在しなくなれば、価値差を埋める貨幣は必要なくなるはずですが、同じ重さなら重さを測る秤がいらぬように、同じ価値なら価値を測る

貨幣は必要ないということです。では本当に貨幣は必要ないのか、貨幣の職能とも照らし更に検証してみることにはまいしょう。

貨幣には、次のような職能があります。

- 一、交換価値を持つ。
- 二、価値の尺度を示す。
- 三、支払いの手段である。
- 四、価値の貯蔵をする。
- 五、利潤を得る手段に利用される。
- 六、あらゆる権利の決済手段あるいは交換手段として利用される。

一から三までの職能は、価値差を埋めるために利用されているものですから、すべてのものがタダになり無価値になれば、これらの職能は不要になるはずですが、つまり、すべてのもの（労働力も含む）が等価値になれば、比較衡量する必要がないので、貨幣を介在させる必要はないということです。四と五は、欲と得を満足させるこの社会特有の職能ですから、仕組みさえ変えればなくても何ら問題ないはずですが、最後の六の職能も、後に出てくる配分哲学が理解されれば不要なものです。このように考えると、貨幣は人間のご都合

主義で使われている、単なる価値の橋渡し役にしか過ぎないことが分かります。渡す価値がなくなれば、橋渡し役は不要ですから、貨幣など必要なくなるのです。以上、貨幣のいらない論拠を示しました。

私たちが生きて行くために必要なのは、唯一労働力です。労働力さえあれば、何がなくても人間は生きて行けるのです。今日その労働力は、物と同じ商品扱いされていますので、どうしても売買の対象になってしまいます。労働力が売買の対象になれば、そこから生まれた物も売買の対象になるため、どうしても貨幣が必要になるのです。でも労働力がタダになれば、すべては売買の対象外に置かれますので、貨幣は必要なくなるのです。つまり金のかかった労働力から生まれた品物にはお金は必要ですが、タダの労働力から生まれた品物にはお金は必要ないということです。

人間がタダ働きする発想は、今の社会では非常識かも知れませんが、本当の人間を知った社会なら、違和感なく受け入れられるでしょう。すなわち、「私はあなた、あなたは私、一人は全体、全体は一人」という真理が定着すれば、労働力は社会全体のものになるので、そこから生まれた品物はすべて無価値になり、もう価値差を埋める貨幣は必要なくなるということです。あなた私がある社会のみお金が必要なのです。

肉体を自分だと思えば、どうしても保身に走るので、物を多く得たいお金をたくさん稼ぎたいと欲を持つのは仕方がないでしょう。しかし自分の本性が生命だと知れば、肉体保全是二の次になるので、物やお金集

めに躍起になることはなくなるのです。貨幣を使っている社会はまだ幼い社会です。ですから貨幣を使っているかいなかで、その社会の熟成度を知ることができるのです。

○私有財産のない社会に変わる

人間は何の疑いもなく物を私物化していますが、本当に私物化できる物がこの世にあるでしょうか。地球上に存在する物は、生きている間一時使わせてもらっているだけで、私物化すべきものではないはずです。人間はいつか必ず死にます。ならば、生きている間だけ借用できれば良いのではないのでしょうか。

この世に私物は存在しないと同時に、使ってならない物も何一つ存在しないのです。ただこの物質界は、時空が重なりとぶつかり合うという不都合が生じるので、ぶつかり合わないよう一時誰々の物と区別しているに過ぎないのです。本来物は、必要とする生き物のものなのです。人間に限定すれば、必要とする人のものなのです。本当に必要なら、今誰かの手の中にあっても必要とする人のものなのです。例えば、今ある場所ですらどうしてもペンシルが必要になったとしましょう。隣にペンシルを持った人がいたら、その人から借用するのは当然です。今の社会では使用後ペンシルを返すのが常識ですが、あなた私のない社会では、必要な持ち帰っても許されるのです。そのペンシルは、その後も必要な人の手を渡り歩くことで、多くの仕事を

してくれるでしょう。一人に使われるより多くの人に使われる方が、どれほどペンシルも嬉しいことでしょうか。ペンシルを貸した人も、必要なら人から借りれば良いのですから、何の問題もないはずです。

食べ物など私物化しているように思われるかも知れませんが、食べ物は食べたらずでそれでお終いでしょか。食べ物は食べた人のエネルギーとなって、人のために、社会のために、自然のために、形を変え働き続けているのです。エネルギーは、エネルギー不滅の法則に基づいて、決してなくなることはないのです。捨て水がないように、捨てエネルギーもないのです。どのように姿を変えようと、何に使われようと、誰に使われようと、エネルギーは必要な役割を延々と果たしているのです。

役所内で使われているペンシルは、どこの窓口で誰が使っても良いはずで、社会で使われているペンシルは、社会のどこで誰が使っても良いはずで、地球の中で使われているペンシルは、地球のどこで誰が使っても良いはずで、本当に必要な物は、必ず手に入るようになっていて、それが必要な高ければ高いほど、手軽に入るようになっていて、どうしてもペンシルが必要なから、近くにペンシルを持った人がいたのです。どうしても食べ物が必要なから、そこに餌が現れたのです。どうしても必要だから、身近に穀物が、野菜が、果物が、魚が取れたのです。自然の仕組みはそのようにできているのです。

良くできているといえ、必要とする物ほどたくさん存在し、また手軽に入手できるといふ不思議さです。自然は必要度合いを見透かすように、段階的制約をつけているのです。例えば、空気は一番必要とするので何の制約もありません。水だって、空気に次いで手軽に手に入ります。サンマやイワシなどの魚も、つい最近までは手軽に手に入りました。穀物も野菜も果物も魚も、庶民向きほど手に入りやすく、また栄養価も高いのです。このように自然は必要性を見透かすように、生きるのに必要な物は身近にたくさん置き、必要でない物は遠くに少なく置いてくれているのです。この配剤の巧みさは、神の愛の現れだと私は思っています。ですから需要と供給のバランスが崩れること自体おかしな話なのです。自然は当たり前を当たり前の如く演じているだけです。その当たり前を崩しているのが、人間の欲望なのです。水の取り合いなどは、その典型的例といって良いでしょう。

あなたの物、私の物と区別する世界では、常に競い合いや奪い合いや争い合いがつきものです。でも区別のない世界では、競い合いも争い合いも奪い合いもないのです。あるのは許しの心のみです。ですからその社会では、「あなたからお先にどうぞ！ いいえ、あなたからどうぞ！」といった市場風景が、日常茶飯事見られるのです。

○価値に縛られない社会に変わる

本来、価値など存在しません。なぜなら、価値を生み出しているのは、人の無知と欲だからです。この世に不必要な物は何一つないのですから、価値の生まれる道理がないのです。もしあるとすれば、対等の価値のみでしょう。対等の価値しかないなら、価値は存在しないことになりませんか。

価値を戒めた話に、ジャックと豆の木の童話があります。ジャックは純粋な天の心を持っていましたので、物の交換を損得ではしませんでした。でも地の心を持つお母さんしてみれば、牛一頭と豆五粒との交換は大変な損でした。お母さんはジャックを叱ります。でもその豆が、後にジャックに幸せをもたらしたのです。

私たちは物に価値があると思っていますが、物そのものに価値があるのではなく、労働力（労働力には智慧も含まれる）が物に価値を与えているのです。いい換えれば、心が物に価値を与えているのです。なぜなら、労働は心がするものだからです。どんなに資源が豊富でも、労働力が乏しければ宝の持ち腐れといわれるのも、物に価値を与えているのは労働力だからです。労働力こそ、価値を生み出す打出の小槌なのです。物質は有限ですが、労働力は無限です。無限は価値を消滅させますので、無限の労働力から価値は生まれようがないのです。なぜ人間は争い合うのでしょうか。なぜ人間社会は不自由なのでしょうか。それは価値に囚われるからではないでしょうか。そうです。不自由も、争いも、価値に囚われるから生まれるのです。

もし人間が価値に囚われなくなったら、自由で争いのない社会がやってくることでしょう。自由は当たり前です。不自由は当たり前ではありません。人間は価値という不自然なものを追いかけるがゆえに、当たり前を当たり前でなくしているのです。

○奉仕労働力によって営まれる社会に変わる

「ではこの世から価値をなくすには、どうすれば良いのでしょうか。」

労働力を無価値にすることです。そのためには、労働力を自由開放しなければなりません。自由な労働力が手に入れば、そこに価値が生まれるわけがないからです。

「では労働力を自由解放するには、どうすれば良いのでしょうか。」

労働力をタダにすれば良いのです。労働力がタダになれば、すべての物は対等の価値に収まりますから、黙っていても価値は消滅してしまうのです。すべての物が同価値になれば、価値評価ができなくなるのは当然でしょう。

「ではどうすれば、労働力をタダにすることができるのでしょうか。」

労働力をお金や権力で縛るのではなく、人々の自由意志で社会的財産にすることです。つまり、労働奉仕をしてもらうのです。人々の労働力を無報酬で提供し合い、その労働力に何の制限も制約もつけず、ただただ社会のために使ってもらうのです。そこには誰彼の労働力があるのではなく、社会全体としての一つの労働力があるだけです。それでは社会主義や共産主義と何も変わらないと思われるかもしれませんが、いいえ大違いです。社会主義や共産主義は唯物社会ですが、この社会は唯心社会です。人生の目的がまるで違うのです。この社会の人生の目的は、本当の自分を知ることです。経済はその目的を達成する手段に過ぎないのです。手段と目的を取り違えるから、おかしい社会になるのです。

・社会主義社会(共産主義社会)——権力が人を労働に駆り立てる。

・資本主義社会——金力が人を労働に駆り立てる。

・奉仕社会——人生の目的が人を労働に駆り立てる。

労働力がタダになれば、物の価値が存在しなくなるばかりか、職業の価値も能力の価値も量的価値も、一切存在しなくなるでしょう。そうなると、物の配分に何の哲学もいらなくなります。自由取得制度が採用されるのは当然の成り行きです。私は労働奉仕と自由取得制度を旗印とする社会を、「奉仕社会」と命名したいと思います。このような社会を現実のものとするには、いかに労働力を社会的財産にできるかにかかって

います。損得を一切考えず、労働力をタダで提供する人が多くなれば、理想社会は当然の如く訪れるでしょう。

○無理な生産をしない社会に変わる

今日の社会において物の生産は、消費者の欲望を企業側がくすぐる形で行われていますが、本来物の生産は消費者側の要望に応じて行われるべきなのです。本来にこの物が必要だから、この物を生産するのです。本当にこれだけ必要だから、これだけ生産するのです。売るため儲けるために生産するのではなく、生活を賄うために生産するのですから当然です。

このように生産は、消費者の要望に応じて行うのが正しい姿なのです。そのためには、地域で賄う生活物資はできるだけ地域で生産し、地域の人が使うべきです。地場生産・地産地消がそれです。地域人の必要な分だけ作るのですから、そこに無駄が生まれるわけがありません。だから今日のように、畑や工場や市場で廃棄処分されることはなくなるのです。今日の社会においては儲けが先行しますので、どうしても無理な生産手法を取らざるを得ません。化学肥料や農薬が使われるのはそのためです。しかし儲ける必要のない社会

では、無理な生産手法を取る必要がないので、クリーンな実りを手にすることができるのです。それも、豊かな労働力を持った奉仕社会ならできる話です。

人間は物を多く持つことに幸せを感じていますが、持てば持つほど厄介を背負うのが物なのです。あなたは引越しの際、たくさん物があって困ったことはありませんか。物は必要な物だけ、必要な量だけ、あれば良いのです。できるだけ身軽な方が良いのです

○差別化のない社会に変わる

今日の社会では、できるだけ商品の差別化を図ろうとします。それは他の商品より良く見せかけ、売り上げの増進を図りたいからです。つまり儲けたいからです。でも 儲ける必要のない社会では、そんなところに労力がつぎ込まれることはなくなるのです。むしろ 商品の統一化が図られるでしょう。この差別化の廃止は、経済だけに止まらず、政治、教育、科学、スポーツ、芸術など、あらゆる分野で行われるでしょう。それでは独創性がなくなってしまうのでは、と思われるかもしれませんが、そのような心配ありません。なぜなら、この社会では上辺(形)より中身(心)の方が重視されるからです。この差別化について語ると、大変な紙面が必要になりますので、別な機会を設けて詳しく説明したいと思います。

○良心に基づいた配分社会に変わる

本来配分は、必要度合いに応じて、等しく分け与えられるべきです。しかし今日の資本主義社会においては、強者が豊かになり弱者が貧しくなるといった偏りを見せております。物や金を得ることが人生の目的なら、弱肉強食社会も止むを得ないかも知れません。でも人生の目的は、何度もうのように本当の自分を知るためにあるのです。ならば食べるために苦勞する社会であっては、いけないのではないのでしょうか？

奉仕社会における配分は、一人ひとりの良心がするのです。必要度合いを決めるのも、一人ひとりの良心です。どれほど必要としているかは、誰よりも本人が知っているからです。この良心に基づく「自由取得制度」こそ、奉仕社会の誇りとするところです。もうそこに貧乏人も金持ちもありません。このようにいうと、怠けて働かない人も一生懸命働く人も、同じように自由取得できるのでは不平等ではないかといった疑問がわくかも知れません。でもそれは、愚問というものです。なぜなら、子供の頃より真理を学んでいる者が、怠け心を起こすわけがないからです。この社会では、人の仕事を譲ってもらう人はいても、怠けたくて人に仕事を押し付ける人など一人もいないのです。

では欲張りな人は、たくさんものを持ち帰るのではないか、といった疑問もわくかも知れません。確かに、貨幣社会なら物売って一儲けできるので、そのような人も出てくるかも知れませんが、貨幣のない社

会ではそれができないので、そのような人は出てこないのです。いつでも自由に取得できる社会で、どうして煩わしい思いままでして余分な物を持ち帰ろうとするでしょうか。だからこの社会では、欲張る人も、競い合う人も、奪い合う人も、盗人も、いないのです。

○労働力の豊かな社会に変わる

今日直接モノづくりに参加している労働者は、半数以下だといわれています。では後の半数の労働者は、一体何をしているのでしょうか。そうです。半数以上の人たちが、売るため、儲けるため、会社を大きくするための仕事をしているのです。私からいわせたら、そんな労働者は無駄働きをしているのです。また、労働力の豊富な社会が豊かな社会であるべきなのに、今の社会は、労働力が余れば余るほど、失業者が溢れる混乱した社会になっております。

儲ける必要のない奉仕社会では、営業行為も販売行為も宣伝行為も必要ありませんから、全員モノづくりに参加できます。また貨幣のない社会では、銀行も証券会社も保険会社もありませんから、そこに労働者をつぎ込む必要もありません。また物に執着しなくなった社会では、必要以上の買物物は控えられますから、生産や物流や販売にかかわる労働者も今の半数以下になるでしょう。さらに流通機構や販売機構も簡素化さ

れますから、そこで働く人たちも三分の一以下になるでしょう。したがって奉仕社会では、あり余る労働力が確保されるのです。その余りある労働力は、どのように使われるでしょうか。皆さん、一度ゆっくり考えてみて下さい。

○良心を法の要とする社会に変わる

「自由に目覚めた馬達は、何者にも邪魔されない自由な放牧地を望みました。その結果、囲いも柵もない自由な放牧地を得たわけですが、あまりにも放逸な自由を得たために自由のぶつかり合いが生じ、多くの問題が持ち上がってきました。仕方なく、対処療法的に原野に柵を巡らせ自由の衝突を避けようとしたのですが、次から次へと問題が持ち上がってきたために、柵はそこら中に張り巡らされるようになり、今や柵の中で縮こまって生きなければならぬほどになったのです。少々不自由でも、大きな囲いの放牧地を望んだなら、これほど不自由な生き方をしなくて済んだでしょうに……。」

今日の社会は、法律や規則や罰則で縛られた息苦しい社会です。これでは真の自由社会とはいえません。真の自由社会が欲しければ、大きな囲いの放牧地を求めるべきです。大きな囲いとは良心のことを指してお

り、良心に生きれば法律や規則や罰則など、何の柵もいらぬのです。あなたは、良心の嘯きを聞いたことがありますか。

「そんなことをしたら後悔するぞ！」

「安心して眠れないぞ！」

「止めろ！」

良心の嘯きは、生命の嘯きなのです。本当の自分の嘯きなのです。良心に恥じない生き方をする人が多くなれば、社会に裁く人も裁かれる人もいなくなるでしょう。もともと人が人を裁くこと自体、おかしい話なのです。なぜなら、裁きは父と子の問題であり、子と子の問題ではないからです。因果応報が、父が子に持たせた裁きのムチです。このムチは父（生命）が子（人間）に持たせた裁きの道具ですから、父が子に課した裁きともいえますが、父と子はもともと同じですから、子自らが自らを裁く形になるのです。つまり、本当の自分が本当の自分を裁く形になるのです。この宇宙には、本当の自分しかいないのです。自分を分けるから、本当の自分がニセモノの自分を裁かなければならなくなるのです。もっとも、本当の自分に目覚めた者が罪を犯すことはありませんが・・・。

良心が困いの社会になれば、何一つ人を縛る縄はいらなくなりますから、法律も規則も罰則もいらなくなるのです。もし縛る縄があるとすれば、

作用あれば反作用あり！

原因あれば結果あり！

自分が撒いた種は自分が刈り取らねばならない！

という宇宙の法の縄があるだけです。この法を多くの人が認めるようになれば、労働奉仕制度や自由取得制度を導入する根拠ともなるので、理想社会の実現も夢でなくなるでしょう。

○時間に縛られない社会に変わる

必要なら働く、必要なら勉強する、必要なら遊ぶ、必要なら食べる、必要なら寝る、これが真の自由を得た人の生き方です。本来、何時から何時までこうしなければならぬ、といった決まりはないのです。必要な時にやり、必要な時に終れば良いのです。必要に応じてやるのが、自然の仕組みだからです。だから、時間を見て暮らす習慣はなくすべきです。考えて見て下さい、時間に縛られない生活がどんなに気楽か……。

今の社会では、時間になれば明日に仕事を回してしまいます。もう少しやれば終わるのに、途中で止めてしまうのです。今やれることは今やるべきです。それでは規律が取れないといわれるかも知れませんが、自然界においては、何時から何時までとか、いつからいつまでとか、こう使わねばならない、ああ使わねばならない、といった制約はないのです。いつ働いても良いし、いつ終わっても良いし、上手に使えたらどう使っても良いのです。思いに従って素直に生きることが大切です。それが定着すれば直感が人を導くようになりますから、みんなの思いが一致するようになります。そうなれば、仕事の効率は時間の比ではありません。私たちは時間に使われるのではなく、時間を使うべきです。見ただけ（五感）判断するのではなく、直感で判断すべきです。直感に動かされるようになれば、今日の非常識も非常識でなくなるでしょう。

○働くことも、学ぶことも、本人の自由意志を尊重した社会に変わる

今の社会で自分のしたい勉強や仕事をしている人が、どれほどいるでしょうか。殆どの人が、食べるため、家族を養うため、いやいやしているのではありませんか。あなたは本当に楽しんで勉強や仕事をしておりますか。一体自分の自由意思は、どうなってしまったのでしょうか。これもみな競争社会で生き抜くためです。

ようが、こういう人達は強制労働や強制勉強させられているようなものです。必要最低限度の糧を得るのに、どうして悩み苦しむ必要があるのでしょうか。それは欲を持つからです。しがらみに囚われるからです。

自然の仕組みはうまくできているもので、本当に必要ならそう苦勞せず糧が得られるようになっていくのです。空飛ぶ鳥は蔵を持ちません。動物達も日々与えられた物で満足しています。欲を起こし、物をたくさん集めているのは人間だけです。一人ひとりが必要最低限度の糧を目標に働くなら、そこに過酷な労働が生まれるわけがないのです。

奉仕労働力が社会的財産となれば、有り余る労働力と時間が確保されるので、自分の好きな学びや仕事を楽しくでやれるようになるでしょう。そんな社会に受験戦争も就職戦争もありません。学びたいから学ぶのです。働きたいから働くのです。強制されることなど一切なくなります。自分の意思を素直に表せる社会こそ、成熟した大人の社会です。

○人との付き合いも、人との結び付きも、自然体で行われる社会に変わる

人と人との出会いは、すべて縁絡みです。必要あって出会い、必要あって別れるのです。すべて縁です。必然です。損得絡みや感情絡みが結ぶ縁は、正しい縁とはいえません。自然な形で出会うのです。自然な形で体験するのです。自然な形で学ぶのです。それが自然の仕組であり自然な姿です。

今日の結婚は真の目的を意識せず、ただ本能と感情に任せ結ばれています。だから悲しい結末を迎える人が多いのです。自然に委ねれば、出会いも結婚もすべて縁が演出してくれます。勿論、子供を授かるも授からないもすべて縁です。すべて学びのカリキュラムに組み込まれているのです。自然に委ねるという意味は、波動に委ねるという意味です。この宇宙は同レベルの波動は共鳴する仕組になっていますので、波動に合った出会いや出来事が起こるのです。個人においても、団体においても、社会においても、国においても同じです。

不思議なもので、良心に生きている人が何かをしようと思った場合、してならない時には必ず邪魔が入るものです。それも一度や二度ではありません。これは、やってはならないという警告です。やって良いことは、初めからスナナリ行くものです。何事もごり押しはいけません。

最近、少子化問題や尊厳死問題などが取り沙汰されていますが、生も死も人間が介入すべき問題ではないのです。生まれるべきにして生まれ、死ぬべきにして死ぬのですから、自然に任せたら良いのです。だから精子や卵子を弄ぶようなことや、人を死刑にするようなことはやってはならないのです。自然体で臨むことで、地球の人口は正しく調整されます。それが当り前の姿だからです。

○慣習に縛られない社会に変わる

今の社会は、古い習慣に縛られ過ぎです。人との付き合いはこうあるべきである、こう振舞うべきである、こういう習わしに従うべきである、こういう行事をするべきである。今や、神事・仏事・記念行事真つ盛りの中です。一体何が大切でしょうか。過去を思い出し、涙にすることが大切なのでしょうか。迷信に振り回され、神事や仏事に明け暮れることが大切なのでしょうか。それとも、現実に目を向け今を正しく生きる事が大切なのでしょうか。

世の人々は、戦争や災害を忘れないよう、毎年記念行事を続けるべきだといっています。でも私にいわせれば、まったく反対です。どんなに悔やんでも、終わったことは元には戻らないのです。いつまでも悔やんでいるのではなく、教訓を受け取ったらスパッと忘れ、今に目を向けるべきです。前向きな社会に、神事も、仏事

も、記念式典も不要です。そんな時間があるのだったら、正しく思い、正しく語り、正しく生き、人生最大の目標である「自分を知ること」に時間を充てるべきです。

○小さな核を中心とした村社会に変わる

宇宙は極微から極大に至るまで相似に整えられ、それが連鎖と関係することで全体の調和が保たれています。ですから極微が整えば、極大も整えられるのです。人間は国が村々を統治すると考えますが、本来村々が国を統治するのです。身体が細胞を作っているのではなく、細胞が身体を作っているからです。細胞がなくては身体があり得ないように、国の基盤となる村がなければ、国体はあり得ないのです。その細胞（村）が健康であれば、体（国）も当然健康でしょう。一村一村が健康であれば、黙っていても国は健康になるのですから、あえて国の健康を考える必要はないのです。人間はこの自然の仕組みを見習うべきです。

体の最小単位を細胞としますと、村は国体における最小単位です。相似形という意味においては、村には国家としてのすべての機能が備わってはいくつではありません。またそれらの村々は、特色ある村でなくてはなりません。体に例えると、心臓の役割をする村、肺の役割をする村、胃の役割をする村など、その場所

やらねばならない村の役割がそれぞれあるわけです。その特色ある村々が、縦横の関係を親密に保ちながら、理想の国体を形成するのです。

例えばここにカラクリ人形があったとします。そのカラクリ人形は、たくさんの小さな歯車が組み合わさって動くよう出来ております。もし歯車の一つでも欠けたら、人形は動かなくなってしまおうでしょう。また歯車が自分勝手な動きをしたら、自分を破壊するばかりでなく、人形そのものも破壊してしまおうでしょう。一村一村は、この歯車のようなものです。自主独立はしていますが、全体の中で働かなければ、全体を殺すと同時に自分も殺してしまうのです。

近年グローバル化を賛美する傾向がありますが、人類は本当の意味のグローバル化を知っておりません。真のグローバル化とは、本質のグローバル化のことをいうのです。人間の本質を知り、気持ちを一つにするグローバル化です。すなわち、人類はみな同じ生命であり、同胞であり、兄弟姉妹であるという意志の統一です。見える形の部分を一つにするのではなく、見えない「意識・思い・心の部分」を一つにすることが、真のグローバル化なのです。人形が正常に動くためには、歯車一つ一つの意志の統一が欠かせないように、地球人類が正常に動くにも、一人ひとりの意志の統一は欠かせないのです。

そのグローバル化も勘違いしてはなりません。歯車一つひとつに役割があるように、個人一人ひとりに、人種人種に、民族民族に、それぞれ役割があるのです。役割といっても、特別な役割があるわけではありませんが。その場所において、自分達がやれることを精いっぱいやって生きることが役割なのです。なのに誤解し、ものの考え方も、価値観も、習慣も、宗教も、違う人種を一緒にしてグローバル化を進めるから、民族紛争や宗教紛争が起きるのです。

人間一人ひとり、分子の一つひとつです。一村一村は、細胞の一つひとつです。国々は、諸器官の一つひとつです。その集まりが地球であり宇宙ですから、私たち一人ひとりが健康になれば、村々が、国々が、地球が、宇宙が、健康になるのは当然なのです。この宇宙には、分離したものや独立したものは何一つないのです。全一体の中における分離や独立はあっても、全体から切り離された分離や独立はないのです。あくまでも、一単位一単位がその場所で与えられた役割を果たし、それが連綿とつながり全体を完遂させる働きがあるだけです。

なぜ奉仕社会になると、村社会になるのかといいますと、この社会では儲ける必要がないからです。今の社会は人が集まらなくては商売にならないので、どうしても都市化してしまうのです。でも奉仕社会は儲ける必要がないので、安らげる田舎へ田舎へ人は出てゆき、全国均一な人口に落ち着くのです。

○論争し合わない社会に変わる

この世の知識を振りかざし、論争し合うなどは愚かな話です。良く日曜討論で、口角沫を飛ばし合っている国会議員の姿を見ますが、この世の知識の実を食べながら、どうして卓越した発想が生まれるでしょうか。どんな博識を持った者も、人間の自覚を持って語る限り高が知れています。なぜなら、彼らは実在しない物を前提に語っているからです。

無が有を生むことはないのです。有が有を生むのです。人間は無で有を生み出そうとしているのです。でも、生命の自覚を持った者の語る言葉は違います。それは、本当に有るものを前提に語っているからです。つまり、生命の見識に支えられ語っているからです。そのような人が論争するわけがありません。静かに人の話を聞き、必要に応じて必要なことを語るだけです。それが人の心を動かすのです。論争は争いの始まり、しいては戦争へと発展します。論争はできるだけ避けるべきです。「知る者は語らず、語るものは知らず」の格言を脳裏に留めて置きたいものです。

○意識の高い者が指導者となる社会に変わる

神は偉大な下僕であるといわれるように、神は空気の中で、水の中で、土の中で、微生物の中で、私たちの体の中で、黙々と働き続けてくれており、決して偉ぶることはありません。神は人間に、上に立つ者はこうでなくてはならない！ という手本を示してくれているのではないでしょうか。

意識の高い人は、決して偉ぶることはありません。率先して人の嫌がる仕事を引き受け、人の手本になるうとします。勿論、論争などしません。生命の心は一つですから、論争しなくても分かり合えるのです。ただ行動で示すだけです。彼らには生命心のみがあり、私心がないからです。だから安心して任せられるのです。未来社会の指導者は、そのような意識の高い人でなくてはなりません。

ではどのようにして、意識の高い指導者を見分けることができるのでしょうか。それは波動です。意識の高い人の言葉からは精妙な波動が出ているので、その波動に触れると気持ちが悪くなったり、眠気を催したり、何もしゃべりたくない状態が起こったりします。言葉にザラザラしたものが無いので、スーと心の中に入ってくるのです。これは慣れれば誰でも感じられるようになります。波動は決して嘘をつきませんので、これに勝る見分け方はありません。

○原子力や石油エネルギーに頼らない社会に変わる

現状の地球においてエネルギーの確保は、緊急課題となっています。紛争の殆どがエネルギー問題から起きていることを考えても、その重大さが分かります。でも本源的なものを知れば、エネルギー獲得はそう難しい問題ではないのです。私たちは物質にだけエネルギーがあると思っていますが、エネルギーは見える所にも見えない所にも無尽蔵にあるのです。ただ、そのエネルギーをどう使えるようにするかだけが問題なのです。つまり智恵と労働力が、エネルギー問題を解く鍵なのです。

人類が真実を知り、宇宙の智恵に結び付けば、海からも、土からも、空気中からも、エネルギーはいくらでも入手できるようになるでしょう。もう、石油や原子力に頼らなくても良くなります。そのためには、人類は大人にならなくてはなりません。なぜなら、「子供に危険物を与えてはならない！」という宇宙の決まり事があるからです。子供はいたずらをしたがります。危険な遊びもしたがります。そんなやんちゃ坊主に、危険なエネルギーが与えられるわけがありません。人類が分別できる大人になったら、大方のエネルギーは解放されるでしょう。

空気を奪い合う人はいません。それはたくさんあり、手軽に入手でき、誰彼のレッテルが貼ってないからです。エネルギーも同じこと、．．．いつどこからでも手軽に入手できるようになれば、奪い合うことも争

い合うこともなくなるので、みな仲良く暮らせるようになるでしょう。それを可能にするのが、智慧であり労働力（心）です。物が、お金が、権力が、豊かにするのはありません。智慧と労働力が豊かにするので。一日も早く智慧と労働力を、空気のようにタダで使えるようにしたいものです。

○必要最小限度の情報発信する社会に変わる

人類の悪想念がいかに地球環境にダメージを与えているか、これは考えただけでも空恐ろしくなります。悪想念は地球環境を汚すだけでなく、人の心まで汚します。これを野放しにしているは、地球に明るい未来はありません。今地球人類は、悪想念の出し放題をしています。特に携帯電話花盛りの今日においては、その影響は計り知れないものがあります。殺人事件や事故や自殺の殆どが、この悪想念が引き金となって起きております。物質的な地球汚染も深刻ですが、想念による地球汚染はそれ以上に深刻なのです。悪想念を押さえるには、できるだけ不必要な情報を受信・発信しないことです。私たちは外側の情報より、内側の情報を大切にすべきです。

なぜ智者は無口なのでしょう。それはこの世の出来事が、みな幻だということを知っているからです。幻を知って、一体何になるのでしょうか。ただ興奮と悪意を助長させるだけではありませんか。だから真実を知った社会では、必要最小限度の情報しか受信・発信しなくなるのです。

不思議なもので、克服すべき課題の多い人ほど情報のやり取りをしたがるものです。その心理状態は、さみしさです。満ち足りなさです。人生に対する疑問です。それを埋めんがために、外側の情報を求めたがるのです。その意味からいえば、地球人類にはまだ克服すべき課題がたくさんあるということなのでしょう。

○真理を重点的に教える教育に変わる

今私たちが身に付けている知識は幻の知識です。いわゆる存在しない知識です。なぜなら、この世そのものが幻だからです。そんな知識を一生懸命覚えさせ、試験をして競わせているのが今日の教育です。確かに、この世で肉体を持って生きていく限り、この世の知識はある程度必要でしょう。でもその知識を得るために、気が狂うほど勉強しなければならないのでしょうか。

もう一つ知識に執着してならないのは、この世の知識はこの世限りのもので、あの世まで持ち越せるものではないからです。どんなにたくさんの知識を身に付けても、次生また一から学ばねばならないのですよ！

そんな知識を得るために命を削って勉強するなど愚かです。私たちが知るべきことは、永遠になくならない真理です。この世の知識は死ねばご破算になりますが、真理は死んでも魂の中に永遠に引き継がれてゆくのです。永遠になくならない私たち（生命）は、永遠になくならない真理を学んでこそ、この世に生まれ出た意味があるのです。このように教育の本分は、永遠になくならない真理を教えることなのです。その教育内容は、大きく分けて三つあります。

- 一、自然の法則や宇宙の法則を教えることです。
- 二、正しい想念の使い方をお教えることです。
- 三、本当の自分を知らしめ、自覚させることです。

この世の知識は、この三つを成就させる手段として、必要最小限度教えれば良いのです。しかし真理は、じっくり時間をかけて教えねば身に付きませんから、一生続けられるべきです。それが真の意味の生涯学習です。だから理想世界では、大人になっても、子供と一緒に同じ教室で学んでいるのです。人生の目的が見定められた社会では、真実を知ることには教育の重点が置かれるでしょう。

○意識科学を重視した社会に変わる

科学は宇宙の掟や仕組みを解き明かし、現実の世界に形として具現させる学問です。これまでの科学は、外側で何かをやることだと思われてきました。現に実験のすべてが、外側のルートを使って行われてきました。しかし外側は結果次元ですから、そこから本源的なものを見付け出すことはできないのです。本源的なものを見付けるには、原因点である私たちの心の中に潜るしかありません。なぜなら、宇宙のサンプルは私たちの心の中にあるからです。私たちの心の中に宇宙のひな型がそっくりそのままあるわけですから、実験者を外した科学など有り得ないのです。

物質が物質を変化させるのは、自然科学における約束事であり、それは粗雑な波動同士においてのみ可能です。しかし精妙な波動の世界になると、人の意識の介入なしにはできないのです。イエスは水をぶどう酒に変えたり、空中からパンや魚を取り出したりしました。今も聖者の間では、日常茶飯事で行われていることです。これは、内側に意識を潜らせなければできない技なのです。

このように真の科学は、実験室で試験管と睨めっこするようなものではなく、己の意識深く潜り込んで実感し、体験し、現実の世界に具現させる技術をいうのです。それは体験そのもの、実践そのものです。自らが実践し、体験し、それを外側に具現してゆく、そこにはすべて自分（実験者自ら）が入っています。

宇宙に人工衛星を打ち上げる必要も、地下に大きな加速器を建設する必要もありません。自分を開発することで、あらゆる謎解きが可能になるのです。自分を開発する道具は、いうまでもなく瞑想です。瞑想によって意識を高めれば波動が上がるので、そのレベルに比例した情報がドンドン入ってくるようになります。しかもその情報には実感が伴っているので、自分がそのものになれるのです。本当の自分を知れば、そのコツも、方法も分かります。未来の科学はこのように、自己開発を最前線とし、そこで得た智恵を外側に具現してゆく、二段構えの科学になるでしょう。

○精神文明を重視した社会に変わる

幼いうちはどうしても華やかなものに目が行きがちですので、物質文明が栄えるのも止むえぬことかも知れません。しかし大人になると、感性や本性が騒ぎ出しますので、科学や、哲学や、宗教など、精神的なものを求めたくなってきます。人類は今物質文明に酔いしれていますが、やがてその儂さに気付き、精神文明に大きく舵を切るようになるでしょう。精神文明とは真の喜びを発見し、その喜びに少しでも近づく文明です。つまり天の利を地に降ろし、天の幸せに劣らぬ幸せを地に開花させる文明です。

人間は幸せを誤解して受け取っています。幸せは肉体が感じるのでしょうか。心が感じるのでしょうか。心ですね。ならば平安をもたらす文明こそ、真の文明ではないでしょうか。確かに便利さや快適さをもたらす物質文明は、心を喜ばす条件の一つではあります。でもいかに良い条件が整っても、心に悩みがあつては真の幸せを掴むことはできないのです。物質文明は幸せを得る一手段ではありますが、目的ではないのです。それに対して精神文明は、幸せを得る目的そのものなのです。なぜなら、真の人間を知らずして精神文明はあり得ないし、真の幸せもあり得ないからです。

人の幸せは、心の持ち方次第です。もし物質文明が幸せをもたらすなら、私たちはとくに幸せになつていなくてはなりません。しかし物質文明が進んだ今日、かえって心の不安が高まつているではありませんか。後進国の人達が物質文明に取り込まれるに従い、精神的苦しみが増しているのはその良い証です。心の病が多くなつていくということは、その文明が誤つた方向へ進んでいる証しなのです。勿論、物質文明にも意味はあります。でもその意味を知つた暁は、一日も早く物質文明を卒業しなければなりません。キンピカ、キラキラ、天にも届く高層ビルが建ち並び、その間を縫うように高速道路が走るといった文明は、今日限りであることを知つて下さい。

○病気のない社会に変わる

病は気からといって、エネルギー（気）不足が原因です。そのエネルギーを低下させているのは誰でもない、自分のネガティブな思いです。つまり、不安、恐怖、心配、イライラなど、ネガティブな思いが病気にしているのです。でも今の医学はそのことを知らず、ただ物理的治療を施して一時的に症状を取っているだけです。だから再発する可能性が高いのです。

傷を治しているのは薬でしょうか。風邪を治しているのは薬でしょうか。みな自己治癒力ではありませんか。もし薬が治しているなら、すべての患者に一樣の結果が出なくてはなりません。そうはなっていない。それは患者の意識がみな違うからです。同じガン治療を施しても、治る人と治らない人が出てくるのも、患者の意識がみな違うからです。このことからいっても、病気は心的原因によるといえるのです。だから安心感を与える逆治療法（物理療法）が、有効な手段になっているのです。インドのサイババ師はそのことを熟知しているので、最新の医療機器や技術を持って治すことを容認しているのです。

どんなに口で諭しても、思い癖は急に変えられるものではありません。また苦しんでいる者が、人の話を聞かなくてもありません。まずは苦しみを取ってやる、そうすれば心穏やかに人の話も聞けるでしょう。話を受け入れネガティブな生き方をしなくなったら、病は癒えてゆくでしょうから、それは心身を癒したことに

なり、真に人を救ったことになるのです。この逆治療法のことを、今の医者は知りません。医学が病気を治しているとは勘違いしているのです。

幼い社会にのみ病気はあるのです。病気が人を成長させる手段になっていくからです。しかし真理が浸透しその社会に病気が必要なくなれば、病は自然と消えてゆくのです。「清潔になった所に、ハエや蚊が必要ないように・・・。」

○宗教のいらぬ社会に変わる

本当の自分を知った社会では、自然と宗教はなくなってゆきます。それも金儲けのできない社会になれば、黙っていてもなくなつてゆきます。宗教は幼い社会に必要であつて、大人の社会には必要ないからです。自分を神だと知つた者が、どうして宗教を作ると思ひますか。また入ると思ひますか。神がどうして宗教を必要とするでしょうか。

本当の自分を知つた社会では、みな真実を見抜く目を持ちますので、もう神秘もどきの宗教はいらなくなります。持つのは科学的な目と、科学的な行動です。科学的な目とは、真実を観る目のことです。科学的な行動とは、自力で成す行為のことです。例えていえば、卵を前に早くヒナに返つて下さいと祈るのが、これ

までの宗教です。対して、実際に自分で卵を温めてヒナに帰するのが科学です。そこには、自分の想いと行為が必ず入っております。

真の宗教とは、科学のことなのです。他力ではありません。自力です。また空想や妄想や幻でもありません。実在那のもの、真実そのものです。ですから本当の自分を知った社会では、宗教は科学に置き換えられるのです。

○自分と競い合う社会に変わる

他人と競い合うことを相対的競い合いといい、自分と競い合うことを絶対的競い合いといいます。人間は今、相対的競い合いを通して成長しようとしているわけですが、相対的競い合いは案外と楽なのです。なぜなら、すべてこの世でケリがつくからです。たとえば村一番の力持ちは、村の中でケリが付きます。国一番の力持ちは、国の中でケリが付きます。世界一の力持ちは、世界の中でケリが付きます。たとえ宇宙一の力持ちであっても、宇宙の中でケリが付きます。しかし、自分が相手となるとそうはゆきません。自分が限界を定めなければ、無限の相手と競わなければならないからです。それが己との戦い、絶対的戦いです。

理想社会実現のためには、この絶対的戦いを克服しなければなりません。すなわち、良心との戦いに勝たねばならないのです。この戦いに勝利してはじめて、理想社会は実現するのです。人が見ている時に、どんな良い格好をしてもそれは偽善です。良心の前で思い、良心の前で語り、良心の前で行ってこそ真の善です。判定人は自分自身ですから、これほど厳しいことはないでしょう。でも本当の自分を知った者は、それが当たり前のようにできるようになるのです。なぜなら、この宇宙に自分しかいないことが分かるからです。自分を偽れますか。偽るとしたら自分をごまかさねばなりません。あなたは、自分をごまかして満足できますか。絶対できないはずです。だから良心に生きる人が多くなった社会では、規則も法律も罰則も要らなくなるのです。

○争わない社会に変わる

争いが起きるのは、自分と他人との間に溝を作っているからです。溝ができれば、溝を埋める何らかの方策を考えねばなりません。その方策は、お金です。権力です。武力です。知力です。ですから今の社会では、常に争い事が絶えないのです。本当の自分を知った社会では、自他の溝が埋められますから、もう埋めるお金も、権力も、何もいらなくなります。またその社会の人達は、この世が幻の世界だと知っておりますので、

肉体子孫に何も残そうとしません。だから必要以上のお金も、必要以上の物も、欲しがらないのです。繰り返しますが、分けるから争い事が起きるのです。一つになれば、一つの中に争い事が起きるわけがないのです。自分一人で、どうして喧嘩ができますか？ ということです。

さて、真実を知った社会の変容の様子を見てきましたが、この考えの前提になっているのは、何度もいうように、すべての人間は一つの生命から生まれた同胞であるという考え方です。すなわち、すべての人間は、同じ生命であり、家族であり、同胞であるという真理です。この真理が理解されれば、みな仲良くできるはずなのです。

地球に色違いの人種が存在するのは、どんな人種も一つの白光から生まれた同色人であることを知ってもらうためです。もともと私たちは、一つの白光だったのです。この地上で役割を果たすため、色分けさせられただけなのです。その理由を知れば、人と人との溝も、人種間の溝も、国家間の溝も、なくなるでしょう。このようにいうと、「そんな夢想家のたわごとなど信じられるか！」という人もおられるでしょうが、これまでも世を変えてきたのは理想家であり夢想家だったのです。夢と理想を持たない社会に進歩はありません。ぜひ、子供のような夢を持って下さい。

【コラム】オリンピック旗の意味

オリンピック旗は、五色の輪が結ばれた形になっております。今のオリンピック旗は、左上から青色・黒色・赤色、左下から黄色・緑色の順に並べられていますが、これは間違いです。本当は、左上から白色・黄色・赤色、左下から黒色・緑色の順で並べられるのが正しいのです。なぜなら、地理上においてヨーロッパ系白人種は左上に位置し、アジア系黄色人種は上真ん中に位置し、北米系赤色人種は右上に位置し、アフリカ系黒色人種は左下に位置し、南米系緑色人種は右下に位置しているからです。

赤色と緑色と黄色は三原色で、地の心を持って混ぜ合わされば黒色となり、天の心を持って混ぜ合わされば白色となるよう計られた色です。基本色である白色と黒色は、天において交われれば白となり、地において交われれば黒となるよう計られた色です。いずれも一つの白光色から生まれた同胞です。オリンピック旗は、人類の統合を五色の輪に託したシンボルなのです。

五色の意味をもう少し詳しく説明しますと、基本色の一つである「白色」は天を意味し、心を表しています。基本色であるもう一つの「黒色」は地を意味し、物質を表しています。三原色の「赤色」は物質科学を意味し、「黄色」は精神科学を意味し、「緑色」は自然科学を意味しております。いずれもバランスが取れば素晴らしい世界が実現するという、深い意味が込められております。

本来一つの色を五色に分けるのは、仲間意識を作り争いの要因となるので好ましくありませんが、そうしなければ一つの色から生まれた同胞だと気づいてもらえないので、天はリスクを犯してまで色分けされたのです。要するに天は、姿形は違っても本性において人類は、「一つである、同胞である、同じ兄弟姉妹である」、ということに気づいてもらいたいのです。今人種間や民族間でトラブルが起きているのは、そのことに気づく模索と考えたら良いでしょう。人類はやがてそのことに気づきます。その時こそ、私が示した理想の世が現実のものとなるのです。

(4) 自然と変わる社会

魂の進化を左右するのは、文明でも社会システムでもありません。人生劇場における体験です。その証に、このように文明が進んでいるにもかかわらず、いまだに動物以下の生き方をしている人がたくさんいるではありませんか。人生劇において大切なのは、どれほど本当の自分を知り得たか、どれほど宇宙の仕組みを知り得たかです。もし多くの人が本当の自分を知ったら、当たり前のことを当たり前のようにできる社会が、当たり前のようにやってくるでしょう。

○当たり前な社会

私たちは何かというと、利害得失によってすべてを量ろうとします。私はこれをする事によって、損するのを得るのか。あの人は私に利害のどちらをもたらすのか。おべんちゃら、おべっか、へつらい、夏の贈答、何々のお返し、これみな損得勘定から生まれた偽善行為です。醜い賭け引きのうちに終わられる商取引も、計算のうちに終わられる人と人の付き合いも、みなその考えの域を出ておりません。一人人間は、どこに真心を置き忘れてしまったのでしょうか。これは個人に限らず、企業間においても、国家間においても、同じような考えの下に行われています。だから、いつも不信と疑惑を抱え対峙し合わなければならぬのです。その疑惑と不信を取り除く道具として軍備は必要となり、さらに対決色は深まります。このような感情を持ち合い、人の世に信じられる社会がやってくるわけがありません。もし何事も損得勘定抜きで行われたら、私たちはさすがさや爽快さを持ち合うことができるでしょう。私たちが何よりも大切にすべきは、正しい動機と純粋さではないでしょうか。

本当に学びたいから学ぶのです。本当に働きたいから働くのです。本当にやりたいからやるのです。本当にしてあげたいからしてあげるのです。どこまでも幼子のような純粋さを貫く姿勢、当たり前なことを当た

り前のようにやる姿勢が大切です。例えばここに五人の人がいて、五個の食べ物があったとすれば、一人一人に等しく分け与えるのは当たり前です。数が足りないなら、緊急を要する人から与えるのは当たり前です。

- ・力ある者が、力ない者を助けるのは当たり前です。
- ・先に知った者が、知らない者に教えるのは当たり前です。
- ・目明きが、盲人を導くのは当たり前です。
- ・一番身近にいる縁ある人が、困った人を助けるのは当たり前です。
- ・子が親を敬うのは当たり前です。また親が子を慈しむのも当たり前です。
- ・生き物を慈しみ、いたわり、思いやるのは当たり前です。
- ・生き物同士、仲良くすることは当たり前です。
- ・地球上にある資源を、すべての生き物のために平等に使うのは当たり前です。
- ・土地が空いていたら、そこを人々のために有効利用するのは当たり前です。
- ・必要な物を、必要な量だけ生産するのは当たり前です。
- ・必要な物を、必要な時に、必要な人が使うのは当たり前です。
- ・やりたいことを、やりたい時にするのは当たり前です。

- ・悪いことを思わない、悪いことをいわない、悪いことをやらないのは当たり前です。
 - ・良いことを思い、良いことをいい、良いことをやるのは当たり前です。
 - ・過ちに気付いたら、過ちを正し、正しく生きるのは当たり前です。
 - ・真実を探求し、真実を知り、真実に生きるのは当たり前です。
 - ・必要に応じて学べば良いのです。
 - ・必要に応じて働けば良いのです。
 - ・食べたくなったら食べれば良いのです。
 - ・眠たくなったら寝れば良いのです。
 - ・話したくなったら話せば良いのです。
 - ・思った事が最良の思いです。
 - ・思った時が最良の時です。
- 利害や損得に縛られ、慣習に縛られ、権力におもねるなど、しがらみに自由を奪われ、やりたいことをやらないのは不自然です。もともと自由な私たちが、思うがままに生きるのは当然です。やりたいことをやるのに、誰にも遠慮はいらないということです。なぜなら、私のやりたいことは、皆がやりたいことだからで

す。だから、決して他人とぶつかり合うことはありません。例えば、今日どこかでどうしてもこの物が必要だったら、その物がちゃんと用意されるのです。村や国においても、どうしてもその物が必要なら、ちゃんと用意されるのです。

例えば、このようなことも起きるでしょう。仕事上において、フトあれはこうすれば良いのではないかと閃いたとしましょう。思った時が最良の時ですから、さっそく職場に駆け参じます。すると同僚が同じ考えを持って、すでに駆け参じているのです。そこで、「あなたもそう思ったのですか！」と行って笑い合うというわけです。食べたいと思った時が、食事の時間なのです。電話をかけたと思った時が、かけ時なのです。仕事をしたいと思った時が、労働時間なのです。休みたいと思った時が、休憩時間なのです。思ったその時が、行動に移す時なのです。ですから、時計は不要です。

この話は、あくまでも本当の自分に目覚めた暁の話ですが、素直さを持ち合わせていれば、今の社会でも決して非常識な話ではないと思います。つまりここで述べたことは、幼子が取る行動そのままを社会に反映した姿なのです。しがらみさえ取り除けば、誰でも納得できると思います。ただ今の私たちは、社会の様々なしがらみ（慣習・規則・体制）に縛られ、自分の意思を素直に表せていないだけです。

人間の本性を知り生命への回帰がなされれば、自然法則下での常識はすべて反故にされるわけですから、「ねばならない!」といった制約はなくなるのです。これも人類の成長と共に訪れる、当たり前な変化の一つです。ですから無理に変えるのではなく、自然と変わるのです。いや、自然と変わって行くのです。

○本源的なものを知れば、誰でも同じ社会を夢見るようになる

社会が複雑化すればするほど混乱の度が深まるのは歴史が証明しており、それは今日の社会を見ても疑う余地はありません。その教訓から、人類が目指す未来社会は日時計でなくてはなりません。機械時計は一見頑丈そうに見えますが、一旦故障すると手に負えません。あちらの部品を取り替え、こちらの部品を取り替え、しまいいには何が何だか分からなくなり、お手上げ状態になってしまいます。しかし、日時計なら故障がないから安心です。

日時計とは、真心や良心が支配する簡素簡潔な社会のことです。機械時計とは、規則や罰則が支配する複雑怪奇な社会のことです。奉仕社会では、守ったり儲けたり大きくしたりする必要がないので、機械時計など不要なのです。それは一人ひとりの良心が、認め許し納得することで、すべてが自由になり、平等になり、

保障されるからです。大人になった社会では、隠すことも守ることも装うこともしないのです。有りのままに、思いのままに、素直に表現するのです。そうすれば、単純でありながら深い味が出せるでしょう。

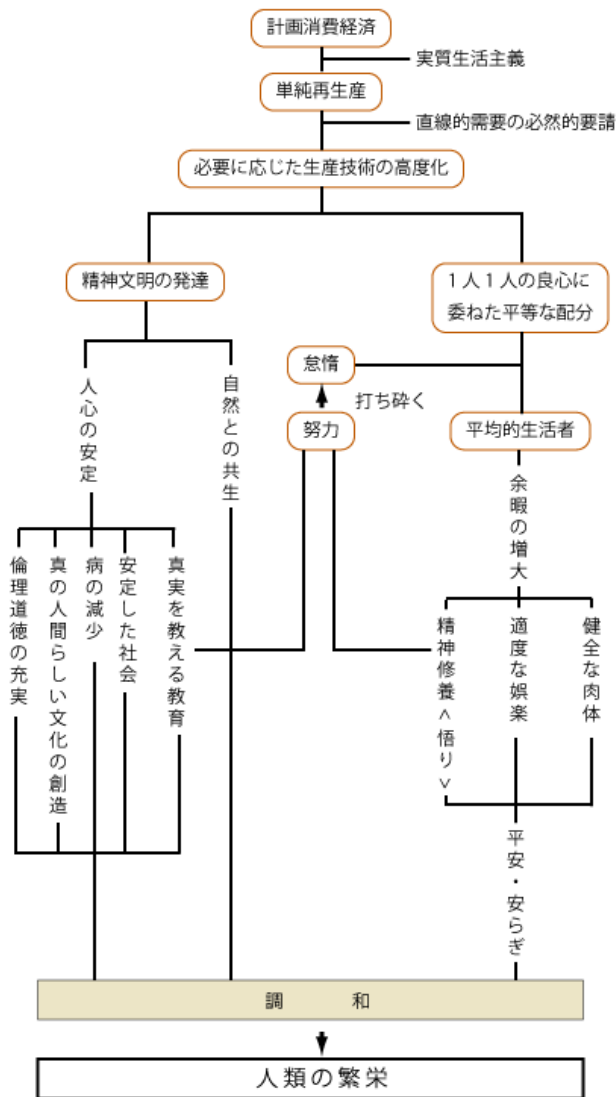
例えばあなたに三色の色鉛筆を与え、スマイレの花を描きなさいといったらどうするでしょうか。多分三色の色鉛筆を巧みに組み合わせ、スマイレの花に似た色を出そうとするでしょう。二十四色の色鉛筆を与えたらどうするでしょうか。恐らくスマイレの花に似た色鉛筆を一本選び出し、単純に描こうとするでしょう。この例え話には、相反した命題が隠されているように見えますが、実は素直な心を表現しなさい！それが自然で良いですよ！という問いかけなのです。だからどちらが良く、どちらが悪いというものではないのです。その人の心の状態、その人の意識のあり様に添った、一番良い方法を選ぶことを望んでいるわけです。

大自然は多様に富みながら単純です。何一つ奇怪なものはありません。単純でありながら進歩性に富み、かつ繊細で大胆です。これは、両極端をバランス良く調える智慧の中に生きているからです。私心を捨て素直に対処すれば、良い方向へ進むよう自然はできているのです。注意点は二つ、一つは方向性を間違わないこと、もう一つは正しい動機を維持することです。それは目的意識を正しく持つことで可能になります。間違いない未来を開拓するには、この二点に気をつけることです。あとはなるがまま、有るがままに進めば、決して今日のような複雑怪奇な社会にはならないでしょう。

さて、人間の本性を知った社会がどのように変わるか見てきましたが、これは私の見解ではなく、なるべくしてなる自然の姿なのです。社会は変えるのではなく、自然と変わってゆくものなのです。本源的なものが確立されれば、すべてが当り前の如く整って行くのです。もし人類が真の目的を掲げて邁進するなら、行くべきところに行き着き、収まるところに収まるでしょう。当たり前のように行き着き、当たり前のように収まるでしょう。その旗印に向かって邁進する姿を見た子供たちは、きっと目を輝かせ喝采を送ることでしょう。その理想が、天の意に沿うものなら尚更です。私がこれまで繰り返し訴え続けてきた、本当の自分を知ることが天の本意なのです。それが実現されれば、社会は一変します。もう、戦争も、飢餓も、事件も、事故も、災害も、環境汚染も、経済戦争もなくなり、平等な生活の下にみな仲良く暮らすことができるでしょう。このような社会の実現は、夢だと思いますか。今の争い多い社会が夢なのです。

もしあなたが社会を作るとしたら、どのような社会を作りたいと思いますか。あなたが望む社会を、一度机上で作って見て下さい。もし将来、理想の社会が作られるとしたら、あなたの思ったとおりの社会が実現することでしょう。なぜなら、本源的なものを知れば、誰でも同じ考えを持つようになるからです。私たちは同じ生命ですから、同じ考えを持ち、同じ行動を取るようになるのは当たり前なのです。今日の良くない社会の夢が実現したように、理想社会の夢も必ず実現します。それが宇宙の望みだからです。(図8)

(図8) 奉仕社会



【コラム】価値とは

人間が価値にこだわるのは、自分達が価値を生み出しているかと思っています。つまり肉体がものを考え働き、価値を生み出しているかと思っていますからです。でも、肉体がものを考えたり働いたりすることはありません。考えたり働いたりしているのは生命です。生命が考え働いているのに、どうして肉体のあなたが価値を欲しがるのですか。このことを知ったら、決して価値を自分のものとしないうでしよう。もう一つ価値にこだわってならない理由は、価値は人間のご都合主義で作られた人的なもので、絶対的なものではないからです。

・物の価値を考えて見ましよう？

「通常物の価値は、希少性に富んでいるか否かで決まります。でもどんなに希少性に富んでも、条件が変われば途端に変わってしまうのが価値の正体なのです。例えば、平常時において金やダイヤモンドは貴重品ですが、非常時においては水一リットルの方が貴重品になる場合があります。ネシー一本なくても時計は動きません。部品一個なくても車は動きません。ならばネシー一本部品一個は、時計や車と同等の価値があるのではありませんか。このように、条件次第で揺れ動くのが物の価値の正体なのです。

・能力の価値はどうでしょう？

これも条件次第で変わる相対的なものです。例えば、A村で一番の早足も、B村では鈍足者といわれるかも知れません。A工場で一番の技術者も、B工場では最低の技術者といわれるかも知れません。

・ 職業の価値はどうでしょう？

大人の世界では医者は大切にされていますが、健康な子供の世界では綿菓子職人の方が大切にされるでしょう。自動車の修理は、医者にはできないのです。時計の修理は、総理大臣にはできないのです。トイレの配管がつまり汚水があふれた時、駆け付けてくれた職人さんが神様のように見えた、という経験はありませんか。本当に必要な場合は、職業の価値の壁さえ崩れてしまうのです。

・ 量的価値はどうでしょう？

これも単に、数や量だけで片付けられる問題ではありません。例えば、一瞬の技が大きな価値を生む場合もあれば、じつくり時間をかけねば生み出せない価値もあります。常識的に考えれば、十時間働いた人と一時間しか働かなかった人を同等にみることはできませんが、打ち込んだ熱意は時間で測れるものでしょうか。問題にすべきは、動機と熱意とその中身（内容）ではないでしょうか。

このように物の価値も、能力の価値も、職業の価値も、量的価値も、みな条件次第で変わる相対的なもので、決して絶対的なものではないのです。だから、決して価値にこだわってはならないのです。能力や努力

を認めてやらなくては、奮起が期待できないという人がおりますが、どうでしょう能力は自分のものでしょうか。天の恵みではありませんか。努力だって、天に帰るために必要な準備行為です。あなたは、人に認めてもらいたいから努力するのですか。たくさん報酬が欲しいから頑張るのですか。そうではないはずです。少しでも魂を成長させたいから、頑張るではありませんか。

今私たちは天の恵みをタダで頂いて、人生という大切な勉強をさせてもらっているのです。仕事は華厳の道であり、魂の成長に欠かせない体験の一つです。なのにたくさん報酬が欲しいなどについては、バチが当たるといふものです。私たちはすでに、努力に対する報酬を魂の成長という形で頂いているですよ！それ以上何が欲しいというのですか。価値は天のもので、決して私するようなものではありません。もし私するならば、「あなたは天の価値を盗んでいますよ！」と神様にいわれても弁解できないでしょう。

【コラム】資本主義を問う？

「耕して、種をまいて、ゆっくり育てられる世の中にして下さい！」あるドラマの中で、将軍の妻が死ぬ間に夫にいい残したこの言葉に、私は深い感銘を受けたものです。地位も名誉も何も要らない！貧乏でも親子がひっそり肩寄せ合って生きられる、そんな平和な家庭が欲しい！妻の願いはこんなところにあっ

たように思います。人生の目的を考えた時、この「ゆっくり」の言葉が、魂の叫びのように聞こえて仕方ありません。しかし、現代社会はどうでしょう？ 拝金実利主義が横行し、人々はまるで獲物を狙うライオンのように落ち着きがありません。経済は二十四時間不夜城のごとく活動し、私たちの安眠を妨げます。ためまぐるしく変化する時代の流れは、私たちを無理やり虚飾の世界へ引きずり込もうとします。ああ、何としんどい世の中になってしまったのでしょうか。これもすべて、資本主義という怪物のなせる技です。

今の人間は、資本主義が最良のシステムだと思い込んでいます。これほど多くの矛盾を抱え、行き詰まっているにもかかわらず、なぜか手放そうとしません。他に道がないと思っているのか。共産主義の崩壊を目の当たりにし、矛盾があっても資本主義の方がましだと思っているのか。それとも情性に押し流され、舵が利かなくなってしまうのか。いやもしかしたら、今の華やかな生活を手放したくなくて、目を背けているのかもしれない。なぜ資本主義が採用されるようになったかについては、色々と意見があると思いますが、肉体を自分として生きる限り、必然的に生まれる社会システムなのです。生きる目的が金儲けである限り、しのぎを削って突き進む競争社会はやむを得ません。例えどんなに自分達の首を絞めようと、一日動き出した歯車を止めるわけにゆかないのが、このシステムの恐ろしいところだからです。

私たちは、自分で自分を追い詰めていることに気付いていないのです。皆で皆を追い詰めていることに気付いていないのです。社会全体で社会全体を追い詰めていることに気付いていないのです。追い詰められた小鹿たちは、一体どこに逃げれば良いのでしょうか。いじめる方もいじめられる方も、犯す方も犯される方も、殺す方も殺される方も、みな逃げ場を失って泣き叫んでいる哀れな小鹿たちです。もう彼らには、断崖絶壁から飛び降りる道しか残されていないのです。確かに強くあらねばなりません。でも、現代社会はその許容量を遥かに越えているのです。

・今の世の中のどこに、安らげる場所があるのでしょうか？

・私たちは一体、どんな設計図を持ち、何をなそうとしているのでしょうか？

・私たちは一体、何にコントロールされ、どこに向かおうとしているのでしょうか？

何もありません。ただ盲目的な動きがあるだけです。あえていうなら、その時その時の人の感情と欲望が、社会の流れを作っているといつて良いでしょう。だからこの社会は、人の意思でコントロールできないのです。目に見えない感情と欲望が、私たちを断崖絶壁へ運んでいるのが現代社会の姿なのです。際限のない感情と欲望の上に築かれた社会は、危険極まりない社会です。膨らみ続ける風船がいつか必ず破裂するように、

感情と欲望をエネルギーとして膨らみ続ける資本主義社会もいずれ破裂するでしょう。資本主義社会の崩壊は、もう時間の問題なのです。

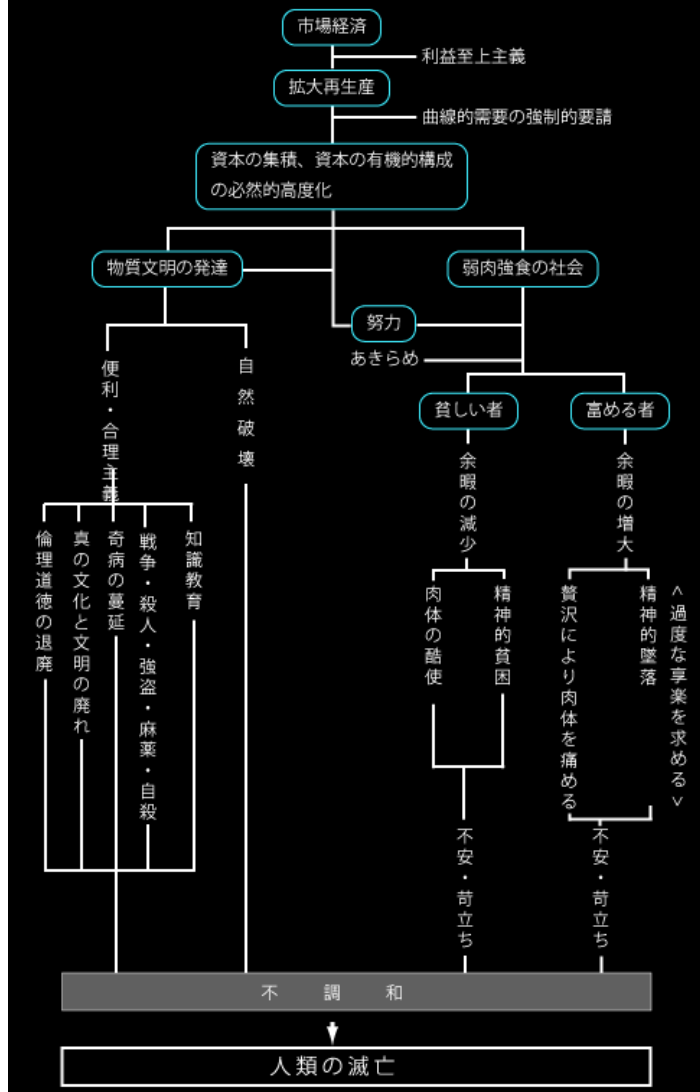
では、他にどんな道があるのでしょうか。私はこの本の中で、その道の概要を示しました。何のことはない！ 子供でも思いつく当たり前な社会です。人間の感情と欲望としがらみさえ取り払えば、今すぐにでも実現可能な当たり前な社会です。こういうと、色々な問題を指摘する人もいるでしょうが、私はその人にあえていいたい、

- ・ 夢の世界に、何を築こうというのですか？
- ・ 夢の世界に、何を残そうというのですか？
- ・ 夢の世界で、何を成し遂げようというのですかと・・・

この世は、修学旅行で一夜泊まるホテルのようなものです。どんなに楽しくても、翌朝には旅立たねばならない夢の中のホテルです。そんな腰掛的なホテルに、一体何を築き何を残そうというのですか。私たちは今、夢の中に蔵を築こうとしているのです。どんな立派な蔵を築き、どれだけたくさんの宝物を集めて

も、目覚めればすべて消え去る夢事・夢芝居です。それも、無知が生み出した夢事・夢芝居です。無知は矛盾を生み、矛盾が無知の後押しをします。この関係は気づくまで延々と続きます。では、何が気づかせるのでしょうか？ それは痛みです。苦しみです。悲しみです。早く気づけば、それだけ痛みも苦しみも少なくて済みます。もうそろそろ人類は、そのことに気づいても良いのではないのでしょうか。(図9)

(図9)資本主義社会



【コラム】捨てられるか？ 捨てられないか？

経済は人間が作ったもの、だから本来人間が経済を使うべきはずなのに、今の人間は経済に使われてい
ます。もう人間の意思で、動かすことも、止めることも、変えることもできないのです。このまま進めば、間
違いなく大きな悲劇を生み出すでしょう。さて、人間はどうするでしょうか。

今ある飛行場に、幸せの国に向かって飛び立とうとしている飛行機が待機しておりました。しかしその飛
行機に乗れるのは、欲のない身軽な人達だけです。すでに搭乗手続きが始まっており、みな身一つで飛行機
に乗り込んでゆきます。そこにデップリと太った男がやってきて、保安検査機を通り抜けようとなりました。
でも彼はたくさんのお金を持っているのです、保安検査機に引っ掛かってしまいました。

「お客さん、この飛行機は身軽な人でなければ乗れないのですよ！ どうかお金を捨ててきて下さ
い！」と係員にいわれます。しかし男は係員のいうことに耳を貸そうとせず、

「本当にこの飛行機に乗れば、幸せの国に行けるのかね？」と、疑いの眼差しを向けます。

「ええ、本当です。ですから早くお金を捨ててきて下さい！」係員は促します。

でもそういわれても踏ん切りがつかないのか、男はなかなかお金を捨てに行こうとしません。そうこうし
ている内に、飛行機は飛び立ってしまいました。資本主義を放棄する時、真っ先に反対するのは資本家や大

金持ちでしょう。彼らはお金がすべてと思っ
ていますので、お金抜きで幸せが得られる
など、とても考えられないのです。さて
彼らは、お金を捨て切れるでしょうか？
捨て切れないでしょうか？

今人類には、左から右へのコース変更
が迫られています。左のコースとは資本
主義社会のことで、死地へ続く絶望の
道です。右のコースとは奉仕社会のこ
とで、生地に続く希望の道です。でも
コース変更するには、欲を捨てねば
なりません。さあ人類は一体どうす
るでしょうか。(図 10)

(図10)どちらの道を選ぶか？

ここに右と左に分かれる分岐点があります。
 左へコースを取れば苦しみ多い世界へ
 右へコースを取れば喜び多い世界へ
 どちらを選ぶかは、あなたの自由意志に委ねられています。

あなたはどちらの道を選びますか？

二つの道 項目	出発点(入口)	
	条件・何もなし <狂った世界>←無知	条件・すべてを捨て身軽になること 知恵→<正常な世界>
1)人間を何と見るか？	肉体を自分と見る	意識(心)を自分と見る
2)何を大切に するか？	↓ 肉体を大切に する	↓ 心を大切に する
3)喜びを何に 求めるか？	↓ 五官に快楽を 求める	↓ 精神に喜びを 求める
4)物質の必要 量はどの くらいか？	↓ お金も物も多 いほど満足	↓ 日々必要な 物が有れば満 足
5)子供に何を 残したいと思 うか？	↓ 自分の代は勿 論、子々孫々 まで財産を残 したいと思う	↓ 日々必要な 物があれば満 足
6)何に力を入 れるか？ (人生の目的)	↓ 地位・名誉・ 経済力をつけ たいかため教 育に全力を投 入する (他人と競い合 う)	↓ 自分を知る本 来の目的に邁 進する (自分と競い合 う)
7)社会のシス テムはどの ようになる か？	↓ 物質主義・ 経済主義へと 傾く (複雑怪奇な 社会になる)	↓ 分かち合い・ 奉仕社会へと 傾く (簡素簡潔な 社会になる)
8)どのよう な文明になる か？	↓ 何事も快適・ 快楽・欲望を 求める文明に なる (物質文明・ 機械文明)	↓ 自然と和合し ・自分と和合 し・人々と和 合する文明と なる (精神文明)
9)社会はど うなるか？	↓ 殺人・強盗・ 自殺・事件・ 事故の多い 混乱した社会 となる	↓ 何に一つ争 いのない社会 となる
10)世界はど うなるか？	↓ 戦争・紛争の 絶えない世界 へと発展	↓ 平安な世界へ 発展
11)地球の未 来は？	↓ 文明の崩壊	↓ 地上天国(宇 宙へ飛び出す)

【コラム】無限の宝物を得る秘訣

今人類は経済戦争に明け暮れています。これはエネルギー獲得戦争以外の何ものでもないのです。私たちは産声を上げた時から、すでにエネルギー獲得戦争をしているのです。母親に泣いて乳をねだるのもそう、塾に通うのもそう、受験戦争、就職戦争、すべてそうです。私たちは銃こそ持ちませんが、生まれてから死ぬまでエネルギー獲得戦争を続けているのです。何としないことでしょうか！ もう、こんな戦いに終止符を打とうではありませんか。では終止符を打つには、どうすれば良いのでしょうか。それは、宇宙生命にながることです。宇宙生命につながれば泉のごとく智慧が湧いてきますので、その智慧を使えばいくらでもエネルギーは手に入ります。事実人類は、固形エネルギーから液体エネルギーへ、液体エネルギーから気体エネルギーへと、エネルギーの進化を遂げてきたではありませんか。それは資源の有る無しの問題ではなく、智慧の有る無し（労働力）の問題だったはず。智慧こそエネルギー獲得の最善の方法なのです。その智慧を得るのに、地底や海底をボーリングしたり、

宇宙に飛び出したり、素粒子と睨めっこしたりする必要はありません。自分の心と睨めっこすれば良いので

す。自分の心の中には、これまで宇宙銀行で積み立てられた智慧が、一つも漏れなく貯蓄されてあるからです。それも生きた智慧として・・・、実感できる智慧として・・・、ただ私たちは、そのことに気付いていないだけです。気付いて掘り起こせば、もうエネルギー獲得に苦慮することはないのです。ただし、欲望を満足させるような智慧は与えられません。なぜなら、欲は智慧の扉を閉ざしてしまうからです。智慧を得るコツは無欲になること、本来に必要な場合のみ扉を叩くことです。そうすれば、必要な智慧は必ず与えられるでしょう。瞑想は、その智慧を掘り起こすスコップのようなものです。ぜひ、瞑想というスコップを使って無限の宝物を掘り起こして下さい。

(5) 自然が、地球が、変わる

○地球の現況

今の地球は、私たちが考えている以上に危険な状態にあります。異常気象が、動植物の異常行動が、人類の暴走が、それを証明しています。これもみな人類の悪想念が原因です。意識にも重い軽いがあるのです。良い想念は軽く、悪い想念は重いのです。悪想念は負のエネルギーですから、悪想念が多くなると地表近く

の空気が重くなり、あらゆる生き物に悪影響を及ぼすようになるのです。それが膨らみ続けると、今度は地下へ地下へと潜り込み、地殻あるいはマントルの上部に溜まって地軸まで狂わせてしまうのです。そうなのは大変なので、時々地震によって発散させバランスを取り戻そうとしているのですが、それも追いつかないほど、今の地球は負のエネルギーが溜まり続けているのです。

はっきりいって、今の地球の地軸は狂っております。地軸が狂って極軸の頭にブレが生じると、今度は赤道付近の回転にブレが生まれ、大気や海水の循環を狂わすようになるのです。そうなると海水の流れや温度分布が狂い、大気の流れや温度分布が狂い、雲の発生メカニズムに変化が起きてきます。そこに温暖化が加わると、ますます大気不安定材料は増し、予期できない異常気象の原因になります。想念は目には見えませんが、想念の良し悪しが地球環境に絶大な影響を及ぼしているのです。良い想念は良い影響として、悪い想念は悪い影響として……。今地球上に災難が多発しているのは、悪想念を出す人間が多くなっているからです。

○地球環境は人の心の写し鏡

家の中を見れば、その家の人の心の状態が分かるように、荒れ果てた地球の現状をみると、いかに人の心が荒んでいるかがうかがい知れます。なぜこうも、地球は荒れ果ててしまったのでしょうか。良い家に住みたい！ 良い車に乗りたい！ おいしいものをたらふく食べたい！ この肉を喜ばしたい欲望が、地球を荒廃させてしまったのではないのでしょうか。

共存共生とは、分を犯さないことです。自然の尊厳を認め、犯さない、侵さない、冒さないことです。そうすれば象が暴れることも、カラスが人を襲うことも、クマが人を襲うこともなくなるでしょう。人類は自然を保護するためと称し、海を埋めたり、ダムを作ったり、コンクリートで護岸するなどの手を加えていますが、そのような小賢しい手法でどうして自然が守れましょうか。いじめばいじるだけ、返って自然を狂わすだけです。

そこに、川が、山林が、原野が、鉱物が、植物が、動物が、人間が、必要だから置かれています。必要なもの同士が、必要な場所での出会い、必要な学びをするよう計られているのが自然の仕組みです。にもかかわらず人間は、わざわざ遠くから物を取り寄せたり、遠くへ物を運んだりしています。せっかく近くにあるのに、その物を使わず、わざわざ遠くから物を取り寄せて使っているのです。同じ品物が北海道で作られ

九州で作られるのは良いとしても、その品物が一方では北海道から九州へ、一方では九州から北海道へと運ばれているのです。国内だけならまだしも、今世界中でこのような不自然なことが行われているのです。最近では、ペットや観賞用植物まで海をまたいで運ばれています。このような不自然なことを人間はどうしてするのでしょうか。

小学生に、地球環境を良くするにはどうしたら良いですかと質問したところ、「人間がいなくなることです！」という答えが返ってきたといいますが、正にその通りです。人類は地球を束ねる使命を持っていますので、必要ならば何を埋めようと何を移動させようと何を破壊しようと許されるのです。でも今の人間は必要を度外視して、欲望や遊び心を満足させるためにやっているのではないのでしょうか。自然界には、「自然の促進による行為のみ許される」という生態系の一員として守らねばならない暗黙の決まり事があるので。しかし人類は、自由意思が与えられているのを良い事に、この決まり事を平気で破っているのです。

自然界の生き物は、決して欲得で動くことはありません。彼らは、生きるための最低限度の殺しをしているだけです。人間はどうでしょうか。遊びで釣りをしたり、猟をしたり、狩りをしたりして、生き物を殺しているわけではありませんか。闘牛も、闘鶏も、闘犬も、競馬も、みな人間の遊び心から生まれたゲームです。なぜ動物たちは、人間の遊び心を満足させるために傷め付けられねばならないのでしょうか。

※自然の促迫とは、遊び心のない、真に必要な、正しい目的に合った催促心のことで、自然界はこの無言の導きによって調和が保たれている。

○自然からの警告

最近動物病院が繁盛しているようですが、どうしてそのようなおかしな事になってしまったのでしょうか。本来、犬や猫に糖尿や歯槽膿漏などの病気があるわけがないのです。人間のネガティブな意識の移入と過保護が、そのような病気を作ってしまったのです。これはペット病だけではありません。まだ目に見える形で現れていませんが、人間のネガティブな意識の移入は、動物界はいうに及ばず、鉱物界や植物界まで狂わし始めているのです。やがてその凶変に、驚かされる日がくるでしょう。

すでに目に見える形では、虫や鳥や動物たちの生息分布の変化、クラゲやヒトデなどの異常増殖の変化、サンゴ礁の衰退の変化、魚介類の生息分布の変化、魚類の回遊の変化など様々な異変が起きていますが、この異変は今後ますます激しさを増し、人類の生存を脅かすほどになるでしょう。前述した異変は人類の生き方に対する警告ですが、次のような異常行動も自然界からの警告と受け取らねばなりません。人間は、入りに江にクジラやイルカが迷い込んだといって騒いでおりますが、決して迷い込んだではありません。彼らは

人間に、「生き方を正して下さい！」と、警告に来てくれているのです。熊や猿やイノシシや象などが人を襲うのもみなそうです。わざわざ人里まで出て来てそうしたことをやるのは、過ちに気付いてもらいたいです。といっても彼らは、意識してやっているわけではありません。自然界の意思が、彼らにそのような行動を取らせているのです。

近年蝶や蜂やトンボや蝉などの益虫が減り、毒ガやシロアリやダニなどの害虫が増えています。これも人類の生き方に対する警告です。自然界からの警告は、病気に至っては啞然とするばかりです。例えば、物質に溺れ始めたところから、ガンという病が多発するようになりました。性の退廃が進みかけたところから、エイズという病が発生するようになりました。美食に酔い始めたところから、糖尿病や肥満病が発生するようになりました。グルメに狂い始めたところから、狂牛病やO一五七や鳥インフルエンザなどの奇病が発生するようになりました。このように、人間の乱行に釘をさすように奇病が発生しているのです。これを偶然とみるか必然とみるかは皆様の良識に任せますが、偶然にしてはあまりにも出来過ぎていると思いませんか。地震も、火山も、異常気象も、動植物の異常行動も、菌類の暴走も、病気も、みな人類の生き方に対する警告です。これは神を信じない者であっても、何となく感じているではありませんか。さあ人類は、一日も早く生き方を改めねばなりません。自然界はその良い手本を、私たちに見せてくれているのですから……。

※阪神淡路大震災では、神戸港の物流基地が大変な被害を受けました。スマトラ沖地震では、リゾート地が甚大な被害を受けました。東北大震災では、原子力発電所が回復不能な被害を受けました。タイ洪水では、企業団地が手痛い被害を受けました。賢い人ならもう気付いていると思いますが、これらの災害はみな物質文明（資本主義経済）に対する警告なのです。

○自然から学ぼう

【自然はこのようにいっています】

・私たちは蔵を持ちません。

・腹一杯食べられたら、あとは何もいりません。水の美味しさ、空気の美味しさ、自然物の美味しさ、これに勝る食べ物がありますか。

・大の字になって眠れたら、それ以上の空間はいりません。

・寒さをしのげれば、それ以上着る物はいりません。

・飾り付けは生まれながらに与えられた、羽毛です。毛皮です。皮膚です。毛です。爪です。こんな美しい贈り物が与えられているのに、なぜ人間は刺青を入れたり、毛を染めたり、爪に色を塗ったりして飾ろうとするのですか。

・私が飛び立てる日まで、母は私のことを優しく包んでくれます。父は一生懸命食べ物を選んでくれます。時には独り立ちさせようと厳しく当たることもあります。これも私を愛するがゆえです。父も母も、けっして怒りません。激励の意味を込めて叱るだけです。こんな素晴らしい愛に抱かれ、どうして不良になれましょうか。

・大地を自由に走れる足があります。大空を飛べる翼があります。美しい花々を観賞できる目があります。小鳥のさえずりを聴ける耳があります。何でも嗅げる鼻があります。自由に話せる口があります。このように素晴らしい道具が与えられているというのに、あなた達はこれ以上何が欲しいというのですか。

・大自然のパノラマは、私たちをどこまでも魅了します。空を見上げれば、宝石を散りばめたような美しい星々が輝いているし、地に目を向ければ、美しい花々が甘美な芳香を放って私たちを魅了してくれます。一枚の落ち葉はどんな画家も描けない絵であるし、溪流に散在する石や岩はミケランジェロ顔負けの逸品です。小鳥は陽気なソプラノ歌手であるし、谷川から聞こえてくるせせらぎは、山岳の名演奏家です。この

ように大自然は、私たちを飽きさせません。なのにあなたたちは、どうして手作り品の娯楽に夢中になるのですか。なぜ、宝石や骨董品集めに夢中になるのですか。

・自然界の生き物は味付けをしません。備わった味で満足しています。自然の味をじっくりと味わって見て下さい。これ以上の美味はないのですよ。人間の舌欲が、自然の美味を狂わせてしまったのです。

【自然界は色々な智慧を人間に見せてくれています】

・木や花から放たれている芳香は、必要な生き物達を呼び寄せ、森林全体に循環の命を吹き込んでいます。
・砂浜は酸素の補給基地となり、打ち寄せる波は酸素の運び人となって、海に莫大な酸素を送り込んでいます。

・川のせせらぎはミネラルを溶かし、酸素を補給し、清らかな水を下々に提供してくれています。

・山は雲を止め、雪を貯え、下々の生き物達に常に変わらぬ量の水を注いでくれています。またその水は、あらゆるものを溶かし、浄化し、私たちに命の素を届けてくれています。

・生き物の宝庫である森林や原野は、呼子のように慈雨を呼び込み、そこに生息する生き物達の命を支えてくれています。またそれらの生き物達は、微が小に小が中が中に大に我が身を捧げ、生態系のバランスを保つ役割を果たしてくれています。

このように、自然は誰にいわれるでもなく、我が身を犠牲にして全体のために黙々と働いてくれているのです。海も、山も、川も、湖も、空気も、水も、土も、鉱物も、植物も、動物も、人間も、一つとして独立しているものなどないのです。虫一匹、細菌一つ、みな縦横の関係を連綿と保ちながら、大自然のバランスをつなぐ役割を果たしているのです。人間も自然の一員ならば、一員としての役割を果たすべきです。それが命を持った生き物の務めだからです。自然界は当たり前前のことを、当たり前前如く演出しております。そこには、欲得も、しがらみも、拘りも、何もありません。ただ素直に、自然界の意に沿って生きています。人間もそのように生きたら、万物の霊長としての役割を立派に果たすことができるのです。

○真の地球奉仕者

人類の悪想念がもたらす影響はすでに指摘した所ですが、これはこの地上界だけでなく、あの世といわれる中間世界（幽界）にまで及ぶのです。中間世界が狂うと、地上界の悪想念を増幅させる悪循環を生み出すのです。近年テロや、凶悪犯罪や、自殺などが多発しているのは、みなこの悪循環によるものです。それ但至少でも解消しようと、今色々なところからサポートの手が差し延べられています。残念なことにはそのサ

ポートのエネルギーが、百パーセント地球に届いていないのです。このままだと地球は、大変なことになってしまいます。私が瞑想を勧めるのは、少しでも悪循環を解消し、地球の波動を正常に戻したいからです。地球上には常時、宇宙から愛のエネルギーが注がれています。そのエネルギーを百パーセント光に変えるには、地球上に媒体となる人間が必要なのです。電気を光に変えるのに電球が必要のように、宇宙エネルギーを光に変えるにも、媒体となる人間が必要なのです。その媒体となれるのが、瞑想する心ある人達です。もし世のため人のためになりたいなら、ぜひ瞑想する仲間に加わって下さい。

私たちの本性は生命ですから、何が起きようと私たちの本性が傷つけられることはありません。ですから心穏やかに、今自分達のできることを精いっぱいやることです。すなわち、正しい想念を持ち、正しい言葉づかいをし、正しい生き方をし、時間の許す限り瞑想することです。瞑想は、地球を浄化する唯一の手段なのです。もし瞑想する人達が人口の一角にでも達したら、地球の波動は正常化し、自然界も息を吹き返すことでしょう。

真の地球奉仕者になれるのは、瞑想する者たちだけである。

【コラム】人間は一幅の絵とならなければならぬ

人間は身をもって地球絵の演技者となり、演出者とならなければなりません。例えば地球を一幅の絵とすると、人間一人ひとりはその絵の中の点であり、線であり、円であり、色であり、描写心そのものです。その理由は、人間そのものがキャンパスであり、絵の具であり、画家そのものだからです。その意味において、もし人間が己の本性に目覚めたら、地球は文字通り光り輝く聖なる星となるでしょう。演技者と演出者が一体となって描かれた絵からは、素晴らしい波動が出ております。その波動の感じられる時代が、刻々と近づいております。

・美術とは、天の意をそのまま地に表現したもの・・・

・芸術とは、天の意に人の意を加え地に表現したもの・・・

もし美と芸が一つに融合したら、地上は素晴らしい美芸のキャンパスと化すでしょう。

肉体を腹一杯にするのは物質ですが、心を腹一杯にするのは喜びと感動です。だから心は、いつも喜びと感動を待っているのです。

・真に心を打つのは純真さです。

・一点の曇りのない表現の機微です。

・子供が考えるストーリーです。

・子が親にせがむ望みに似ています。

この喜びの感動は、心のひだに微妙に残って消えません。

心を打つ美芸は、どんな宗教よりもどんな科学よりも勝るものです。さあ、人生における感動のドラマを作りましょう！ 感動の絵を描きましょう！ それが永遠に尽きない、永遠に色褪せない、究極の幸せを約束してくれるのです。

○自然が変わる

人類の意識の高揚が進めば、因果の法則の働きがスピード化されるため、自然界の狂いは速やかに正常化されます。

・地球の地軸が正常に戻ります。

・海流も、気流も、正常に戻ります。

・季節も規則正しく巡るようになります。

・雨も風も、必要なだけ降ったり吹いたりするようになります。

・ 動植物の棲み分けが正しく行われるようになります。

・ 空気が澄んできます。

・ 影が濃くなってきました。

・ 空気が軽くなってきました。

・ 音が静かになってきます。

・ 光のスピードが速くなります。

・ 水が輝いてきます。

・ 鉱物の核力が強まり、より純度の高い結晶になってゆきます。

・ 植物においては、交配種や雑種が原種に戻ってゆきます。

・ 動物においては、群核の純度が増し、進化が早まるようになります。すべてのものが、より純度の高い方向へ進化してゆくのです。

・ 人類においても、原種に戻るのとは他の生き物と同様です。今の人類は、ある部分に手を加えられた一種の改良種で、原種ではないのです。悟った人に特殊な能力が備わるのは、開発されたのではなく、本来持っていた能力が蘇ったためです。

・人間社会においても、犯罪が減り、事故が減り、災害が減り、病気が減ってきました。他にも、凶暴な犬がおとなしくなるとか、腐敗が進みにくくなるとか、家電製品が壊れにくくなるとか、車の燃費が良くなるとか、水がまろやかになるとか、食べ物のコクが強まるとか、花持ちが良くなるといった変化も起きてきます。

・自然界の生態にも著しい変化が現れます。例えば、動植物の寿命の正常化、生態ピラミットの正常化、食物連鎖の正常化、棲み分けの正常化など、生態の原初回帰がなされます。また進化の追いかかけが不要になるにしたがい、生き物の種類や数が減ってきます。（進化した生き物に統合されてゆく。）

・人間生活の質と量が変わることによって、経済活動に著しい変化がもたらされます。それにより地中エネルギーの使用度が正常に戻り、地球の進化は予定通り進みます。

このように人類の意識が高揚すれば、地球上に生息する生き物たちの進化はいうに及ばず、地球そのものの進化を大きく押し上げることになるのです。自然界の進化と地球の進化は、すべて人類の双肩にかかっているのです。

○地球の未来展望

人類の進化が予定通り進めば、やがてボディーを必要としない時代がやってくるでしょう。そうなれば、宇宙の節目に居ながら、多岐に渡った役割が果たせるようになります。生命が形の中で活動するのは、本当の自分を知らない間だけです。目覚めた生命体にとって、形を持つ持たないは大した問題ではないのです。必要なら持つし、そうでなければ自由に働きやすい意識そのものとなって宇宙を飛び回り、色々な場所で色々な役割を果たすようになるのです。地球人類もいづれ大宇宙に飛び出し、より重要な役割を果たすようになるでしょう。小さな環境（肉体）で生きる人間も自らに目覚めれば、大きな環境（宇宙体）に飛び出し、より大きな働きができるというわけです。

さて、未熟な生命体を受け入れている星では、権勢欲の強い者達が政治や経済を主導しますので、どうしても争い事が起きやすくなります。それも文明の力が発達してくると、大きな悲劇を生み出します。その一方悲劇は教訓を残しますので、人類が考え得る最良のシステムである民主主義へと傾いてゆきます。しかしどんなに民主主義が行き届き、どんなに物質的に豊かになっても、人の心は不満だらけで収まりがつかません。当然です。どんなにニセモノを手にしても、ホンモノを求めている心は満足しないからです。人類の文明はそこを頂点に、やがて崩壊の道を下りはじめます。これまでの文明がそうであったように、今の文明も

同じ道を辿っています。ただこれまでの文明と違う点は、進化の条件が整うため、上位の軌道にステップ・アップできるといふ点です。それを全面的に支えてきたのが、宇宙の大きな意志です。

宇宙の進化の歩みは、上方の意志から下方の意志へ順次降ろされ進むよう計画されています。ですから理想の世を開くのは、あくまでも大きな意志であって人類でないことを知るべきです。孫悟空がどんなにキントン雲で飛び回っても、お釈迦様の手の平の外に出られなかったように、人類がどんなに好き勝手な生き方をしても、大きな意思の外には出られないのです。といつても、人類の自由意思が犯されているわけではありません。大きな意志は、人類に常に自由で闊達な働きを許しています。万一大きく道を外した場合でも、法則の促進による修正を気長に待ち、決して手出しはしません。ただし宇宙の大きな節目に直面し、動きが取れない状況に陥った時は、下方の意志を通して手を差し伸べることはあります。しかしそれとて、自由意思を犯さない範囲でなされます。宇宙に無秩序というものはないのです。すべて、大きな意志によってコントロールされているのです。

確かに、宇宙号の列車の外には出られません。でもその中においては、何をしても許されるのです。その自由なドラマ作りが、表現宇宙に活力を与えると同時に、絶対宇宙に新鮮な喜びを注ぎ込んでいるからです。その意味では、私たちが演じるドラマは、宇宙を永続させるエネルギー源になっているのかもしれない。

また究極の幸せも、そのドラマの渦中から生まれてくるのかもしれませんが。そのドラマの内容は、意識の高まりと共に苦いものから喜び多いものへと変わってゆくでしょうが、どのようなドラマであっても、表現宇宙の進化に寄与していることは間違いないのです。だからこそ私たちは、日々の人生を精いっぱい生きなければならぬのです。

今の地球の現状をみる限り、どこにも希望の明かりは見出せません。でも闇が深いということは、夜明けが近いということでもあります。そうです！「地球はもうすぐ変わります。」ですから私たちは、大いに希望を持って、今やれることを精いっぱいやって待つことです。その意味においても、このメッセージを真剣に受け止めてほしいと思います。

【コラム】人類の進化と惑星の進化との関係

(惑星の進化)

惑星の進化とそこに生息する生命体の進化との関係は、惑星が誕生する段階ですでに決められております。つまりその惑星の質量と大きさによって、そこに誕生する生き物の数や人類の数や進化の歩み具合などが決まっているのです。一握りの牛豚からどれほどの種類の生き物が、いつどれだけ誕生し、いつ死滅す

るかは、牛フンの量によって決められているように、地球の質量が涸れるまでどれほどの数の生き物が、いつ誕生しどれほどの悟り人が出されるかは、計画されているというわけです。ですから資源を早く食いつぶしても、遅く食いつぶしても、進化の計画を狂わすことになるのです。進化した惑星の比重が軽いのは、それだけ多くの生き物を誕生させ、かつ多くの悟り人を輩出してきたからです。比重の軽重は、惑星の進化度を知るバロメーターになっているのです。その意味では、比重の重い地球は、見かけは美しくてもまだ幼い惑星だということです。このように惑星の成熟度は、どれほど質量を使い果たしているか、どれほど多くの悟り人を輩出しているかで推測することができます。

これまで地球は、悟りやすい道場を人類に提供してきたわけですが、その苦労は筆舌に尽くせないほどだったでしょう。だから悟り人が一人出る度に、天上界も地球も大喜びするわけです。なぜそれほど大変な出来事かといえば、一人の悟り人を輩出することは、単にその惑星の進化問題だけでなく、全宇宙の進化においても大きな加点となるからです。すなわち一人の悟りは、膨大な原子を消化して時空を収縮させ、大宇宙の脈動運動と循環運動に直接的・間接的影響を与えるからです。

ある猿が芋を洗って食べるようになる、全世界の猿が芋を洗って食べるようになるのは、宇宙に意識は一つしかないからです。同じ意識の持ち主同士だから、私の学習はあなたの学習に、あなたの学習は私の学

習になるのです。だから一人が悟れば、他者の悟りのレベルアップにつながるわけです。末期の熟した星に悟り人が多く出るのも、熟した星が多くなると全宇宙に急激に悟り人が増えるのも、宇宙に意識は一つしかないからです。これは一人の人間が、いかに大宇宙と深いつながりを持っているかの実証でもあるのです。

（人類の進化）

人類の進化の道程は、緩やかな螺旋階段を上るがごとく、進化しているのか、退化しているのか、停滞しているのか、分からないくらいゆっくりとした歩み方しております。でもそれで良いのです。なぜなら、それが自然の法則に適った進化の歩み方だからです。だから一人の覚者の手によって、あるいは飛び抜けた科学力によって、一挙に進化の階段を駆け上がることはあり得ないのです。人類の唯心的思想信条が確固たるものとなり、それに沿った社会の仕組みが整い、更に歴史の実績を積み上げて、はじめて人類は進化の階段を上るのです。付け焼刃の進化はあり得ないということです。

結びの章

この宇宙は、単純明快簡素簡潔に創られております。人間のいらぬ知識で目隠しし、いたずらに難しくしているだけです。さあ単純に、素直に、宇宙を見詰めましょう。きっと、なるほど！ と今点がゆくはずです。神は何一つ難しいものはお創りになつていないのですから……。

。人生の目的は、本当の自分を知ることです。それも、心の底の底で知ることです。本当の自分を知れば、誰もが正しい生き方ができるようになりますので、もうそこに倫理も道徳も宗教もいらなくなります。愛しなさい！ 調和しなさい！ 正しく生きなさい！ という言葉さえいらなくなります。なぜなら、自分の本性を知った者が、本性に恥じる生き方ができるわけがないからです。そのような人が多くなれば、社会から争い事がなくなっていくます。もう何の約定も、規則も、法律も、罰則も、いらなくなります。したがって、警察官や、検事や、弁護士や、裁判所や、刑務所など、人を捕まえたり弁護したり裁いたりする人も機関もいらなくなります。所詮、人を規則や罰則でコントロールすることなどできないのです。唯一コントロールできるのは、人間一人ひとりが自分の本性に目覚めた時です。

「私たちは人間ではなく宇宙生命である！」、とここまで訴え続けてきましたが、このことが大衆の前に披露されたことは、恐らく地球の歴史を振り返ってもそう多くはないでしょう。ですからこのメッセージをはじめて読んだ人は、驚きと共に狂言者の戯言と一笑に伏すのです。でもどんなに笑われようと、私はいい続けます。

「あなたは生命である！」

「私は生命である！」

「すべてのものは生命である！」と・・・。

生命とは、意識です。エネルギーです。原子です。智慧です。光です。愛です。さらに、無限なる存在です。普遍なる存在です。永遠不滅なる存在です。完全無欠なる存在です。絶対善なる存在です。これを総して、「神」と呼んでおります。神は生命であり、生命は神なのです。その神は恐れ多い存在でもなければ、神秘的な存在でもありません。どこにでも転がっている、ありふれた存在です。神は到るところにおるのです。石の中にも、花の中にも、虫の中にも、犬の中にも、人間の中にも、汚物の中にさえいるのです。神はすべての全て、有りて有るものです。神と呼ぶのが恐れ多いなら、生命と呼んでも、エネルギーと呼んでも、原子と呼んでも、光と呼んでも良いのです。ようするに意識と意志を持ち、智慧を働かせ、実際に生きて働いているのが神なのです。だから神は現実的です。実際的です。手より足よりも身近な存在です。その神は大宇宙に満ちていますので、私たちも大宇宙に満ちていて当然でしょう。なぜなら、神そのものが大宇宙そのものであり、私たちそのものだからです。

。もしあなたが人間と違ってこの世を去るなら、再び人間社会に舞い戻ってこなくてはなりません。なぜなら、思いにも慣性の法則が働くからです。本当の自分は宇宙生命なのに、人間と錯覚することで人の形を取ってしまうのです。

人生を懐かしく思う人は、どうぞ再び人間に生まれて下さい。そして昨日の夢を、今日の夢を、明日につなぎ止めようと必死にもがいて下さい。あなたは今生も、嫌というほどこの世の虚しさを味わったではありませんか。嫌というほど肉の苦しみを味わったではありませんか。まだ、味わい足りないのですか。日に生まれられた人はまだ幸いです。世界を見渡して見て下さい。手足を奪われた人、飢餓で苦しんでいる人、強制労働させられている人、戦場で人殺しを強いられている人、五体を満足に動かせず苦しんでいる人など、地獄の苦しみを味わっている人達がたくさんいるではありませんか。今幸せと知っているあなたも、来生どのような境遇に生まれるか分からないのですよ！ もうこりごりですよね！ さあ、生命に目覚めて下さい。政治家は良くいます。「私の言っていることの正しさは、歴史が証明してくれるだろう」と……。ではお訊きたい、あなたは何百年後の社会がどうなっているか知っていますか？ と……。知らないのに、どうして自分の意見が正しいといえるのでしょうか。今のあなたの意見が、その時代の人達に受け

入れられると、どうしていえるのでしょうか。時代は刻々と変わりますよ！ 人の趣向も、生活スタイルも、思想も、信条も、刻々と変わりますよ！ なのに今のあなたの考えが、どうして何百年後の人達に受け入れられるといい切れるのでしょうか。それはあなたの自己満足にしか過ぎないではありませんか。どんなに卓越した考えも、いつの時代にも合うとはいえないのです。今の考えは、今だけの考えです。何百年後まで持つて行くわけにはゆかないのです。もし永遠に変わらない意見があったら、それは真理に根差した意見だけでしょう。

。人間の想念は、何でも作り出す偉大な力を持っています。事実人間は、高層ビルを建て、コンピューターを操り、自動車を走らせ、船を浮かべ、ジェット機を飛ばしているではありませんか。それは人間が神だからできる技です。でも人間は、誰も自分のことを神だと思いません。神の自覚無しにこれだけのことができるのですから、自覚を持ったらどれほどのことが成し得るか、考えただけでもゾクゾクします。

いっておきますが、人間がやっているものではありません。形は生きていないのですから、人間がやれるはずがないのです。やっているのは、あくまでも中で働いている生命です。これだけは勘違いしないで下さい。

今人類が味わっている不幸や災難も、人間が神の力を悪用して作ったものです。自分が作り、自分で苦しんでいるのが人間なのです。そのことに、一日も早く気付いて欲しいと思います。

。実在とは、永遠になくならないものをいいます。非実在とは、時が来れば消えてなくなる物のことをいいます。なくなるのは、実際にはないからです。あなたに、亡くなった祖父母がいたとしましょう。その祖父母は、本当にいたのでしょうか。いいえ、いなかったのです。一時形を取っていた、蜃気楼のような存在でしかなかったのです。

誤解しては困りますのでいい添えますが、形が蜃気楼のようなものといったのであって、形の中で生きて働いている生命は実在します。ですから生命の祖父母は実在です。でも肉体の祖父母は、実在ではありません。だから、形につけられた名前も実在ではありません。つまり、祖父母の誰の誰べえさんは幻だったというわけです。

。このメッセージに初めて出会った人は、戸惑っているでしょうね。何せ「肉体はない！ 個人はない！ 誰々さんはいない！」と人間を否定するのですからね……。でも考えてみて下さい。肉体があるというこ

とは、肉体を形作っている本質が必ずあるはずで、どんな形も、本質なしには生れようがないからです。その本質がものを思い考え、言葉を話し、行動指令を出して肉体を動かしているのです。

海の上に浮いている氷は、海から生まれた海の子です。氷が解ければ海に帰るわけですから、氷の生みの親は海です。人間も、生命という海の上に浮いている氷のようなものです。人間が解ければ（死ねば）生命に帰ります。海がなければ氷が生まれないように、生命がなければ人間も生まれません。

あなたがどんなに人間はいると突っ張ろうと、人間なんてどこにもいないのです。いるのは人間の形をした生命です。その生命は永遠不滅ですから、生命から生まれた私たちも永遠不滅です。氷を見れば一個の存在ですが、氷を生み出している海は無限です。人間も形を見れば個人ですが、人間を生み出している生命を見れば無限です。だから私たちは、無限の存在なのです。形を見ないで下さい。形の生みの親である本質を見て下さい。本質を見れば、人間も個人も誰の誰べえさんもないことが分かります。

。人生の目的が不明確だと、誰もが自堕落な生き方をしがちです。特に一回限りの人生と思えば、生きてい間できるだけ楽しく過ごそうと、金欲・物欲・色欲などに走りたがるのも仕方がないかも知れません。カツオブシを出され食べない猫がいないように・・・。

でも、人間には理性があります。自分を律する良心があります。これこそが、人間が神である証しなのです。ただし理性を完全に機能させるためには、人間の本性を見破り、人生の目的が何なのかを知らねばなりません。もし知ったら、決して自堕落な生き方はしないでしよう。一旦知ったら、どんな誘惑にも負けない理性が働くのが人間だからです。ぜひ、人生の目的を知って下さい。本当の自分を知って下さい。

。これまで宗教が必要だったのは、あまりにも宇宙に謎が多かったからです。不幸の原因が分からない？ 運命の行方が分からない？ 何か目に見えない力が左右しているのではないか。その恐怖と猜疑心が、迷信的な信仰にしがみつかせたのです。誰かが、何かが、不幸にしているわけではありません。また、神が罰を与えているのではありません。不幸にするも幸せにするも、すべて自分の思いと行いです。正しい思いと行為の下に生きれば、誰だって幸せになれるのです。これは絶対的な法則（因果の法則）ですから間違いありません。

鰯の頭も信心からといわれるように、信じた自分の思いが幸・不幸を呼び込んでいます。宗教を信ずるのではなく、科学を信じて下さい。迷信を信ずるのではなく、法則を信じて下さい。そして何よりも自分を信じて下さい。あくまでも己の思いと行為が幸せにすることを知って下さい。己の思いと行為が運命を握

っていると知れば、もう宗教にしがみつくと必要はありません。どうでしょう。正しく生きるのに宗教が必要ですか。生命と考えるのに宗教が必要ですか。己を律する心と、理解力と、自覚だけが必要なのではありませんか。

人はどうしても外側に真実を求めたがりません。でも外側に真実はないのです。真実は、唯一自分の心の中にあるのです。さあ、自分の中に真実を探しましょう。自分を頼って下さい！ 自分を信じて下さい！ 自分を信じる者に宗教は必要ありません。さあ宗教を捨てましょう。

。知識を詰め込む教育に重点を置く必要はありません。だからテストも必要ありません。学校は二つあれば結構です。一つは社会常識を身に付ける学校、もう一つは自分を知る学校です。自分を知る学校は年齢性別に関係ないので、誰でもいつでも好きなように学んで良いでしょう。お父さんやお母さんと机を並べて学ぶ、そんな光景が近い将来見られるかも知れません。

真に学ぶべきことはただ一つ、「本当の自分を知ること」です。これなら誰でも百点取れるでしょう。もう試験勉強に頭を痛める必要はありません。

。人間は、合理的で、便利で、快適な社会を文明社会だと思っています。でもそれは錯覚です。なぜなら文明の本分は、究極の幸せに近づくことにあるからです。私たちの心は、内に向かえば安らぎ、外に向かえば荒むように出来ています。ということは、幸せは外側からは得られないということです。

確かに装いをみると、機械文明は実に華やかで魅力ある文明に見えます。でも、その弊害も大きいのです。あなたは電話番号を何件覚えていきますか。携帯電話やカーナビを使うようになってから、あなたの記憶力や直感力は衰えたではありませんか。計算機を使うようになってから、あなたの計算能力は落ちたではありませんか。このように機械文明は、私たちの能力を潰してもいるのです。私たちは、何でも成し得る「意識」という偉大なコンピューターを持っているのです。そのコンピューターを使えば、もう機械文明に頼る必要はないのです。

幸せは形ではありません。意識状態です。幸せは心で感じるのです。だから、どんなに華やかな機械文明の中で生活しても、心が荒んでいては幸せにはなれないのです。機械文明は、精神文明に向かう通り道にか過ぎません。ですから、華やかな物質文明がいつまでも続くと思っはなりません。地球人類はその直前にいるのです。

。人間は、人の目の届かないところでは平気で悪いことをします。心の中の悪さを考えたら、恐らく目を覆いたくなるでしょう。なぜそのような心を持つのかといいますと、自分の心と他人の心が別々だと思ってるからです。でも宇宙には、宇宙心という一つの心しかありません。その一つしかない心を、人間だということによって、個別の心に分けてしまったのです。でもどんなに分けようと、心は一つしかありません。一つしかないから、本当の自分に嘘がつかないのです。

本当の自分とは、宇宙生命の自分です。宇宙生命の自分の心、すなわち良心です。良心が警察なら、人の目が有ろうが無かろうが、悪いことはできないのではありませんか。ルールに頼るは他力です。良心に頼るは自力です。罰則が怖いから守るのでは、本当の大人とはいえません。誰が見ていても見ていなくても、良心に恥じない生き方ができて、はじめ本当の大人といえるのです。大人の社会にルールは必要ありません。「天知る」「地知る」「人知る」「我知る」です。我はすべての全てだから、すべてを知って当たり前です。地球人は良心に生きることなどできないと思いますが、宇宙には良心に生きている星が数知れないほどあるのです。地球も、一日も早くその仲間入りをしたいものです。

。私たちが毎日受け取っている情報は、すべて幻の情報です。なぜなら、この世そのものが幻だからです。この世の知識はこの世限りのもの・・・そんな幻の情報を携帯電話やインターネットで追い求め、あなたの生活はおかしくなっていないませんか。頭の中は常に雑念で一杯ではありませんか。これでは心が安らぐはずありません。

できるだけ無駄な情報は受け取らないことです。また不必要な情報を自分から発信しないことです。どうしても必要な場合でも、必要最小限度に止めるべきです。外は幻の世界ですから、外の世界から得る情報は幻なのです。その情報は、まだ幻の世界に用のある人だけに必要な情報です。真実に目覚めた人は、この世の情報はあまり必要としません。私たちは一日も早く、外側の情報を必要としない人になりたいものです。

。これまでの人生の総決算として、今の環境があります。つらく厳しい環境、平安で穏やかな環境、すべて因果応報によるものです。見方を変えれば、必要だから与えられた環境です。だから有り難く受け入れ、その環境で精いっぱい生きることです。

人を口で諭せるものではありません。また自分も人から諭されるものでもありません。でも環境は、黙っていても諭してくれます。環境が気づかせ、学ばせ、成長させてくれるのです。だから環境は愛そのもの、

慈しみそのもの、といわれるのです。例えば障害者は、家族の厄介者と思われがちですが、実際は家族の方が障害者から多くのことを学んでいるのです。どんな厄介者も、どんな乱暴者も、どんな薄命な者も、愛の環境として大切な役割を果たしているのです。

愛の環境とは、人を成長させる役割を持った環境のことです。あなた自身は勿論、あなたの妻も、夫も、友人も、あなたがこれまで出会ったどんな人も、どんな生き物も、みな縁が結んでくれた愛の環境です。その愛の環境が、これまであなたを成長させてくれたし、これからも成長させてくれるのです。

自分を生んでくれた両親に感謝しましょう。妻や夫に感謝しましょう。周りの人達に感謝しましょう。すべての環境に感謝しましょう。今あなたが、どんなに辛く苦しい環境にしようとも・・・です。一生懸命生きていけば、そこで生きていく意味が分かってきます。その時あなたは、両親に、兄弟姉妹に、妻や夫に、子供たちに、周りの人達に、今の環境に、感謝できるでしょう。

。利害の溝をどう埋めるべきか、これは非常に難しい問題です。個人の立場に立てば、東西南北それぞれ違う立場から見るとは、利害が生じるのは当然です。我を通そうとすれば、永久に平行線のままでしょう。では、どうすれば良いか。それは、立場を拡大することです。一個人の立場から、社会全体の立場に

立つことです。一窓口の立場から、役所全体の立場に立つことです。地から見るのではなく、天から観ることです。人の目から見るのではなく、生命の目から観ることです。すなわち、あなた私の障壁を取り払い、一つ目になることです。その見方も一時の目で見ることではなく、永遠の目で見ることです。そうすれば利害の枠を越え、譲り合う心も生まれてくるでしょう。

。銃の引き金を引かせているのは誰ですか。戦争を起こしているのは誰ですか。テロを起こしているのは誰ですか。事件や事故を起こしているのは誰ですか。自殺をさせているのは誰ですか。

肉体ですか？ 心ですか？

そうですね。事の起こりの背後にあるのは、すべて心です。心が肉体を動かしているのです。人間はこのことを深く考えようとしません。だから心を粗末にするのです。心がなくては何もできないのですよ！ 心がなくては何も始まらないのですよ！ この事実をしっかり認識すべきです。

真に国民の幸せを願うなら、心のメカニズムを解明し、正しい心の使い方を国民に周知させるべきです。これは国策として、真っ先に取り組まねばならない重要課題です。源流を清めれば黙っていても下流が清ま

るように、原因である心を清めれば結果である社会は黙っていても清まるのです。何事も「心」が関係していることを、教育者にも、政治家にも、知って欲しいと思います。

。労働力は、本来売買の対象にならないものです。なぜなら、労働は肉体がするのではなく、心がするものだからです。心は売買できません。でも肉体が労働すると考えれば、肉体は物質ですから売買の対象になってしまいます。労働力が売買の対象になれば、生産物もサービスも売買の対象になってしまいます。今の社会でお金が幅を利かしているのは、労働力が売買の対象物になっているからです。もし売買の対象物から外されたら、個々人の労働力は社会的財産として扱われるはずです。労働力をバラバラに使うより、集めて使う方が合理的だからです。そうになると、社会的財産から生まれた生産物は、とうぜん社会全体のものになるでしょう。配分についても、お金から生まれた物の配分にはお金が必要ですが、奉仕労働力（心）から生まれた物の配分にはお金は必要なくなるでしょう。そうなれば、良心に委ねる「自由取得制」が採用されるのは当然の成り行きです。一人ひとりの心が生み出した生産物の配分は、一人ひとりの心に委ねるのは当然だし、その方が間違いないからです。

奉仕社会では、価値の源が心にあることを認めていますので、どんな自然物も、どんな生産物も、どんなサービスも、心の表現物として大切に扱われます。でも物に価値を置く社会では、物は単に物として扱われますので、無謀な開発、無謀な生産、乱暴な消費が当然のごとく行われるのです。また人生の目的が物を得ることにあるなら、汗水流して金集めに躍起になるのもまた当然でしょう。労働力は智恵と力の結晶です。智恵も見えなければ力も見えません。その見えない智恵と力が物を生み出しているのですから、物を単に物として扱うのではなく、心を持った生き物として大切に扱うべきなのです。（智恵も力も心の産物）

。配分を良心に委ねる「自由取得制度」を、夢のように考えてはなりません。なぜなら、今も現に行っているからです。あなたは、家族からお金を取って食べさせていますか。お金を取って着せていますか。お金を取って住まわせていますか。取っていませんね。それは家族間に自他の溝がないからです。さらに家業をやっている家では、家族の労働力は惜しみなく家業に使われているはずですし、そこで得た糧も家族全員のために使われているはずです。この発想を広げたのが奉仕社会ですから、自由取得制も労働奉仕制も異端な制度ではないのです。つまり社会の営みを家業と考えれば、一人ひとりの労働力を社会全体のために使い、そ

ここで生み出された物の配分も一人ひとりの良心に委ねるのは当然だからです。全人類が兄弟姉妹だと知り、他の溝がなくなった社会では、このような発想が生まれて当然なのです。

。人間は過去にこだわり過ぎます。過去は閉ざされたページです。「過去を清算せよ！」という国がありますが、過去をどう清算せよというのでしょうか。お金で清算することを清算というなら、それはただお金が欲しいだけではありませんか。どうでしょう。みなさんが戦争をしたのですか。戦争をした人達は、とっくに死んでいるのですよ！ なのになぜ子や孫が、責任を取らねばならないのでしょうか。

精算できる過去などあるわけがないのです。もしあるとすれば、今仲良くすることです。そうすれば戦争で犠牲になった人達も、きっと喜んでくれるでしょう。いつまでもいがみ合っているのは、亡くなった人達は浮かばれません。もしいつまでも過去にこだわり、いがみ合うとしたら、あなたは犠牲になった人を犬死させたことになるのですよ！ ですから靖国神社にお参りすることでも、慰霊碑に花束を捧げることもなく、お互い仲良くすることが亡くなった人達に対する最大の供養になるのです。

。あなたが私は生命でない、とどんなに主張しようと、あなたの本性が生命であることに変わりはないので
す。私意で真実は曲げられないということです。もしあなたに真実を観る目が備わったら、自分のことを納
得して生命と認めるでしょう。だから私は何度もいうのです。本当の自分を知らなさい！ 本当の自分に目
覚めなさい！ と・・・。

本当のあなたは生命なのです。あなたの本性は生命なのです。このことは、いくらいってもいい過ぎると
いうことはありません。あなたがどんなに違うと突っ張ろうと、生命である既成事実が変わることはないの
です。真実はどこまでも真実のままです。ニセモノはどこまでもニセモノのままです。今の人間は、カモが
アヒルと勘違いし、空飛ぶ鳥をうらやましがっているようなものです。本当の自分に目覚めれば、今すぐ
でも空を飛べるようになります。

。今、人類は膨大な費用をかけ宇宙に探査機を送っていますが、これほど予算の無駄遣いはありません。な
げなら、外から得るものはみな幻（結果）だからです。幻を得て、一体何になるのでしょうか。私たちが求
めるべきものは、結果ではなく原因ではありませんか。一体、宇宙の塵を集めて何になるのですか。どんな
に遠くの塵を集めても、それはみな幻なのです。この表現宇宙に存在するもので、一つだって真実なるもの

はないのです。そんなに宇宙の塵を研究したいなら、自分の足元にある塵を研究したら良いではありませんか。何億光年先にある塵も、足元にある塵も、同じ本質で造られた同じ物だからです。私は批判しているではありません。欲しいものが自分の家にあるのに、わざわざ遠くに出掛ける必要はない、ということに気付いてもらいたいのです。そんな予算があるなら、心の研究に使った方がどれほど国民のためになることか。

この宇宙は、一つの真実を知れば、すべてを知ることができるようになっていくのです。その一つの真実は、どこか遠い所にあるのではなく、一番身近な私たちの心の中にあるのです。だから私は予算も使うなら心の研究に使ってほしいと願うわけです。現われているものは非真実です。現わしているものが真実です。このことに一日も早く気付いてもらいたいのです。

さてこのメッセージは、私の恩師である知花先生の口から語られた真理を、一般人にも理解できるように目を下げ、さらに噛み砕き、そこに私の観じた宇宙の香りをまぶして書き上げたものです。私がここで強調したいのは、恩師の教えと宗教の教えを一緒にして欲しくないということです。宗教の教えと恩師の教えの違いは、次のような例えで示すことができるでしょう。

鯉をマナ板の上に乗せ、色や、艶や、固さや、匂いなどを観察し、さらに包丁で腹を裂いて内臓を観察し、鯉とはこのようなものであると物的に示したのが宗教の教えだとすれば、鯉を生かしている命の本源に観察者自らが潜り込み、鯉とはこのようなものであると心的に示したのが恩師の教えです。さらに宗教の教は、神あるいは超越的絶対者を外側から推理・推論し、ドグマ的思想で組み立てた知的な教えです。つまり自分がそのものになっていない、ただああそうか！ で終わってしまう、自己満足に過ぎない教えです。対して恩師の教えは、自らが内側に潜り込んで神的体験をし、身を通して（エネルギーとして・波動として）現わした真実なる教えです。真にそのものになることができたなら、現実生き方が変わり、自分の身に変性・変容が起きる教えなのです。どうでしょう！ 宗教の教えと、恩師の教えの違いが分かってもらえたでしょうか。

私は、すべての人に知って欲しいと願っているわけではありません。真剣に真理を求めている人達や、縁ある人達だけでも良いから知って欲しいと願っているだけです。その人達が真理に目覚めれば、きっと縁ある人に伝えようとするでしょう。伝えられた人は、さらに縁ある人に伝えようとするでしょう。このように一人から二人へ二人から三人へと真理をつないでゆけば、いつか全員の心を結ぶことができると思うのです。地道ではありますが、それしか地球を変える方法はないのです。ですからまずは知って下さい。そして知っ

たら実践して下さい。自分が変われば人も変わって欲しいと思うのは当然ですから、そうなたら縁ある人に伝えて下さい。

真理を会得するのは容易なことではありません。知れば知るほど、疑問も誤解も深まるからです。でも今の地球には、波立たせることが必要なのです。イエス・キリスト一人現れただけでも、あれだけ大きな波紋が起きたのですよ！もし皆さんが行動を起こせば、どれだけ大きな波紋が起きることか・・・考えただけでもゾクゾクしませんか。私はその意味においても、真剣に真理を求めている人たちに、あるいは縁ある人たちに、この本を読んでもらいたいと思うのです。

おわりに

この本を読まれ、今あなたは戸惑っているでしょうか。それとも当然のことと受け止めているでしょうか。もし当然と受け止めているなら、あなたは偉大な魂の持主です。一昔前なら、どこかのオカルト主義者の狂言として打ち捨てられていた所でしょうが、今は事情が違っています。このメッセージを理解できるような魂が、ドンドンと生まれてきているからです。特に、若者の中にそのような魂が多いのです。地球もいよいよそのような時代に突入したのです。

今日の世界を見渡すと、表面的には完全に崩壊に向かって進んでいるように見えます。しかしその舞台裏では、新しい時代を迎える準備が着々と進められているのです。それを担っているのが、あなた達のような熟した魂です。しかしその中にも、物質文明に翻弄され悩んでいる魂も少なくありません。無理もありません。私たちは気の遠くなる年月、人間として育ち、人間として生き、人間社会に慣れ親しんで生きてきたのですからね……。でもあなたは、心のどこかで疑問を抱いているはずですよ。何かがおかしい？ 何かが違うっていると……。だが良く分からない、だから気を紛らわせるために何かをする。でも、何をやっても虚しい……。あなたはそんな心落ち着かない日々を過ごしておりませんか。どうでしょう。その疑問を拭い

去って見ては・・・？ 何もロケットに乗って宇宙に飛び出しなさい、とっているわけではありません。家に居て、自分の心を見詰めるだけでできるのです。確かに根気はいります。努力も必要です。でも真剣に打ち込めば、必ず成果は上がります。それは、自分が変わることによって証明されます。

物やお金を得た喜びは、一時の喜びにしか過ぎませんが、心の宝物を得た喜びは永続します。空しい人生を終えても一生、充実した人生を終えても一生ならば、充実した人生を終えた方が賢いのではないのでしょうか。といって、強制するつもりはありません。私がどんなに良いことだと勧めても、あなたにとって良いかどうかは分からないからです。ですから、あなたの自主性に任せます。

人の生き方を批判してならないのは、みな自分の理解した世界でしか生きられないからです。私たちは体験して学び、体験して学び、少しずつ理解力を高めながら成長してゆくしかありません。ですから今あなたが正しいと知っていることも、いつか手放さなければならぬ時が必ずやってくるかもしれません。そして、その正しいと信じていたこともまたいつか・・・それがあなたの成長の軌跡です。

世界は一つしかないと思っていますが、世界は人類の数ほどあるのです。つまり自分の理解した分の世界を持ち、みなその世界の中で生きています。ですから自分の理解した世界に、人を連れてきて住まわすことなどできないのです。理解した人にその世界があっても、理解できない人にはその世界はないからです。

だからあなたが理解できるからといって、あなたの世界を人に押し付けてはなりません。求めてきたら、ドアを開けてやって下さい。それが真理を伝えるコツです。人の生き方は様々です。この言葉の受け取り方も様々です。ご健闘をお祈りいたします。

人を変えることはできません。

人を諭すこともできません。

しかし、自分を変えることはできます。

それで良いのです。

あなたが変われば世界は変わります。

なぜなら、あなたはあなたの世界の主だからです。

一人一人が自分の世界を変えれば、黙っていても世界は変わるのです。

世界を変える方法は、唯一自分の世界を変えることなのです。

二〇一三年十一月

かとう はかる

〈著者プロフィール〉

かとう はかる

一九四一年北海道生まれ。

覚者知花敏彦に十数年師受し、二〇〇二年四月真理の真髓を掴む。

現在、静岡県伊豆市に在住。

理想社会の実現を夢見、東京・大阪・博多・清里・修善寺で「理想社会を考える会・・・かとう塾」を主宰していた。

著書に「偉大なる魂」「人類の夜明1（理想世界への誘い）」「人類の夜明3（真実はひとつ）」ほか

◎理想社会を考える会公式ホームページ。

<https://katou-kyuku.jimdo.com/>